

異色ある新時代の風俗雑誌

奇譚クラス

昭和25年10月5日 第三種郵便物認可（毎月1回1日発行）
昭和26年1月24日 日本国有鉄道特別扱承認雑誌第1887号

奇譚クラス

怪奇 戦慄 妖艶 妖捕 告実
平家谷の妖精
枕絵詮議
非処女流浪記

4月号

昭和25年10月5日 第三種郵便物認可（毎月1回1日発行）
昭和26年1月24日 日本国有鉄道特別扱承認雑誌第1887号

昭和27年3月30日印刷（第6巻第4号）
昭和27年4月1日発行 奇譚クラブ4月号

UNE EXPOSITION D'ART DECORATIF A MYCENES



CHEZ LES GRECS, LE CULTE DE L'ART ETAIT TEL...



...QUE LA VERTU ELLE-MÊME COURAIT LE RISQUE D'ETRE EXPOSEE !

定價九拾円

地方賣價（九拾參円）

怪奇小説

平家谷の妖精

沼貫健
竹中英二郎画

(56)

軟派小説

深夜の貞操

松谷茂

(60)

春宵秘話

すみれ夫人肉体圖繪

志乃田よしろう画

(64)

異國情緒

看々明白
(さまよい歩いた上海の裏町で彼の見たものは何んであつたか、エキゾチックな異色体験談)

夏目千代画

(69)

学生の風紀

當今大學生色談義

須磨としゆき画

(72)

時代巷談

實說遊女一代

藤田盛治画

(76)

愛慾の港

土生の港

薄田寛二画

(82)

謎の男えへへへ大人シリーズ第一話

えへへへ大人

街啓介画

(25)

南紀温泉郷探訪記

温泉旅館初夜物語

曾根三太郎画

(32)

時代小説

煩惱お傳地獄

窪村冷光画

(36)

世相諷刺奇譚

軍艦行進曲

能登一三画

(42)

伊月京太出張日誌

純情旅行

港中比呂志画

(48)

告白實話

非處女流浪記

壬生すみ子美濃村晃画

(98)

變態小説

巫女屋敷の責繪卷

岡田咲子

(104)

戰線懷古

白い花びら

夢野一平画

(86)

現地ルポルタージュ

女密航部隊上陸

津雲壽郎

(30)

犯罪實話 (惨虐殺人事件)

後家殺し

山形星雨

(96)

今は昔★戰線エロ落穂集

逸物

下出章一

(54)

怪奇語源集

逸物

若水豊

(53)

讀切傑作
現代小説

雌蛇 (めへび)

松井籟子

喜多玲子画

(90)

世相實話

若き情死者たち

原田春雄

(40)

現代小説

夫婦慕情

泉春樹

(116)

(大阪のプロファイル)

新世界ジャンジャン横丁

染田玄光

(17)

奇譚艶笑風土記

南國鹿兒島の盛り場歩るき

春山耀子

(108)

農村風流談

母娘の復讐

庄司浩平

(86)

觀々堂手柄
話の内

枕絵証議

緑猛比古
今幾久藏画

(110)

怪奇小説

平家谷の

妖精

沼貫健

平宗盛の愛妾葵御前の後裔と稱する
加茂家の裏山には先祖以来の墓がある。
苔むした五輪塔の下は、巨大な榎の老樹に
蔽れて夏でもひんやりとする。
緑蔭を洩れる光りに多彩な葵のヌードが
眞白な閃光となつて飛びこんできた。
妖女と蛇淫をめぐる怪奇殺人事件ノ



英二郎 絵

パチンコの音
麻雀のバイの音
そして串カツの匂い
こゝにジャンジャン町の
入口がある

[illegible]

天王寺公園入口



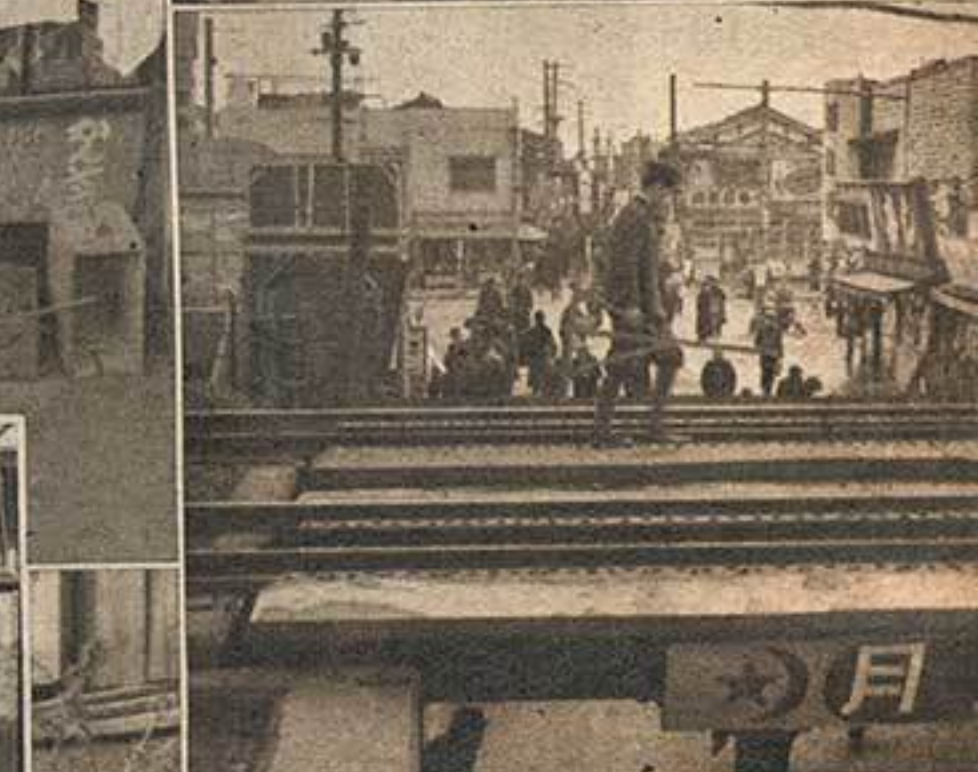
会社をサホッテパチンコ通いの男も通る、これから開店というところもあり、もうアカンと悲鳴を上げる所もある。ストリップはすでに秋風か？

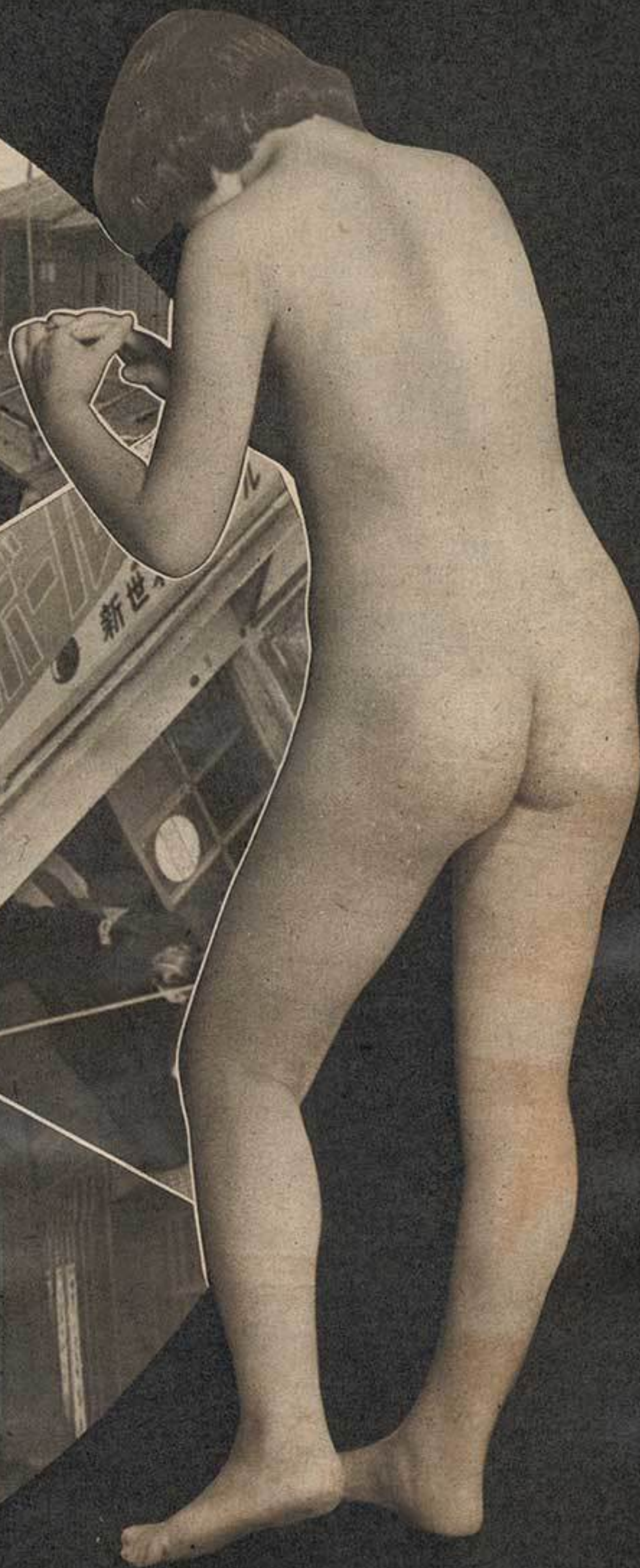


赤あんの店に向いあつて交番がある
ウイントをチラリと見ながら人々は細い通りに入る



薬店の店頭の中には、いろいろの器具や薬品が陳列されてある







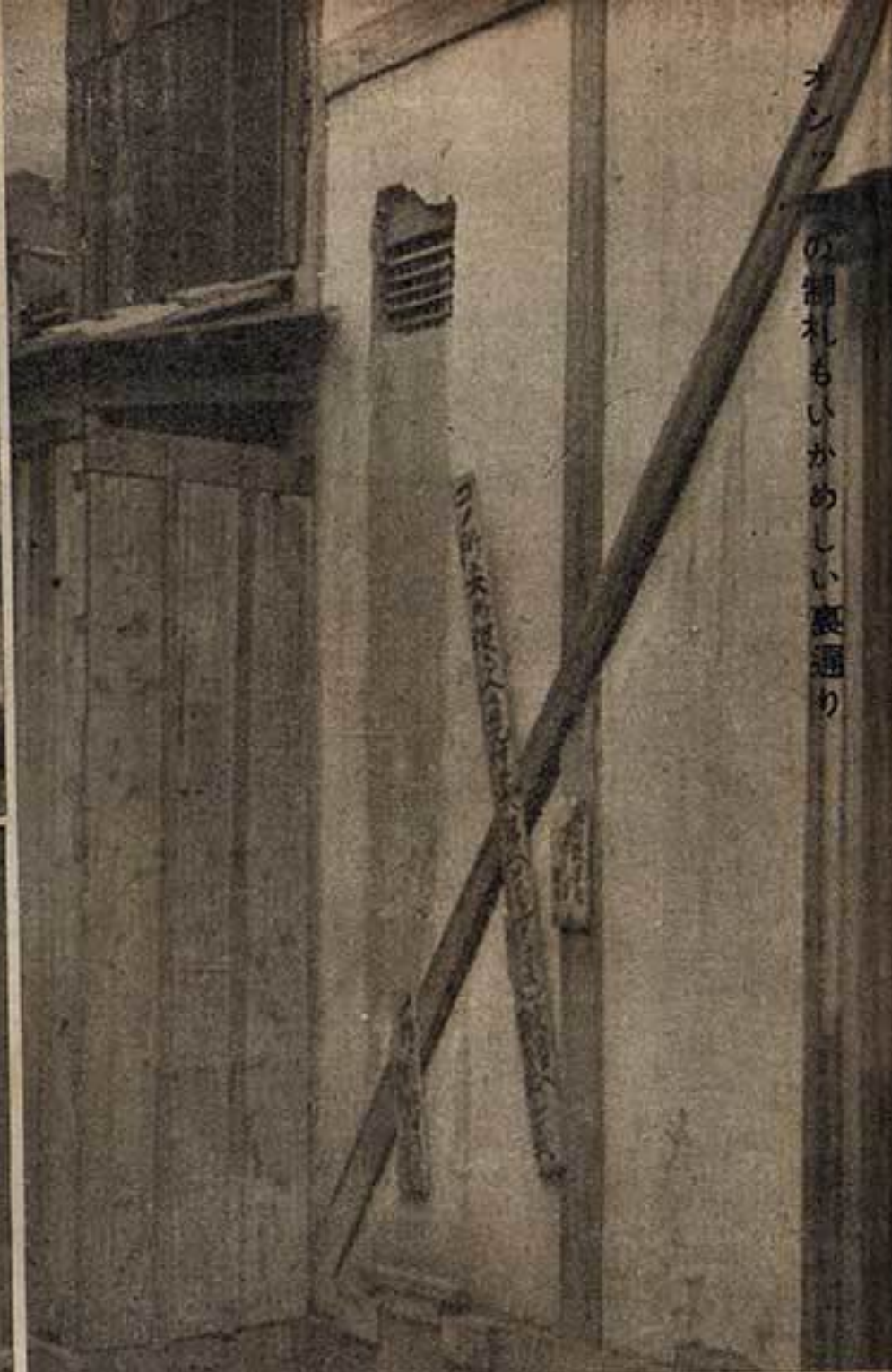
オシメ通りの眺望（裏通り）



よきカモぼなきか



サ・エンドの人生



の棚れもいかめしい裏通り



ゴミ箱を
あさるオッサン



この看板に偽りなきか？



ジャン
横丁の素顔



このお尻が大よしと
いうのと違います



たか主の使い道



小人は七十円です

しかも彼等はゆく
食慾と娯樂の街へ

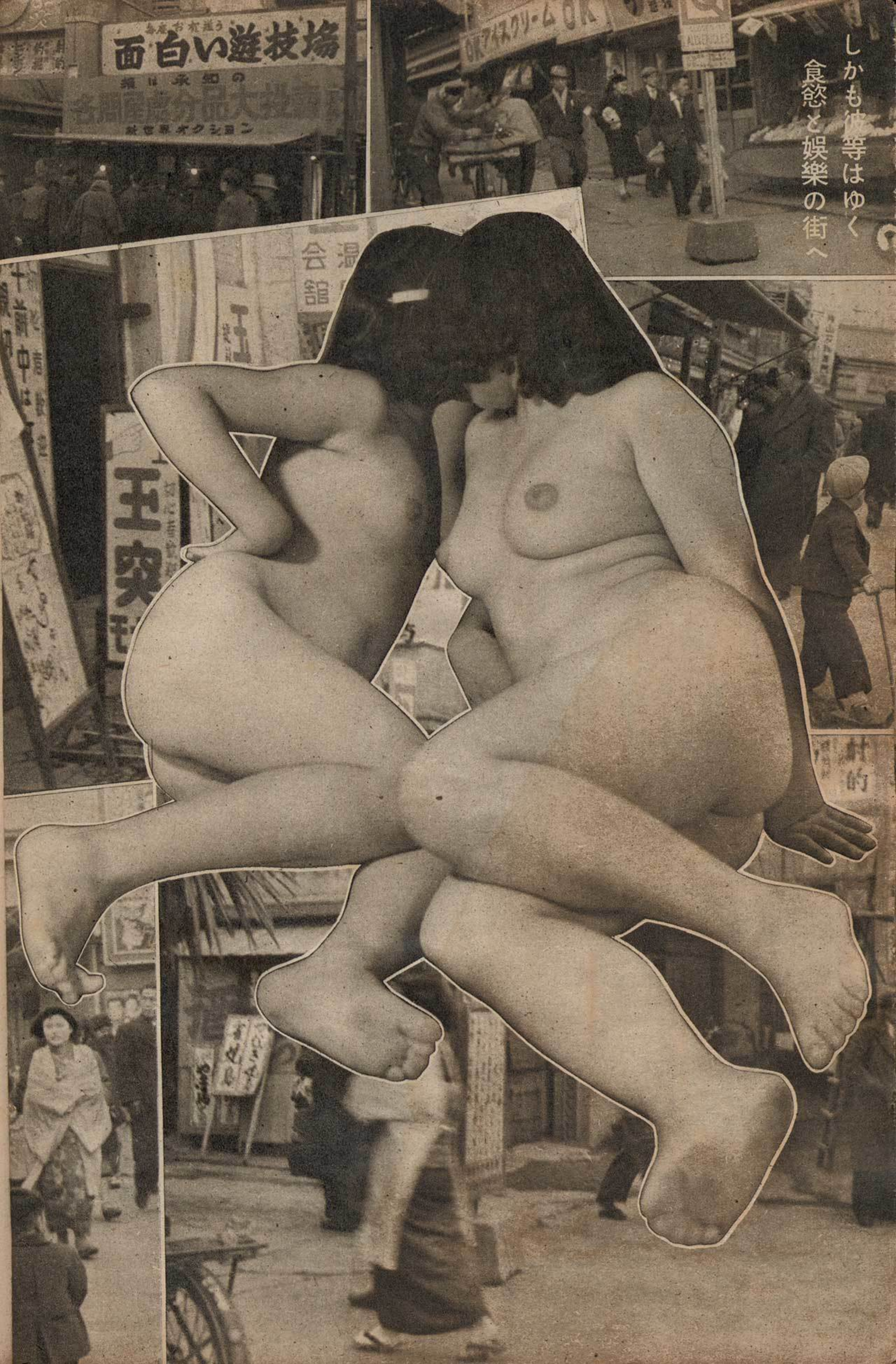
毎座有送
面白遊技場

類は承知の

就世界オクシロン

会 温
館

玉突





異色ルポルタージュ

ペン「めし」の街をゆく

★(大阪の横顔) 新世界ジャン横丁の巻
★本誌特派記者 染田玄・箕田京二・源氏光

◎胃袋の街の表情◎

淫売婦の素足の股の間から匂ってくるスエタ臭いがこの裸の街の体臭である。ホルモン料理の臓物の煮える匂い、串カツの安油の焼ける匂い、それが一体となつてこの街を蔽っているのだ。実に胃袋の街の名に背かない、商店の半分は飲食関係で占めている。新世界と飛田をつなぐこの細い横町に我々の視線の焦点を合せてみよう。

林芙美子驚く

故林芙美子女史が朝日新聞に連載する小説「めし」の材料を集める為に大阪を訪ねた際、一人ひとりに漂然とこのジャン／＼横丁に遊んで、「これは断然凄い、すつかり好きになつた」と讃嘆の声を叫びしめた粉飾も虚偽もない裸のまゝの街である。小説の題名の「めし」というのも此の横丁の暖簾からヒントを得られたという。

地下鉄動物園前から関西線のガード下をくぐつて南へ約二丁、この幅二間ばかりの道路の両側がその昔、串カツを食べさせる一杯飲み屋が立ち並んで襟首まで真白く白粉を塗つた白首の女たちが、三味線をジャン／＼弾いて客を引いたところから、一名ジャンジャン横丁と呼ばれる通りである。然し職人の街として特異な眼で見られたのも昔のこと、南陽通りというその本名の通り、今では大阪の庶民階

級には忘れることの出来ない安価で軽便な食慾の街であり慰安娯楽の街でもある。勿論、何んでも裏と表とがある。しかし、此処は或る一部の人達に恐れられる暗黒街でもなければ、犯罪の街でもない。こゝに我々はカメラのグラビヤと相呼応してペンを以て、この横丁を暴いてゆくことにする。

◎大阪中で一番利用者の多い公衆便所はこゝだ

地下鉄を動物園前で下りて南へガード下へかゝろうとする右側にある公衆便所は大阪市内の盛り場でも最も利用者の多いと悲鳴を上げさせる所である。宜なるかな、こゝは何時みても満員である。たつた一ツかない大便所なんかは四人も五人もの女が外迄行列をしている。入口の扉はいくら修理しても直ぐ割つてしまふというのだから一寸お上品な御婦人方には御利用願えない代物である。こゝらにも赤裸々な人間性

をよく表している。

この附近は交通量に比して不思議に公

衆便所がない。焼跡や道路の片隅で失敬する人は別だが、そうでないとわざわざ此処迄御出張に及ぶわけだから繁昌する筈である。夜ともなれば寒さしのぎの浮浪者が藪を持つて陣どるといつた具合で四六時中あいたためしがない。

◎宵闇迫れば息づく町

なんといつても夜の街である。眠つていた朝と風の街は、店頭で電灯やネオンがつき出す頃から俄然活気を帯びてくる。黄昏時、サラリーマン、工員、小売員、職人、諸々の庶民階級が三々五々に通りかゝる。頭の上を東京行急行が轟音と共に通り過ぎる頃、公衆便所の前の道端に一足三百五十円の古靴を並べたオッサンが、薄暮の残光の中で盛んに客を呼んでいる。

白粉を壁のように塗つた和服の二十女が道ゆく人の袖を引いて佇んでいる。曰く麻雀荘〇〇、バー〇〇、等より派遣されたゲーム取りや女給であらう。運命判断の行燈にボツリとかぼそいロソクの灯がついても行き交う人の足は止まらないが、新聞売りのオバさんの

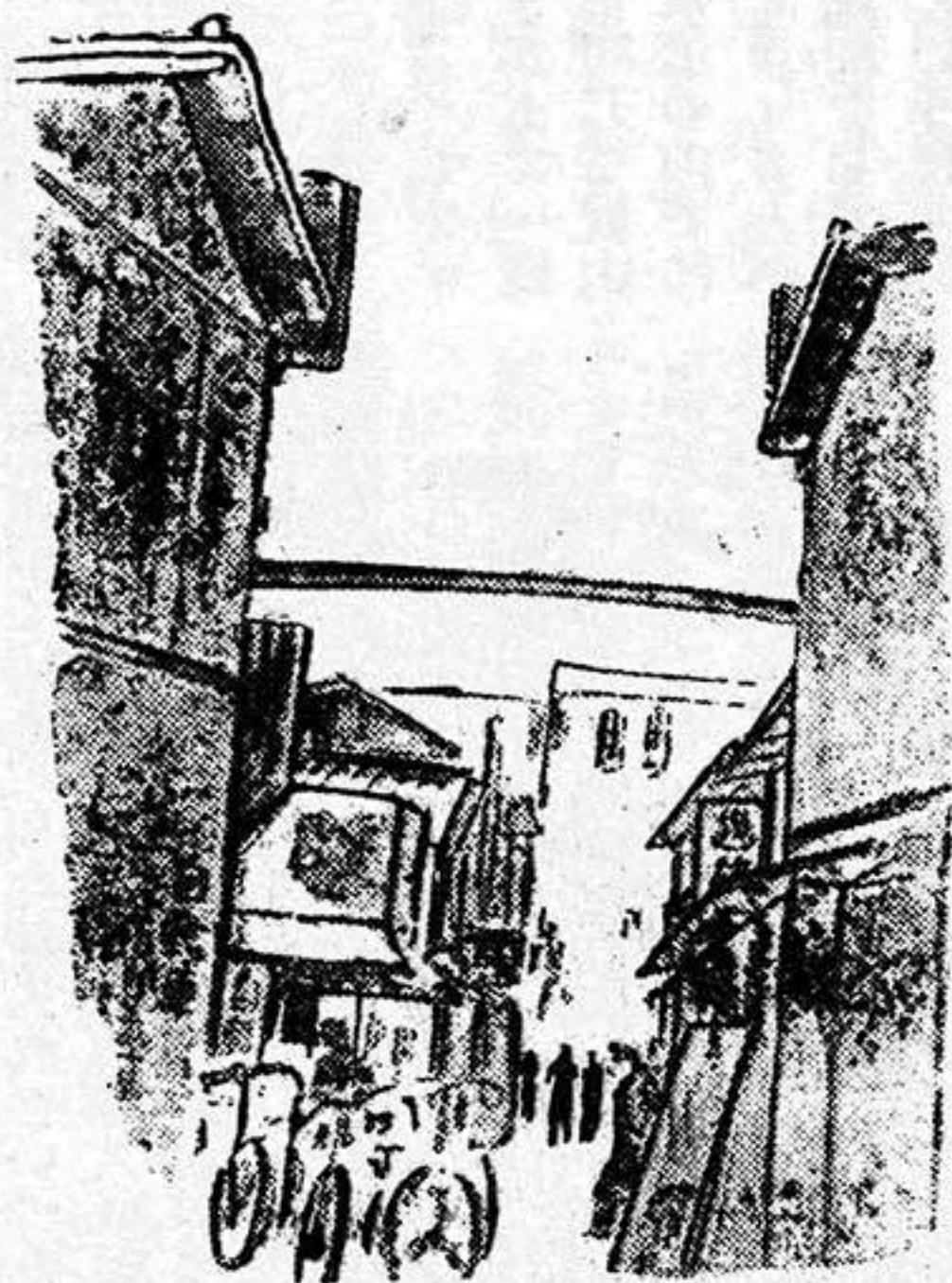
横に佇んだ三十過ぎの年増は、ボン引かはた又バン助か、大道将棋のオッサンが大きな商売道具を組み出した頃はあたりは、もうすつかり暗くなつていた。

ガード下の人生点描

早朝と夕暮の二回、贓品の密売セリ市がひらかれるという此のガード下は夏は涼しい風寝の場所であり、俄雨には恰好の雨宿り場所でもある。

日蓮宗の坊主がヤケに太鼓をボンボンと叩いている傍で朝からずつとそのコンクリートの上へムシロを敷いて座込んでいた物乞いの盲目の老婆が手さぐりで道具を片づけてやおら立ち上ると、チビタ下駄に垢じみた素足の少女が入れかわりにその後を付む。

老婆の体温と体臭が匂つてきそうなその場所に手を後に廻してじつと立っている。その昔十銭淫売と云われた浮浪者相手のバン助でもあらうか、煙草





一本で転んだといわれる終戦当時の事はさておいて、このガード下では極く安いパン助がいるそうだと、この少女の行動に注意したが、急にそういつた素振りも見られなかった。

赤あんどの灯の影で

ヨヒンビンにベニシリン、月やくホルモン剤となると昔の赤あんど式とは大分趣が変わってくるが、やはり昔ながらのホリホツク真空治療器とか肥後ずいき、いもりの黒焼きといった戦前派もやはり陳列の中では幅をきかしている。螢光燈に照らし出された硝子越しの台の中には、陸鏡の実物が説明つきでピカ／＼と光っている、一日の中に数十人の男の眼がこの中をのぞいてゆく、殆んどが好奇心で眺めてゆくのだが中にはお下げの女学生が、こゝは顔がさ／＼なくて買いいいわと、産製具を仕入れに来る心臓娘もあるという。

灯し頃ともなれば、赤あんどの赤い広告燈に灯がついて、入口に鉢植の植木にかくれて鉤の手の店内に入れば、中は薄暗くて切符売場のように顔を見合わさなくとも買えるから内気人士にも人気がある。女護島への入口、ジャン／＼横丁のとつか／＼に性具の店があるのも面白いし、又その丁度真向いに浪速署の霞町出張所があるのも面白い対照である。

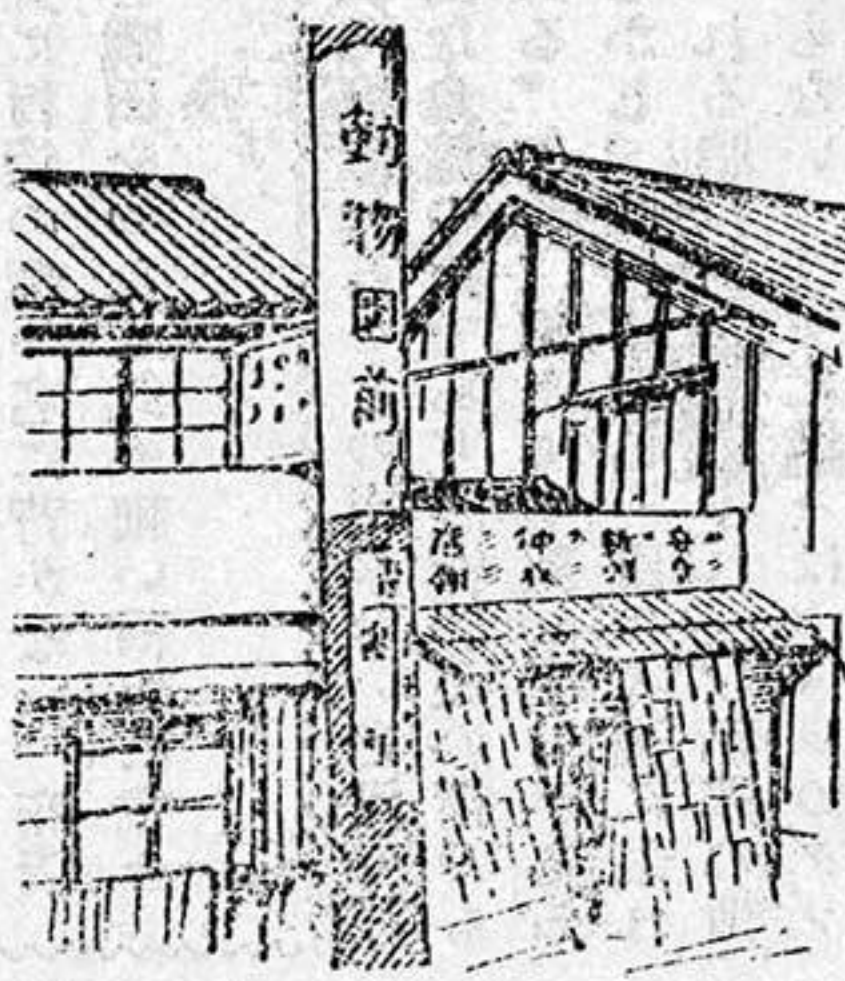
娼婦の寝乱れ姿

午前の十一時はこの街の目覚めの時間である。はれぼつたい眼に錦沙の着

新世界ジャンジャン横丁の巻

ながし素足に草履といったしどけない姿の接客婦たちがこゝを通つて、割引きの映画を見にゆくのを、パチンコに負けた／＼の兄ちゃん／＼がからかつている。

あらゆる大衆娯楽機関の揃っている新世界の歓楽境と、大阪で一番大きな女護島肉体の街飛田をつなぐ通路がとりも直さずジャンジャン横丁であるからである。両側には昔の松竹座の焼跡に隣りあつて市電の天王寺車庫が大きく跨つていて、新世界から飛田へ飛田から新世界へ出るとなれば、どうしても此のジャンジャン横丁の細道を通らなくてはならない。



接客婦たちの白い素足が足早やに通る過ぎる頃から、両側のパチンコ屋のガラ／＼という玉の音も次第に賑やかさを増してくる。そして朝風兼用のうどん屋、一杯十円のカス汁、一杯五円の黒蜜屋の前に人だかりする。

裏街の所見

オシメのアーチ

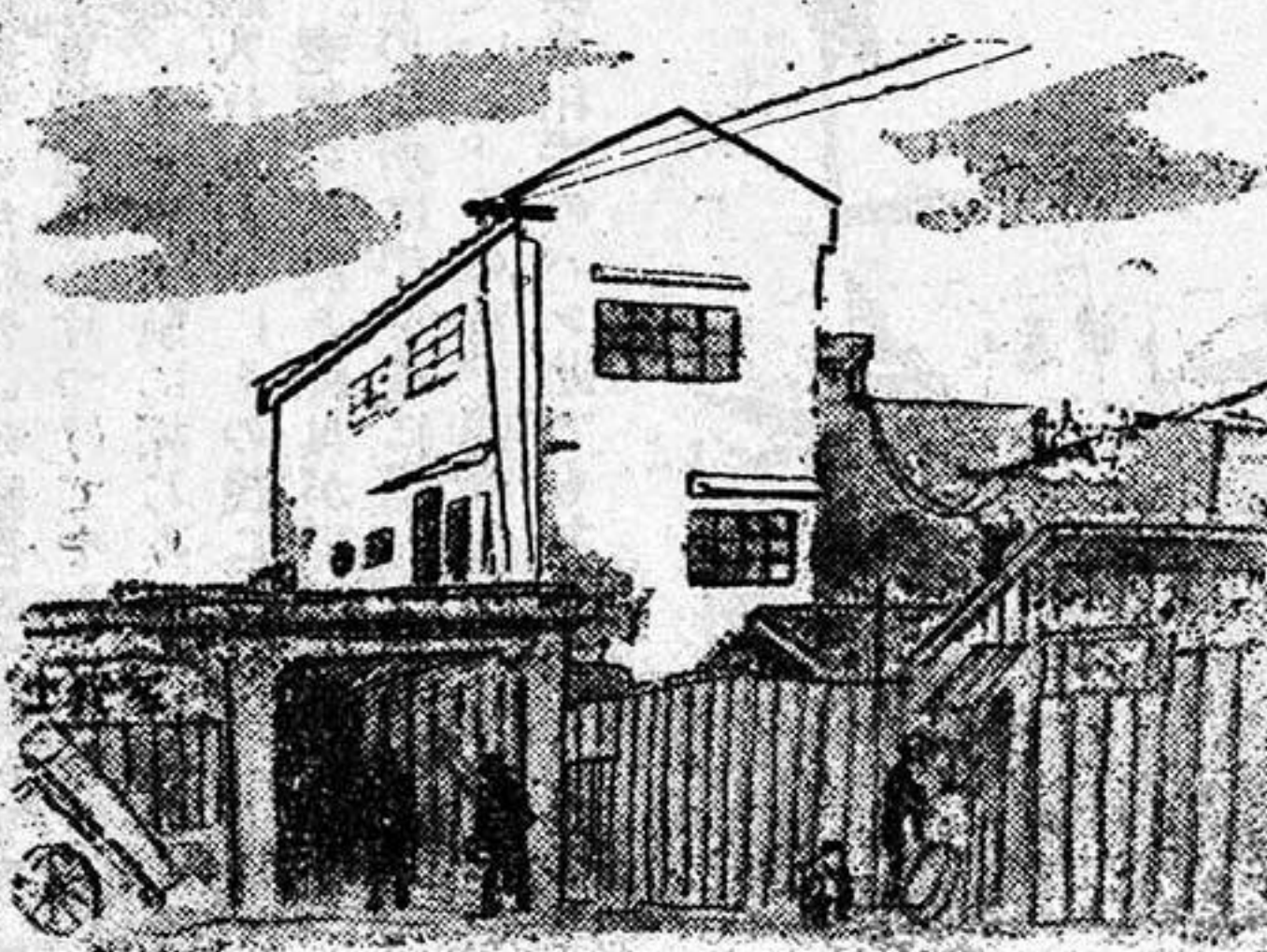
表は麻雀、碁将棋、射的、パチンコと華やかな娯楽設備にひきかえて一度裏へ廻つてみると、何処も同じ子沢山のオシメのアーチ、共同水道の前では二十を出たばかりの若いオカミさんが股を開いた恰好で汚物の洗濯をしている。パチンコのガラ／＼という音も裏で聞いていると佻しいものである。マーカーと並に関係者以外の使用お断りと貼紙した共同便所が設けられている。シズクの滴れるオシメのアーチをくぐれば、シチュー屋の裏では玉葱の皮をむいていた女の子が目こすり／＼出てきた。開かれた裏木戸の間から中を眺めてみると、大きなザルに山盛りの玉葱とジャガイモが二籠土間に置かれてあつた。芋を洗つたまゝの水が盥に真黒のまゝである。

襖一重が境の新婚夫婦

後は天王寺車庫のコンクリートの壁である。出来るだけ広く店の間をとつてあるので、住居といつたら四帖半か六帖一間がせいぜいといったところ、従つてこの附近の住宅難も例に洩れない窮屈なものである。地下の三畳一間の借賃が一日百円、二百円というのは普通の相場である。

従つて裏通りのバラックも、襖で二帖、三帖の部屋を仕切つて専ら間貸し

に使っている、勿論押入れといった贅沢なものは使わないから、押入れたと思つて開けた襖の向うには他人が住んでいたという事になる。



裏通りは焼跡のコンクリートの壁にもたせかけて建てた三間に三間の真ッ四角のバラック。このオヤジは生来の器用さから便利大工をしているので、あり合せの材料で建てたチヤチヤッだが、場所が場所だけに、先ず新世界で露店を出しているという万年筆屋の青年が家賃千五百円で隣室の六畳へ入つてきた。次いで女房の妹の友達だといふパン助が裏口から入れる三帖を一日百円の約束で入り込み、万年筆屋の男の部屋の間をベニヤ板で仕切つてしまった。

最近になつて同僚の手伝いの息子が飛田の接客婦と一緒にいたという



移りゆく射倅心

娘目当の射的の客

(新楽天地エレジー)

楽天地の人形落しの射的、釣り堀等は正月を峠としてパチンコに客を奪われてもうすっかり淋れてしまった。若い女の子を置いて盛んに色気仕掛けで客を引きつけようとしているが、さっぱり寄りつかなくなっている。

朝の八時から店を開ける此処として停電は最も大敵である。トタン屋根が通路の上を掩っているので電燈がつかないと真暗で商売にならない。

一度遊んだ客の名前は帳面に控えて落した人形の数を記録しておいて次に来た時に加算するといった方法でとにかく常連を増やそうと必死になつてゐる。サービスの娘目当に来る客は射的の玉は人形を狙うより、娘のハートを狙つてせり合つてゐる。

最近ではパチンコの玉場でも若いきれいな娘を置いて射的場に対抗しようとしているから油断がならない。あくどい客の引き方や、両側に同じ遊戯場がずらりと並んでいるの等が却つて客を他へ走らす原因となつてゐるのかも知れない。

すたれたZボール

昨年の春、この通りでゼットボールにピンゴ、ロケットボール等が全盛をきわめていた頃、一軒もなかつたパチンコが今では八軒にも増えて、すつかりZボールのお株を奪つてしまった。現在では残つてゐるZボールが只一軒それも昔のような客の入りはない。殆どどの処はさつさとパチンコに改業してしまつて、中には開店の花環に埋まつたパチンコ店と、閉店の貼札も淋し床上げをしたがらん洞のピンゴボール店とが隣り合せに有為転変の世相を表しているのも皮肉である。

碁将棋の高等遊民

この界隈の碁将棋の会所はいつ見ても朝早くから満員である。硝子窓に額のおデコをおつつけて眺めている人こそ慌しく動いているが、パチリパチリと三昧境に入つてゐる高等遊民氏には外の騒々しさは一向意に介しない。

一時間二十円、それ以後一時間増す毎に十円とはきめられてあるが、一時間や二時間で帰る人は更にない。何級誰々、何級何某と書き出された段級一覽表に示された通り皆殆んどが常連なのである。息子の働きで食べてゐる楽隠居の集りかと思つて眺めても、そんなジシムサイ爺さんは一人もない。皆元氣ハツラツとした若い衆である。男娼の間夫かパン助のヒモか、それとも又キヤバレーの用心棒、ダンスホールのダンス教師か、何れにして結構な御身分の高等遊民氏たちではある。

麻雀と撞球

玉突のキューを握る手で女の温かい手を握り、麻雀のバイを持つ手でふ

でその隣りの襖で境をした四帖半へ引越してきた。新婚夫婦とパン助の二組に横とベニヤ板で仕切られただけの万年筆屋の青年は堪つたものでなからうが、それにも増してこの便利大工の男に似合ふぬ若いきれいな女房を持つてゐるにも拘らず、附近の商売女の尻を追いかけて廻すので、毎日痴話喧嘩が絶えない。

隣つた引つ掻いたの騒動の上、飛び込まれるのがこの男の部屋である。持物といつても、商売道具を入れたリュックと寝具一組が隅に積み重ねられてあるばかり、如何に住宅難の時勢とはいえよく辛抱してゐると思われるのだが、又そこには人に言えぬ楽しみもあるのかも知れない。

ダンスケ賭博

現在のパチンコの煙草やキヤラメルの景品をやめて、全部金で払うようにしたらもつと流行るのと言つた男があつたが、そんな事したら只さえパチンコ禍のやかましい時、待合で闇取引を事とする待合族から苦情の出ることは必定である。

さて此の通りも新楽天地の前あたりにはちよつとした広場がある。人が集り易く四方八方に露地があつて逃げるに好都合といつた癖に人だかりがして、目つきの鋭い男が数人、その附近をうろついている。言わずと知れた当今御禁制の裏街道、慾と金に目のない男を鴨として、「さあ、ドッコイ、ドッコイ、張つた張つた」のダンスケ賭博に、今流行の玩具の馬が手廻しハンドルの振動で傾斜した板の上を走る競馬賭博、チェの輪やモヤ返えしは、大分そのカラクリが行き渡つてしまつたのでドッコイその手には乗らぬといふのだらうか。慌しい夕暮の街角に於ける一風景である。

◎ ジャン横族の生態 ◎

ジャンジャン横丁には蠶を生やした紳士やアマス夫人なんかは夢にも訪れない。上品に乙にすました心齋橋人種とは対照的に、この街は生のまゝの裸の人間の寄り集りだからこゝを訪れる人種といえは自らきまつてゐる。

ゴミ箱あさりの浮浪者、アブレた日雇人夫、乞食、等が我もの顔にのさばりかえつてゐる。彼等にはこゝが一番住みよく暮しよく居心地がよいからである。

「なんだあんな不潔なところ」と頭から軽蔑して寄りつこうとしない人が多い然し、こゝを第二の故郷として懐しがつてゐる人達も又如何に多いことか、次にジャン横族の表情を記してみる。

◎ 素足の娘

この寒いのに足袋もはかない素足に高下駄で走り廻つてゐる娘たち、何にも好きこのんでの事ではござりませぬホルモン煮に、串

カツ屋、うどん屋等大衆食堂の女給仕叩きの上をいつも水でビチャ／＼に洗つてゐるので足袋をはいてゐると濡れてしまふからである。

朝は十時頃からストリップのはね



る十一時頃迄、忙しいの何んので、一日中立ち通しでござります。お蔭で素足でも一向に寒うは感じませんとは、さすがに十六七のむく／＼と肥つた元氣盛りの娘さんだけはある。

◎ ホルモン人種

寒い時は牛のモツに辛子を真赤にふりかけて熱いヤツをフウ／＼言うて喰うに限りませんがナと言ふのは、言わずと知れたホルモン党のオッサンである油でベツとりと黒ずんだ暖簾を頭でわけて満員の椅子の後に立つと、「何にしましやう」と此方に向く娘の顔は勿体ない程アダメなくて可愛い。

垢じみたカーキ服にツタ袋を肩にした男、アソコ風の男、ルンペン風の男等数人が狭い土間に目じろ押しに並んで臍物の煮たのを頬ばつてゐる。どの男の前にも欠けた湯呑に透明の液体が置かれてゐる。カストリである。

カストリ一杯、ホルモン煮一杯、それにうどん二杯平げて大枚百円也とはホルモン党の献立である。

ルンペンモク族

天王寺公園界隈をねぐらにしているルンペン氏を目あての煙草屋がある。

煙草屋と云つても、専売局から仕入れてくる一般の煙草屋とは全然ちがつて、モク拾いのオッサンを夫に持つオバチャンがやつてゐる「モクヤ」がそれなのだ、肩から下げた汚れた袋の中には光やピースの箱がつまつてゐるが一箱最高が十円だと云うから驚く。

中身はみんな吸がらばかりで、その長さによつて値段が違ふのであるが、大体四種以上の長さのものが一箱で十円、四種以下二種までのものが一箱で七円、二種以下は一箱五円だそうで、長さがたんねんによりわけであるのも面白い。此のモクヤさん、一日に二百円は収入があると云うから、袋張りやマツチの内職よりいゝわけである。

パチンコ族

ジャンジャン横丁に入軒あるパチン

◎ ジャンジャン横丁の郷愁 ◎

東大阪の繁華街新世界と飛田遊廊、それに天王寺公園を結ぶ、細い約二丁ほどの露路、そこがジャン／＼横丁だと云つてしまえば何でもないうだがその二間はどの狭い道路をはさんで、両側にそれこそ目白押しに間口一間あまりの小さな店がたち並んでゐる。

それはひしめいてゐると云つた方が適切かもしれない。めし屋、喫茶店、麻雀屋、玉突屋、ビンゴ、パチンコ、人形落し、ストリップに三流浪曲、漫才、軽演劇、セカンド映画、インチキ

コ屋の台数は全部で二百三十一台。これが一日中ガチャン、ガラ／＼ツとひつきりなしに音を立てゝいるのであるが、此処でパチンコをやる人々の特徴は、千日前や道頓堀の客筋とは違つて遊んで帰ると云う気分よりも、ゼツタイに景品をせしめて帰ると云う気分のお客が多い、だから玉がある程度たまれば、煙草に交換して元は確実にとつて置いて、それからゆる／＼もうけにかゝると云う訳だ。

意地になつて長追ひもせず、玉を買い金高も少ないから、損をしてもたいしたこともなく、旨く当れば確実に景品を持つて帰ると云うから、此のあたりの業者が「お客の出入りの割に、もうかりまへん」と云うのも本当かも知れない。

カフェ、もひとつ裏返せば秘密売春宿などがまるで売笑婦の厚化粧のような装いをこらして、囁くように集つて来る男達を待ちうけてゐるのだ。

あえて男達と云つたのは、それだけの理由があるのだ。何故なら其処には女の娯楽機関など何一つ存在しないからだ。強いて女の客というなら、飛田遊廊の哀しい勤めの女性、男の情慾の腕から逃れて僅かな自分の時間を空費してゐるくらいだろう。詩人は都会のノスタルジアが落ち



◎ 深夜のジャンジャン横丁 ◎

夕暮から夜になると共に次第に人通りが多くなり喧騒を加えてくる。人の足音、パチンコの音、こゝは年中物音の絶えない街であり、夜の無い街である。一日の仕事を終えた諸々の勤労者が弁当を脇に抱えて集つてくる頃から俄然生氣を帯びてくる。

五円玉一個を握つて黒蜜湯の甘味に舌なめずりをする靴磨き、串カツの油っこい味を忘れられぬ印判天の男、カストリに一日の疲れを休めようとする筋肉労働者、煙草をせしめようとするパチンコ狂等が続々とつめかけてくる。

映画帰りの客が一入賑やかに通り過ぎてストリップの「只今から全部見られます」の札が「只今より五十円に割引」の割引札に替り、それが三十円に値下げされる頃には流石に表の人通りは宵のようになつてくる。然し、飲食店は勿論のこと、将棋、麻雀と室内は何処も満員の盛況である。Zボールの客だけが夜が更けると共に歯の抜けたように減つてゆく。

パチンコ屋のストリップの周りに浮浪者風の男が三人かたまつて、拾い集めたモクを選っている。串カツのいやなゲツプの臭気を発散させながらゲデンゲデンに酔っぱらつた男が狭い道を千鳥足でやつてくるので、映画帰りの女の子二人がキャッキヤツと言つて逃げ廻る。

本屋が店を閉めだし、喫茶店の飾り

燈が消える。串カツ屋の奥から艶歌師の「アコードオンに合したドラ声の流行歌が人通りの減つた道端へいやに大きく響いてくる。

時計はまさに十一時前である。終電目当の人々が一しきりガヤ／＼と足早やに帰つてしまつたと裏通りは大方店の閉めてしまつて残つた客相手の食物屋の灯が赤々と街路を照らしている。派手なマフラーを首に巻いた青年が四人、盛んにパチンコと取つ組んで、ガチャ／＼とやつてゐる。風とは違つたガラ／＼という玉の出る音があたりをひどく反響する夜通しやるつもりなのだろうか。悠々と落着きはらつたやり方である。

薄暗い露路からぬつと出て来たものに犬かと思つて見れば肩から炭俵を下げた拾い屋がゴミ箱を漁つてゐるのである。食物屋の裏にはお客の食べ残し等で結構おこぼれがあるのだらう。腰に罐詰の空罐に針金を通したものを三つ迄下げてリボンのないソフトかかぶつた有様はまるで武装した兵士のような恰好である。

もう人通りはすっかり途絶えてしまつた。紙屑がカサ／＼と風に吹かれて舞つてゐる。電車がなくなつても帰る当てのない人達であらう。どこかの店でもそういつた連中が三人、四人と頭張つてゐるうち、十二時の時計が長々と時を報じてと／＼翌日となつてし

新世界ジャンジャン横丁の巻

ていると唄い、作家は都会の赤裸々な体臭を感じさせると書き、画家は既に絵になつてゐると筆を投げる奇妙な町ジャンジャン横丁ノ

其処にひとたび登を踏みいれれば魔に憑かれた鳥のように、人々は妖しい憩いの翼を思ふ存分に広げてしまふのだ。

時間も觀念も思想も、そんなものは此の町には必要ではない、必要なはまつた。

肥つた野良犬が串カツ屋の下で落した肉片を拾ひ廻つてゐる。さつき迄あれ程雑踏だつた道筋も嘘のようにしんと静まりかえつて、電燈の灯ばかりが映えてゐる。時折、麻雀屋の硝子戸を開けて出てくる人影は近くに住むのかそのまゝツイと路地に消えてゆく。何か落し物がなにかと女乞食がボロを下げながら地見をしながら、物欲しそうな眼を食物屋の店先に注いでゆく。



赤裸々な人間の本能の活動だけだ。情慾の溢れのたうつ町ジャンジャン横丁、いくたの時に歌われ、そして明日もまた、哀しい人間の性の詩をすゝり泣きながら歌つて行くだらう町、私は大阪の性格を真正直に表現してゐるジャンジャン横丁に遊ばぬ人、行き過ぎて見ようもしない人を不幸な人だと思ふ。

其処には人生のドラマが泥まみれになつて転がつてゐるのだから。

うか三人の男と二人の女が、眠むくのかパチンコ機と四つになつてネバと言葉をかけると、此処の方がストーブがあつてぬくから夜あかしをするのだという。

交番の中は人影は見えないが、入口は開け放たれたまゝで時々電燈が明るい。電車が通らなくなつてレールだけが冷たく光つてゐる。時々アペノ方面へさして走るハイヤーのヘッドライトが、魔物のような闇を一瞬明るくする。

食物屋屋の裏口でジャージャーと水道の栓を開け放して洗物をしてゐる。電車通の上から見れば横丁の上に連つてゐる裸電球が眼にいたくしみる。やがて初発が通る頃だらう。

断然多い食物屋

〔食慾は人間本来の本能の中
て最も強烈なものである〕

◇ 食慾の街の匂い

この通りを歩くと、誰でもが第一に感じるのは、一種特別な匂いのすることである。ホルモン料理、おでん、串かつ等……せまい道路の両側に目白押しに並んだ食物店のそれらの鍋の中から温気と共に発散される油つこい匂いと、ジャンジャン人種の体臭とが混然一体となつて、独特の空氣が構成されているのだ。広い大阪の、他の何処にも無いこの匂いの流れを、林芙美子は「ジャンジャン横丁の体臭」だと説明づけた。

説明づけた。

界限全体を通じて飲食関係の店が、六十三軒、四十七パーセントとほとんど半分を占めている現状を見ても、プロフィール食い倒れ大阪の、名に恥じるものではないし、特にジャンジャン人種の生活力のたくましさ、こゝに根ざしていると考えれば、この匂いのする街も、彼等の人生に直結していると云つても過言ではないだろう。

さてジャンジャン人種の郷愁である

街

の

此の匂いの本体を探つて見ると、六十三軒中一番多いのが串かつ、おでんの二十六軒、次にめん類、お好焼の二十一軒で、このほか廻転焼、黒蜜、あめ湯、ミルク屋等が各々一軒宛ある。

(二月十五日現在の調査に

依る、季節によつてこれらの数は増減するのは勿論である) その他に喫茶店が一軒、菓子屋が九軒、ちよつと上品な料理屋が北の方の横丁に一軒ある。

◇ 串かつ

脂じみた型ばかりの「のれん」を肩でかけて店に入ると、いきなり鼻の先に人の顔が並んでいて、盛んに口を動かしている。一本五円の(四円のところもある)串かつがホルロー引きの四角い容器の中に網を置いたものゝ上に積み上げられていて、人々は揚げたてのその串の先をデョイとつまんで傍に置かれたソースの中へどつぷりとつけ



る。そして口へ、と云う具合である。

押し合いながら、空いている丸い木の椅子に腰を下すと、胸のあたりの高さの台の上に、側の串かつを積み上げた容器、ソースの一杯入った鉢、キヤベツを切り込んで盛つた入れものなどが、丁度二、三人の客に対して一組の割合で置かれてあつて、人々は自分の手近のところへ手を伸ばせばいい訳である。目に付き易い場所に一つ一つの値段表がりはつけてあつて、いわく

串かつ	五円
いかフライ	十円
かきフライ	二十円
とんかつ	二十円
清酒 一級	八十円
二級	五十円
焼酎	三十円

酔いどれとルンペンとパン助と

ホルモン料理考現學

陽が沈んであたりが暗くなつたばかりで、まだ宵の口だというのに、顔を真赤にして大トラになつた男が盛んにホルモン煮の給仕女をからかつている。牛の臓物に夏は南瓜、冬は玉葱と馬鈴薯のぶつた切りを叩き込んでえも言われぬ異臭をあたりにふりまいて、所謂働きの栄養補給源をなしているゴタ煮は、その中から齒のついた鹽が現われ出ようが、ヒゲの生えた陽管が出て来ようが一向意に介しない。



等と言つた具合。とにかく安く酔えて腹が満たせて、という各種の合理化された慾望が、安直に実現出来るのである。

空間を食慾で充満させている此の世界には、階級もなければ差別もない。折衝を膝の上にかゝえて、串をつまむ背広の紳士の横には、仕事にあぶれたオンボロの目雇労働者が焼酎のゴツプをかたむけてゐるのだ。酔いにまかせて傍の客にからんでいつたりする風景が、ほとんど見られないのは知らず知ら

ひたすら量の多からんことを願うのがホルモン党のエチケットである。それに此の男、どうせ此のあたりで散財するのだから大した人間ではなからうが、紺の厚手に黒い毛糸の襟巻きを無操作に巻きつけてもう焼酎を一升以上も飲んだような景気でオヤジと女給仕を相手にホルモン料理の講釈をしてゐる。

大体ホルモン料理の名からして、牛豚、犬、雞は勿論のこと卵巣とか睾丸とかを主としなければならぬ。それに此の附近の物は通称モツという臓物



食物

らずのうちに此の世界の人々がお互いのさゝやかな雰囲気をお互いにしていく為にはなからうか。

◇ お好み焼

巻頭の考現図を見て、と判る様に、お好み焼を食べさせる店は、通り筋よりも、どちらかと云えばちよつと横丁へ入った場所が多いのは、あまたさからかけ離れた、お好み焼だけが持つ雰囲気の為ばかりではない。

高校生とも見える思春期の男女が、鉄板を前にして、ひっそりとお好み焼を焼いているのを見かけが、彼等にしてみれば、此が一番いい場所として最適なのかも知れない。

映画の帰り途や、公園での逢曳きの別れ際に彼等が利用するのはお好み焼屋でのひっそりとした一時である。

或る店ではそんな二人のために、二階を提供して呉れるのである。勿論お好み焼の代金の中にいくらかの席料も含まれるのであるが、ホタルへしけ込む程の勇氣を持たない、このお客たちは、階段のきしみにも胸をときめかせながら二階へ消えてゆく。



油つこい串かつや、シチューの味も

◇ ホルモン料理

一皿二十円のホルモン料理は、日稼の労働者の為にも、飛田へ急ぐ遊客の為に、欠くことの出来ないものである。だからジャン／＼人種は今夜のそして明日のエネルギーを蓄積する意味でも此処へ寄つて来る。

大盛りの一皿は、充分彼等の胃袋をたんのうさせてくれるから、百円あつたら、ホルモン料理を前に置いて焼酎を二杯お代りしても、まだ二十円のお返しがあるのだから、知らない人ならその安さに驚いて勘定を間違えたのではないかと思うだろう。何しろ百円札一枚あればゲン／＼になれる別天地なのだ。

◇ 黒蜜、あめ湯

「食欲の街」と云われるだけに、全体の半数をしめる食物屋の店で売っているものも、種々雑多であるが、中でも此の界限特有なものに黒蜜とあめ湯がある季節の関係で案外今のところは少ないのだが、春から夏にかけてこの店が多くなる。

釜の中の湯に黒砂糖を溶かし込んで

新世界ジャンジャン横丁の巻

を以て代用としていいるインチキであるというのだ。

浮浪者人生哲學

大トラが気焔を挙げているところへボロを下げた浮浪者が煙草の吸殻拾いにやつてきた。その男の捨てたばかりの火のついたのを拾い上げてそのまゝ口へ持つていつてスバ／＼とやり出した。

「まあ、オッサン一杯飲め」と差し出すカストリのコップへ「奢つて下さるんなら腹がへつてますよつてに、お酒より一杯そのホルモンの方を」というルンペンが垢で汚れてはいるが案外若い顔付きである。ドンブリへ山盛り湯気の立つやつをもどかしげにガツガツと立つたまゝで食べ初めた。

「見ればいゝ身体をしとるのに、何んで拾い屋なんかしとるんだい」「旦那はん、此れ程気楽な商売はおまへん

かきまわしていれば、黒蜜湯が出来上るといふ安直にやれる商売なので、往來を歩いているとどが喝く季節が来ると、トタンにおでん屋がこれに早がわりしたりすることになる。とにかく一杯五円で咽喉をうるおわせてほのかに甘いことから、わが愛すべきジャンジャン族にとつては橋筋で百五十円もとられるモカのコーヒーなんかより「この方がえゝわ」と云うのが本音かも知れない。

あめ湯も黒蜜と大同小異だが、これ

税金の心配はいらんし……」

売春処世學

と言つている所へ、のれんを潜つて何の商売か得体の知れない年増が入つてきた。顔見知りなのか腰掛けるなりナミ／＼と溢れるように注がれた透明な液体が渡される。その女はぐうと一息にあけると初めて人心地がついたという風で、うどんを注文した。

「この頃は不景気でさつぱりワヤヤ」と呟やくのへ

「姐さんは何んの商売や」酔にまかした無遠慮さでさく。

「御覧の通りの浮草稼業、あんた今夜あたしの身体を買つて呉れはりますか？」

酔つばらい眼が急に好色的に輝やいて、女の分迄一緒に払うと肩に手をかけながら、よた／＼と横丁へ消えていった。

は底の深い湯のみ茶碗の中の、あめ色をした液体にボトリ／＼としずくを落したしやうが汁の匂いが魅力である。ほのぼのとあた／＼かい湯気の立つ茶わんに、無性ひげを寄せて彼等は音をさせてそれをすすむのである。そして片方の手がズボンの中でにぎりしめている五円玉の感触に、芦屋人種や杜用族の御存じない幸福があるのかも知れない。

★

★

★

★



昔なつかしい

ラジウム温泉界隈

まだ戦争のなかつたその昔、新世界の東端、天王寺公園の入口に向いあつてラジウム温泉という宏大な建物があつた。入浴料二十銭で、浴場の外に娯楽室、玉突場、食堂、温泉劇場と称する劇場、温泉会館と名づける大カフェーもあつて、隠然たる大衆娯楽機関を形作つていた。

それが戦災によつて一望瓦礫の山となつて長らく放任されていたのが、先ず表通りのバラックの飲み屋から復興して、今ではラジウム温泉は独立した浴場として復活し、玉突場は温泉モナミ撞球場として初心者歓迎、午前中は女流選手が親切に御指導申上げますの看板の下に玉突と麻雀を併合している劇場の方はストリップと芝居の温泉劇場、映画の温泉映画劇場、漫才と落語の温泉演芸場の三つに分れている。然しその裏をみてみれば焼けたビルが大きい切口を醜くひらいたまゝであ



新世界ジン・ジャン横丁の巻

り、演芸場の上は焼けた当時そのまゝで急造の板囲いの便所が淋しく芸人たちの用を足しているばかりである。公園通りに至る迄の焼跡は酔っぱらいの嘔吐物と小便で臭臭ぶんだる中に、子供の遊び場、パン助のたむろ場となつたり愚連隊のチンピラの喧嘩場になつたりしている。かつては「おい兄ちゃん、一寸顔かしてんか」とこの裏通りへ田舎者を引きずり込んで持物を奪つたりした事もあつたが、現在ではそんな事は絶対といつていゝ位になつてゐる。

入浴随意の温泉マーク

ジャンジャン横丁の通りに沿つて温泉旅館は一軒もない。地図を見られてわかる様に六軒を数えるホテル旅館は公園に沿つて四軒と、他の二軒は新世界通りに近いずつと北に寄つた西側の小路の奥である。

連れ込み宿と呼ばれている温泉マークの旅館がすべて入口には盛り塩でもしてありそりなイキなのが多い。夕暮れともなれば、裾をはし折つて赤い腰巻を見せた女中さんが、この冷たいのにハダシになつて玄関を洗つてゐる。やがてネオンが灯り出すと、あたりはしつとりと艶めいていくありげなアベックが肩を触れ合つて吸い込まれてゆく旅館といつても場所柄、料理屋をかねた様なものが多い、が然しあの逆さくらげと呼ばれる温泉マークだけは、何処も同じように大きく掲げられてあ

電燈の光に照らし出されてボツカリと浮かんだ二人、会社員風の二十三歳の男、女は事務員風でまだ二十才にはなつていないだろう。今その旅館から出てきたばかり。先に出了た男の後を追

裏町挿話

ストリップ小屋で

拾つた女

入れ替りなしの三十円で連続上演。映画や写真ではない実演の裸踊りという拡声器の口上につられたわけではないが、百五十円も二百円も出してみるストリップより実があつて安いという新世界ならではの見られぬ庶民芸術であるといふので覗いてみることにした。踏み固められた土間に立つたまゝで見るのは三十円の手前贅沢は言えないが大概足がくたびれる。裾の方から隙間風は冷たい。革靴を提げた年輩の男が真面目な顔をして正面を向いているのを押し分けて前へ出ようとして、オヤツと驚いた。いつの間にか左腕へ女のジャケツがぶら下つてゐる。いや若い女の腕が巻きついてゐるのだ。花魁道中の半分も見ないうちにムツちりした腕で抱えられるようにして外へ連れ出された。薄暗い中から急に外気に触れると、冬の淡い陽ざしながら暗さに慣れた眼にはまぶしい。女が思つたより若くて美しいので再び驚いた。麻雀やつたら駄目やと一応警戒したが、角のモナミ撞球場へは入らない。

つて女が走り寄つて、並んで市電の停留所の方へ歩いてゆく。折柄汽車が響きを立て、暮れ初めた街を黒々と過ぎていつた。

麻雀荘のサービスガールでもないらしく、そのまゝ裏町へ入つてゆく。露路を幾曲りして、まだ焼けた跡の黒々としたコンクリートの塀に沿つて木戸を開けると、空地に建つたバラックの裏口に出た。「此処、うちの家や遊んでいつて」彼女の遊ぶという意味が初めてわかつて、その薄暗い部屋に上つてみる。三十ワットの電灯に照らし出された四帖半の部屋、只片隅に蒲団が一組積み重ねられてあるだけで、何一つとして道具らしいものはない。

彼女はこゝを日払い二百円で借りてゐるそうだ。公園が稼ぎ場だそうだがもう何度もバクられて、幸いに病氣がないので一晩泊つただけで帰つてくるが顔を覚えられてゐるので、この附近でうつつかり稼ぐことも出来ない。日払いのドヤ代がもう一週間も溜つてゐるのでどうしても金をとらなければと、モギリに友達がいるストリップ小屋へ出かけたというのだ。こゝは丁度温泉の裏あたりであらうか。華やかなシングルメロデーが洩れてくる。

大衆食堂 甘黨
めしどん



街 啓介
え 曾根三太郎

謎の男えへへへ大人

シリーズ 第一話

圖々しい男

「あんたッ？」

店の土間から、障子をそつと開け、表を通る人に、中を見られぬように、太い牀で塞いで、首だけ挿入して、低い声で呼んだが、男は答えない。子供を学校へ送り出してから、もう二時間にもなろう。板張りの道具のない六畳の間一杯に蒲団が敷かれて

一つの明り窓から射し込む太陽は、もう男の枕元まで来ていた。男は狸寝入りしているのだ。チエは、むら／＼と腹立たしさを覚え、急いで座敷へ上り、うしろ手で障子を荒々しく閉めたが思い直して、その場へ崩れて、吐息した。

（何だつて自分は、こゝろ男運が悪いのか）と、思うと、我れと我が身をいとはしかつた。

を酷使して、手当り次第に働かねばならなかった。

だから終戦のどさくさに、夫を失った時には少しも悲しみなど湧かず、嘘偽りなくほつと重荷を降ろした気で、もう二度と男なぞ持つものかと、固く心に誓ったのである。

内地へ引揚げて来ても、帰る家のないチエは、同じ境遇の人達が作ったマーケット

へ、お情けで入れて貰い、闇買いして来ては、太鼓焼を始め、どうやら子供と二人、その日その日を送った。それから一年半、最低乍らの生活基礎が出来、子供の正一も小学校へ通うようになり、ほつと一息した全くチエに取って始めて味う、小さい乍らも安定感だった。するといけない。かつて感じた事のない、物淋しさを覚えた。無理もない、赤黒い顔で、お洒落なぞ忘れ果て只生き抜く為めに、なりふり構わず働いて来たので、恋も若さも枯れ果てた、薄汚ない四十婆さんに見えるが、未だ二十九の女盛りであつた。とはいえ、今更お洒落する気にもなれない。医者の薬を知らぬだけを取り柄の、仁王様みたいにむくれ上つた風貌と、赤黒い十六貫の不死身の巨体を、持て余した。そのちよつとした隙に、この凶師春成と自称する男が、あつという間にチエの生活の中へ、潜り込んで了つたのだ。一週間ばかり前の夜、太鼓焼を喰べに這入り、世間話をしている内に、男が引揚者で、今夜泊る処もないのを知つて、身に覚えのあるチエは、一夜だけ泊めてやる事にした。尤も、こゝろ決まるまでには、男の巧みな話術や子の正一と直ぐ仲好しになつた気易さや、えへへへと、卑屈げに笑い乍らも、少しも下品さがなく、絵で見る公卿様のような上品さが妙にチエの心を掴んで離さなかつた。見すばらしい色褪せた軍服に風呂敷包み一つの姿だが、そこら辺にごろ／＼している連中とは異つていた。

だがその夜、チエは、世の中に、こんなにも図々しい男があるのかと魂消した。男は

当然のように、少しの不自然さもなく、チエを抱いた。チエは、心では怒り乍ら、不思議に骨抜きされたように、何の抵抗も出ず、男の云いなりに、不甲斐なく身を任した。どうもそれが判らない。極端に貧乏に追われ通しのチエは、夫婦の営みも、型式的で淡々たるもので、過労から強く拒絶する事も多かつた。酒に酔つて挑んで来た夫の友達を、腕力で撃退した事もある。そんなのに、この一見弱々した男に触られると、金縛りに逢つたように自分の躰が、自分の意志に従わなかつた。男は魔術師みたいに、チエを自由にした。それから、ずる／＼べつたりと、一緒になつて了つた。それはまあ諦めていゝのだが、男は、てんで仕事をしない。これでは前の夫に輪を掛けた、だらしなさである。無暗に腹が立つのだが、いざ面と向うと、チエの躰は変に燃えて何も云えなかつた。それはこの男の、女躰を悦ばす技巧が、チエのしらなかつた世界を教えて呉れたからである。これで少しでも男が働いてくれたら、何も贅沢は云わぬのだが、一週間の様子を見ても、希めそうになかつた。

間抜け面を作る

「おや、こゝに居たんだね。えへへへ」
暢気そうに、うんと伸びをした手が、チエの膝に触れると、男は、今気が付いたように顔を向けて笑つた。チエが、我になく笑いを返すと、男の手は、エプロンの裾を捲くろろとする。直ぐこれだ。邪剣に払つ

て、

「私これから、買出しに行くのよ。」

と、精一杯の荒さで云つた。

「未だ早いよ。えへへへ。」

男の手は颯つとチエの手首を掴んだ。すると、全身の血潮が、昨夜の寝まじい肉躰の接触を思出して、妖しくたぎつた。

「冗、冗談じゃないわ。おいそれと買えぬのだから、早く行かないと……」

「心配要らんよ。僕が行けば、君の半分の時間で、何倍ものメリケン粉でも砂糖でも買つて来るよ。」

「え？ あんたが行つてくれる？ でも駄目よ、仲々始めの人には、売らないから」

「なあに、問題じゃない。君は躰と足で買出しに行くが、僕は頭と口で買うからね。えへへへ。」

如何にも自信満々な、男の口振りに、本当だろうかと思つた。が、その僅かの会話の間に、チエの躰は、意気地なく蒲団の中へ引込まれていた。

「いけないわ。未だ朝なのに……。」

貧乏に追われ通しの、不死身のチエは、明るい内に蒲団などへ遁入つた事はない。まして……。

「君は正直過ぎるよ。朝は又朝で、格別な味があるんだ。えへへへ。」

柔らかく物慣れた態度が、暴君のように女の意志など、少しも省みない。

「駄目！ いけないわ。」

そう口では拒み乍らも、チエは諦めて、男の求める儘に、帯を解いた。いや男の上手に火を点けられた肉躰が、そうさしたの

だ。

「御免下さい。」

桃色の霞の中で、遠い国からの声のように聞いたチエは、ぎよつと現実へ引戻された。

「御免！」

あつと、危く声を出す処だつた。どうしよう！ あの声は正しく、日頃口姦ましい金貸婆さんである。慌てゝ起きようとする

と、

「いけない。じつとしてるんだ！」

男は、チエを一層強く抱き締めて、耳へ口を押当てゝ云つた。その語調は、まるで命令のように強い力を持っていた。と云つ

て、万一このように、朝つばらから、裸で男に抱き付いている処を、あの婆さんに見られてもしたら、大変どころの騒ぎでない

それでなくても、長い後家暮らしの曲り根性で、他人の色事を中傷的に、宣伝屋みたいに、年中振れ歩いている婆さんである。チエは、身をふるわし無事素通りを、心で祈

つた。だが、足音は無情にも、店の中へ這入つて来た。

「留守かね。御免よ。」

チエは、もう生きた気もしない。今にも障子が開きはしないかと、蒼白めて額に汗を滲ませて、男の胸に嚙み附いた。

「いゝんだよ。ほら、あの鬼みたいな婆が



障子一枚向うで、今どんな顔をしているか
考えても面白いだろう。世界一の大間抜け
面をしているよ。」

耳元で呟いた男は、片手で又悪戯をする
のだった。何と云う呆れ返った男だろう。
チエは、悶絶しそうな苦しさに喘ぎ、たら
くと脂汗に濡れて、えへへへと、暢氣
そうに笑っている男を睨んだ。

「ちえッ！ 何処へ行つたのかな。」

舌打ちして、婆さんは出て行つた。あゝ
助かつた！ チエは、一時に張り詰めた緊
張が弛るんで、大きく吐息して、ぐつたり
となつて了つた。その耳元で、

「惜しい事をした。あの婆が障子を開けた
らそれこそ、腰を抜かすような手を打つて
やろうと、待つていたのに。えへへへ。」
と、男は、氣樂そうに笑つた。

まむしの政吉

急に、表の方が騒がしくなつた。

「あんだ。ほら、ゆうべ話した、まむしの
政吉が、今日みんなの留守を知つて、又来
たのよ。お福さん可哀そうに。」

チエは、荒々しい息で帰つて来た。買出
しの用意を終えて、どれ一ぶくと、上り口
に腰を降ろし、のんびりと煙草を喫つてい
た男は、ほうと、別に大した興味もなげに
きよんとしていた。

二軒先の向いのおでん屋「福の花」は、
むつちりと色白い丸ぼちやのお福の色つぽ
い今にも崩れそうな愛嬌で、相当な客を集
めていた。それでいて、お福は、仲々のし

つかり者で、浮いた話一つなく、朝から晩
まで働き通して、胸を病む夫を養つていた
このお福に惚れ込み、何んとかしてものに
しよう、もう一年近くも追い回している
のが、浅田土建の兄哥株まむしの政吉であ
る。

もとくこのマーケットは、浅田土建の
社長——と云うより、一般に浅田組の親分
で通つた。浅田鉄五郎の義侠的な援助で出
来たもので、費用の半分は、各個人が向う
三ヶ年間毎月分割支払いになつており、政
吉は、その集金の責任者である。大した人
物でも悪党でもないが、ヤクザ崇拜の単純
な男で、人に媚てられるといふ氣になり、
相手が弱いと、まむしの刺青を派手に見せ
て、啖呵を切つた。

悪い事には、三ヶ月程前から、浅田土建
は、九州へ発電所工事を請負い、主脳部は
全部、その方へ出張して了つた。鬼が居な
くなると政吉は、急に威張り出し、面白く
ない問題がよく起きた。お福に対して、
露骨に挑んで来た。その度にお福は、相手
を怒らせてはいけなと、せめて一人身に
でもなれば、又お世話にもなりますと、当
らず触らず、軽く柳と受け流していた。処
が、思い掛けず、夫が死亡したのである。
雀躍した政吉は、さあ約束だ、一緒に成
れと、姦ましく責め立て、酒に酔つて来て
は、お福を苦しめた。一昨日の夜も、ぐで
んぐに酔つて来て、暴力でお福をものに
しようとして、反つてマーケットの責件者
達から、口汚なく罵られ、覚えていろ！
と捨合詞を残して帰つた。今日、マーケッ



トの男達が、県庁へ用事に行つたのを知つ
て、三人の弟分を連れて乗り込んで来たの
だつた。

井の割れる音と、荒々しい怒号がした。
それに混つて、お福の悲鳴が聞えた。

「どうにかならぬものか知ら！」

チエは、はら／＼したが、この脾弱な男
では、どうにもならぬのは判つてゐる。

「困つた奴等だわい」

男は、静かに腰を挙げて

「では、ちよつと、制めて来るかな」

と、まるで水道の水の洩れを止めに行く
ように、笑い乍ら煙管に、新らしい煙草を
詰めた。

軟弱戦法

「何……何を云うの！ あんだ。相手はま
むしの政吉つて、あんだは何も知らんけど
……」
チエが、顔色を変えて制めようとする
「矢つ張り、人間だろう。えへへへ」
そう笑つて、ひょう／＼と出て行つた。

おでん屋「福の花」は、目も当られぬよ
うに、荒されていた。その中で、真つ赤に
酔つ払つた、六尺近い仁王さんみたいな政
吉が、一人の弟分に手伝わし、土間へ座り
込んで泣き喚くお福を、引曳り出そうと、

手荒く争っている。店の前は、黒山の人群りだが、人相の悪い二人の仲間が、入口で肩を怒らし、目をむいているので、みんな声を呑んで、尻込みした。

「はい、御免よ。御免よ」

物優しい声で、人垣を分けて出た男は、口に咥えた煙管を左手に持ち

「やあ！」

と、入口の二人へ、愛想笑いをし、何でもない様子で、きよとんと、互いに顔見合している前を、すつと通つて、店の中へ這入り

「おい、あんちゃん。あんちゃん」

と、いきり立つている政吉の肩を、子供でもあやすように、優しく叩いた。

「何んだ！ 貴様っ！」

お福の手を掴んだ儘、凄顔で振り返つた政吉は、片手に煙の立つ煙管を持ち、にこやかに笑っている、吹けば飛びそうな貧相な男を一瞥して、何んだと、力抜けた顔になり

「お前なんかの出る幕じやない。あつちへ行け。怪我するぞ！」

と、大人気なく怒鳴つた。

「えへへ……あんちゃん。仁俠やくざの道は、そんなじやなかつたな」

驚ろいたのは政吉だけでなく、三人の弟分も、野次馬連中も、火の中へ水を流したような男の出現に、呆れて了つた。

「強きをくじき、弱きを助けるのが、やくざの道じやつたな。悪い事は云わない。勘弁してやんなさい。女は弱いもんじやから喃。折角のいい男伊達が泣く。えへへへ」

お地藏さんが、御利益をさずけるようににこやかな男の表情である。鬼にでも取り組む気構えの政吉以下も、これでは全く、毒気を抜かれた態で拳も振り上げられない

「親分は、遠者だらうな」

「へえ」

お福の手を離し、及びツ腰になつて、褒つと男を仰いだ政吉の顔には、今まで豪慢さも酒の気もなかつた。

「お、お見外れ致しました。定めし名のある親分衆と拝察致します。お恥かしい処をお目に掛けまして、御勘弁願います。手前事は……」

「おつとつとつと。えへへ……飛んでもない。自分はそんな者じやない。直ぐ横前の太鼓焼の下らん亭主でな。どうぞよろしく頼みますよ」

男は手を振つて明るく笑つた。随分人を喰つた遣り方だが、この場合、どんな暴力よりも、偉大な効果があつた。その証拠に政吉達は、手持無沙汰で棒立ちになり、彼等の最も愚かしい姿を丸出しに、我を忘れていた。

「お、お福さんだな」

同じように、呆然と、土間に崩れた儘、男を見守つていたお福は、我に返つて、慌て、

「はい」

と答え、立ち上つて、乱れた着物を直した。

「これでは、仏様も成仏出来まい。僕が一つお経を挙げてあげよう。あんちゃん。じや失礼しますぞ。えへへへ」

言葉も忘れた一同を尻目に、お福をうながし、男は、座敷へ上つた。

野次馬が散り掛けた時である。静かに詭経の音が、流れて来た。それは実に朗々としてどんな名僧にも増して、人の魂を揺するような、巧みな節廻しであり、四圍を圧する堂々たる声量であつた。政吉達も、こそくと逃げ去つた。人々の背後から、総べての様子を見ていたチエは、ほつと安堵の胸を撫で降ろしたが、何故か膝頭が、がたく顫えた。

探がす男

「図師春成？ 矢つ張りそうでしたか。もしやと思つて来たのですが」

雄二は、悦びの昂奮に声を上ずらせた。

浅田親分の一粒種の雄二は、一度戦死を伝えられたが、奇蹟的に生還し、今では父の片腕として働いていた。髪も綺麗に分けきちんと背広を着た青年紳士だが、さすがに、多くの荒くれ男を、頸で使うだけあつて、陽焼けた風貌には、男らしい精悍さが滲つていた。今日連絡の為に、九州から突然帰つた雄二は、政吉達の暴状を知るや極度に激怒し、即刻追放を申渡したが、政吉達は、平蜘蛛のように泣いて哀願するし残留の古顔達が、特に将来責任を持つからと、詫びを入れたので、漸く怒りの虫を抑え、四人をお福の前に、両手を突いて詫びさせた。その時耳にした仲裁人物の特異な風格に、強く心を引かれ、立派な土産物を持つて、お札に訪れたのである。男は、未

だ買出しから帰つていなかったが、チエから男の名を聞かされ、思わず悦びの声を挙げた。

「あの若親分さんは、あの男を、よく御存知なのですか」

「知つている処か、僕は帰国して以来、あらゆる手段を構じて探したが、どうにも判らず或いは大陸で、亡く成られたのかも知れないと、なかば諦めていたのです。いやそれは、僕だけでなく、僕と最後に生死を共にした、廿三人の者も、同じ気持で、あの人の身を案じ続けたのです。早速みんなに知らせて遣りましょう。どんなに悦ぶだろうかな」

雄二は、少年のように、明るく云つた。

「又それは、どうしてでしょうか」

チエは、不思議そうに訊いた。男の正体が益々判らなくなつたのだ。

「僕達の命の恩人なんです。こゝにこうして居れるのも、実に、あの人の超人的な働きのおかげなんです」

雄二は、遠い日の感激を追想して、眼を輝やかせた。

「一体あの人は、どんな人でしょうか」

「え？ 何んですつて！」

チエの質問が、余りにも突飛だつたので雄二は呆れたが、やがて如何にも愉快らしく明るく笑つて云つた。

「奥さんが自分の旦那様はどんな男かつて人に訊くなんて……いや、そうでしょうね如何にもあの人らしい。正直に云つて、僕達も半歳以上も、同じ飯を喰い、共に寝起きし乍ら、あの人が判らなかつたんですか」

らね。どう云つていいか、ちよつと我々は桁外れがしている人物と云う以外、どうとも云い現わせないのですよ」

チエは、益々何が何だか判らなくなり、きよとんと、雄二を見上げていた。

謎の活躍

終戦も間近い頃、浅田小隊は、天津から十数里の地点を準備していた。この中に兵隊とは余りにも縁の遠い、中年兵がいた。勿論未教育兵で、銃の持ち方も、兵隊語も満足に出来ない。幾度教えても、直ぐ忘れて了う。いや始めから、てんで習う気でない。暇つても怒鳴つても、てんで効き目がなくえへへと笑っているので仕舞いには、怒る方が馬鹿臭くなり、放任するようになった。

その代り、いざ余興となると、全く一人舞台で、一人漫才もやれば、曲芸もやる、物真似、手品、尺八、詩吟、剣舞、日本舞踊、浪曲等々、何でも一通り遣つて退けたその上、碁、将棋は有段者級の實力を持つていた。特に坊主の真似は堂に入つたもので何宗のお経も本職顔負けだった。どんな場合でも怒る事を知らず、のほほんとほけて、えへへと上品に笑っているのので、図師春成なんて名は、みんな忘れて、えへへ大人で通つていた。

覆い切れぬ敗戦の余波は、この一小隊の上にも、ひしひしと襲い掛り、充分であつた衣食物資も、杜絶え勝ちとなつた。それは直ぐ土民達に反映し、今迄自由に購入さ

れた食物も、拒まれるようになり、激しい空腹と、暗い焦燥が、一同の上に被さつて来た。すると俄然、えへへ大人の動きが活発になった。誰れが行つて依頼し、或いは威嚇しても、入手不能と化した食糧品を彼が行けば必ず、然かも無一文で手に入れて帰つて来た。その理由を訊いても、相変らずえへへと笑つて、答えなかつた。こうして、最も軽蔑していた弱兵は、一躍小隊の生存権を握る立場になつたが、決して威張ろうとせず、えへへと上品に笑つてせつせと一同の為に、食糧を集めて廻つたある雨の降る夜、突然、敵の包囲に陥つたから、大至急撤退、夜明けまでに本隊へ合流せよとの指令が来た。浅田小隊長は、直ちに全員出発準備の命令を下したが、不幸にも、二人の病兵がいた。彼等は、自分達を捨て、行つてくれと頼んだが、浅田は死なば諸共と許さず、二人を交互に背負つて、行く事にした。いざ出発と云う時に、どうしたのか、えへへ大人の姿が見えない。然し、瞬時を争う時なので、心ならずも捨て、出発した。

雨の降る真暗な道を、火は点けられず、おまけに二人の病兵を抱えた小隊は、心ばかり焦り乍らも、手探りに遅々と歩いた。二里ばかりどうにか進んだ頃には、もう絶望があるだけだった。とても、夜明けまでに、本隊までたどり着けない。死あるのみだ。互いにそうした気持ちには伝わり合い、歩みは一層遅くなつた。その時突然、雨音の中に、馬蹄の響きが聞えて来た。然かも単騎ではない。素破敵襲！浅田が一同を止め

必死の身構えをした時、馬なり飛び込んで来たのは、意外にも、えへへ大人だった。彼は敵の接近を告げ、自分が喰い止めるから、一時も早く逃げてくれと、連れて来た三頭の馬を置いて、馬首を返した。浅田達が止めようとする、

「大丈夫ですよ、あんた達が本隊へ合流する頃には、何処かで温々と、女を抱いていますから。えへへへ」

と、例の笑いを残して、雨の中へ消えた浅田達は、三頭の馬へ、病人と武器を積み身軽になつて、勇躍出発した。間もなく後方で、激しい銃声と凄まじい爆発が起つた。一同は腸を断たれる思いで、彼の無事を神に念じつゝ、本隊へと急いだ。

凡々夫

「そのお蔭で、我々は無事本隊へ合流出来たのですが、えへへ大人の消息は、全然判らない。その中に終戦となり、僕達は、天津で武装解除されたが、その時、この隊に、かつての満州国の特務機関で働いていた、重要人物が居るはずだと、嚴重に取調べられたのですが、その写真を一見して、僕達は、あつと驚ろいた。なんとそれは、自分達を救つてくれた、えへへ大人だったからです」

「特務機関と申しますと？」

「一口に云えば、スパイです」

「え、あの人が、スパイ？」

「信じられぬでしょう。僕達も仲々信じられなかつた。が、そう聞かされると、あの

人を包んでいた謎が触れて来た。特殊なスパイはあらゆる箇所へ、アヘンを秘していたそうです。万一の時の用意にね。あの国ではアヘンは金以上の価値があり、アヘンさえあれば何でも交換に入手出来るんですよ。食糧を易々と買出して来たのも、あの非常な時に、馬を何頭も手に入れたのも、それで領けるんですね。」

チエは、呆然として言葉を忘れた。又更めて、晩に來ると約して帰る雄二を見送つてから、マーケットの入口に何気なく佇んで、あの男の事を考えていた。チエの前へ、石炭を積んだトラックが、急停車すると、助手台から子供の正一を抱えてあの男が降りて来た。

「どうだ。君より買出しは上手だろう」

男は、石炭の上へ積んだ三つの袋を降ろし乍ら、子供の如くに威張つた。男は食糧事情の一番好い炭鉱の寮へ行つたのだ。そこで満州時代の知人が寮長をしていたので、原価でメリケン粉と砂糖を手に入れ街へ輸送のトラックに便乗させて貰い、帰る途中、遊んでいた正一を拾つたのである。その姿は誰れが見ても、みすばらしい引揚者である。太鼓焼の主人にふさわしい。どんな風に雄二の話を持ち出そうかと迷い乍ら、せめて、今夜はすき焼きでもと、隣りの肉屋へ、頼をほてらして、チエは入つた。

【次号】 乞食期待！

えへへ、大人第二話

魔性私刑

(終)

現地ルポルタージュ

女密航部隊上陸

本誌地方記者

対島久田村安神駐在

津雲壽郎

島・對島の境

一

晴れた日は朝鮮海峡を隔て、佐須奈村から遙か半島南端の島影を望むことが出来る国境の島、こゝ対島は、玄海灘の荒浪が白く岩を噛んでいつも深い霧の中に包まれていた。

日本本土から朝鮮半島へ、半島から日本への道筋として豊岐と共に有史以来数々の歴史が海峡の波濤を越えて、両者の密接な繋りを証明している。然し敗戦によつて、内地と植民地を結ぶ軛帯としての役目は嚴重なる連合国の監視の下に断たれてしまった。

新生独立の喜びに躍る半島と、敗戦という最大の悲運に哭く日本との明暗二条道の境界線でもあつた。終戦直後一人当り二合一勺の配給量では、島民の健康を保持す

るのさえ十分ではなかつたが、島の一年間の主食の生産高は、数字的に表わせば人口五万の島民の僅か一ヶ月の糧にしかならず、それは窮乏した本土の食糧事情以上に悲惨なものであつた。

その頃、新生朝鮮の各地からは嚴重なる監視と海峡の激浪と闘い密輸船は続々と朝鮮米や砂糖を満載して、島嶼に揚陸し、島の薪炭や海産物と物交した。勿論彼等は巨利を博することを目的としてこの危険を冒したのではあつたが、飢餓寸前に陥つていた島民にとつて如何に救いの神となつたかは想像にかたくない。

月二十五日、世界の火薬庫として危険視されていた冷たい戦争の接点、朝鮮半島の三十八度線は遂に熱い戦争となつて爆発した。李王朝三百年の専制政治と日本治下五十年の植民地生活より脱して宿願成つた祖国韓国の独立も一瞬にして骨肉、同胞相喰む修羅場と化してしまつた。

祖国の山野がすべて戦火にさられて、荒茫たる戦場に逃げまどる独哀れな民族と、今や新生講和



立の希望に輝やく日本の最尖端と明暗二条道はこゝに逆転して、国境の島、対島は再び時代の脚光を浴びてきた。マレーインを超えて海上保安部の嚴重なる警戒網ををくつて

二日余り時化が続いたので、平穩な日々であつたが、今朝は淡い霧と共に風いでいたので、てつきり密航者があつたための非常召集であると直感した。朝食のかわりに、蒸したての甘藷をポケットに放り込んで、神社の石段を駆け上つた。僅か二十三名の団員は殆んど揃つていた。団長の説明によれば、早朝草刈りに行つた娘が、山の中腹で鮮人の婦女子二十数名と出逢つたというのである。

一見して密航者ということがわかつたが、嚴原の警察へ連絡するにしても数時間を要するため差し当り任に當つてゐる消防団員の召集をしたというので、直ぐ一同揃つて現場へ急いだ。若い団員達は婦女子の集団ということに好奇の眼を輝やかせながら、我れがちに息をきつて駆け登つてゆく。

示された現場へ来て見たが人影はない。しかし先刻迄人がこゝに集つていたことを示す証拠に草が土足に踏み荒され、丸めた紙屑がちらかされてあつた。一同は手分けをして周囲に散らばつていつた二十分程してようやく六十位になる老婆を一人、山林内で発見した。幸いに日本語を話すことが出来たので事情を訊いてみると、四日



前の夕刻釜山を女ばかりで十五名の集団で三十余屯の小型船に乗って九州へ密航を企て、途中玄海灘の激浪に押し流されて、昨夜遂にこの島に漂流したが、山中でかいもく地理がわからず、風は発見される心配があるので一人一人分散し、夜は寂しいので集って過したが、火を炊くことが出来ないため生米を嚙つていたと、弱々しく語った。

三

樹の枝々に囀る小鳥の声を聞きつゝ、背丈に近い叢を分けてゆくと、山猫がカサカサと荒い音を立て、目の前を通る。私は定められた方向を真直ぐに進んで、いつしか旧軍隊が掘り残した防空壕の所迄来た。

そこで私はふと子供の声を耳にした。思わず「居たぞッ」と大声で叫ぼうとして、一步退きつゝ壕前にいる若い婦人の美しい姿に声を殺した。自分乍ら異常な心理現象に驚いた位だ。幸いにして私に感づいていないらしいと、息をこらして木陰から見ていると、傍に五六才の男の子と、四ツ位の女の子が、何か母親に訴えているようである。二人共派手なオーバーを着て今丁度可愛盛りである。

母親は茶色の下衣に黄のセータ

1、胸の飾りボタンが朝日を浴びて光っている。頭髮はパーマをかけ、近代的な容姿はこの村でも見ることの出来ない位垢ぬけしたものであつた。年齢は私とは余り離れていない様子である。

その中、女の子が小便をせがんだらしく母親が附添つて、木陰へ用をたしに行つた。私は防空壕の陰に沿つて、男の子の前に姿を現した。突然、ワツと泣き叫ぶ子供の声に母親はギョツとして女の子を両手でかばつて、私の方に鋭い視線を向けた。私がゆつくりと母親の方へ歩を運ぶと、彼女は身を震わせて、

「私は、どうなつてもいいけれど此の二人の子供だけは助けてやつて下さい」

と直剣な顔を向けるのであつた。歯切れのよい標準語は田舎弁の私の日本語も及ぶところではなかつた。意外な彼女の言葉に驚いた私は、黙つてポケットから出した蒸し芋を彼女の手に握らせた。母親は礼を言う言葉も待てぬらしく、それを二人の子供に分け与えるのであつた。

「二日間は生米ばかり嚙つていました。激しい戦火の中で生命の危険にさらされていると思えば私はいゝとしましても、この何にも知らない子供たちが可愛そうで、

……この御礼に私で出来ることなら」

そう言つて彼女は私に身を投げかけてくるのであつた。子供達は腹が大きくなつたのであろう濠の周りで遊んでいる。同僚達はどの方面を歩き廻っているのだろうか樹々に囲れたこの一地域だけは、暖かい静けさに包まれていた。張り詰めていた心が安堵という大きな霧閉気の中に解け込んでゆく快さでもあつた。

四

彼女は日本内地の高女を卒業、夫は東京理研の職員であつたが、終戦と同時に朝鮮へ帰り、楽しい家庭生活を続けていたのも東の間の動乱で主計中尉として従軍していた夫は、半年前に戦死し、其の後その扶助料で細々と生計を営んでいたが、果てしないインフレの波には抗しきれず、再び安住の地を求めて日本へ密航の群に投じたと

いうのだ。

所持品一切を金に替え、現在の持物といへば小型のトランク一個と風呂敷包一ツだけである。釜山を出る時手にした金も、密航費として子供二人を含めて三十万円も支払われたので、天にも地にも今は此れが全財産だというのだ。戦火に巻き込まれた半島の悲惨

な有様を彼女の口からポツリポツリと聞くにつれて、私が抱いた彼女に対する野心を今更乍ら恥しく思うのであつた。片手にトランクを提げ男の子を背負つた私は女をうながして、村へさして下つて行つた。

すでに同僚達は全部揃つて居た先刻の老母を交えて十五名の婦女子が村役場の前に連行されていた前以つて連絡してあつたので、町の警察署より警備の係官が出張していたが、密航者の代表となつて答弁に当るのは、私の連れてきた二人の子供の母親であつた。

若い団員達は「良い女だ、玉だ」と口々に囁やき横目で見乍ら脇腹をつつき合つた。それ程、彼女は垢抜けして際立つて美貌であつた。係官の持物の検査が始まつた。彼女の番となり、トランクが開けられ、毛布がひろげられた時には、思わず私はハラ／＼とさせられた。つい先刻の名残りを見せられたやうで心の中で赤面した然し当人は案外平気であつた。老人の出した財布の中から数枚の銅銭がバラバラと地の上へ落ちたので、一同は声を合せて笑つたが、何かそれは正視出来ない痛ましきであつた。

南紀温泉郷探訪記

温泉旅館初夜物語

港 晴 路
秋 田 冷 光 画



編集部から、温泉旅館の探訪記事をとるようと言われて、白浜の温泉の町に滞在すること三日間、一級の旅館から安宿屋に至るまでずらりと軒を並べた南紀の別世界は、ほのかに鉱泉の匂いがたぎよい、結婚のシーズンを迎えて、活気が町ぜんたいにみなぎっている。昔は温泉というと、湯治の客の独占地とされたものであるが、今は決してそうではない。

編集部から、温泉旅館の探訪記事をとるようと言われて、白浜の温泉の町に滞在すること三日間、一級の旅館から安宿屋に至るまでずらりと軒を並べた南紀の別世界は、ほのかに鉱泉の匂いがたぎよい、結婚のシーズンを迎えて、活気が町ぜんたいにみなぎっている。昔は温泉というと、湯治の客の独占地とされたものであるが、今は決してそうではない。

泊何食付で、往復の運賃も計算にはいつている、週末旅行にはもつてこいの此のクーポン券付旅行は相かわらず人気がいゝらしい。もつともツーリスト・ビュウローの狙いは、なるべく安く、簡単な旅装で気軽く出かけられる、大衆（特にサラリーマン）の行楽氣質に重点をおいているので、すべてが簡単に旅行のプランを一貫している。

同じ会社につとめている、相思相愛の恋人同志が、土曜日の午後プランを樹て、男は手提げ鞆、女の方もハンドバックひとつといつた身軽さで、夜の阪和天王寺から、白浜に直行する組は少くない。私が国鉄阪和のプラットホームに立つた時も、どうやらクーポン券組らしい男女が、あちらこちらに寄り添って待つていた。列車は天王寺仕立なので、発車する間まで皆プラットホームに佇んでいるのだ。黙つて歩きまわっている組何かしきりに、重大な決断をうながしている組、くすくす忍び笑っている組、男の腕に片手を廻して、すべてをまかせきつていゝ組、アベックほど、微妙な雰囲気をかもしものはない。

私は丁度、後ろに歩いて来た彼女たちの、ブライベートな囁きを聞いた。男の方が、しきりに何か口説いている様子だつた。それには女の方が、ハタと当惑したように立止つて、

男が最後の切り札をならべた。プラットホームの男女が、一組づゝ車中の座席へ消えて行く。発車時刻が秒一秒と迫る。……

突然女が、男の腕に縋つた。「私、帰りません。……どこへも行きますわ」

ついに女の牙城はくずれた。

白浜駅に着いて、続々と降りてくる男女の中に、彼女たちの姿もあつた。慾をいえば、R旅館に投宿してくれることを希つたが、彼女たちは少し離れた、N旅館の玄関口に消えて行つた。

このN旅館は、一昨年馳け落ち女学生的情死未遂事件が起きたところだ。

女は、大阪の素封家の三女で、某高女に在学中。男は、新制高校生で十八才、女は一つ年上の十九才であつたが、旅館の帳場では、二人がすっかり服装を変えていたのと、態度が落着いているので、宿帳の年令に別に不審をいだかなかつたらしい。

宿帳には、男の手で、

井崎良夫——二十一才

妻、晴子——二十才（何れも偽名）

と書かれており、部屋付の女中も、二人を新婚の夫婦だと思つて

そのつもりで扱つていたという。情死の原因は、男の家庭が貧し

いので、両親が結婚を許さなかつたため、将来を悲観して死の逃避行となつたのである。

二人は一週間あまり泊つていたが、からだの関係があつたのは、投宿して二日目にあつたらしく、三日の朝、床を片付に行つた女中の話では、敷布の上に完全に結合したさういふのが、二滴ほど附着していた。勿論本人たちは気づかなかつたであらうが、あの血は湯では落ちにくく、寒中などは凍りつくような真水で洗わなければならぬので、旅館の女中も迷惑千万な話である。

同じ新婚の初夜組でも、少し思慮がつく年であると、こうしたさういふはめつたにない。女も二二、三になれば、一応性智識を身につけているので、事前に適当な処置をほどこし朝、顔から火のでる思いをすることはない。

情死を計つたのは、投宿してから八日目の深更で、サイダーでプロバリンをのんでいた。

九日の朝、何時になつても起きてくる気配がないので、若しやと思つて女中が確かめに行くと、二人は既に昏睡状態におちいつていた。

早速警察に急報して、最寄の医者に応急手当してもらつたので危く命はとりとめたが、その時の

二人の姿は、夫婦のいとなみを行つたまゝの恰好で、男も女も、下半身には何もつけていなかった。

尚、女の持物のハンドバックを調べると、コンパクトの外に口紅財布、プロバリンの使い残り、それにコンドーム二個が入つていた。心中もこの程度ですむとまだいふ方で、完全に息を引きとつてしまふと、仲々やつかいになつてくる。検死が終るまで、誰も部屋に入ることは許されない。それも、たいがい好き同志で死ぬくらいだから、たいい的情死は死ぬる直前に、最後の交渉をやつていふ。

それをたとえ検死とはいへ、無慈悲に夜具をとつてしまふので、顔を赤くするような男女の姿を見なければならぬ。

温泉旅館に長くはたらいでいる女中さんになると、非常に職業意識が鋭敏になつて、初対面の六感で、ピンとお客の筋が判るといふ

つまり、このお客は連れ込みであるとか、心中するおそれがあるとか、また新婚の夫婦の場合であれば、翌朝の二人の様子から、初夜の経過が判るのである。しかし、これまでに判るには、やはり何んといつても長い経験が物をいう。

新参の女中さんなんかでは、とうていこれの十分の一も判らない。仮りに、新婚の夫婦が三日泊と

すると、必ずしも第一日が、初夜であるとはいへ、切れないのだ。一例を挙げると、このR旅館でも最高記録が五日目に初夜という、一寸比類の少ない気の弱い花嫁さんもあつたのだ。

これは結婚までの経緯、年令、性格、その夜の生理的条件などによつて異なり、傍らに愛すべき花嫁と同衾しながら、指一本もふれずに、むざむざ一夜を送つてしまふのである。

若い女中さんに訊くと、お客の中でも、新婚夫婦が一番気をつかうと洩らしていた。とくに、あくる朝などは、時間と気配に注意して、まるで、自分の不仕末のあと片付けでもするように、夫婦がそろつて洗面している間に、急いで夜具をたゝむのである。

掛布団をとると、ブーンと甘い花嫁の体臭が残つていふ。初夜のあとを見るのは此の瞬間なのだ。敷布団は、二枚重ねの上等であるから、寝だくぼみが完全に残つていふ。それが、どちらかの枕の方で一ツのくぼみをつくつていふ時は、初夜はすんだものと認めてさしつかえない。

古い女中さんになると、花嫁の髪を見たり、歩き方でだいたい見当がつく。

初夜にも二つの組があつて、ほ

んとりに、純潔であつたものと、そうでないものがある。

結婚前に、既に異性を知つていふ花嫁などは、どこかにあらわれるもので、初夜にはじめて経験した女にくらべると、床に入るまでの動作がちがひ、同衾後のしまつが注意ぶかいものである。朝、女中がくるまでに、枕の位置を直したり、敷布のしわを気にしたりするのは、一度でも知つた女でないと気付かないことである。その点初夜を迎えるまで処女であつた花嫁は、身心ともに人妻になつた安堵感と、良人に対する信頼の芽ばえとで、態度もの腰ひとつが、はじめの様子とちがつてくる。

最近結婚式も、非常に合理的になつて、三々九度の盃が取かわされると、すぐ披露宴はいり、次いで新郎新婦が旅行に出るといつたスピードぶりである。花嫁は堅くらしいモーニングをぬぎ、花嫁は重いかずらを取つて、身軽な旅装で温泉旅館に到着した時、はじめて甘い言葉をかわし、今宵こそ事実上夫婦になるのだというよろこびに燃えるのである。

初夜を迎える花嫁は、洋装、和服の旅仕度をしていて、いよく床入となると、それゝゝ携行の長じゆばんに着かえるのだが、この長じゆばんこそ、初夜の歴史を永遠

に秘めた、夫婦だけの想い出になる肌膚なのだ。美しい花嫁が、白い肌をチラチラこぼしながら、燃えるような緋の長じゆばんに着かえる物音は、花嫁にとつては正に歓喜の前奏曲ともいふべきであらう。

R旅館でも最古参で、しかも新婚組を数多くあつかつてきた、おしげさんという女中さんに、初夜の生態を突込んで訊いてみた。

「戦前と戦後の初夜に、何か変わった特長はないですか」

「そうですね。変つた特長と申しますと、ご夫婦の愛情の表現へおしげさんは、こんなムズカシイことを云つた」がロコツになるようです。こちらへお着きになつてお召しかえをなさるとすぐに接吻なさつたり。この頃は花嫁さんともとても大胆ですよ。ご夫婦だから誰に遠慮はいらないとはいふもの、あまり接吻が長いので、ご用事があつても入れません。そんなことがいつも……」

「見えるんですか」
「ええ、夏などはハッキリ判りますよ。また見えなくても長い経験で、ピンとくるんです。」

お部屋がしんとして、物音のしない場合は、ほとんど猛レツな接吻の最中なんです。あてられてしましますよ。ホ、ホ、ホ」

「そんなに仲がいい夫婦は、風呂なんかも一緒でしょう」

「たいてい一緒ですよ、それがまたとても長いお風呂なので、かえつてこちらがマゴツイてしまいます」

「一体中で何をしてるんです」
「さア、そればかりはネ。ホ、ホ」

「神聖な初夜を迎えるので、齋戒沐浴というわけですか——」

「私たちは、湯殿にいらつしやる間に、お床を取つて置くのですが中にはそのお床に香水をまいて、初夜の雰囲気をやが上にも効果

的になさる方もあります」
「なるほどね。バイオレット（香水）なんかは相当性欲を刺激するそうです」

「朝お床をあげに行つた時、プーンといふ匂いをするのはいいんですけど、敷布にへんなものがついていたりすると、いつべんに幻滅を感じますわ。とくに若いご夫婦ですと、よくしくじつていらつしやるんです。初夜に女の体にとんな異状が起きるかということをご存知ないのでしょうか」

「すべてが神秘だと思つてるんですよ」

「第二の初夜の奥さまですと、その心配はございませんね。……でも、花嫁さんにすれば、それで処女であつたかどうか証明されるのですから、なか／＼もつて重大問題でしょう」

「好色川柳に『生娘であつた証拠に血をながし』というのがありますが、花嫁として妻のあれを見れば本望でしょうね。結娘まゑに相当女道楽をやつた男は、あの瞬間に女が男を知つていたかどうか判るそうです。大したもんだ」

こゝで、おしげさんに初夜の特ダネを提供してもらつた。

七カ月ほど前のことである。花

嫁は三十四才、花嫁は二十五才で三日間R旅館に泊つたのであるがいよいよ初夜となつた時、夜中になつて花嫁が泣きながら部屋から出てきたのである。何しろ夜も更けているし、他の部屋の新婚組もむつまじく愛撫の一夜を送つてい

る頃なので、おしげさんは長じゆばん一枚のしどけない姿で、廊下に泣きくずれている花嫁を見て、びつくりしてしまつた。まさか初夜そう／＼から、夫婦喧嘩でもあるまいと思つて、なだめすかして訳を訊くと、どうやら出血がなかつたので、花嫁の処女を疑われたらしい。それで結婚を解消されてもいゝから、別の部屋に一人で寝

たいというのであつた。しかし、そんなことをすれば、かえつて専ら面倒になるから、まあ／＼此の場は私にまかせて下さいと、おしげさんが仲にはいつて雙方をなだめた上、その夜はどうにか丸くおさめたのであるが、翌日、朝になつてご気嫌を伺いに入つて行くと昨夜のいざごさは何処へやら、花嫁さんはしきりに頭を叩いて、

「昨夜はいろいろご心配をかけたが、実は……」と言ひ難そうに顔を赤らめて、これも恥入つて顔を伏せている、新妻の方へ眼をやつて、とう／＼白状してしまつた。

「ははー」とおしげさんは直感したが、その時は黙つて引きさがりあらためて夜具をかたづけにくると、どうであらう、あれほど大袈裟にさわいでいたものが、チャンと敷布の中央にじんんでいるのだつた。

これなどは、花嫁の無理解から起つた、嘘みたいなナンセンスである。性科学者たちに言わせると強じんな処女膜は、初交において破れぬ場合があり、したがつて破爪にもなる出血もないわけである。

祝福すべき結婚の初夜に、こうした悲劇が起きるのは、性智識の欠陥からくるのが多いが、中には地位や金力に屈服して、不純な初



夜をさげねばならない、連れ込み組の悲劇もある。

殊更戦後の温泉旅館は、逢曳と桃色遊戯の桃源境と化した傾向である。

男が、温泉に行こうかと誘う意味は、とりもなおさず、女の肉体を要求していることなのだ。別に経費のかさむ温泉旅館でなくても市内の温泉マークでも、これを許容することは、女が貞操を許すことを前提としているのだ。つまり温泉旅館とは、スリルに富んだ安易な待合に外ならない。

R旅館に泊るアベックで、男の方が四十年輩の紳士、女が三十代の美人であれば、男は重役や課長級、女はその会社に勤めている女事務員かタイピストである。

女はなか／＼器量がよく、他にいくらでも若い恋人を物色できるのだが、交際するには小遣が足らず、それに美しい洋服の一枚も欲しい。その弱点をつかまれてしまうと、あとは上役という地位に押されて、ずる／＼とデカタンになつてしまふのだ。

今どきの女性には、貞操より金力の価値を認めている。

小柴よし子(仮名)二十二才、某製紙会社タイピスト。彼女も洋服や靴をつくるため、会社の課長に連れられて、R旅館に投宿した

おしげさんの報告によつて、湯殿から帰つてくるところを、廊下でチョット見たが、やゝ中肉の丸顔の女で、容貌八十点。丹仙を着ていたが洋服のよくうつるタイプである。

何故おしげさんが彼女のことに詳しいかというと、以前にも一度会社の重役に連れられてきたことがある、その時は男と寝るのとおそろしいといつて、部屋から逃げてきたのである。その彼女が半年とたない中に、今度は腹をきめて一緒にきたのだ。しかも上役の男と差し向いで、ビールを飲むほどになつており、おしげさんにこゝろ云つた。

「女が人並に生活して行こうと思えば、やつぱりパトロンが必要だわ」と。

短かい述懐のうちにも、きびしい世相の生き方がうかがわれるではないか。

小柴よし子は、月一万円の約束で、少くとも一週に一回は、上役の自由になつてやるのだそらだ。今日は、その第一回の逢曳というわけであるが、一週に一回として、月に四回で、一回の割合が二千五百円。公衆便所みたいな汚い接客婦に一夜二千数百円とられることを思えば、実に安い初夜代である。

よく売春婦たちが「この頃の素人女は、妾たちより一枚うわ手やとの／＼しつてゐるが、正しく今の素人女は、街娼の皮肉を裏書してゐる。温泉旅館にくる連れ込みでも、素人女より素人女の方がはるかに多く、平気で初夜のらん売をやつては、体をやつすのに躍氣となつてゐるのだ。」

大阪の女事務員で、パトロンまたはそれと同様な条件で、肉をひさいで衣裳や小遣銭をつくつてゐるものは、だいたい四割程度はあるという。

仮りに、月給六千円として、一ヶ月の小遣(映画、お茶、お化粧代を含む)が千五百円。

あとの四千五百円で、洋服をつくり、贅物をこしらえて行こうとすれば、家庭に入れる金はなくなつてしまふ。そこで、小柴よし子が言つたように、人並にして行こうと思えば、どうしても肉体を売らなければならぬ。

私は夕方の省線の中で、こんな彼女たちの会話を聴いた。

「ねえ、こんどの土曜日にスバル座に行かない? いゝ映画やつてんよ」

「うん、うち行きたいけど、マネー薄いのよ」

「あんたはいつもピーピーしてんのね。いゝことおしえてあげようか?」

「なあに?」

「オんセン——判つた? 課長さんならいつでもOKよ。フツ、フツ」

意味ありげに、腰をつゝいた女事務員は、なるほど、リュウツとした素敵な洋服を着ていた。しかし、彼女たちも、この洋服一着をつくるためには、心にもない初夜をおくり、いろんな悪戯をされてゐるのだ。すべてが金を条件として、一夜の妻になつたのだから、不服は言えないようなものゝ、連れ込みの場合は新婚の初夜とちがつて、徹頭徹尾男のおもちやにされてしまふ。はじめは覚悟の上できた女が、悪戯のあまり恐怖を感じてワニキズム(陸けいれん)を起し、同衾のまゝの奇怪な恰好で医者をつんだ例もある。昔、嫁入の時に長持を道具の一ツとしたのも、こんな醜態を隠すためであるという。現在は医学が進歩しているの、人前で死ぬる様な思いをするのではないが、性的に無智な処女の初夜には、神経作用で起きる場合もある。

温泉旅館に女を連れてくる男はこのへんのことはよく知つてゐるのか、事前に酒をのますことゝ、避妊の処置をほどこすことは、ゼツタイに忘れない。これは、女を自由にしやすい、後の責任をまぬがれるためであらう。

おしげさんは言う、

「私はこんど生れる時は、男になつて生れてきます。どうして? そりやア温泉旅館の女中さんをしてみれば判りますよ。ホッ、ホッ」

◎記事写真訂正廣告◎

本誌昨年十月号三七頁所載の写真は編集部の手違いにより誤りて挿入発表されましたので、こゝに右写真を削除し、同誌面に掲載されるべき性質のものでない事を広告致します。尙右に依り御迷惑を蒙られた向きに対しまして謹んで御詫び申し上げます。(編集部)

いでの温泉の香 かおり

鉄の香が、仄かに鼻孔に滲みてくる。
屹立した巖の狭間の谿谷に立昇る湯煙が
岩壁のところどころに忍び出た檜、栗、松
の老樹へ絡んで、薄藍色の絵の具をとかし
たような空へ消えこんでいる。
夕から宵へ移りゆくほのぐらさ。

無蓋の湯舟から振仰ぐと、薄雲が何処へ
ともなく飄々として耳を抉るような静寂

沼田、老神六里の野山

峠こえれば温泉の郷の

恋の手招き、踊り袖

澄んだいい声で、お伝は小さく歌つてい
た。

鈍い鉄色の湯の中に、二十二歳の裸形の
女体がたおやかに揺れ動いて、うす桃色に
上気した顔に、オクレ毛が二条三条乱れか
かり、ウツトリと目をとじた真向うに、淡
い宵月がかかつていた。
暖れた夜鳥の音が、森閑たる静間を縫つ
て過ぎ去ると、あとは想い出したように動
かすお伝の手に、ボシヤツと鳴る湯音があ
るばかり。

小刻に震えては去り、近寄る湯の小波が
シーンと鎮まると、高い雲の去来と、月影
を映して、銀鼠色に美しく彼女の乳房を押
包んだ。

入湯の連れもない唯一人。天然の岩風呂
に恍惚とひたりながら、その儘山の精に憑
かれたように――。

お伝は突然ビクツと臉を震わせながら、
寄りかかつていのる巖上を真ッ直ぐに振仰
いだ。畳み上げた石のように、真上は僅か
ながら平の巖だ。

其処に――。

じつとお伝の裸体を見入っている男の顔
がある。

「アッ！」

湯が激しく揺れて、丸い顎へ湯飛沫がか
かる。

伸ばしていた二本の足が慌てて二ツに折
曲げられ、太く白いくの字形の上に上体が
折重なるように近付いた。

「誰だい？ 誰なのさ？」

お伝は頭上の巖の人影へ声を投げた。

逢魔が刻という。

その魔の精でもあるのであろうか。
が――。

――男の頬が、お伝の声を聞きつけて、
微かに笑った。

「私だよ、お伝さん」

男の音が低く答える。

「あ、佐吉さんかえ！」

「遊湯の客――越後の毒消売の旅行商人だ
と云う。お伝より一日遅れて湯の客となつ
た男だが、客と云えばお伝と此の佐吉のた
つた二人きりなのだ。

「お馬鹿さんネ、そんな所から覗いている
なんて――」

相手の素性が判ると、ちぢめた足を再び
投げ出して、

「降りていらつしやいよ」

「本当かい、お伝さん？」

「お馬鹿さん――！」

巖の上から消えた佐吉の姿が、程なく小
を廻つて近寄つて来た。

十八だと謂う。藁の荷を背負つて、旅か
ら旅を渡り歩く行商人には珍らしく、日焼
けも見せぬ色白な面は、子供のような、あ
どけなさが何処ともなく残っていた。

「そんな所へ立つていないで、は入つたら
どう？」

「いいんですか、は入つても――？」

「悪ければ云やアしないけど、お気に召さ
なければねエ」

片品川。

x x x

煩悩お伝地獄

穴洼村 弘
幾々藏





早い病葉の一とひら二たひらを乗せて、急奔な流れが巨岩怪石の頭を躍りこえて、真ッ白な飛沫。

握りつぶしたように、淡月薄光がクシヤクシヤに縮んで、水面に落ちていく。

流れの音。

水面の景。

それ等は湯舟の園には僅かに遠く、二ツの裸体が熱い血潮を燃やして沈黙している

一とひら。

栗の葉でもあろうか、お伝の髪の上へ、ヒラ／＼と舞い落ちてきた。

つツと思ひ出したように

「あんた、何時頃此処から帰るつもり？」

「そう何時迄も居られないでしよう、しがない旅行商人ではネ。だが、せめて、お伝

さんが逗留している間だけは居たいと思つ

ているが——」

「お上手ネ、あんたと云う人は——」

「客と云えば、私とお伝さんの僅か二人つ

きた病葉。

きり。お互いが知らぬ他国の者同志だけれど、此処へ来てお伝さんを知つてから、本当に離れる事が出来ない心持になつてしまつたんです」

「あんまり悦せると、家へ帰さないから」

お伝の目許を、ニイッ！ と艶っぽい笑

いがすぎた。

体内を流れる淫奔な血潮の要求でもあろうか、彼女の指先は、自然のように、佐吉

の指に絡んでいた。

触れようとせずとも触れる狭い湯舟の中

で惹かれたように佐吉の股が、お伝のフク

ヨカな股にヒタツと接した——。

「私、もう上ろう。佐吉さんあんたは？」

「お伝さんが上るんならネ」

「お部屋で話そう。そのほうが宜いでしよ

う？ 此んな所だと、何時誰が来るか知れや

しないからねえ」

月影を掠めて、又、一とひら舞い落ちて

来た病葉。

黙した森閑たる静間を、バシヤ／＼と湯音が破る。お伝が上り仕度を始めたのだ。

雪白。そして豊満。

ザアツと肩から湯を滑らせて立上つたお

伝の裸身へ、佐吉の両眼は、肉の悶えを宿

して注がれた。

形ばかりの脱衣場。

巖の蔭の堀ツ立小屋で、手早く着物を身

に着けると

「では佐吉さん部屋で待つてゐるからネ」

誘いの目許は殊更色ツばく、爪先登りの

小徑を、お伝は身軽に、小走りに駆け上つ

ていった。

明治五年——初秋の宵の寂寞が、細いラ

ンプの光に絡んで、お伝は一人、膳の上の

徳利を取上げていた。

程なく来るであろう佐吉の面影を偲ぶに

つれて、下駄に残してきた亭主波之助の姿

が近々と臉に近寄つてくるのだ。

癪の病で、床に呻吟している筈。

謙悪も、悪感もない。

唯——。

運命と諦めて、只管つくしてきた筈のお

伝なのだが——。

まして、此の温泉の逗留も、良人波之助

を偽つては来たものの、決して遊湯の客で

は有得ないのだ。

老神の温泉は、あらゆる病氣に利くと云

う。本当だろうか？ 不自由な波之助に苦

難の路を歩せるより、ソツと行つて事実か

否かを確かめよう。

高崎の叔母が病氣だと、波之助を偽つて

自ら湯の客となつたお伝だった。

が——。

愛情は別として、枯渴した波之助の肉体

の上に、女盛りのお伝の肉体は、常に哀愁

を感じていたのである。

それが今。

若い美男子、佐吉の肉体を凝視てより、

渴望の血潮は妖しく燃え始めてきたのだ。

きょうらく

享樂の果

風——。

山廻りの雨になろうとするのか。

隙洩る風に、山奥の宿の夜は、流石に肌

寒く、深い静寂がカ細く息づいていた。

「佐吉さん、今夜は此の部屋から出さない

よ」

敷いた夜具の上に崩れたお伝の腕が、佐

吉の首筋へ白蛇のように絡んだ。

「判らない、お伝さん私には判らない？」

酔つた目許で、甘えるように、佐吉はお

伝の顔を振仰いだ。

「判らないつて、何が判らないのさ」

「お伝さんが娘なのかお女房さんなのか」

「いいじゃないの、そんな事。どつちだつ

て」

笑つて、首を抱えた腕に、力を置めたお

伝だけれど——。

人の女房。

ましてや。

癪病に呻吟する者の女房と知れたら、此

の妖艶美麗な容姿も、佐吉の目には何ん等

価値のない女と化し去るであらう。

奔逸する肉慾の血の静まる迄、身の素性

を知られたくない、煩悩にあえぐお伝だつた。

「寝ようよ佐吉さんもう大分遅いからネ」
佐吉の顔を引寄せて、力強く押つけたお伝の唇は火のように熱かった。やがて、お伝はよろめき加減の足を踏みしめて立上つた。

ハハリ、手を滑つて帯が――。

そして、肌褌袴の裾さが――。

――帰らなければいけない。下牧の我が家で、女房の偽りを偽りとも信ぜず、淋しく待つてゐる波之助の身の上に、お伝の心は幾度か馳せとんだ。が、

しかし。

空闇に等しかつた幾夜の佗しさから、奇くしも味わつた佐吉との一夜の快楽は、良人へ時折馳せる心とは別に、お伝の足を強く、空谷に近い温泉の宿に引止めたのである。

今宵も。そして、又、今宵。

無蓋の彼方の宵月を眺め乍ら巖風呂の中の二つの裸身はあくことを知らないのだ。
「佐吉さんも、そろゝ家が恋しくなつたろうねえ」

佐吉の掌の中に弄び乍ら、フツと想うともなく、良人波之助の身の上に、想いを走らせたお伝だが。

同じ時刻に。

嶮険なくくり、峠を、トボトボと力なく杖に頼つて下つてくる饅頭笠が一ツツ。

遙か眼下が温泉の郷だと云う。

里人の教えに導かれつつも、物憂い足取りは、月を佗しく頂いていた。

湯煙は見えない。

が――。

神秘的な郷は其処にあると云う。
頼りない己の力に鞭打つて、饅頭笠の主の足としては、それでも速かつた。

更に。

その旅人のあとを追うように、セカセカ峠を登つてくる一人の小娘。紺の風呂敷の小包みを背に負つて、紺がすりの着物に、裁著、草鞋ばきの姿は、雪国より出た旅行商人のそれであろう。

目差すは、先を行く饅頭笠の旅人か？

あるいは。

やはり温泉の郷か。

夏から秋へかけての日光の直射も受け付けぬ色白な丸顔に、何か祈つてやまない愛いの色が刷かれていた。

佐吉の裸身を膝の上にのせて、お伝は愛し弟を愛撫するように、髀と抱きしめていた。

「佐吉さん、あんた、何んの目的で、此の湯へ来たのだい？」

「旅する身でありながら、行つて見た事がないでは、話になりませんからネ。私よりお伝さんは――何処か体でも悪くて？」

「そんな風に見える？」

「意地悪だよ、お伝さんは！」

「ホホホ、私のような女は、一寸でも話に上るような場所へは、一度行つて見ないと気がすまないんだよ。厄介な性分ね。でも来て良かった、と思つたのは、此処が初めて――」

「どうして――？」

「佐吉さんが居るじやアないの」

ソツと乳房へ触れた佐吉の手を、上からギョツと押えて、フト何気なく頭上の巖を振仰いだお伝だが――。

其処に三日前の思い出がある。

じつと見下している男の目。それがお伝の肉慾を掻きたてた愛し佐吉の覗き顔の顔だつたが――。

饅頭笠が一ツツ。あの時の佐吉のように二人の情痴を凝ツと見下しているのだ。

お伝は思わず佐吉の体を膝の上から突離して、

「誰、誰だい？」

低い、鋭く声をかけた。

「――」

答えはなく、饅頭笠は動かなかつた。

と――。

彼女の胸にギクリときたもの――宵闇とけ云え、月があつて明るいのだが、深くかむつた饅頭笠に遮られて、その主の容貌は判らず――しかし、波さん！

間違いない！ ザアツと湯を割つて立上りざま、又、振仰いで見ると、饅頭は既に消えていた。

狼狽したお伝が、脱衣場へ駆け上つて、手早く着物を引ツ掛けて帯を廻すと

「お伝さん！」

後から追つた佐吉の声は、今は唯、怖ろしい物にしか聞えないのである。

「お伝！」
巖と巖との間の小徑を、危つかしく、蹠と下つて来た饅頭笠の主の姿がお伝の前

に踏み止まつた。

「波さん！」

お伝の足許へ饅頭笠が投げられた。

「お伝、よくも俺を騙してくれたなア」

顛の病に、元の美貌をすっかり失つた波之助の醜怪な相貌に、呪いの影が泣くように漂つた。

形影相弔う。

此の身に、それ以外の何があるか云うのだ。

「違ふ、波さん！」

叫んだお伝の声を

「高崎の叔母御が病氣だてえのは此処だつたのか。おまけに、その叔母御が、何処の馬の骨か判らねえ若僧とはなア。悪いことは出来ねえなアお伝、一昨日その叔母御が沼田へ用事があつたとかで家へ寄つたが、

それで何も彼もおめえの嘘は暴露（はくろ）したんだ。それで、段々足跡を探つて見りやア、飛んでもねえ高崎で、とんでもねえ叔母御と乳くりあつてゐる、お伝、俺アどうせ長くはねえ命だが、どう云う因果か、此の儘おめえを残しちやア死に切れねえ。その代り、そつちの若僧も道連れにしてやらアなア」

「違ふ、待つて波さん！」
此れ程の病弱の体が――呪いと嫉妬と、自分の生命を見限つた最後の力が、更に死神の力を借りて、お伝を突飛ばして躍りかつた波之助の手の七首が、危く佐吉の脾胃を掠めすぎた。

「危い、佐吉さん、逃げて――」
お伝の声は思はずかん走つた。
「野郎！」

お伝の声に促されるように、危く波之助の第二の襲撃をされて佐吉は走り出した。石を蹴り、砂を踏みしだいて、逃げのびる場所を撰ぶ隙もなく、佐吉の足は、次第に片品川べりに追い込まれていった。

帯がとけて、巖の上にうねる。

「逃げるか、野郎！」

執拗に、血潮を求めて止まない波之助の七首が、佐吉の肘を掠つて、

「アッ！」

石に躓いてヨロメいた佐吉の体が、着物の裾を黒い大鳥の翼のように翻して、片品川の急流へ、モンドリ打つて落ち込んでいった。

「畜生！」

波之助は、暫く流れを睨んで唇を噛んだ。「波さん、逃げよう。佐吉さんは助かりつこない」

駆け寄つたお伝が、波之助の袖を掴むと「お伝、おめえも一緒に若僧と地獄へ行きやアがれ」

その手を振離して、狂気の如くお伝へ突いてかかった。

「此れには訳があるつて、云つてるじやないか。波さんの馬鹿！」

さけて、手首を必死に掴んで、お伝は波之助の体を引寄せた。

「訳はあとで話します。ほら、お前さん、あの声が聞えないのかい。逃げよう、私アお前さんを人殺しの罪人にしたくない！」

嫉妬する者程、恋する心は強いと云う。

波之助の場合もそれであつた。

思はず七首を取落したその耳に

「兄さん——」

佐吉兄さん

女の呼声が

聞えてきた。

巖に見え隠

れつつ、探し

求めべき人を

探しつつ、近

寄つてくる人

影。

紛れもない

くぐりう峠をせ

か／＼登つて

来た小娘なの

だ。

——落合

場所を沼田と

約して、別れ

別れの薬売り

の行商人が、

約したその日

に姿を見せぬ

兄佐吉を気付

かつて、消息

を尋ねつつ、老神

の温泉に道を急いで来た妹のお金

だつた。

今は多分湯へは入つていらつし

やると思ひますが——

宿の者の言葉に、急ぎ足に湯舟に来て見

れば。

人気なき湯は煙を棚引かせて、しーんと



「兄さん——」

応える声——に耳

を貸しながら、川べ

せいすい 盛衰の血

人影はなかつた。

「波さん、此の儘東京へ行こう。どんな事をして働いても、私アお前さんの病氣をキツと治して見せる」

佐吉への、肉体の執着を思い断ち切つたお伝が、愛情一途に返つて、波之助の手を取つて遙かな空を振仰いだ。

下牧村をあとに、その夜お伝と波之助は旅立つたのである。

それから、一年程経つて——。

浅草の病院からの帰る時、すれ違いに、フト何気なく見た男の顔。

「アッ、お前は佐吉さん！」

唇を突いて出ようとした驚きの声を危く呑んで、急にお伝は波之助を促して道を急いだ。

散切頭さんきりに姿は變つてはいるが。一年程前上州の老神の宿で、情痴の快楽をつくした挙句、波之助に発見され、嫉妬に狂つた七首に、片品川に追い落された薬売りの行商人佐吉に紛れもなかつた。

肉慾の思い出が、フツとお伝の煩悩を甦えらせた。

「波さん、お前さん此処からなら帰れるでしより、私、一寸用事を思い出したから」一人波之助を帰して、お伝は直ぐに引返して佐吉の姿を探し求めた。

「佐吉さん」

佐吉の姿を発見すると、お伝は声を弾ませて走り寄つた。

「暫くだつたなア、お伝さん！」
お伝を迎えた佐吉の面上、冷い笑いが深く刻まれていた。

「話は山程ある。其処い等の小料理屋まで付合つてくれ。まさか嫌とは云うめえなアお伝さん」

片品川に落ち込んだ時に受けた傷でもあろうか、横顔に一線刻まれた傷あとと、眼光の鋭さは変つていたが、美しさを失なわぬ佐吉。

そうして。
此処に。

お伝の身と心は、再び、波之助の上から佐吉の上に移つてしまつたのだ。

あの時、はからずも助かつた佐吉は、深い怨みを抱いて、お伝と波之助の後を追つ

て東京へ出て来たが、何時の間にか、商売の薬売りは捨てて、スリの仲間以身を持崩して、仲間の顔利きにたてられていたのである。

お伝と佐吉との関係は、やがて波之助に知れる日が来た。

お伝の日頃になく變つて来た様子に、不審を抱き始めた波之助は、お伝を尾行して二人の不義の隠れ家を見止めたのである。

「お伝、今更何も云う事はねえだろう、覚悟しろ！」

怒りと呪いとに閃めいた七首の下をかい

くぐつたお伝の右手に、七首が閃めいて、殺る意志もなかつた切つ先は、波之助の腹を深く抉つていた。

「や、殺つたなお伝！」

苦悶と共に倒れた波之助に、
「アッ」

愕然として、我に返つたお伝、

「な、波さんしつかりして——」

血の七首を投げ出して、波之助の体を抱え起したお伝の頭上に、一年前を偲ぶように、淋しい月が鈍くかかつていた。

亭主の波之助殺しを、月より他に知るものはあるまいと思つたが、フド通りすがりに目撃した者、それは兄佐吉を尋ねて東京へ上り、やはり悪の花に身を持崩した佐吉の妹のお金だつた。

お伝は幾年かの間、世を忍び、佐吉と夫婦気取りの生活を續けていたが、はからずも知り合つた、旗本崩れの代田和十郎に男を乗代え、邪魔者になつた佐吉を秘かに殺

害した。

お金はそれを知るや、和十郎とお伝を、兄の仇と狙つたがはたさず、返つて、和十郎の為に大川へ投げ込まれてしまつた。

お伝の悪業は尙も続いたが、やがて運命つくる時が来て、繩にかかつて。そして明治十二年、一月三十一日、お伝は二十九才の妖艶な肉体を双の鏑となつた。

お伝が最後に残した言葉。

それは——今となつて思うと、一番愛しかつたのは佐吉であつたと——。

作者はお伝の生涯を物語ろうとはしない。唯、悪の花と咲き開きつかけとなつた、温泉の宿の物語りを綴つて見たにすぎない。
おわり

世相 若き情死者たち

原田 春雄

◎情死者は殆んど変態

若い男女情死といえはなんとなく艶めかしい雰囲気想像さすものであるが、鉄路のサビとなつた手も足もバラ／＼になつた醜死体毒薬を仰いで寝巻の裾もあらわに苦悶して枕を並べた二つの顔、或は水ぶくれした水死体、又は縊死稀には双物で女の頸部を深く抉り男も咽喉笛を刎ねて血塗れになつ

て死んでいる惨状等は、一度見ると二三日は不気味な思ひで飯がまづかつたものである。

私は職掌柄、幾度となく情死事件に遭遇するにつれて、馴れるといふことは恐ろしいもので次第に神経が鈍つて、どんな惨しい死体を見てきても飯がまづくなるような事はなくなつたが、私の蒐集癖が昂じて、情死者の記録、特にその性生活について集め出した。勿

論情死するほどの男女の性生活には、普通人の想像することさえ出来ぬ変態的事実が伴うているので、此処に掲げてみるのも興味あるものと思う。

◎死の直前に行われ る交渉

男女の情死者が死の直前に際して行われる一事だけは、総ゆる情死を通じて殆んど例外なしと言わ

なかつた。

各人の情死するに至る迄の事情は千差万別それ／＼特殊な關係に置かれてゐるものであらうが、性に対して驚くほどの執着を残してゐることは、事情や境遇の如何を問はず共通してゐる点である。当事者にすれば寧ろこうあるのが道理であつて、少しも不思議とするに足りないだらうが、それにしても死に直面しながら、尙かくまで性に執着するといふことは浅間しい限りである。
心中文学の泰斗大近松の書いたものを見ても、その最後の実行を

近松一流の麗筆で、極めて婉曲に記してあるのを窺れる。曾根崎心中に「今は最後を急ぐ身の魂のありかを一つに栖さん道を迷うな違うなど、抱き寄せ肌を寄せ涙の絲の結び松、棕櫚の一



木の相生を、連理の契りになぞらえて、露の憂きの置どころ」とあるのや、更に生玉心中に女が「逢い初めて今日が日まで、鳥が鳴かぬ日はあれど、顔見ぬ日もなかつたに、死ぬる今夜に限って顔さえ見えぬ雨空、未来の暗さが思われ、それが悲しうござんすに、歎けば男も涙ぐみ、おゝ道理吾とても今生の名残り、ま一度顔も見なければ、燈火としては夏草に、せめて螢の影でもほしい。おゝ思い当りしと小石拾うて脇差の、鐔を火打の石の火の、光り待つ間の命の楽しみ」とあるのは、共にその刹那の光景を描いたものである。

◎女子同性愛と性的技巧

技巧

品川の妓楼に情死未遂があり、女は双物で左の乳下を刺し即死し

女子が同性愛の結果、情死した実例に二回逢着した。一は女学生同志、一は紡績会社の女工同志であつた。こういった事件は女子の寄宿舎、女囚の刑務所、等で起るもので、これは世にトイチハイチと称するものである。女子の同性愛は御承知のように一人が亭主の立場に立ち、一方が女房役を務めるものであるが、然かもその性生活は極めて不自然な行為の連続に過ぎぬのである。それ故相当の年輩に達すると性生活の不満を感じて離れてしまうものが多いのである。

中には此の反対に相当の年輩になつてから同性愛に陥る者もあるが、これは概して商売女上りの者とか。又は夫との行為について不平を持つている者とかいう特殊の事情のある女に限られている。

◎相対的な陰萎者の情死

情死

だが、男は同じく双物で腹部と咽喉を切つたが傷が浅く、二週間ほどで治癒してしまつた。その男を品川署の司法主任が取調べると、芝の金杉町の瀬戸物屋の主人で妻子のある上に四十近い分別盛りで何んで情死を企てたかと訊問すると、この男の答弁は実に意外であつた。

情死の近因は放蕩のために家産を傾け、加うるに不義理の借金が出来たというお定りの紋切型であるが、この男をして放蕩させるようにした遠因は、何故か女房に対しては少しも情念が起らないのでそれでは自分は病氣にでもなつたのではないかと、他の女性に関係したところ立派に目的を達することが出来たので、それからというものは家が面白くなく、転々として商売女を漁り、その結果が品川の女と深い馴染を重ねるようになり、遂に情死を企てたというのである。そこで主任は、それなれが女房と別居するなり、



又離縁するなり、いくらでも方法があるではないか、というのに男は女房を愛しているのですが、どんな原因か、関係する事だけが後なのであると答え自殺幫助罪で処刑された。

これは相対的陰萎と呼ばれる一種の精神病で、こうした病氣にかゝり情死を遂げた者も少なくないようである。近松の心中天網嶋の紙屋治兵衛もこの患者であつたことは、女房おさんの怨言のうちに「一昨年の十月中の亥の子に、火燵あけに祝儀とて、これこゝで枕並べて此の方、女房の懷には鬼が栖むか蛇が栖むか、二年というもの巢守にして」とあるのでも知れる。更に艶姿女舞衣の酒屋の半七も同病であつた。女房おそのが「添臥はかなわずとも、お側に居たいと辛抱して」とある文句から推察される。

◎腹上死と稱する情死

する情死

極めて稀な例であるが、事の最中に男女共死亡した情死？事件のあつたのを聞いた。勿論これは男女の間に

死のうという意志の一致があつたわけではなく、極度の興奮の結果心臓麻痺か何かで暴死するのであるから、厳密に言えばこれを情死というのは疑問ではあるが、普通世間では男女のこういつた死に方を××情死といつていたので、情死の中の一つとして考えられぬこともない。

此れは或る妓楼でお客が馴染の女と一緒に死んだという事件である。新聞紙には乗らなかつたが、珍らしい出来事として知る人の好奇の耳を聳てたものである。又、婚礼の夜に新郎が新婦を伴つて寝所へ入つたまゝ、翌日になるも出て来ぬので、家人や仲人が怪しんで寢室を開けてみると、二人共そのまゝの姿で死んでいたので、婚礼が變じて俄かに葬式になるという騒ぎになつたというのを報知新聞に載せてある。

印度や中国では、この情死を理想的な極楽往生と讃美し、欧州でもその実例に乏しくないそうである。入浴に飲酒に性行為の三つが脳溢血とか心臓麻痺の誘因になり易いということから考えて、こういつた不可抗力的な不作為的な男女の相対死が世間一般に思つてゐる以上に多いことであらう。

刺譚 奇譚 古相

軍艦行進曲



再軍備はおもちゃから。大阪松屋町のおもちゃ問屋から毎日飛行機、機關銃、戦車、軍艦がどん／＼日本全国に送られていている……。金儲けにかけては生き馬の眼を抜く大阪商人の不敵な逞しさ。

一

近頃の再軍備の吹きまわしとやらで昔なつかしい軍艦行進曲の古レコードがじゃん／＼売れるらしい。ひどいやつは、ダンスホールで、守るも攻めるもの勇壮な旋律に合わせて女と頬をくっつけてステップを踏んでやがる。国破れて山河在り、連合艦隊沈んで軍艦行進曲在りとはなさない。たゞし、敗戦の記憶さえ捨てしまえば、メロディとしてなら別に悪くはあるまいが、とくに狭くなつた日本に九千万近い人間がうよ／＼舞めき、おまけに貧乏人ぞろいだから、せいぜいパチンコと競輪とダンスぐらいの他、外国のように夫婦そろつて高尚な芸術や趣味を楽しむ金も暇もない。有りあわせのものをロハで遊ぼうとすれば、夫婦のやることは大体見当がつく。だから、なんぼ政府が人口制限じゃ、産児調節じゃと喚き立てゝも馬の耳に風というやつで、毎日毎晩おぎやあ、おぎやあど威勢のいい産ぶ声があがる。生れつたやつを元の穴へ押しこむわけには行かないから人間は増える一方である。

赤ん坊が増えるのをホク／＼喜んでるのが産婆と駄菓子屋とおもちや屋という寸法。

そのまたおかげを受けて商売繁昌金持つてこいと、すこぶる鼻息のいいのが、大阪名物の松屋町。知らざあ言つて聞かせやしようか、と尻をまくるまでもなく、松屋町といえは日本全国にその名知られた駄菓子とおもちやの問屋町。

内本町あたりで延々十何町、バスにトラック自転車オートバイが、一日中ブ／＼、ガタ／＼と往来する十間幅の松屋町大通、その両側に押しあいへしあい、並びも並んだ問屋千軒。玩具菓子卸問屋なんて、長つたらしい名前は舌を噛みますがな、これで十分意味はわかりませ、とばかり、どの店の看板も「玩菓」と二字。ガンカてなんのこつちやなどと首を傾げる暇に、論より証拠、店先をずうつと見てみなはれ。うちの専門なら飴にキャラメル、ビスケット、煎餅にあられにかき餅に昆布、ドロップにチョコレートにチュウインガム。おとなりは、南京豆に煎豆に塩豆、小豆に大豆、そのおとなりはゴム風船にゴム人形、ボールに雨靴、消シゴムですがな。あゝ砂糖やつたら向いにおます、黒砂糖、赤砂糖、ザラメに白砂糖シロップに糖蜜、なんでもそろいまつせ。

とにかく一年中きり／＼まいの忙しさだすわ一月は今宮のえびすさん、二月は節分、三月はひなまつり、四月は花見で五月は端午の節句だつしやろ。六月は梅雨で一息ついて七月八月は海水浴に登山、九月になつたらもう正月の菓子やおもちやの仕入だつせ、それと、大将何を仕入れとくなはるねん、かりん糖だつて、栗おこしだつて、そや／＼、豆板はどないだす、一貫目七百円の大見切りの勉強や、はりこみなはれ！へエ？、仕入れとちがいまのかいな、他の店を探してはるのやつたらそれを先に言うとかうなはれんかいなと、河豚のように膨れた番頭が仏頂づらで教えてくれたのが、僕のたずねているわが辰ちゃんのお店。新米の

店は探すのに骨が折れる。

「あつはつは、能登はん、松屋町で呑気にボヤツと店先に立つもんやおまへんで気が荒うて、口も達者なら手も早い間屋町やさかい、……自転車の空気入れで頭をドヤされまつせ！」

辰ちやんは腹をかゝえて笑つた。皮のジャンパーにズボン、大きなソロバンを腋にかゝえて、わが幸福堂玩具店の若主人公は大分金まわりのいゝ証拠に、ロンジンの腕時計を手首に光らせていた。

幸福堂の専門はセルロイドのおもちやだセルロイドのキニービーに人形、まゝごと遊び、ラッパに笛に太鼓、汽車に汽船に電車に自動車。安うて早うこわれるのがつて目だすわ、と辰ちやんは児童心理学の先生みたいにニヤ／＼笑う。子供というものは、新しいおもちゃに熱中するかわりすぐにあきる。高うて丈夫なおもちやなんか、親の虚栄心を満足させるだけで、子供はあんまり喜はない。

「男はいつまでたつても子供や、というけれどほんまだすな、高うついて丈夫な女房はなんぼ美人でも鼻について、安物のピカ／＼した新しい女の尻を追いかけるのに夢中や……、それに、中には、自分のおもちやよりよその子供のおもちやが欲しいダダをこねる子のように、他人の女房を取りたがるやつかておますのやさかいなあ」

辰ちやん、とき／＼、エゲツないおもちや哲学を口にする。こんなえらそうなことを言うくせに、辰ちやんはまだ二十四才、むろん女房もなくて、去年女学校を出た妹

の悦子さんに店を手伝つてもらつてゐる。

兄貴と三つちがいの二十一才、色白でぽちや／＼とふとつた可愛い娘さんだ。にっこり笑うと両方の頬つべたにエクボがでる。どこかへ勤めてサラリーをもらつてもたか／＼六千円ぐらいがいゝところだし、ちやんとした会社へ通うなら、服装や化粧も同僚の女の子の手前があるし、映画だのダンスだのにも誘われるから交際費がさむ。ていさいいだけはいゝが、それじゃ結婚の支度も満足にできやしない。

兄貴の辰ちやんの店なら、どんな服装でも大して恥づかしくないし、毎日現金が入つてくるから小使銭にはこまらない、ヘソクリをこしらえるぐらゐの早業は、たとえ悦子さんが純粹無垢の処女だつて、女の本能だからなんでもない。その方が気楽だしずつと得だわ、と、さすがチャッカリしたアブレ派大阪娘だからソロバンに狂いはなかつた。

「僕が相手するより悦子が応待する方がよく品物が売れまんねん、やつぱり、誰でも若いきれいな娘の猫なで声にはひつかゝりよるねんやなあ」

辰ちやんは塵払いでバタ／＼おもちやの上をはたきながら、にや／＼笑つた。松屋町へ仕入れにくるのは、あんまりバツとした連中じやない。水鼻吸りながらのじいさんばあさん、赤ん坊を背中にくゝりつけた女房連が、せいぜい二三千円ぐらいでおもちやの一ダース、飴やキャラメルの四五百匁。辰ちやんの店でのセルロイド製の安物のおもちやなら、嵩だけは膨れても、片手

で提げられるほど軽い風呂敷包みに納まる卸値は売値の七割が通り相場だが、大阪市内はおろか、近郊近在、さては大和、河内和泉、丹波、丹後、近江あたりの田舎から毎月一ぺんは仕入れにくる。それがひつきりなしにいろんなお国訛りでせまい店中の品物をひつくり返すんだから、見ている僕だつて眼がまわるほど忙しい。

「ふうん、商売つて儲かるもんだなあ、僕の一ヶ月分のサラリーぐらゐ、おもちや問屋ならたつた二三時間の口銭か」

僕は啞然とした。道修町の一流会社の総務課勤務なんて、肩書だけはちよつと洒落れていても、かんじんの月給たるや、専門学校出て、満三十八才、女房子供三人かゝえて、なんとまあ税込二万円をはるかに切れちよる情なさ。なるほど、これじゃ辰ちやんが、あほらしうなつたさかい、せつかくやけど辞めますわ、と総務課を逃げだしたのもむりはない、としみ／＼思いあたつた！。もつとも、辰ちやんが僕の会社を辞めたのは、サラリーの安いことより、もつと愉快な大失敗があつたんだが。それはあとを讀んでいだけば分る。

二

商売というやつは苦心も多いが、勤め人生活なんかでは絶対に味わえない面白さがあるらしい。勤め人から転進したズブの素人の辰ちやんが、吹けば飛ぶような退職金を元手に、よりにもよつて、生粋の大阪商人の巢、伝統の老舗を誇る松屋町問屋の中へ、若さの熱と意気で割りこんで行つて、

ふう／＼いゝながらも、だん／＼得意先がつき、繁昌してゆくのに僕もあつけにとられた。人間は若いうちに身体をハツて苦勞しておくに限る。勤め人を長くやつて、呑気で楽な時間の切り売に染んでしまえばだん／＼意気地がなくなり、尻が重くなり大事な男の一生を、鎖でつながれた犬のよう、チン／＼おまわりだけが上手になること受けあいだ。

辰ちやんは時々僕の家を訪ねてくれる。子供の土産に、商売物のおもちやを風呂敷に山のように包んでくるから、女房も子供も辰ちやんを大いに歓迎してくれる。

「あなた、もうこれで三本目よ！」

女房は怨めしそりに空の一升瓶を横眼で睨んだ。

「かまわん、友在り遠方より来たるだ」
没る女房を亭主の威厳で押さえつけ、チャブ台を二階へ運ばせて、景氣よく一級酒でスキ焼の御馳走だ。

「まあ飲めよ、辰ちやん、よう儲かつて結構だぜ、悦子さんも元氣かい？」

と杯を渡すと、

「へえ、まあなんとか」

「なんだい、おい、辰ちやん、今日は妙にしょげてるな、どうした？」

「……………」

「悦子さんと兄妹喧嘩したんだらう」

「ちがいまんねん」

「そんなら税務署にいじめられたのかい」

「いや、握らすもん握らしておます」

「ふうん？一体何事が起つたんだい」

「能登はん、実はその……、女に吊るしあげ

「あれましたんや」

「へえ？、女にかい、は、あ、さては悪い」

ヒモのついてるダンサーか女給にちよつかいを出したんだな、ひっぱり出して押さえたつたのはい、けれど、そのあとへ、凄味の利くアンチヤンかなにか、因縁をつけに来たという訳だね？」

「いや、相手は素人だすねん」

「年ごろは？」

「さあ、はつきり判りまへんけど、たいいて三十代から四十代だつしやろ」

「辰ちゃん！、冗談じゃないぜ、相手が中年で素人なら他人の女房じゃないかい、年増の深情というけれど、そんな関係してはうるさいのはあたりまえだぜ、なんとか早う手を切らなきや」

「ちよつと待つとくはなはれ、能登はんはそんなことにかけては、気をまわすのが早すぎてかないまへんがな……、相手は一人やおまへんのや、何十人も束になつて店へ押しかけて来りましたのや」

「何十人も？……妙だな、一体相手は誰なんだね、相手によつて話のつけ方がちがうからな」

「それが、近所の小学校のPTAのおばはん連中だすねん」

「うわあ、それを早う言いたまえよ！、こつちはてつきり色事のゴタ／＼だとおもつて、手に汗を握つていたんだよ、やれ／＼」

「やれ／＼どころだすかいな、PTAやさかい困つてますねん」

「なんだか頭がこんがらがつてきたぜ、いったい何がどうして、辰ちゃんがPTAの

おばはん連中に吊るし上げを食つたのか筋道を立てて話してごらん」

僕は糸コンニャクと豆腐を鍋に入れたした。男同志のスキ焼は、牛肉ばかり片づいて、コンニャクだのネギだの豆腐はきつと余るものらしい。辰ちゃんは、冷たくなつた杯をきゆつと干すと、

「そも／＼の起りはだすな、正月に売つたカンシヤク玉からだんねん

りますか」

「男の子がゴムのパチンコで女の子の足元に飛ばして喜んでいたあの豆粒ほどのやつだらう、パンパンと爆発するあれ？」

「そうだす、危いさかいと警察から大眼玉を食うて禁止になつたんだすけど、あれで大失敗でしたんや、実はあのカンシヤク玉を製造工場から運んで来たては、

まだ糊が乾いてないさかい店の外へゴザを敷いて乾かしまんねん、ところが、うちの店の隣りは南京豆や煎り豆や塩豆の間屋だつしや

ろ、京都へ送る五色豆を外で紙箱につめとりましたんや」

「ふん／＼、それで」

「うつかりしよつて、紙箱が破れたもんやさかい、五

色豆がパーツと四方へ飛んで、うちのカンシヤク玉を乾してあつたんとゴチャまぜだすわ、五色豆の赤いやつと、カンシヤク玉は大きさも色も重さも丸つきりいつしよだつしやろ？分けるにも分けられしまへん」

「なるほど」

「大さわぎして豆屋の番頭と僕とで、まちがえんように分けたつもりでしたけどやつ



ぱりいきまへん、方々の駄菓子屋やらおもちや屋から、五色豆を噛んだら爆発したやの、店先のカンシヤク玉をお寺の鳩がついて食べよつたやのとえらい苦情の百出だすわ」

「あつはは、それは愉快だ、滑稽だなあ」

「笑いごとやおまへん、これがケチのつきはじめでした、その次がPTAの吊し上げの災難だすがな……、能登はん、なんぞえ、チエおまへんか」

「PTAのおばさん連中がいきり立つたのもやつぱりそのカンシヤク玉の一件かい？」

「い、え、刀とピストルからだす」

「どうしてだい、男の子が刀やピストルで遊ぶのはあたりまえじゃないか、辰ちゃんだつて子供のときには、チャンバラ遊びだの西部劇ごつこに夢中だつたらう？、僕なんかも物凄くあばれた腕白坊主だつたぜ、いたずら盛りの子供なら誰だつて刀やピストルを欲しがるよ」

「ところが、製造元同志は商売だすやろ、はじめは、誰が見てもすぐおもちやと判るように、刀はせい／＼一尺五寸位、中身は竹か木に銀色の絵の具をぬつた位、ピストルもニツケルの鋳物でしたけど、だん／＼本物みたいになつて、このごろのんは、刀

かて長いのは二尺二三寸、中身はジュラルミン、ピストルも鉄や真ちゆう使つて、本物とちよつとも変りまへん、夜中に強盗が

だしぬけに突きつけよつたら誰でも縮み上りますわ」

「弱るね、そいつは……」

「弱るね、そいつは……」

「それに近頃の大流行は、アメリカのとそつくりそのまゝの機関銃のおもちやだすねん、引金を引くと、カチカチ／＼と火花が出ますねん……、煙草のライターの石を使ひてさかいすぐあかんようになりますけどな」

「ふうん……、大人の世界より一足お先におもちやの方が日本の再軍備に大賛成なんだね、じゃあ、そろ／＼戦車だの飛行機だのバズーカ砲なども出はじめていゝね」

「能登はん、いつたいこんな戦争のおもちやが流行する原因はどこにおますのやろ、PTAのおぼはん連中は、僕らおもちや問屋が、金儲け目的で、純真な童心へ悪影響を及ぼすちゆうことを考えとらん、というてかん／＼におこりよりますねんけど」

「むつかしいことだよ、そいつは。作るから買うのか、売れるから作るのかとなるで鳥と卵がどつちが先に生れたかという難問題だといつしよだね、辰ちやんだつて、製造元が押しつけて来ても買客がなければ断わるだろうし、どん／＼売れ／＼ばこそ仕入れるわけだろう……、ストリップショウだつてエロ本だつて、パチンコだつて、あれだけ繁昌したのは、やつぱり世間が要求していたからさ、ストリップが女剣戦が世間の要求にびつたり合うからさ……」

「それはそうだなあ、PTAがかん／＼におこるのも道理やけど、子供のおもちやから戦争が起るのやなしに、世間が、日本の再軍備はいやおうなしにやらならんのかやないかしらん、という風に考えはじめた証拠と見たらえゝわけだすな」

三

辰ちやんはほつとしたように、ぐつ／＼煮えるスキ鍋の中へ勇んで箸を突つこんだ

老兵は死なず、と日本を去つた元帥が、

「日本は東洋のスイスであれ！」

と餞別を残してくれたと思つたら、今度来た偉い人は、

「世界で完全中立の国はない、スイスは国民皆兵の完全軍備である！」

と教えてくれる。へへえ、ありがたき幸せ、ご尤もの仰せ、とそのたびに畏まつてお辞儀をしているんだから、八紘一字、神洲不滅、万世一系の大日本帝国だつた国も落ちぶれたものである。とにかく、市営住宅のように男便所はなく女便所だけ、地震かいなと飛び出したら、空のトラックが木炭臭い煙を残してヨタ／＼と通るところだつた、というよりな、至極安直、輕便そのものの四つの小島だから、その日／＼の風向き次第で七面鳥のように器用に色を変える芸当だけは身についたものである。

インテリだかヒンテリだか称する一部の連中は、低い鼻柱に縁なしメガネを貼りつけ、英語と米語とフランス語とドイツ語をチャンポンに混ぜてエンゼツしたがるし、作業服に下駄、首に手拭を巻いた一部の連中は、共産党の発禁新聞をいかにして手に入れ、いかにして労働組合を牛耳り、いかにして市長と面談すべきかを研究し、あとの大部分の八つつあん熊さん権助どん諸氏は、米語もロシア語もわれ聞せず、もつぱらメチール燐肥に親しみ、忠臣蔵の芝居と

清水の次郎長と浪花節と、国定忠治の女剣戟に拍手し、月が出た／＼とズンドコぶしの盆踊。パーマ髪とナイロンの靴下と肩を

怒らせた外套のミーチャンハーチャン女族は、宝塚と大阪劇場に延々長蛇の列をつくり、スタイルブツクをビニロンの風呂敷に包み、お好のみ焼屋で男友達のノロケを競

いあつてゐるんだから、いやはやどうにもバカは死ななきや直らないやつばかりがそろつたものだ、と憤慨する。能登一三のごときアバン派の中年ヒン士とくれば小心翼翼々、戦々競々、もつぱら、会社をクビにならんよう、女房の逆鱗にふれんよう、息子は共産党にかぶれんよう、娘は靴屋と駄け

落ちせんよう、女友達を腹ボテにせんようと、か弱い？男心を千々に砕いているのだからいじらしすぎて浅ましい。

こんなの比較れば、わが辰ちやんなどの世渡りはまさに賞讃に値する。カンシヤク玉と五色豆をまぜごにし、ピストルと刀でPTAのザーマス夫人どもに吊るし上げになつたとて、あに怖るゝにたらんやじや！

へへ、とにかく頭の毛が赤くて、眼の玉の青い連中に、米つきバツタのようにお辭儀しとるうちにはだめじやよ、第一、吉田の白足袋と鳩ボツポの一公が同じ穴の狸とムジナじやろうと、徳球と鈴木茂三が天下を争うちゆうよりなアホな夢を見とろうと天下の蒼生をいかんせんやだ、ウーイ、われにこの焼酎と焼鳥あり、あつはは、愉快じやよ、なあ、大将よ、わが辰ちやんよ！

と大氣焔をあげ、あんまり酒につよくない辰ちやんの肩にぶら下つて、梅田の地下道にずらりと並ぶ居酒屋を千鳥足で出たとたん、

「しもうた！、もう阪急の終電車が出てしましましたで、能登はん、どないしやばりまんねん？、奥さんがスリコ木を持つて待つてはりまつせ！」

辰ちやんの指さす電氣時計は正に午前〇時三十分。

「ゲエツ？、タハハ、この月給袋を女房に渡さなきや、首筋つまんでほりり出されてしまう」

やれ怖ろしや女房大明神、良妻賢母のザーマス夫人よ！……、いくら考えても、やつぱり僕は松井頼子あたりを女房にすべきであつたわい、彼女なら、かゝる男性の苦境窮地に対して、いかに深甚絶大の理解をもつてくれるであらうものを。キリストよマホメットよ、女房大明神よ、この憐れな迷える小羊を許したまえ、助けたまえ、ウーイ。

「そない柱に抱きついて泣いてゝも仕方がおまへんがな……、今夜は僕の店で泊つとくはなはれ、おーい、その輪タク松屋町まで頼むわ」

辰ちやんと相乗りの輪タク、ふわ／＼とタイヤがくすぐつたくはずんで、夜の風の吹きこむのがたまらなく氣持がいゝ。

「辰ちやん、泊めてもらつてもいいのかい悦子さんがこまりやしない？」

「なあに、あいつなら今頃店の二階で大字になつて白河夜船だつせ……、それにし

と大氣焔をあげ、あんまり酒につよくない辰ちやんの肩にぶら下つて、梅田の地下道にずらりと並ぶ居酒屋を千鳥足で出たとたん、

でもこのごろの若い娘の寝相いたら、なつてまへんで、ほんまの妹やけど、とき／＼いつそいてこましたらかとおもうほど大胆な恰好で寝とりまつせ」

「おい／＼、危険だぜ、は、あ、大分溜つとるな、辰ちやんも早く女房をもらわんといかん」

コト／＼ゆれる輪タクの中で、辰ちやんはふと声を低くした。

「能登はん」

「なんだい？」

「あのう、元気で勤めてまつか？」

「誰が？」

「……分つてまつしやろ、あの娘だすがな」

「信ちやんかい？、専務付の秘書の」

「そ、そうだす」

「まだ忘れられないかい、ほんとうに惚れていたんだね？」

「……」

「信ちやんも君がずいぶん好きらしかったぜ」

「ほんまだつか、能登はん、それは」

「すんだことだから仕方がないけれど、あの前に、上役の僕にお互いが惚れぬいているから結婚させてくれと言つてくれればよかつたんだよ」

「そやかて」

「専務だつて、短気だけれど、やつぱり道修町でさん／＼苦勞した人だもの、僕から機会を見て穏やかに話せばよく分つてくれたんだぜ」

「すんまへん」

「い、よく、そりや、いくら何だつて君

が専務の留守中に部屋へ忍びこんで、信ちやんにむりなキッスしたりなんかすれば、専務がかんかんにおこつて君をクビにしたのはあたりまえさ、もつとも、君だつて、月給の安いことで、すつかり嫌になつていたんだから、あんな会社をやめたつてちつとも心残りはないだらうけれどさ……、恋愛つてもものも、やつぱり順序を踏まなきや成功しやしないぜ」

「今考えたらやつぱり僕の方がわるうおましたなあ」

「それに気がついたらいふんだよ、若いときには誰でも一度は失敗しとく方がクスリさ、ところでね、その信ちやんだがね」

「……」

「あの娘も会社をやめたよ、君がやめて一ヶ月足らずにね」

「どうしてだつしやろ？」

「分つてゐるじやないか、君にすまないと思ひこんでたからさ」

「い、いまはどこに居ますねん？」

「逢いたいんかい？、あの娘も僕に、辰ちやんの住所をさかんに聞いてたよ」

「能登はん知つてはりますか？」

「うふふ、分つてゐるよ、けれどねえ、辰ちやん、いゝ機会があつたら、僕と女房が仲人役をして、きつと二人を夫婦にしてあげ

るさ、……悦子さんの結婚話がきまつたらね、兄妹の中へ花嫁さん迎えちや、どうもまづいことになりやすいからね」

「大けに、大けに……、御恩は忘れしまへん」

「信ちやんは君が結婚する気になれば、明

日にでも飛んでくるさ、その代り、君はいまうんと商売に身を入れてね、花嫁さんに生活の苦勞をさせないだけの用意をしてくれることだよ」

「……能登はん、僕、なんやらふあつと天に昇るみたいにうれしうなつてきましたがない、なんぞ、おもいきり大きな声で歌う行進曲がおまへんか？」

「おい／＼、こんな夜中に大きな声で歌つたりしちや、巡査に叱られるぜ！」

「かましまへん、千円や二千円ぐらいの罰金ぐらいはいちやらだすわ」

「ようし！、辰ちやんの気持はよく分る、こんな歌、戦争中により流行つたぜ、歌だつて人間並みに追放解除だ！」

まもるもせめるもくろがねの

浮かべる城ぞ

たのみなる

辰ちやんと僕は輪タクの中でお互いの膝をたゝいて調子をとりながら、ある限りの声をはりあげて、なつかしい軍艦行進曲を歌いはじめた。

「旦那はん、かないまへんがな、そないに中でバタ／＼足踏みしやはつたら、ハンドルが揺れて進ましまへんで」

車夫がふり返つてこぼすのへ、

「ぐ／＼言いな！、料金はうんとハズンだるさかい、お前かて、愉快にいつしよに歌いながら、ペダルを踏むんや、ヨタ／＼してんと、巡洋艦みたいにスマートに威勢よく走つてんか！」

四

「政府発表昭和二十七年予算、なんだつて？へへえ、内政費が六千五百億で、予備隊やら防衛負担費やらに二千億円……ふうん、ずいぶん金を食うもんだぜ」

僕はチャブ台の上でひろげた夕刊を女房に渡した。

「あら、ばかにしてゐるわ、学校の給食費も削つちやうんですつて……、ほんとにいやになるわ、これじや又税金が上りますわよ、交通費が上り、電気もガスも水道も、それから新聞も値上りよ、上らないのはあなたの月給だけ！」

これだから女房の皮肉は怖い。真綿で首を絞めてくる。会社では威張つても家では青菜に塩だ。

「うん、そりやまあ、僕もすまんと思うとるがね、やはりそれはその」

「大の男の癖に雀の涙ほどの月給に嚙じりついていないで、もつとなんとかハッキリしたお仕事をなさいよ、そら、いつか来なすつた松屋町のおもちや問屋の人なんか、まだ若いけれど、あなたなんかよりずつと腕があるわ、……電話のひけた挨拶状が来ますわ」

「なるほど、大分景気がいゝらしい、ふむ明日会社の帰りに寄つてくるぜ」

僕は辛うじて女房の鋭鋒をかわした。女つてやつは現金で、景気のいゝ男や、出世した友達と亭主が親しくすると機嫌がいゝけれど、こちらよりも貧乏で地位の低い連中と仲よくするとたちまちお冠がまがる。

きもるもせぬるも
くろがゆの



三かろえ

女房を立てれば家庭は円満だが、友達からは薄情を怨まれるし、友情を盛んにすれば女房が背中を向けて寝る。
僕は翌日久しぶりに辰ちゃんの店を訪ねた。うらむ、辰ちゃん、えらい派手なことをやつちよる、と僕は一眼で棒立ちになった。大屋根一杯に、ドカンと据えられた

くしてはりまんねん

辰ちゃんは僕の手をつかむと店の奥へひっぱりこんだ。
「おめでとー！、大へんな繁昌じやないか」

「へえ、おかげさんで、よう売れますわ」
にこ／＼しながら、辰ちゃんは、ジリ

の大きな戦艦の模型看板

その戦艦の胴に真紅なネオンで幸福堂の文字がくつきりと浮き上つていた。店中並んでいるのは大小それ／＼の航空母艦に戦艦、巡洋艦に駆逐艦、潜水艦のおもちや、天井からぶら下つているのが戦闘機に爆撃機ごたくと土間一杯に積み上げたのが戦車に大砲、機関銃、ピストルに刀、もしもおもちゃでなくて、本物だつたら、何千億円やら何兆やら見当もつかない物凄い大軍備だ。前にあつたまゝごと遊びだの人形だのはもう影も形も見当らない。それに驚いたのは店の中で仕入品を漁る客の喧嘩のような大さわぎだ。店の前では、ずらりと何台も並んだ自転車の列、地方送りの品物を荷造りしている大勢の小店員の賑やかな笑い声「能登はん、なにをキョロ

く／＼とベルの鳴る受話器を取りあげた。

「飛行機が三十と、ピストルが五十、えゝと刀が百だすな？、……軍艦が二十追加だつた、へえ承知しました、すぐ自転車で届けますさ」

「ときに悦子さんは？、どうしたんだい、一向顔が見えないね」

「えへへ、あいつ、白浜の温泉へ遊びに行つとりますねん」

「辰ちゃんがキリ／＼まいの忙しいときに妹が温泉遊びつて、あんまり薄情すぎるぜ」

「いやそれが……、実はえゝ縁談がおましてな、今日は相手と一緒に見合に行つとりますのや」

「へえ？、恋愛結婚の流行している時代に見合とはまた古風だね」

「いえ、実は型式だけだすわ、相手とは早うから恋仲で、半年ほど前からもうこれだしたんや、能登はん、気がつきまへんだしたか」

辰ちゃんは甘酸っぱい顔で、自分の下腹のふくれている恰好をしてみせた。

「そうかい、お店が繁昌、妹さんが片づいたとしたらめでたいよ、次はいよ／＼君と信ちゃんの順番だね」

「たのみまつせ、能登はん早うしとくなはれな、あれももうすぐバクハツしまんねん」

「バクハツ？……なにがだい」

「チエツ、ほんまに能登はんは勘が鈍うおますわ、僕の赤ん坊がきますのやがな」
「無茶いーな！、信ちゃんは純真無垢の処

女だぜ」

「と思うてはるのは能登はんだけだすわ、約束は会社にしたときにもう何べんも交しておますがな、手紙かて始終来てるし、あれから後も方々のホテルとか旅館でよう逢うてましたんや」

「ひどいぜ！……もう進水式がすんでいたのかい、君ら二人で、うまく僕を担いでいたわけだ、けしからん！」

「えへへ、どうもすんまへん、そやけど、能登はんが仲人役したる、とえらい力んではるさかい、ついほんまのことを言いそびれてましたんや、すんまへん」

「うゝん、敗けたぜ僕は！」

「とにかく、商売かて恋愛かて、先手の勝たすわ、昔風のかたいことを言うてたら、うだつがあがるはずおまへん」

辰ちゃんは照れたように頭を掻いた。

「しかしねえ、辰ちゃん、商売は儲けんならんけれど、こんな殺伐な戦争の道具ばかりを子供のおもちやにしたら、大きくなつて、きつと本物を使つて戦争したくなるぜこいつが心配なんだがな」

「大丈夫だすわ、その時分にはまた戦争反対とか全面平和とかのお題目が流行するにきまつてますさかい、論より証拠、終戦後シューンとしてたチャンバラ映画がまた大流行だつしやろ、長谷川に寛寿郎、有太

エ門に阪妻、波いところで月形龍之介ゆう連中がチョンマゲ姿でダンピラをふりまわしてますがな、これも世間の気持にびつたり合うさかいだつしやろ」

「うん、僕らの少年時代とそつくりそのま

「だね、大新聞の小説だつて、源義経だの豊臣の残党だの新選組だのが受けるんだから」

「日本映画はチャンバラで、外国物は西部劇とギャング物つまり、刀とピストルのおもちゃならどんな時代でも食いはずれはおまへんや、おもちゃが悪いと責める前に、大人の方こそ刀とピストルに興味を持つて証拠だつしやろ、大人は得手勝手だす、戦争が起つたら、どえらい金儲ができる、どないぞして、自分の国だけ儲かるように、他の国と国が戦争してくれんかいな、と思うとやつばかりだつしやろ、そ

のくせ、子供のおもちやみたいなんに、やれ好戦的やの、殺伐やのと青筋立てゝけつかる、どだい、根本がまちがうてますのや！」

「えらいぞ、辰ちゃん、一つその意気でこんどの選挙に立候補してみろよ、最高点当選はうけあいだせ、あつははは」

「ひやかしたらあきまへんがな、恥づかしうなつて次が続きまへん、えへへ」

「そうだね、世の中なんて、結局、狐と狸の化かしあいさ、泡を飛ばして議論している奴はバカで、黙つて、機敏に立ちまわつてごつそり儲けるのが一番賢いということ

になるねえ」
僕は手元にある機関銃のおもちやをとりあげると、ぶら下つて揺れている模型飛行機に狙いつけて引金を引いてみた。

カタカタカタと快いリズムといつしよにパチパチと飛び散る青い火花……。僕はふつと十年前、暑い海南島の椰子の葉かげから本物の九七式軽機で、襲つてくる敵機に応戦したなま／＼しい記憶を思い出した。戦争はいかん、二度と血腥い戦争はいかん、と心の中で呟きながら、やつぱり僕はおもちやの機関銃を射ち続けた。本物なら、たちまちもや／＼と立ちこめるききな臭い硝煙

の臭いと、バラ／＼と煎豆のように飛び散る熱い葉簇があるはずだなあと感じて、僕はぎよつとした。こんな四十近い老兵をもう一度ひつぱり出して、本物の機関銃をまた射たせるような世の中になるんじやないかなあ？。陸軍曹長、軽機分隊長、功七級勲七等なんて帰つても、もうその手には乗らないぜ、二度とまづびらごめんだ！

(完)

一、マツチが キヤラメルに 胴巻き社員 伊月京太君の出張日誌より

一、マツチが
キヤラメルに

桃の花、桜のふくらみ、畑の菜の花……

若緑りに萌える野山。お、春日うらゝの旅はよし。まして会社の出張で廿八万円の集金をそつくり集めた伊月京太君は、がいせん將軍のように胸がふくらんでいる。

出向いた先が難かしい取引先で、誰れが行つても掛け売りの半分も集金できれば上等とされたいた香川県の山間部の、四つばかりの協同組合であつたが、京太君の運がてよく、いつものように会社特製安くて上等という「お多福クリーム」や「おかめ白粉」の品質の文句も余りきかされず、次ぎ

の註文も相当貰つて、いま徳島の本社へ帰るところだ。

阿讃山脈をバスで越え、徳島本線穴吹からゆつくりした坐席に腰を下して小一時間あと一時間半もすれば徳島に着く。

京太君の今度の成功は、会社の幹部も驚くだろうし念願の大阪支社へ転勤が叶うかも知れない。

京太君の、「美人化粧品株式会社」の最大のおとくは筋は阪神和歌山奈良方面で、従つて支社とは云え、大阪勤務は事実上の栄転で、現に大阪支社長は、本社々長の兄貴が坐つてゐる位だ。

京太君は廿七才の独身だし、噂に聞く七色のネオン輝くナイトクラブや、三味線の

音色にしつとりと暮れていく宗右エ門の待合など、はなやかな青春の夢を、都会の夜色に濡らしてみたいと思うのも無理はない地味な農村の購買組合を相手にすることはもう卒業したかつた。

眉目秀麗というほどでなくとも、池部良より立派だと、会社の女事務員から囁かれてゐる京太君は、容貌とスタイルには自信がある。いやその故にこそ、社の幹部は勤直な京太郎の身を思つて、誘惑多い大阪へ出さないでいたのである。

だが今度の出張の成功は、幹部の意外とするところで、もはや、京太君を本社に押えつけておく口実は無くなる可能性がある車窓から見る畑の蝶々の舞い姿も、京太

君の前途を祝福しているようだ。と「済みませんが、マツチをお持ちで、？」実直そうな京太君と同年輩位の男が、斜め向いの席から声をかけた。

京太君はマツチを持つていた。自分も一服つけたいところであつたから「ええ」と気嫌よく出してやつた。

その男がバットに火をつけ終るのを待つて京太君も「光」を一本抜いた。

それを見ると男は消えかゝつたマツチの火をあわてゝ京太君の方へ出してきた。

「ど、どうも済みません……」

「いや、いゝんです、お待ちなさい」

悠然と京太君は、会社の宣伝用の小型マツチをその男に与えて、自分はまた新しいマツチをポケットから取出し、うまさうに紫煙を吐いた。

「これ、いかゞです……」

純情旅行



三田部

田中やまじ

満田老人が出迎えていた。

して貰いたい。」

え？と京太君は我が耳を疑った。が、

「或る事情で明日の午前中、三百万円ほどの現金が大坂支社で要る。君の集金をそのまゝ支社長に渡して貰えばいいんだ。」

と満田氏に重ねて云われて納得がいった「おい榮転の先ぶれだぞ」

同僚に羨ましがられ、旅費として更に五千円を満田氏から受取り、京太君が小松島港からワク／＼と連絡船に乗ったのは――それから約二時間後であつた。

「朝は讃岐の山奥で、夜は阪神航路の船の上か――」

心は弾むが公金にマガイがあつてはならないので二等船室も目立し、さりとして三等はサンマを転がしたように混んでなお危ぶない。

ほどよく空いていた乙二等という船室に軀をのぼして、ワイシャツの下の胴巻きに手を当てた。異状は毛ほどもなし。

「美人化粧株式会社」の社員は公金を持ち歩くとき、必らず純木綿のゴツ／＼した胴巻きを用いることになつてゐる。

会社が特に別あつたえにしたもので、これを使用する者を胴巻き社員と云つて信用がある。

おぼろ月の春の夜の、おだやかな紀伊水道を、あかね丸は、船体を快くローリングさせ乍ら滑る。鳴門の渦潮はもう遙か彼方に過ぎたのであろう。

鈍い船室の電燈を見上げ、やがて連続出張の疲れでトロ／＼と眼りに落ちた京太君は、火がついたように幼な児が泣いたのを

剛直大久保彦

の異例である

京太君は、

んな例は一回

もない。

まさに破格

の異例である

京太君は、

んな例は一回

もない。

まさに破格

の異例である

京太君は、

んな例は一回

もない。

まさに破格

の異例である

京太君は、

んな例は一回

もない。

まさに破格

の異例である

京太君は、

んな例は一回

もない。

まさに破格

左エ門を以つて自他ともに許し社中をへい

けいする満田重役に、「先ず／＼」と駅構

内食堂へ案内され乍ら、小首をかしげた。

テーブルにつくと満田氏はビールをとつ

た同僚も気楽そうにコップをとる。

「伊月君、御苦労だつた……」

満田氏がそう云つて一ト息に飲むので、

狐につま／＼れたような京太君も、大好物の

飲料なので遠慮はしない。

いわば何気なくマツチと取り替えたよう

なそのキャラメルだつたが……。

さて、男は幾度も札を云つて鴨島とい

秋は菊の名所の町で下車していつた。京太

君は気車が徳島駅へ着く頃に、ポケットの

底のキャラメルを忘れていた。

二、キャラメルが

巻き壽司に

駅に着くと同僚二人と、取締役支配人の

恐縮してマツチを受取り、やがてバットを吸い終る頃、その男はくたびれた合オーパーのポケットをもぞ／＼させて、キャラメルを三つ四つ、京太君の前へ出した。

「いや僕は……」

甘いものはきらいなんですと口まで出かゝつたが、やめた。男の眼に好意がいつぱい溢れているのを見たからである。

一つだけお義理に口へ入れ、あとはポケットへ、ほおり込んだ。

キツカケに、ざわめき出した室内の気配に目がさめた。

船の横ハッチからどう／＼水が落ちてい

るのが聞える。船が停まつているのだ。

「神戸でんな……」

誰か云つた。おゝもう神戸か。腕時計をみると成程、五時だ。午前六時は大阪天保山着。よく寝入つたものよとさりげなくそして手早く胴巻を確かめ、京太君は起き直つた。

困つたのは泣き出した五つ位の男の子だ。廿八九の母親に添ひ寝していたのが、どんな夢をみて怯えたのか、顔を真っ赤にして大口をあき、お尻に焼け火箸でも当てられているように泣きやまないのである。

神戸で下船する者はしてしまつて、大阪までの十二三人の男女の合客は、抱き上げたその若い母親の膝の乱れや、ひたいからふくよかな頬に汗を浮かべてアヤしているのを交互に見ていた。気の毒だが、何とも仕様がなかつたからである。

夏みかん、りんご何をやつてもハネ飛はす、恥ずかしそうに覗かせた乳房さえ、むざんに小さい手が押ひ潰す。

何となく居堪まらくなつた京太君はいきなり立ち上がつて、大腿に近づいた。涙の奥から男の子の視力は急に近寄つてきた見知らぬ大人の、大きな姿を認めたのであるうか。

びたり声を呑んで、びつくりしたように口をあけたまゝ、まじ／＼と見ている。

無意識に両のポケットに手を突つ込んでいた京太君の左の手に、小粒の固いものが

触れた。

お、キャラメルがあつた！

気がつくといふ急いで、紙をむいて男の子のあいてる口へ

「うま、うまだよ」

と入れてやつた。

子供は泣きやんだ。ほつとした船室客達は思ひ／＼に弁当などをひろげた。若い母親の京太君に対する感激は当然のことゝはいえ大変なものがあつた。その結果が――弁当は持つていきますと固辞するにもかゝわらず、巻き寿司一ト折り、無理矢理に彼女の手から京太君の膝の上に押しつけられた。

三、巻き寿司が

猥褻眞アルバムに

くだけの銀波が次第に明けそめていた。大阪港に着くと直ぐ出迎えの支社員を探したが、それらしい者はいない。

満田重役が電報を打つたから、大阪初上りの京太君を誰れか迎えに出ている筈なのに、これはまた昨日のT駅の時と反対に、拍子抜けも甚だしい。

埠頭から待合室、広場の駐車場と廻つてみたが「美人化粧品株式会社」のバッヂをつけた者は影さえ見えぬ。満田氏は天保山へ着いたら迎えの者と一緒に向くタクシーで博労町の支社へ直行せよと云つたが、うろろしている裡に、タクシーもバタ／＼も客を拾つて一台も残らず出てしまつた。まゝ市電と心を決めて腕時計をみると

六時廿五分。まだ早いと見上げたところ

にずらりと並んだ食堂があつた。客引きの女中達の金属音も耳に入つてきた。靴の中の弁当と船で、いわばキャラメルと取替えたような巻寿司のどちらかを片づけないと重くて仕方がない。

そう思うと船の中では全然なかつた食欲が急に出てきた。空腹感さえ起きてきた。広場を横ぎつて食堂街の方へ二三歩ふみ出した時、市電停留所の方から小型タクシーが矢のように馳つてきた。

それが京太君の前で急停車し、車内から叱咤のようにひらり跳び出した美しい女。

「伊月さん？！伊月京太さん？！」

そうでしょう、そうですわねという「間い」と「肯定」を雰囲気的に編成した、あゝそのとろけるような甘いメツツオ、ソプラノ。そしてフリーチャ、或はシクラメンマーガレットか桜草、温室の香りが一時にむせかえるように、女の全身からはほのと揺らめく香氣！京太君は思はずク／＼とした。おゝ断じてこの女の化粧品は我が社の、「美人化粧品株式会社」製の、安物ではないぞ。

「そ、そうであります」

やつと軽い目まいから脱して辛うじて答えた。

「まあよかつたわ、わたし支社の貴島文子ですの。きのう社の退社際に支社長からあなたのお出迎えを申しつかつておりましたのに……おそくなつて済みませんわ。でもわたし食事もせずに飛んできたのよ。少し位おくれたの許して下さいね……」

齒切れのいゝ標準語調は、たしかにかねて聞き及ぶ東京出身の元某映画会社ニュー・フェース現在支社長秘書の貴島文子にちがひなかつた。

さて、タクシーに同乗したものゝ、街の景色は京太の目に入らない。何しろ狭いクツションである。バウンドやカーヴするたびに、弾力ある貴島文子の軀が、京太君の神経に電氣のように、びり／＼と接解する「肉体の門」などという怪しからぬ言葉がずきん／＼と頭に浮かび出す。文子の方は何でもないかも知れないが、見た瞬間からクラ／＼と圧倒された京太君の青春の血のうずきは甚だ穏やかでない。

こうなるとピント外れでも何でも喋べることで気を散らす必要がある。幸い彼女の話題は豊富そうだ。

「大阪の春はいゝですなア」

京太君始めて来てまだどこも歩いていないのに、これはまた我々らピン呆けの一言だ。しかし

「えゝでも市内は駄目ね。と云つて東京の武蔵野みたいな郊外は、関西にはないし……いつそ四国あたりが却つておよろしいんじゃないくて？」

と尋常に受けてくれたのに勢いを得た。

「天保山で、自動車の中から、僕というところが能く分りましたね？」

「えゝ、たつた一人広場に立つていらつしやつたし、それに伊月さんは池部良を一通り大きくしたタイプと思えば見間違ひなしという評判通りの方だつたのですもの」

「いやどうも……」

「どうやら話が軌道に乗ってきた。」

「でも間に合つてよかつたわ。それで伊月さん現金いくらお持ちになつたの？」

初対面の印象論から直ぐビジネスに入るあたり流石に女秘書の貫祿充分だ。京太君もビジネスとなれば突嗟に我に返る。

「支社長はいくら持つてくると云つてましたか？」

すかさず反問した。

別に貴島文子の正体を疑つた訳ではないが大阪初上りを女位にナめられたくはない気がしたのである。

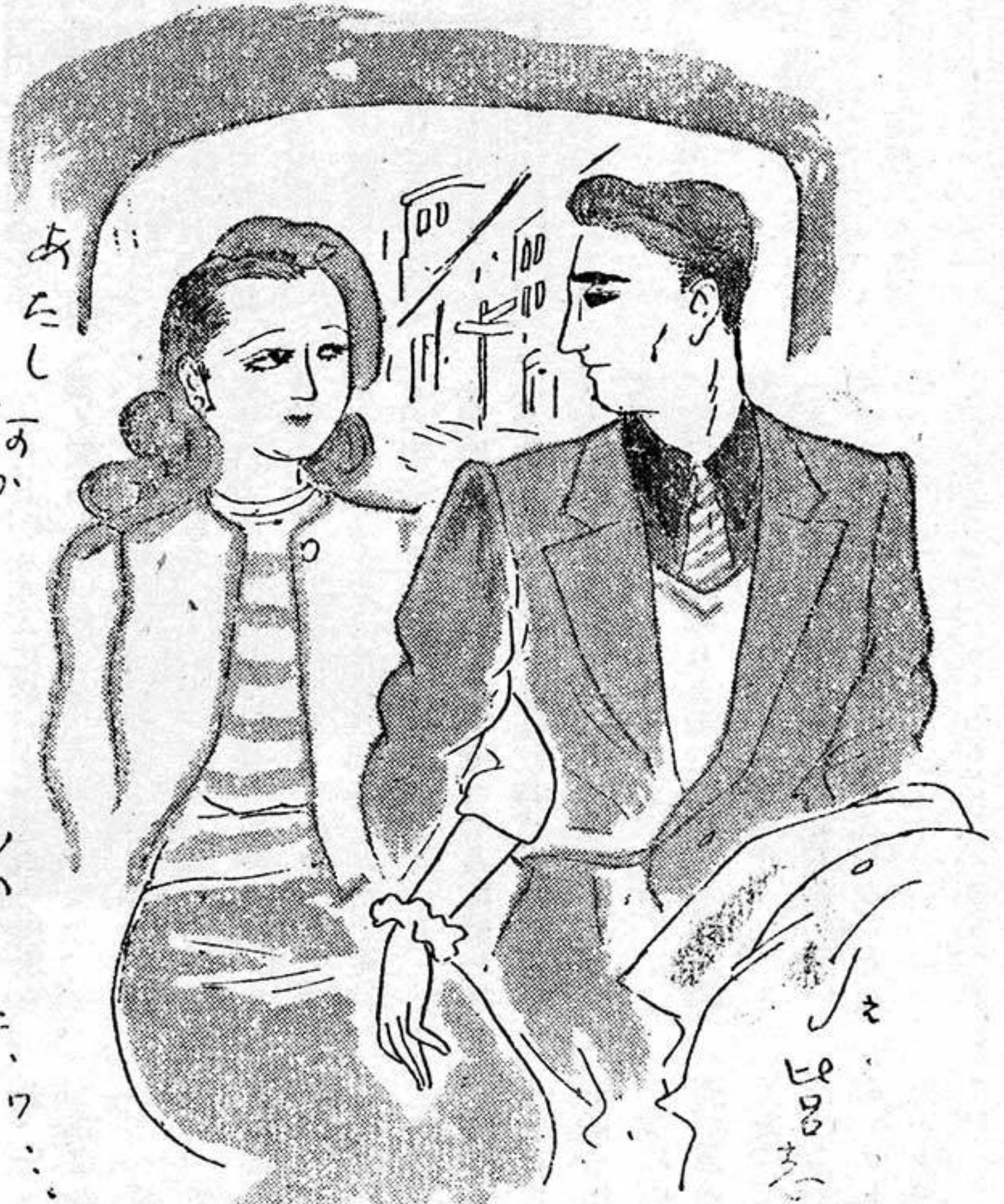
「ま、鮮やかですわね。胴巻き社員の資格満点だわ。」

果然、女秘書は切り返すように讃辞を呈した。そして急に打ち解けて

「お迎え間に合つたと安心したら、わたしお腹が空いてきたわ。支社へ行つても何にもないし……」

「でも住込みの小使い夫婦がいるからお茶位はいつでも沸いてると……」

「そりやあるわ。でも伊月さんわたしね。アパートのひとり暮らしでいつもパン食なの。けさは御飯をいただきますわ。それも



話がまとまつた。

タクシーは大正橋を右へ、ミナミの盛り場に近い日本橋一丁目光風社通称日本一のとある横道にあるアパート光風社の前で停まつた。

「とても美味しいわ」

電気コンロで緑茶を沸かし、女秘書は京太君の、実は船中の若い母親の感謝の贈物である巻き寿司を、堂々と口へつまみ入れた。京太君は満田重役こゝろづくしの竹の子のめしを、これもうまそうに平げた。

グレイのオーバー、同じ色のワンピース貴島文子の趣味は、若い娘の派手さでなく部屋の調度も洋風ながら落ち着いたものであつた。大まかな眼鼻立ちでアイ・シャドウも決してイヤ味はなく、すつきりと浮彫りのように洗練された化粧振りは近く見れば見るほど、ふるいつきたい魅力があつた。

「御馳走さま、伊月さん、御礼にこれを差上げるわ」

クリーム色の洋服簾笥の曳出しから、彼女が手にしてきたのは、セピアビロオド表紙の小型アルバムであつた。それを食卓の上へ置くと彼女は

「ちよつと失礼を……」

と部屋を出ていった。

「オヤ、今度はアルバムか……」

を惚れく〜と見送つてから、京太君は口の中で呟きながら、あまり気乗りもせず第一頁を開けてみた。

「呀ッ！」

それは、声を出した位では驚きが鎮まりそうもない。京太君にとつては想像に絶した猥褻写真であつた。

第二頁も、第三頁も……あゝ全頁二百数十葉ことごとく……主演人物の女は今この部屋を出ていった貴島文子。男は美人化粧品株式会社取締役支配人満田老人ではないか。

怪！また醜！京太君はクラ〜としてきた大阪着以来、二度目の眩暈である。

四、猥褻写真アルバムが美女からの八万圓に

三年前、貴島文子が東京で某映画会社のニューフェイスに選ばれた頃、彼女のたゞ一人の身寄りであり、後援者であつた伯母が他界した。

華やかな銀幕へ愈々これからという時に、後援者のないニューフェイスの生活は苦しかった。人絹会社、ビール、化粧品会社などの広告ポスターにモデル写真を撮つて収入とするのが、演技勉強より主な仕事になつた。

十八人のニューフェイスの中で、役がつくのは三四人に限られてきた。彼女は京都の撮影所へ移籍されたがやはり芽を吹かなかつた。広告ポスターで「美人化粧品株式会社」大阪支社長と知合つた。沖支社長は

変態的なカメラファンであつた。月数回、T市から上阪する満田老人と彼女の肉体構図に異状な興味を持ち、それを撮ることを条件に高給アパート付き三万円というサラリーで、支社長秘書となつた彼女であつた。

映画スターをあきらめた彼女は、酒場を経営するマダムになつて、冷たい世間を見返してやりたかつたのである。

文子、満田、支社長この三人の秘密は、きよらまで完全に守られてきたが、三年間の貯蓄も確実な投資信託で能率を挙げ、あと廿万円ほどで百万円になる。百万あればかねて交渉していた東京新橋の酒場を買うことが出来る。現金過ぎるようだが、支社長と満田に別れ話を持ち出し、手切金を要求した貴島文子だつたのである。

「——ですから、時価一千万円のクリーム製造用ホルモン特殊油料を、買い付ける現金三百万円が足りないなんて、あなたの集金廿八万円を本社へも寄らず、大阪へ持つて来させたのは、二人のトリックなんですわ。あなたの胸巻きに入つてお金はこのアルバムと引換えにわたしがいたゞくのです。さあ、支社へ行きましよう——、支社長室で何も彼もあなたにお分りになるわ。」

京太君は茫然として、彼女の顔を見つめつゞけるだけであつた。

が、眼前のアルバムが彼女の話に真実性を立証しているように思われた。徳島でいっつにない満田老人の舞振、同僚二人は何も知らず似非大久保彦左エ門」のカモフ

ラージュにエキストラとして使われたのであるとすれば、それも符合する。

またアルバムの猥景を仔細に見れば、ポーズの美事さに比較して男女の表情に白々しいものが感じられる。これも事情が分ればうなづける。

カメラ道楽が嵩じて支社長がアマチュア写真家、沖春芳の号を持ち、関西写壇でちよつとしたメンバーであることは噂に聞いていたが、これは何という悪趣味であろうかと京太君は慨嘆した。

——さて、その夜九時三十九分、大阪発特別急行第一四列車で一路東京へ向う貴島文子を見送るのは、伊月京太たゞひとりであつた。

十月月がホームに横たえた列車の屋根を淡く照らしていた。

発車までの僅かな時間を、今は名残り惜しむ二人になつていた。アルバムと引換えに廿八万円を渡した沖社長の野卑な顔、もう倦きがきていたんだ恰度いゝと云つた下司な言葉——きよらの屋間のことが、遠い昔の出来ごとのように思える。

「秘密を知つて、それを守つて人に使われるのは、とても辛いことだわ。会社が居辛くなつたら、わたしのような女でも、頼つて東京へ出ていらつしやいね。」

文子は、しんみりと云つてから、急に運つ葉な調子で

「おかしいわねえ。わたしまたお腹が空いてきたわ。あなたに会うまでこんなことなかつたのよ」

その頬をキラリ光つて伝うものがあつた。

京太君は文子が姉のように思えていた矢先なので、自分も涙ぐましくなつた。

人間は心に武装している間は決して空腹を感じるものではない。警戒緊張が解けた睡眠が訪れるように空腹感が来る。

してみると文子によつて京太君は心から信頼出来る人間だつたということになる。いや／＼仮面と武装の二年間！おつとその必要のない男に会えた日が別れの日！あゝこの女心のニュアンスを、根が純情の伊月京太君の胸に、どこまで深く刻み込まれたか。それこそ神のみが知るところである。

京太君はしみじみと応じた。

「僕も東京に親類が出来たみたいで嬉しいよ。海苔巻きを食べる時は僕を忘れないでね。」

発車のベルが鳴つた文子は急いでほの暗い所へ京太君を連れていつた。そして伸び上がった京太君の頬に唇をあてた。天保山の広場の時のように京太君はクラ／＼とした。

「これ私の置き土産よ」

ベルが鳴り終る頃、唇を離れた文子は何か紙包みを京太君のポケットに素早く押し込んで、二等車のタラップへ走つた。汽車が動き出した。

闇に吸い込まれる夕顔のように、文子の姿が遠のいていく。見る／＼振る手が小さくなつていき、やがて二本のレールに月影だけ……。ほつと我れに戻つて京太君は、ポケットの彼女の「置き土産」を出してみた。パトロン紙の包はネクタイのようであつた。

だが披けてみると千円の札束であつた。

——私は廿万円あれば私の予期しないお金です貴方がいなくなつたら支社長は廿万円でよかつたときツと猫バ、をきめたことでしょう。何かにお使い下さい——走り書きが入つていた。京太君は頭が痛くなりそうであつた。マツチ、キヤラメル巻寿司、猥写真アルバム。汽車、船、自動車、そしてあの顔この顔を、走馬燈のように思いえがきながら。(了)

讀者投稿文藝

(投稿歓迎)

川柳

(岡山) 泉江 洋

処女性へ加減している口説きよう
冗談へ娘の瞳、動かない
膝枕女の方が焦れている
誘惑を乳房で受ける通勤車
気まぐれのキッスへ女あわてない

小話

綜合病院 白砂太作

「あの、また血が出たんですけど」と若い女の声。
「あまりいじつちやいけませんヨ」「えー」
「指を突込むんじゃないんですか？」
「……………」
「毛が薄くなつてるところをみると、しよつちゆういじつてゐるんでしやう？」
次に待つていた男、慌てゝ衝立のカーテンを少しのけてみて
「な——んだ鼻か」

怪奇語源集

逸

物

若

水

豊



物事には何事にも事の起りというものがある。言葉というものにも、それ／＼の意味があり、故事来歴といったものがある。と云つてこゝで七面倒臭い講釈をするのではない。

題名に示したる逸物ということであるが、そも／＼この言葉の起りは……何であつたかを披瀝いたそう。それも我々男性にとつて、一番大切な物、と云えばおわかりと思うが、この逸物なる言葉は、こと男性の、しかも生命にも替え難き程大切な物、あゝそれがなか

ばならぬ。知らねば男の恥とまではゆかぬとも、後学のためあえて無益ではなからう。ゆめ／＼御油断召さるなよ——あえてひそかに世の男性に対して、特にその道の好者に警告を発する次第じゃ。

事の起りは、今をさかのぼること一千有余年、陽成天皇のありがたき御代のことでござつた。滝口の道範という男がおつた。その男が陸奥へ黄金を取りに行く使に差し遣わされることにあいなつた。件の道範は一行九人を引き連れ、遠き陸奥の地まで重き使命を帯び

つたら如何に世は味気なく無意味なものであらう。そんな虎の子のように大切な物と深き関係を持つて生れ出たとわかれは是が非でも知つておいてもらわね

て出立致した。黄金を取りにゆくのであるから、途中で山賊共に狙われる恐れもあるのだ。だから一行九人なか／＼豪の者揃いでござつたことじやろ。

行き／＼信濃の国まで参つたそこでその国のさる郡司の家に宿をとることに相成つた。お上の役目を仰せつかつた一行でござつたから、国々の役人たちも何かと便宜を計つてくれた。何処へ行つても鄭重にもてなしてくれる。

この郡司の家でも旅の疲れを休めるため、酒も出したことであらうし、御馳走もしたことであらう。それから都の話などもちよつと

召されい、と云つたあんなばい、寢室へ通される。

旅寝のならいとて、容易に寝つかれぬことがある。都に残して来た女房のことも気になる。いま頃はどろして居るかなア、浮気はして居ないかなア、まアそんな心配はしたかどうかからぬこととてござるが、寝つかれぬまじしとて天井の、穴なども眺めている中に、は／＼かりに行きたくなつた。

そこで道範は、宵の中に教えてもらつた便所のありかを求めて、廊下ずたいに見当をつけていつたのでござる。他人の家の勝手は始めての者にはわかりにくいもので、たしかこちらの方だと思ひが、と探している、ふと廊下沿いの一つの部屋に灯がついている。何気なく部屋の中をのぞいて見ると、屏風几帳などが並んでいて小ざつぱりとした部屋である。そしてその部屋の中の様子はなんとなくなまめかしくふく／＼とした薫がほのかにたゞよつてもいる。それもその筈、道範がちらりと覗きこんだ部屋には、几帳を透かして女が寝ているらしい。しかも尙よく覗きこんでみると、年の頃なら二十歳そこそこの美しい女であるらしい。

思いがけなく、こゝした部屋を見てしまつては全く眼の毒というものでござるわい。ただ心では居られないのが男の性分。あたりはしいんと寝静まつてとがめ立っている者として見当らぬ。全くもつてこの、このまゝ見過してしまふにはなんと云つても惜しいことである。

色も白く年も若い女の寝姿、むつちりとしたふく／＼かな肉すぎがしなやかな曲線を画いてなまめかしさこの上もない。このまゝ通りすぎては男と生れた甲斐もござらぬ。道範ならずとも、誰しも男ならこんな場面に逢着したら、あやしく心はときめいたこととてござる、いやはや仲々のデリケートなものじや。

しかし道範も本能のおもむくまゝに、すぐ行動はしかねた。こゝは他人の家じや。一夜の宿の世話になつてゐる家じや。あまり向う見ずのことも出来かねし、したためらつていたのでござるが、その女の姿を見るにつけますます押さえ難く、そつと遣戸を開けて部屋の中へ這入つてしまつた。

近寄つて見れば見る程美しい女である。道範の胸は思はず。ドキ／＼とせざるを得ない。

たける心を押さえて女を驚かさぬよう、そつと女の傍に寝た。女はその気配にフト目ざめたが、さして気味悪げにも驚かない。やれやれ、驚いて大きな声でも出されては興ざめなことこの上なき次第ながら、先ずこれなら物にすることもできるだらう、道範の心は嬉しさと安心と好奇心とで一ぱい。

折柄、九月の十日頃のことだから、女はしおん色の一重と濃い色の袴しか着ていない。薄物の衣を通して女の膚のにおいが伝わつて

くるようで、益々道範の心をそよめる。道範はそろ／＼とふくよかな女の跡を抱き寄せようとした。それでも女は、たいして拒もうとせずたゞ、うらはずかしげな風情：「あゝ何たる幸運ぞや、思いがけなくもかゝる女人を手に入れようとは！」

あゝ、熱い吐息。誰じや思わぬ溜息をついてる奴は、まだ早い、——と云うのは、道範がいま正に女を強く抱きしめて、という途端身体の下半分が、す／＼とかるくなつたのじや。

す／＼と軽くなつた感じは、エネルギーが何処かへ飛んでしまつたやうなものでござるわい。頼りないこと此の上もない。件の道範なる男、おや？と思わざるを得ない。かゝる大事な時に、そして彼はそのあたりをまさぐつてみた。ところがなんとしたことか無いのである。大事な物が無いのでござる。これはなんとしたことじや、こんな筈はない、と思つて探した

が、とうにも手応えもない。こうなるとあわてざるを得ない。不思議と云えばこれほど不思議なことはない。そして事実無いとすれば一大事だ。そう思うと益々心は焦り、在りかを求めるのだが、まるで頭の髪の中をかき廻しているやうで手当りが無い。

まるで狐につもまれたやうなわけのわからぬ気持で、道範はしきりに小首をかしげながら、女のところをほう／＼の態で立去り元の寝所に帰つた。そしてもう一度念入りに探したがやはり影も形も見えぬ。どう考えても不思議な事でござつたのだ。そこで部下の中で一番親しい男を呼び起して、

「おい／＼一ついゝ事を教えてやろう。向うの部屋に、年の若い美しい女が寝ているぞ」と云つた。起こされた男は、寝呆けたやうな顔をして。

「女が、どこにです？」と問拔けた声を出して聞いた。

来たんだ。お前も行つて見ろ、やりやいゝ女だぞ」
事の真相はうちあけず、こう云うと、相手の男は、大悦び、抜き足差し足で女の部屋へと忍んでゆく。
暫くすると、この男は帰つて来たが、世にも不思議そうな顔をしてゐる。その顔つきを見て、道範は心の中でハハ、と思つた。やつぱりこの男も俺と同じやうな始末だつたのだらう、と。その男の顔を見ると可笑しくなつて、クスリ、と笑いそゝになつたが、思つてみれば自分もその通りで、笑い事ではない。

しておつたのでござる内心おかしやう可哀そうやうだが、口に出しては云わない。

一行中の男は、次々に出かけて行つて、皆同じ顔附で帰つて来た

道範を始め九人とも恥しい事だし馬鹿々々しいし、例の大事な物紛失については誰も一言も云わなかつた。そして誰でも心のうちには同じで、寝つかれぬ。何んとしても不思議なことだし、悲しいことである。そして馬鹿々々しいことだ。自分たちの粗そつと云えば粗そつと云うなもので文句の持つて行きどころもござらぬ次第、いやはやまことにあわれとも笑止とも云えぬこととでござるわい。



けて来た男は、「郡司がこれを牽れと云つて持つて来たのです。朝のお支度もしてあつたのに、どうしてこんなにお急ぎですか、こんな大切なものまでお忘れになつて」

とニヤ／＼としたらす笑いを浮べて持つて来た白い紙包みを道範に渡した。紙包みの重みは、ドシリと手応えのあるものであつた。「これはどうも御苦勞……」と使の男に礼を云うのも変な具合でてれくさいこととでござるわい。

道範は苦笑のうちに、紙包みの中を皆の者に見せた。皆も頭をかがいて苦笑するよりほかはない。

道範は、フム、とちよつと思案顔をした。

「さておの／＼、我々の大切な忘れ物を届けてくれたが、どれが誰のやらわからぬ困つたものじや。あやまつて間違つたのを取ればそ

今は昔、戦線エロ落穂集 (一)

キコの勢い

シラミのわいた、ボロ／＼の軍服を着て、髯ぼろ／＼と伸ばした兵隊でも、牀内に蠢動する欲情にはヘキエキする。

中には、こつそり五人組の自慰によつて、その炎に近い激情を抑制するヤツもある。だが、翌日の強行軍を思うと、落伍するオソレがあるので、自慰行為も慎まねばならない。中支戦線で、落伍でも

したら、それこそ死骸は行衛不明になつてしまふ。
若い、童貞保持の兵隊ならそりでもないが、一度でも、女の味をしつてゐる兵隊となると、まるでイロキチガイのやうな顔色をして

いる。
占領地の部落で宿営ということになる、そうした連中の隙は、急に、ハッラツと生彩をとり戻す一応、部隊長訓示が出て、婦女を冒すことは禁じられるが、そこはキコノ勢いというヤツ、若い兵隊が黙つて引退るワケはない。

臭 覺

上長の連中には、宿営と同時にイワユル慰安所が設営されて、すぐに蓄積されていた性慾の精算と浪費とがトドコウリなく行使されるけれども、下士官以下になるとそれはゆかない。だから、三人、五人と組んで、おツとり銃で、こつそり漁色に出掛けて行く。が、しかし、部落の方では日本軍来ると知ると、お婆さん以外の、女の名のついた人間は、一瞬にして姿をどこかへかき消してしまふ。

それも兵隊たちは、要領ぶかく、鼻をクンクンと鳴らしながら一軒一軒と、女を探して歩くのだからで犬みたいに臭覚だけが異常発達して来るものとみえる。

まず、入口にたつて、その家の空気を鼻で打診してみるのである「居る、居る……」

どこに隠れていても、彼等の鋭い臭覚は女を探しあてゝしまふ。中には逃げ遅れて、台所の裏東の中に隠れている女などが、偶々、あるものである。

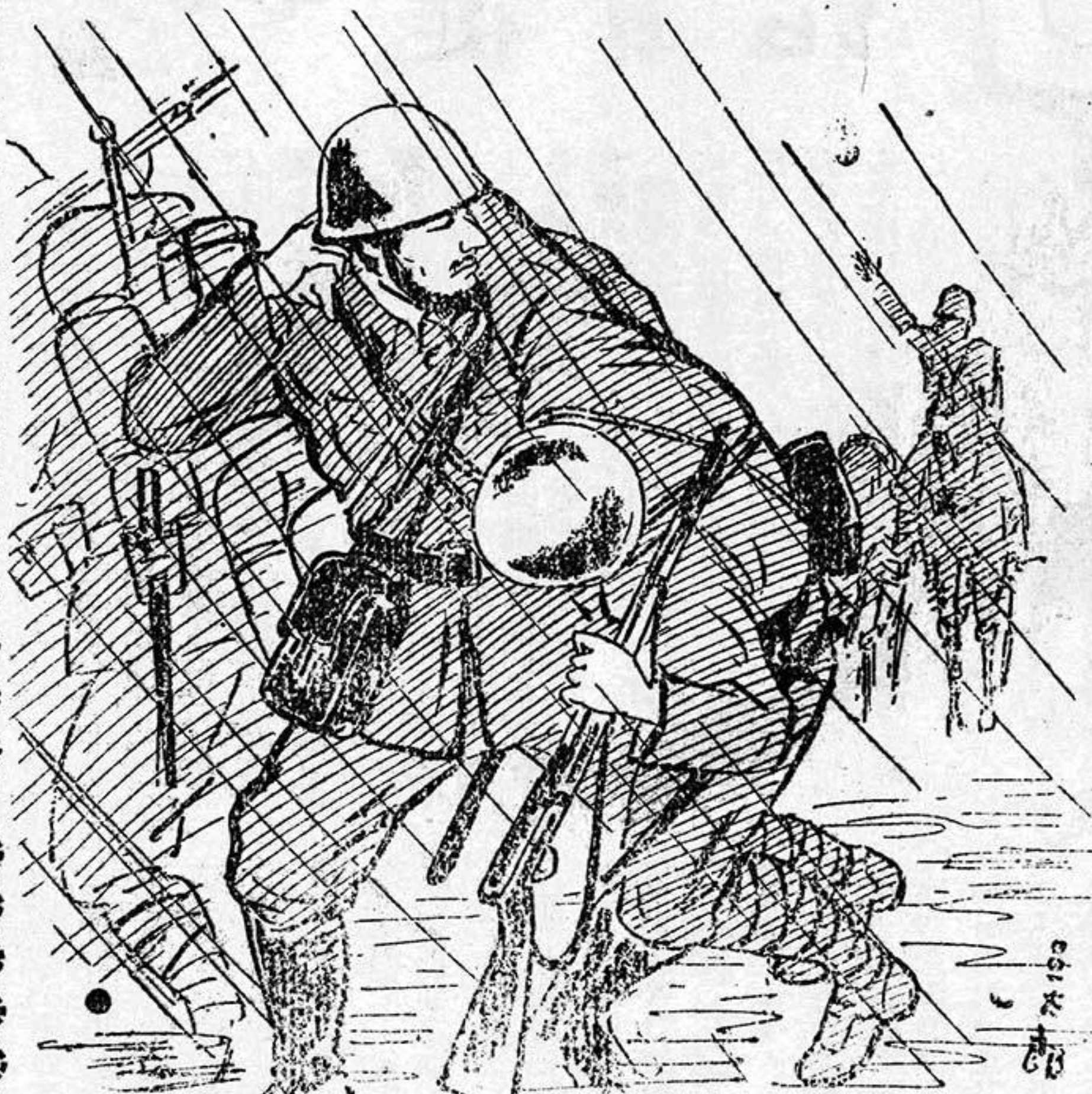
ひきずり出すと蒼白な顔をして覚悟をしたのか殺さないで呉れと哀願しながら、前の方をハダケるすると、兵隊たちのチャンケンボンが始る。

糞 泥

だんだん奥地へ入つて行くと、そうした宣伝がゆきとどいているとみえ？若い女たちは、捕えてみると、言い合したようにハズカシイ箇所を脱糞を塗まつていた。神国に生れた兵隊は、さすがに

それを一瞥してヒキサガツた。なにがなんでも、文明をはこる兵隊が、その不潔を押しきつてまで厭慾を遂げるワケにはゆかなかつたものとみえる。

筆者の戦友で、西村吾市という兵長がいた。生れつきヒョウキンな男で、素人漫才のチャンピオンであつた。その西村兵長がある日あるところで、その異臭をはなつ女にぶつかつた。「おい、勿体ない。見ろ、李香蘭に似とるじやねえか」



れこそ大変なことになるぬとも限らぬからのう。女房どもが、帰つたあかつきどんなことで他人のもの勘ずかぬとも限らぬし、その時説明のしようもないからなア、そうしたことは、女は男よりもよくわかるものじやでのう」と云つた。失つたものは戻つたもののまた別に新しく困つたことになつたのだ。ずらりと並んでいるのは、さぞ奇怪にして見事なことでござつたろう。

と、傍にいる戦友に言つた。そして、ちよつと考えた末、

「張番をしてろよ」

西村はすぐに裏へ出て行つて井戸から水をバケツに汲んで来た。

「清掃、々々……」

と言いながら、彼は女の股間をジャブ／＼と洗い始めた。女は死んだように横になつたまゝ、首を横に曲げて、彼のなすまゝになつていた。

「さ、御馳走になるか」

洗いおわり、きれいにハンカチで濕氣を拭くと、もう、戦友とチャンケンをする必要はない。正しい努力に対する正しい報酬——彼はニンマリと笑つて、軍袴を脱し始めたそりであつた。

心臓も、そこまで行くとまことに、ナンバーワンである……

(未完)

れもこれも逸物揃いではござらぬか」

一行の顔を眺めて道範はこう云つた。

「全くのことですのう」と一行の者も云つた。

が、道範のその心配もやがて解消した。と云うのは、紙包みの中の物が途端に消え、アレ、と思う間もあらばこそ、それと同じに、九人の躰はもとの通りになつたのでござつた。

皆は生き返つた思いがした。そして大笑いになつて、めいめい昨夜の失敗談を馬上で話しながら行くのであつた。

「それにしても俺はどうなることかと思つた」

「だが仲々の逸物ぞろいであつたわい」

道範は紙包みを開いて見たそのときのことを云つて阿々大笑した秋晴れの野にその笑声は心地よく流れたのでござつた。

ちなみに、坐右の漢和辞典を繰いて見るに、逸物とは、「特にすぐれてたくましく強いもの」としてある。そしてまた、「逸」とは失うという意味もある。失くなつた物、それ即ち逸物で、両方相通ずるこの意味は、道範一行の失敗を思い合すとき、思わず笑ひもこみ上げてくるではござらぬか。これが逸物のいわれでござる。ワハッハッハ……

平家谷の妖精

沼貫健 絵



(一)

出雲の国飯石郡琴引山の山麓に、俗に平家谷と呼ぶ山村がある。文治二年檀の浦に亡んだ平家の残党が、この山境を開いて定住したと言われ、海拔一〇一四米の山頭に座した公達や姫御前が、在りし日の榮華を忍んで、琴を弾じたというので、今もつて琴引山と呼ばれている。

中国山脈のど真中、峠を越せば備後の国という別世界に、地獄の釜もろだる様な或る土用の午さがり、この土地に相応しい浮世離れのした殺人事件が起つた。

淫売の葵御前といえは、終戦後急に派手になつた青年達の色事の中に、一際谷々を圧した偉嗣であつた。谷の男という男は、お互に彼女のことは知らぬ半兵衛を決めこんではいるが、彼女の不可思議な肉体を思

い出してはゴクリと唾を飲みこむのだつた。

今を去る七百七十年の昔、平家の公達が恋を競つた白拍子、宗盛が愛妾葵御前が後裔と称する加茂家の嫁は、代々葵と呼ぶ習慣であつた。その加茂家の当代の葵は、家附娘で二十二の年に後家となり、若死した息子が残した孫は、インパール作戦の露と消えてしまつた。

幾十年、満たされぬ空闇に悶えた葵は、長茄子をそつと蒲団の中に忍ばせたことはあつたが、男は一度も寄せつけなかつた。

女子の亀鑑と数回表彰された彼女は、平家谷の名替と称えられ、名譽の中に生甲斐を感じていた。その結果全ての血縁を失つてしまつた彼女は氣負つた今までが馬鹿馬鹿しく、女が女であること、女が子供を産むことを否定するやうな道

徳に、騙され続けた己が不覚に、老い過ぎた年齢を数えては、悲涙に咽んだ。

「もう遅い！もう遅い！」

ヒステリックな彼女の血の叫びは、古刹の様にだだっ広い家の暗黒に、空しく吸われて行つた。

結局彼女は五十五というどうにもならない年齢を数えては、悲しく諦めねばならなかつた。五十五、正しく女の生命にとつてはデッドロックであ

る。普通の常識ではそうであらう。が、彼女は長く消費されずに残つたホルモンのせいか、或は世にも特異な体質の為か、メンスこそなくなつて久しいが、豊潤に湧き出る泉と、三十女に負けない肉体の持主であることには、とんと氣がつかないのだつた。彼女は死を決心した。

この世の想い出にもう一度出雲大社にお詣りし、出雲の都松江市や、玉造温泉美保関など見ておきたいと思つた葵は、簞笥の底から娘時代の晴着大島を引き出すと、これも何十年袖を通したことの無い、疋田しほりの長襦袢に重ね、博多帯には古代紫の帯締に青瑪瑙を配して、久しぶりに見る己が晴れ姿、それは彼女の悲痛な心情とは似ても似つかぬ、没好みの三十女、捨てるに惜しい風情であつた。

「おんや、マー」

二重瞼の大きな目が、クルツと動くと、思わず葵は微笑んでいた。

(二)

「随分綺麗な湯ですね。素晴らしいな」素晴らしいのは湯なのか女の肉体なのか？桜井は青磁色に澄んだカルシウム泉の中に、ゆらめく豊満な肢体を見詰めていた。

「嫌よ……。そんなに見詰めちゃ」

こんな若やいだ言葉が自然と口に出た葵は十八娘のように頬を染めると、そつと身を振らせて乳房をおさえた。彼女は十九の年に子供を産んだが、どうしたことか乳が出なくて貰い乳をしたので、所謂垂乳根の



みにくさでなく、処女のようにピンと張っているのだった。

「小母さん……と呼んじや気の毒かな。何と言つたつけね、そろそろ葵さん、全くクラシクな好い名だな。これから葵さんと呼んでいい？」

「小母さんで結構ですわ」

「ハハハハ。随分綺麗な小母さんだな」

と言うと桜井の手がグツと彼女の方に延びて来た。

関で見染めて、大社で会うて

末は松江の嫁が島

どこかの部屋から三昧に合せて、元氣のよい声が聞えて来る。

葵と桜井のコースはこの頃の逆だった。死への願望と、体のどこかで疼いている女性ホルモンの奇妙な葛藤で、惨憺たる凍土に、水がぬるみ始めた初春に似た葵が乗った、下関発大阪行の客車の中で、隣り合っていたのが角帽姿の桜井だった。東京の大学に

行つてゐるという桜井の、磨きたてた風手に、山奥の男しか知らない葵は、宗盛様もきつとこんな方だったに違いないと思つた。彼女の中に無意識に長く集つていた宗盛への淡い思慕が、旅の気易さのためか急に芽を吹きはじめたのだつた。芽は際限もなく成長して、眉目秀麗な平家の嫡男宗盛と、葵御前の甘い恋物語の中に溶けていくのだつた。溶けた夢は儚ない泡沫で終つてしまふのだろうか？

下車駅の近づいたことを車掌が知らせに来た。冷厳な現実に取り戻された葵は、「どんな御縁でしたか、私にはあなた様が宗盛様、いや戦死しました孫、いや弟のよう

に思えてなりません」

と言うと早や涙ぐんでいた。「弟さんが戦死されたんですね。で、宗盛様というのは、あなたの許婚？それとも御主人」「いえ、とんだはしたないことを申しました。宗盛様は平宗盛様のこと、私の御先祖でございます。主人……は、あの……も戦死しまして」

葵は孫を弟に、三十年前に病歿した夫を戦死にしました。とんでもない嘘に、彼女は百八十度回転しようとする冒険に恍惚となつた。

葵の気持などにはおかまいなく、現実はい間断なく下車駅へ、桜井との別離へと急ぐ彼女はどこまでもどこまでも、旅路の果まで、命のある限り桜井と一緒に歩きたかつた。このまま乗り越してしまおかと思ふ強い誘惑に汽車が徐行を始めても、座を立ち兼ね、松江までだけでもと、ふんぎれぬ気

持を次の駅までの時間へ持ち越そうとした時、

「では御一緒にお供しましょう」

桜井は元氣よく立上ると、ボストンバックを網棚からおろした。

「マー！あなたも此処で」

頓狂な叫びをあげた葵は、晴々と桜井を見上げた。

「ハ、僕何だかこのままお別れしてしまふのがおしい気がしましてね」

九州から上京する桜井は、この方面の見物を目的に、わざと山陰廻りを選んだのだから大社駅下車は予定のコースだった、こんな殺し文句を使つた。平宗盛の後裔という鄙びた上品な女との旅も一興と、大都市の喧噪なアプレ娘達に食傷気味の桜井は考えたのだつた。彼は葵の年齢を知つたならば、魔性の毒氣にあてられた様な慄然たる気持になつたであろうが、哀愁に閉ざされた葵が、醸し出す色気は、静かに彼の官能をゆすぶるのだつた。

出雲大社、日御崎燈台と、思わぬ道行を続けた彼等は、玉造温泉のT旅館で夜を迎えたのだつた。

風呂から部屋に戻つた彼等が、襖を開けた途端

「アッ！」

葵はずんだ声をあげた。湯の中で桜井に抱き締められた興奮が、疾風の様に渦を巻く彼女の目に写つたものは、朱塗の雪洞から流れ出る乳白色の光線に柔かく映えた派手な一枚の友禅模様紅絹裏の掛蒲団、並べられた二つの枕、雪洞の横に、置かれ

た八雲塗の盆の上の、水の入つたフラスコとコップであつた。

「とんだ姉妹になつちまつたものだな」

てれくさそうに桜井が言つたようだった。葵の耳には入らず、激しい心臓の鼓動と全身を襲つた震に崩れた彼女の体は、桜井の腕に支えられ、そのまゝ蒲団の上に横わつた。

此の世の名残りと思つた旅が、とんだ道行になつてしまつた葵は、松江、美保関と夢中に過した。己が年齢も、死ぬつもりであつたことも、すつかり意識の外に霞んで楽しい花園の中に戯れる蝶の様に、桜井に挑み、挑まれ、交つた。彼女は葵でく葵御前であり、桜井は藤長けた公達宗盛であらねばならぬと思ふ倒錯が、この頃既に彼女の夢の中に影を投げていたのだつた。彼等が皆生温泉の波音に羽交の歓楽を結んで頃は、彼女は路銀を使い果していた。「ネー、宗盛様、あたしの宗盛様を一人で東へ下らしたくないの。あたしも連れて行つて」

葵には一秒たりとも桜井から離れられそうに思えなかつた。思い詰めた表情でこゝろ葵に取り纏られる桜井は、思わぬ拾い物をした位に思つてゐるのだから

「鷹の気持も同じなれど、思うに任せぬ都の住居、源氏の追手を恐るにあらねど、期限附なる追立を、申し渡されし四畳半、たとえ十坪の賤家なりと、手配するまで誓しの別れ、国に帰つて待ちやれの、必ず御身を呼び寄せるべし」

こんな駄洒落に其の場を茶化してしまふ

のだつた。嫌じや嫌じやの泣き場もあつてとにかく桜井が住居を手配し次第、迎えに来るとの約束で、一先ず別れた葵は、パーマネットにルージュも鮮かに、颯爽と平家谷に帰つて来た。

(三)

「可愛いそうに葵さんは気がふれたらしいの。あゝ打続いて不幸に会つてはな、無理もないことだけん」と

「でもわしは魂消たわ。見たこともないどえらい別嬪さんがの、よいお天気さんで、と声を掛けるじやないか。何処の娘が帰つて来たかと思つて、目を据えてみてもとんと合点がいかなで、ぽかんと見ていると、アハハと笑つてスタスタと行つてしまつたわ。あれが葵さんの変り果てた姿とは氣づかなかつた」

「ありや色狂人というもんじやろな」

「女は魔性というが、六十婆さんが娘つ子になるとは、一体どないしたことじやろ」
「本人は葵御前の靈が乗り移つたと言つちよるそうだが、いよく本物らしい」

平家谷は葵の噂でもち切りだつたが、当の葵は以前の葵を知る者には、皆目見当のつけようもない陽気さで、鼻唄を唄いながら家財道具などを整理していたが、僅かに残つた田畑山林も売りに出す仕末であつた。興味半分に心配した谷の住人達は、宗盛以来の家を絶やしては先祖に申訳がないと、寄々相談の結果葵の心境を問ひ正してみるのが、

「葵は死んだの。あたしは葵御前の再来なのよ」

言葉まで都風に、途方もない返事、開いた口が塞がらず、退散するより仕方がなかつた。

人の噂も七十五日、葵の話に微が生え始めたが、桜井からの音信は絶えてなかつた別離の際に取り乱した葵は、不覚にも彼の住所を聞き忘れていた。生きる絆を失つた真空状態の中に、難なく入り込んで、どうかと桜井に坐りこまれた葵には、四十年の長い間、彼女を支えて来た、勝気な理智の片鱗も今はなかつた。彼女の鼻唄は次第に聞かれたくなつたが、相変らずの厚化粧で郵便配達人待つ毎日が続いた。

夏が来て、冬が来た。やがて春が訪れようとしている。葵の女体を激しく揺つた温泉宿での日が巡つて来ようとしている。けれど桜井からは何の便りもなかつた。

雪溶水が溪流に溢れ、突道湖に白魚を獲るハツ手網が見られる頃、深い憂愁に閉ざされた彼女の表情は、凄艶な能面の様に、もはや動かなくなつていた。と共に桜井の姿は濃霧の彼方のシグナルの様にぼやけ、桜井とも宗盛とも見分け難いほどになつていた。白濁した彼女の思惟は、全ての男が桜井や宗盛に見えるまでには至らなかつたが、桜井によつて開けられた官能の欲びだけは、刻明に彼女の全てを支配していた。

(四)

谷々に微風が若葉の香を乗せて人々のセックスをくすぐり始めると、夜の客が葵の家を訪れはじめた。初陣は生活扶助の書類を持つてやつて来た。民生委員の隠居であつた。次は部落会長であつた。

葵の能面の厚化粧は変らなかつたが、髪は延びて腰まで達していたおそろしく頑丈な桂で組まれ、数百年囲炉裏に煤けた駄々広い家の薄明の中に、端座した彼女の姿は、葵御前と呼ぶにふさわしい、此の世のものとは思えぬ妖気を漂わしていた。グロとエロをミックスしたこつてりした味は、過労に乾枯らびた女房しか知らぬ男達には、中々の魅力であつた。それに安上りだ。都会で千円も取られるというのに、此処ではただの十円、幾ら山奥とはいえ夢のような話である。いつの間にか葵御前の相場は十円と決つたのだつた。西の谷から東の谷から、峠を越して備後の国からも、通つて来る男達は、声交りを始めた少年から七十の爺さんにまで及んだ。

葵はどの男にも、且つて桜井を抱いた時の情熱を示した。にも拘らず彼女の体力は一向に消耗しなかつた。

加茂家の裏山に先祖以来の墓がある。苔むしてあちこち欠けた五輪や蘭塔の上には巨大な榎の老樹が目を遮つて、真夏でもひんやりとした冷気が感じられる。葵は午後



になると此処に来る様になつた。毎日の暑気の辟易したというよりは、何となく死の予感でもあつたのだらうか。

或る日此の辺では見かけぬ十六位の少年が昆虫採集の網と胴籠を持つて葵の前に現れた。葵のことを知らぬらしい少年は、一瞬ギクリとした様であつたが、端麗な容貌を幾分上気させて

「今日は」

と挨拶をすると、彼も休むつもりか胴籠を肩からはずすと、榎の根に腰を下した。

「あなたお名前なんているの」

葵は少年の側に席を移すと静かに尋ねた「僕、香山春樹というんです」

「そう。可愛いお方。宗盛様のお若い時そつくり」

彼女はジツト少年の横顔を見ていたが、袂からノートを出して、香山春樹と書きつける、少年の腕をソツと握つた。

「ネー、あなたあたしのこと御存知？」

「知りません」

腕をつかまれて固くなつてゐる香山が、

体の割と幼い声で答えると

「あたし葵御前というの。宗盛様!あたしの宗盛様……」

と囁くと、少年を抱き締め

「あたしを確つかり抱いて」

と少年の頬に熱れた熱い息を吐いた。彼女は胸震いをはじめた春樹を、濃緑な毛顫を敷いた様な苔の上に横抱きに倒すと、春樹のショートパンツに手をかけた。紅のしごきが半円を画いて飛ぶと同時に、緑蔭を漏れる光線に、多彩に輝く葵のヌードが、真白な閃光となつて、春樹の臉に飛び込んて来た。彼はモンパッサンの女の一生、コルシカ島の一場面をチラツと思ひ浮べたがそれも瞬間で、いやにすべつこい柔い物が五体の感触をのたくりまわし、やがて不可抗力な全身の痺れに、アツと声をあげると揮身の力で女体に抱きついていった。

「オーイ、香山」

何処かで彼を呼ぶ声に、自己を取戻した春樹は、彼の顔を覆っている髪の手が発散する、アンバーの香に混つた生温い女の体臭を、しばらく吸つていた。

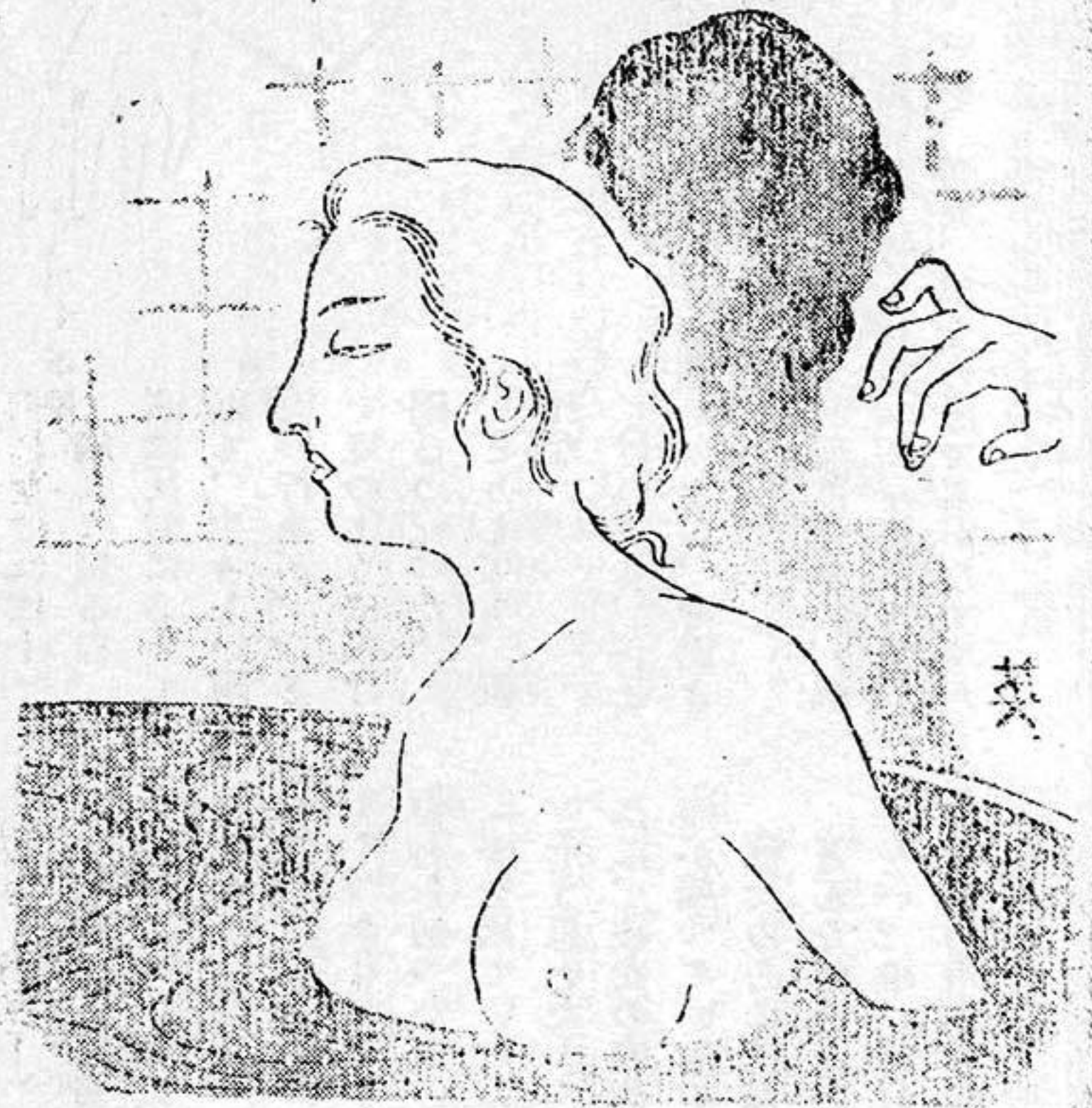
「オーイ、香山」

二度目の声は近かつた。弾機仕掛の人形の様に走り起きた春樹は、急いでバンドを締めると、

「宗盛様!宗盛様!」

追いかける女の叫びを脊に、後をも見ずに走つた。野球帽が青苔の上に、腹を見せに転つていた。

加茂家の墓地は再び静寂に返つた。そこには半裸の女が、長い髪を地に敷いて横た



「キヤーツ!」

という凄まじい女の叫びで終つた。

(五)

脱皮前の蟬の子を取りに来た子供達によつて、葵の死体が発見されたのは、晩鐘が谷々に木霊する夕暮であつた。

乳房も、股間も惜し気なく雄大に見せた葵の最後は、葵御前らしく、エロとグロの極致であつたが

怒る意力も萎れ果た哀れな狂女の、精一杯の嘲笑であつたかもしれない。

他殺か?自殺か?平家谷は一時に湧き返つた。弦月が青い光を投げる墓地には、繩が張られ、悪霊を追い払うかの様に、真赤に寶火が燃えた。蕪の下からはみ出た死人の脚が、赤い火焰に時々反影する。その度に、老婆達の詭経の聲が高くなつた。男達は盛んに素人探偵談を大声で喋り合つた彼等は何か喋つてでもいなければ、やりきれないのだつた。

警察の自動車に着いた時、一同ホツと息をついた。証拠物として野球帽があげられ一応二人の少年が噂に上つた。股間は粘液で濡れていたが、外傷らしいものがないので、屍体は県立病院で解剖してみないと、

他殺の断定はくだせなかつた。

解剖の結果は、心臓麻痺と判明したが、誰にも解らないことが二つあつた。彼女の室内に蛇の鱗が数枚あつたことと、彼女の手帳には、民生委員に始つて、香山少年を最後に、二百名延べにすると九百名に及ぶ男の名前が月日と共に整然と書いてあつたことである。

その話が平家谷に伝ると、男達は慄然とした。あの不可思議な精力を思い合せて、蛇の化身であつたのではなからうかと思えるのだつた。蛇の化身でないまでも、整然と書かれた人名は、果して葵が本当の狂人であつたとは思えない、正確な筆跡だつたのである。

読者文藝

(投稿歓迎)

たばこ物語り

川元悟資(山口)

ななめにさす青白い光が、いとなやましく彼女のふつくらした姿を照らしていたそのけだかくしんせいな姿は処女であることを物語っている。彼はもう堪らなくバツト彼女に抱きついた。その身のりゆりゆりと盛り上つた乳房を求めて彼の手は躍つた。彼女は反抗しなかつた。美しい姿態は彼の為すまゝに、そして最後のワンピースまではずされた。あゝききようやく迫まらんとした。

静かに――朝日がさしはじめた頃、昨夜の人は違つた型の洋服をきせられて洋服店のウインドに飾られていた。

深夜の貞操

派小説
軟小

愛するためには

正子は眠っているのではなかった。

深々と掛蒲団を眼の辺りまで被つて、身じろぎもしないでいるけれど、窓から流れ込む月の光が、彼女の眼尻から伝わる涙をはつきりと浮び上らせている。



松谷 茂

土心乃田よしろう画

同じ部屋に眠っている幸太郎の鼻息が、矢鱈と彼女の耳を打った。

(眠ろう。眠つて忘れなければ……) 焦れば焦る程、頭は反対にさえて来て、生々しい現実の行為が、全身を嵐のように駆け廻るのだつた。

どうしても、眠れない。けれども、正子は深々と蒲団に全身を埋めたまゝ、身動き一つしなかった。

つい今、幸太郎のなすが儘に任せて、経験した野獣のような行為(正子はそう思った。)を、到底、男女の誰でもがなす事だとは考える事が出来なかつた。

すや／＼と寝息を立てゝいる幸太郎を、

今までの幸太郎とは全く異つた人間のような気がして来て

(けだもの!)

心の中で叫ぶ。しかし、声にはならない胸に、肉体を与えた娘心の悲哀があつた。

(馬鹿! 馬鹿!)

先刻のように身をくねらせながら、もう一度叫んで、幸太郎の慰めの声が聞きたかつた。

正子は、静かに首を廻らせた。

くつきりと黒く浮んだ幸太郎の横顔は、安心して切つた深い眠りである。

(夢を見ていたのではないか。)

そう思ひたかつた。しかし、夢でない証拠に、彼女の肉体の一部には、未だその疼痛が残っているのである。

彼女の心に残悔が満ち溢れた。

どんな行為を経験したのか、もう考えたくない。唯、自分が、もう(処女)と呼ばれる数の中から脱け出した(女)になつて

つた。

「幸太郎さん。」

彼女は掛蒲団から顔だけはみ出すようにしながら、静かな声で呼んでいた。

こんなにまで恋しくなるものだろうか。野獣としか思えない行為を、

彼女の感情の混乱を無視したように振舞つた男でありながら、今、こうして深い眠りに入っているのを見てみると、丸で遠い処を歩いてゆく赤の他人のような気がして来て、何としても、このまゝ眠らせておくには、あまりにも儂い悲哀が感じられてならないのだつた。

返事はなく、幸太郎の呼吸には少しの乱れもない。

もう何時頃だろうか。

宿へ着いたのは九時過ぎだつた。入浴、食事、それから人の賑う城崎温泉の街を、山裾の附近まで散歩した。

涇流に架せられた橋。柳の並木、それに続く二層三層の温泉宿。

円山川の支流を挟んだ和洋とり／＼の建築街を抜けると、よく樹の茂つた松林に出た。

「ほんとに君が来て呉れるとは思わなかつたよ。」

「意外だつたの?」

さすがに、この辺りまで来ると、人影は

なく、宵の街の騒音が、かすかに響いて来る程の静けさであつた。

終夜燈の光の届かない窪地まで来ると、幸太郎は立止つて正子を真正面から抱擁した。

正子は、不安な眼を瞬きながら「会いたかつたのよ。」

と、云つた。心に思っている事の精一杯の表現であつた。顔をなせるような男の呼吸と背に廻された腕の力は、正子に男への（恐怖）を抱かせはしたが……。

（三ヶ月間もの間、思いつめていた人だもの）愛情の強さを、自分ながら驚く程崇高に考えていただけに

「あなたに奥さんのある事を知つた時、泣いてしまつたわ。」

いゝながら、ほんとに再び眼頭が熱くなつた。

男は無言だつた。その顔がぐつと彼女の顔に落ちかゝつて来た。瞬間、彼女は眼を閉ぢた。唇の上に、べつたりとした温いものが迫り、それが幸太郎の唇であると分つた時、

（これが接吻というものののだ！）

映画で見たそんなシーンが頭をかすめ、同時に男の吸引力を唇に感ずれば感ずる程彼女はちつとしていられない不可解な焦りを覚えた。全身がかつかつとほてるようである。

人の足音がした。

幸太郎がさつと離れると、彼女は夢からさめたように、その後について歩いた。

新婚の宿ではないが

大谿川の流れには、先程と同じ様に、月影を受けた柳の影が踊つていたが、地藏湯の辺りは夜がふけたせいか、ぐつと人足が減つていた。

三国屋の二階の、通りに面した部屋に戻ると、もう食卓は片附けられ、眼の覚めるような色の蒲団が、白い掛布を覗かせて敷かれていた。枕が二つ並び、枕許には水瓶と煙草盆が置かれ、それらを取巻くように金屏風が立てゝあつた。

新婚の客——宿の女中は、そう思つたらしかつた。

正子は、ふるえた。

幸太郎と夜を共にする事の意味が、この時になつて初めて胸に迫つて来たのである。金屏風に手を掛けて立止つたまゝ、彼女は一步も中へ入ろうとはしなかつた。「正ちゃん、どうしたんだ？これで好いんだよ。」

幸太郎は彼女に振返つてそらいうと、衣桁にタオルを掛け、乱れ籠にドテラを脱ぎ捨てると、さつさと、蒲団にもぐつてしまつた。

「ねえ、お願いがあるわ。」

枕許に坐つた正子が

「もう一つ床を敷いて貰つて下さいな。」

「はつはつはつは、何だそんな事か。よしよし頼んであげよう。怖いのか？僕が？」

彼女は幸太郎の顔を見つめながら、首を横に振つた。

丸顔の、きちんと帯を結んだ女中が、身軽に蒲団を敷き、愛想よく出て行くと、正子は金屏風の陰へ廻つてドテラの紐を解いた。

動悸が鳴つた。

幸太郎に会う事の出来た喜びは、いつの間にか烈しい不安に變つていた。

正子は十九才だつた。雪国に育つたせいか抜ける程色は白く、髪は少し趣味を帯びていたが、それは却つて整い過ぎた顔の輪廓に妖しい程の趣きを添えるようで、濃い睫毛や、二重瞼の下のうるんだ瞳は、その色の白さに調和して、丁度、雪の下に咲く梅の花のような、清楚な美しさを誰の眼にも感じさせた。

新制中学に通つてゐる頃から、正子は女教師の薫陶を受けて、俳句と詩に興味以上の憧憬を持つようになつていたが、卒業して勤めを持つようになつても、この気持は消えなかつた。そして、この北但地方の、そらいつた趣味を持つ人々が作つてゐる雑誌「新山脈」の会員になつた。雑誌は、俳句と詩の研究を主目的としたものであつたが、その巻末に、「青い虹の懸る部屋」という連載小説が毎号掲載されていて、彼女は、その美しい文章と、ロマン的な物語から、つい小説への趣味を抱くようになった。この作者が、幸太郎だつた。秋の総会に初めて出席した彼女は、その席で幸太郎と会つたのである。

「地方文学の自主的発展について」と題する三十分の熱弁を、幸太郎は顔を紅潮させながらしやべつた。正子には、内

容に呑み込めない点が多かつたが、その情熱の烈しさに、深く惹かれた。

散会後の帰途、女性連の間では、幸太郎の噂で持ち切りだつた。

「あの人、きつと立派な作家になるわ。」

「幾つぐらいか知ら。」

「三十前よ、きつと。それくらい……」

「総会や、胸に燃えたる、火一つ。ふつつふつつ。」

その日から、正子は夜毎に小説を書くようになった。世の中を爪垢程も知らない彼女にとつて、それは無謀以上の無謀だつたけれども、彼女は精魂を傾けて一篇の小説を書き上げると、秘かに幸太郎に送つたのである。原稿をポストに投じた瞬間、彼女は、この小説の一枚——を、総て幸太郎に対する自分の（恋心）が書かせたものである事を、はつきりと自覚したものだつた。その幸太郎からの返事で、彼女は、玄武洞駅で彼と落ち合つたのである。

嫂の初夜

月が雲に隠れたのか、部屋の中が真闇になつて来ると、間もなく街燈のぼんやりした反映が、障子を明るくさせている。

静かだつた。

もう表を通る人の足音もない。

「幸太郎さん。」

再び、正子は呼んでみた。けれども幸太郎はぐつすり寝込んでしまつた。けれども（よく眠つてゐる。もう私の事など、忘れ果てゝしまつてゐるのではないか。）

彼女の心を占めていた後悔は、云い知れない悲しさに変つていた。

恋というものを崇高に考え、小さな胸に納めた愛の心を、もつともつと美しいものに保つていたかつたのに、この美しい夢は想像もしなかつたような、野獸の行為で、目茶苦茶になつてしまつたのではないか。

肉体の一部に、幸太郎から受けた疼痛は未だ続いている。この疼痛の続く限り、仲々眠れそうに思えなかつた。

彼女はしきりに父の事を思つた。兄の事を思つた。不思議と姉や母の事は頭に浮んで来ないのだつた。

兄の事を思いつくと同時に、彼女は今朝家を出る前に、

「今日遅くなつたら、お友達の家泊るかも知れんけれど……」

そういつた時に、驚いたような顔で彼女を見つめた兄の、射るような眼が浮び上つて来た。

「そうか、そりや泊つても構わんけれど……お前も、もう一人前の女なんだぞ。いゝか。」

そりいつて、ぢろりと冷やかな眼で妻の顔を眺めてから、更に語気を強めていつたのだ。



「わしはお前のする事に干渉はせん。けれども心得とけ、女の一生の不幸という奴はお前位の時の心掛け一つで、決るんだぞ。いゝか。」

それは、正子によりも、彼の妻にいつているといった風な口吻であつた。

嫂が顔色を変えて眼を伏せたのも、不気味な印象をもつて蘇えつて来る。そういえば、嫂は四年前に兄の許へ嫁いで来たのだが、それ以来、一度も明るい表情をしてい

た事はない。二言目には、泣いているようだつた。

そこまで思い出してみると、ひよいと、四年前の、訳の分らなかつた出来事を思い出した。

兄の結婚式の夜だつた。お下髪、まだ少女だつた正子は、新しい姉が出来ると知つたゞけの、嬉しいような変な気持で、台所や裏庭でごろ／＼していたのだつたが、夕方花嫁さんが自動車でやつて来て、座敷で結婚式が始まると、紋附を着た兄が、いつもと異つたような顔で坐つてゐるのを、納戸から眺めていたが、その内に眠くなつて、そのまゝうたゝ寝をしたのだつた。

どれ程眠つたのか、彼女には分らなかつたが、ふと誰かに肩を揺られたやうで眼を覚ますと、新しい寝衣を着たまゝの兄が、真蒼な顔で

「正子！お父さんを、此処へ呼んで来てお呉れ！」

声は低かつたが、烈しい語気だつた。彼女がはぢかれたやうに立上つて襖を開けると

「馬鹿！その部屋やない。座敷だ！」

いわれて慌てゝ襖を開けたが、その瞬間的な視野の中に、正子は、新しい蒲団の上で、先刻の花嫁が、いつの間にか真赤な襦袢のまゝ前かゞみになつて、肩をふるわせて泣いていたのを発見したのだつた。

意味が分らなかつた。

狼狽して座敷へ駆け込むと、座敷では、ずらりと三方に人々が並んで、夫々漆塗りの膳の前に、盛んに酒を呑んでいる最中だ

つた。

「お父さん、兄さんが呼びなかつとる。」

父の脊後に廻つて、そう呼ぶと、酒で真赤になつていた父は、驚いたやうに立上つた。

正子はおづ／＼と父について納戸に帰ると、兄は、さっきのやうに呆然として立つていた。

「お父つさん、結婚を取止めにしてお呉れ！」

「なにっ！」

父が、どなつた。

「うん、止めてお呉れ。あの嫁さんに帰つて貰つてお呉れ！」

「馬鹿っ！何を云うとる。どうしたんだ！」

父の手が、袴の折目を握んだ。

「父つさん！あの女は男を知つとる。娘やなかつたのや！」

「えっ！」

正子には、何の事だか分らなかつた。恐いものゝやうに、父と兄との挙動を、部屋の片隅で小さくなつて、眺めていた。

やがて、父がどんだん音を立てゝ出て行つたかと思つと、暫くして、同じやうな年配の、やはり紋附を着た男と一緒に部屋へ入つて来た。それが、花嫁の父であつた事を、後で知つた。

父から、二言三言何かを聞くと、その男はさつと顔色を変えて、先刻正子が開けた部屋の襖を荒々しく開けると

「おい！」

声をかけるのも、もどかしそうに入つて

行つた。間もなく母が来た。姉が来た。座敷で酒を呑んでいた親類の連中が、何事かといった顔で入つて来た。納戸は忽ち一杯になつてしまつた。

その中へ、赤い襦袢一枚の花嫁が、その父親の手で襟首を掴まれて、引きずられるように投げ出されたのだ。

「いえつ！おい、云えッ！親の顔に泥を塗るくさつて！やい、一体相手は何処の誰だ！何兵衛だつ！」

花嫁は、畳に身を伏せたまま泣き叫ぶだけだつた。

「云えつ！こら云えつ！云えないのかつ！」

父親の足が、肩を蹴つた。花嫁はどんでん返しに転んだ。前がはだけて裾が分れた「まあ、まあ、」

と、母が止めにかゝつたが

「とぼけくさつて！この売女め！誰と関係してたんだ！死ね！死んでしまえつ！」

更に蹴り上げるのだつた。

「あんまりです。あんまりです……。」

そして、ヒューヒューと咽喉を絞るような声で泣き続けた。正子は恐ろしさに、台所へ抜け出ると、急に渴きを覚えて、お茶をガブ／＼と呑んだ。

情熱の傳説

今、彼女はその時の事を思い出して、みるとその事件を今まで忘れ果てゝいた事自体が、不思議でならないように感じられて来るのだつた。

結婚といえば、女の一生の最も重要な行事なのである。その席上で、あれだけの恥辱を肉親の父から、親類中の者の目の前で加えられた娘の立場——その原因が何にまつたか。

そこに思い当たると、はつとして彼女は心臓が止つたような苦痛を感じた。

呼吸をするのさえ、苦しくなつた。

(非処女！)

それ故に受けた娘の罰であり、どう話が纏つたのかそのまゝ居坐つた一生の不幸の因だつた。とりもなおさず、正子自身がこれから受けなければならぬ、恐ろしい現実ではないのか。

(結婚する資格がなくなつたのだ。)

もう涙は渴き切つていた。いつまでも感傷にふけつてゐる訳にはいかないのだつた。彼女の全身を、未知な恐怖が攻め立てた男に手をふれられた時、何故、飛び出さなかつたのか。「思いつめた人」唯、この気持だけの思ひで、縋つてを任せてしまつたのであろうか。乳首をもまれながら「いやらしい。」

と呟き、そう思ひながら、却つて幸太郎の胸許に飛び込んで行つたのだつた。

「幸太郎さん。」

半身起すようにして、彼女は呼んだ。しかし幸太郎は相変らず寢息を立てたまゝである。彼女は上半身を這らせるようにして幸太郎の肩を揺つた。

「ウ、ウ……」

やがて、幸太郎は眼を覚ました。

「どうした？」

が、そうなつてみると、何を云つて良いものか、見当がつかないのである。

「わたし……」

それだけを漸く云つただけで、次の刹那彼女が幸太郎の腕の中に抱き込まれていて

「どうしたの？え？正ちゃん。」

「悲しくなつたの……。とても悲しくなつたの。」

精一杯の努力で、それだけ云つていた。

「何が悲しいのかなあ。」

男の手が、彼女の胸を這つて来た。

「厭よ、厭！」

正子は腕から抜け出そうとした。しかし無理だつた。更に強く締めつけられるように、太腿に手が終んで来る。どつとして身の縮む思がした。泣きながら、彼の胸にしがみついて行つた最初の時の気持が、今となつては不可解だつた。

「馬鹿だなあ。今更、逃げたつて！」

その声を耳にして、彼女は初めて、(そらだ、もう何もかも終つてゐるのだ。もう取返しがつくものではない。)

新しい涙が流れそうになつた。きりりと唇をかんだ。

「あなた卑怯よ。」

「卑怯？何うして？」

「だつて」

いゝながら、いぢらしい程乳首が固くなつてゐる事を、彼女は感じていた。

彼女は身をくねらせた。悲しみと恐れを嘲笑するうちに、肉体がかつかつと脈を打つて来る。先程から続いている疼痛の部位に、更にえぐるような刺戟がほしい。――

自分ながら驚異だつた。

彼女は急に大胆になつた。

「ね、奥さんと別れて！」

「えッ？」

「ね、別れて！」

無意識のうちに、正子は紅潮した顔を幸太郎の胸に埋めると、とびつくようにしがみついた。

「その必要はないと思うよ。とても悪いんだ！実家に帰つてゐるけれど、医者も、もう十日も持つまいといつてゐる。」

「まあ、お悪かつたの！」

「永い患いだつた。今日辺り家へ電報が来ているかも知れないな。」

「……」

「分つてゐるんだよ、正ちゃん、僕だつて不良ぢやないからね。」

幸太郎は両手で正子の顔を持ち上げるようにして、その小さな唇に接した。

「君さえ僕で良かつたら、ちゃんと結婚する氣でゐるんだよ。ね、安心してお呉れ」

正子の頬に新しい涙が流れた。

もう恐怖は無かつた。悲哀もない。渦巻く激情が幸太郎を襲つた。

正子は幸太郎の情熱を感じると、眼を閉ぢながら、その伝説を待つ体勢になつてゐた。

温泉宿の夜は深々として更けてゆく。

(おわり)

×

×

×



すみれ夫人 肉体図繪

夏目千代
須磨としゆき

生暖い春の風が、まるで浮気男の掌のようにすみれ夫人の頬と云わず首筋と云わずで廻して、彼女は湯上りの裸体のまゝ、身をまかせる様にとり窓辺に眼をとじていた。

を、わしが無理に横取りして来たんだ……」
金茶の地にすみれの花の駒縫お召を愛妻の肩にのせて悦に入る泉山敬三は、月の半分を東京支社で過して来て、たつた今、小型トランクを下したばかりのところだった
「まあ、素晴らしいわア」
手にとつて美しい笑顔を見せる夫人に、彼はもう旅のつかれも忘れる程満足しながら
「よかつた、よかつた、すみれの氣に入つ

今夜は、水島洋一がそつと彼女のベッド・ルームをノックする約束が出来ているのだ。すみれ夫人は、ふつとこみ上げるような微笑を浮かべて、彼の若い青々とした幹の様な新鮮さを心に描いてみた。

三十過ぎの女の

豊満な肌は、今宵も男の血を求めているように、艶々しく匂つてゐる。

「すみれ! どうだい、この柄は……? お前にはきつと似合うだろうと思つて、新橋のまり千代が買つと云うの

て……」

と、たあいなく腕を廻して彼女のバラ色の唇をふさいでしまふ。

彼にとつて、この美しい夫人は何ものにもかえ難い宝石であり、常にまばゆい光を授けてくれれば、それで満足なのだつた。

宝石は高価に匂うような冷たさが値打ちなのだ。けつして多くの人にこびない、むしろ高慢な美しさが値打ちなのだ、彼、泉山敬三は、すみれ夫人を心の誇りに思い、大切に抱きかゝえ、どんな我儘も、彼女との夜のひとときを想えば、安い代償だと鼻の下を伸ばす人のよさだつた。

東亜レィオン社長であり、大阪本社ビルの中にも、若く美しい女事務員も大勢いるが、すみれ夫人程、臨たけた、魅力のある美しさは無いと、豪華な社長室の安楽椅子に背を持たせながら彼は想う。

「コッコッ」と、遠慮勝ちのノックの音に彼の、美しい幻影は破られた。

「お入り!……」

若い社員の浜崎宏が、四角い背広の肩を正して入つて来た。

「社長、昨日のお話の……」

「あゝ、そう……すっかり忘れとつたよ……えゝと……君、今手があいてるの?」

「はア……」

じやア、一つ面倒だが家へ行つて帯地をとつて来てくれ給え……その時、すみれが自分の好みの絵を頼むだろうから……」

「はア……行つて参ります……」

慇懃に頭を下げて部屋を出て行く浜崎に「あゝ、君、君……わしは今夜、一寸客を



の間の爛れる様な情痴の蔭もない。

二

「ねえ、そこ閉めてエ……」

たて続けに飲んだコニヤツクの酔が、すみれ夫人の裾をあやしく乱して、側のベッド兼用のソファに倒れるように身を投げた

「奥さん！大丈夫ですか……？」

浜崎も、強い洋酒に足をとられながら、身もだえる様にあえいでいる女のくずれた姿態の美しさに思わず息を呑んだ。

「よう……早く、閉めてつたらア……」

「閉めるつて……」

「うん、わからず屋……ドアに鍵をかけるの……」

「カギを……」

社長の東京支社に行っている留守に電話で呼ばれた浜崎宏は、今は完全にすみれ夫人のとりこになっていた。

宣伝部の図案をやっている彼に、自分の訪問着の図案化を頼みたい、云うのが、すみれ夫人の名目だった。

元来酒に弱い彼は、無理に飲まされた洋酒に、若い理性を失つてあぶなく踏みはずしそうになるのを、さつきからじつとこらえていた。

若い男の唇が血のように濡れて腫がねつとりと或る一点をみつめるのを、彼女はチラとながめながら

「苦しいの、帯解いてエ……ねえ、浜崎さん……」

白い手がいきなり、男の手からみつ

て来た。

「もう僕は……失礼します……」

何かこわいものにさわるように、そつと夫人の体をソファの上に起しながら云う男に

「薄情な人ね、貴方つて……女がこんなに苦しんでいるのに……」

又倒れかゝるのを彼はあわて、押え

「奥さん、おひやを差し上げましょうか？」

「……」

「ええ、頂戴！いや……そんなの……口うつしで……」

長いまつ毛がくつきり影を作つて、彫つたように美しい女の顔が目の前にくると、浜崎は、鍵をかけたドアをもう一度振り返り乍ら、思い切つて水をふくみ、彼女のバラ色の唇に持つて行つた。

暖められた水が、彼の口から、すみれ夫人の口の中に完全にうつされ、ごくりと咽喉を鳴らすのと同時に、それは、はげしい接吻にかわつていつた。浜崎はガチガチ歯を鳴らして、夫人の次第に力の加わる腕が彼の背を廻わし、お互いの呼吸の荒くなるのを感じていた。彼女は、いきなり手を伸ばすと、頭の上のスタンドのチェーンを引いた。

もう誰はばからぬ二人だけの世界である彼女は、その薄闇の中で、器用に右手だけで自分の帯を解き初めた。

シルシルと帯の解ける音が、男の官能をそよる。やがて、下締めを解き、長襦袢の伊達メの絹ざわりが、彼の右手を下ろしたあたりにふれる。

「あッ！」

と驚く彼の目の前で、夫人はスルリと一度に着物をぬいだ。浜崎は、痺れるような頭の中で、

「これは夢かも知れない……」

と繰り返しながら、ぬめぬめとした白い絹肌の背に撫でるような視線を投げかけていた。

「ねえ、浜崎さん、貴方、これで女は何回目……？フムム、まさか筆おろしでもないでしょうね……」

失神したようにソファにもたれているのへ

「もう、これきりよ……あとは駄目……社長さんが怒るわよ……」

浜崎は、瞬間にもぎつた、熟れ切つた果実の味を忘れかねていた――。

三

「この塩瀬なんですけど……」

「はア……」

浜崎は、情痴の夢からさめて、あらためてすみれ夫人の気高い程の冷たい美しさをみた。

先夜の人とは別人の如く、全くあの夜の秘密を忘れたかのような冷静な物腰で、彼女はテーブルの上に帯地をひろげ

「是非、画伯にお願いして下さいね」

「叔父は氣むずかしくて、所謂芸術家肌ですから、中々すぐと云うわけには行きませんが……」

「いゝのよ、芸術家なんて云うものは気分的で仕事をやるものですから、何時でも結

「奥さん！社長から伺いましたが、塩瀬の帯に墨絵をお書きになりますそうで……」

「ええ、そうなの……貴方の叔父様が、有名な日本画家ですつてね……K画伯つて本当？……」

女中の運んで来たコーヒーに角砂糖を落しながら

「本当なら描いて頂きたいの……すみれの筆描きを……」

銀のスプーンを動かす白い細い指は、こ

構、気の向いた時で……」

浜崎は、帯地を風呂敷に包みながら、すぐに腰を上げる気にはなれなかつた。

秘密の夜の楽しさが、ソクソクと身内をのたうち廻り、行儀よくテーブルの向うに膝をそろえているすみれ夫人にいきなり飛びかゝつて、がむしやりに着物をはぎ取つて真つ裸にしてやりたい衝動にかられた。

「あのう……社長からお言伝ですが、今夜はお客様をなさるそうで、お帰りが二三時間遅れるとの事でございます……」

これだけ云つて、ごくりと夫人の表情の動きをみた。

「まア、そうですか……それはすみません……」

「そんな事、電話でも云つてよこせばいいのにねえ……」

と、何気なく笑つて

「さア、私もこれから一寸出かけなければ……」

と、案に彼の帰りをうながした。

「奥さん……」

浜崎は、じつと燃えるような瞳を見すえて

「帰れと仰有るんですか？……」

「そうじやないけど……私も用があるし……」

「貴方、まだ何か御用でもお有りなの……」

……」

女の白々しさにかり立てられたように

「奥さん……貴方に用が無くて、僕の方に用があるんです！」

「あら、何ででしょう……？ フムム、貴方に、私何か借りてたかしらねえ……」

「まさか……あの夜のことをお忘れにはな

りますまい」

「あの夜のことで……？」

「とぼけるのはよして下さい」

突然、すみれ夫人は笑い出した。その氣

「貴方つたら……フムム、貴方つたらず

い分忘れん坊ねえ……私より貴方の方が余

つ程忘れっぽいわよ……あの晩、云つたじ

やありませんか、これつきりよ、つて……

あとはダメよ、つて……さ、早くお帰い

なさい……」

「しかし……奥さん！ 貴女は、貴女つて人

は、卑怯だッ！」

「卑怯？」

「卑怯です！ 男の心を弄んで……理性で若

さを押えている一人の男の心に火をつけて

おいて、それで貴女は笑つて逃げて行くん

だ！ 真面目に仕事一途にはげんでいる男を

貴女はずた／＼にしてしまったのだ！」

「まア、お黙りなさいよ！ 私に、あの晩貴

方がされたように可愛がられたのは、浜崎

さん、貴方だけじやアないのよ……フムム

ム、わかつた？……Kさんも……Sさんも

だけど、みんな一度きり。私は、一度可愛

がつた男は、もう二度とは嫌なの……ね、

わかつた？……わかつたらお帰り……」

すみれ夫人は、立ち上つて呼鈴を押すと

しとやかに

「叔父様によろしくお願いして下さいまし

ね」

入つて来た女中と入れ替つて廊下に出な

がら

「ねえや、お客様のお帰りだよ」と、軽い

保存され城にハツバエル
貞操の鉄の帯
(前 面)



此の貞操帯は優秀なる貞操 上部には細工された鉄の帯が しては嚴重に鉄の板が前門を 保全器であると同時に立派な 附いている。

一つの芸術品である。二枚の 鋼鉄からなり、彫刻された花 長い刻み目の隙孔があつて用 鳥の模様の裝飾があり、底は 二枚とも繋ぎ合わされている してあるが、男性の攻撃に對 最上の武器である。

スリッパの音を残して消えていった。

四

眼を細めて、なめる様に愛撫してくれる

夫の肉体はすでに初老に入つていた。あら

ゆる技巧を施して妻を満足させようとつと

めればつとめる程、肉体の一部はおとろえ

をみせて、夜毎に美しい夫人のいらだたし

さを目のあたりにみるのだつた。

美しい宝石は我が手中にありながら……

彼は夫人にかくれてホルモン注射を打ち、

うなぎの生肝を食ひ、肝臓の血の垂れる奴

を食べた。

この美しい妻を、泣く程嬉こばせたらど

んなにいいだろうと。

一杯の白ブドウ酒が、ほんのり肌を染め

て、匂うような女の盛りを、嗅ぐように頼

を押しつけ、彼はその唇ばかりを吸つて徒

らに氣ばかりあせつていた。

蘭夜の春の窓辺に瞳を向ければ、春宵価

千金を楽しむ男女の極めて内密なことが今

しもあちこちに営まれているにちがいない

と、すみれ夫人は、悩まし気なそのかすか

な音を聞く想いがした。

彼女は、絹のバジャマも身につけず、三

面鏡の前に腰を下ろし、ざわ／＼と云い知

れぬ楽しさが心をよぎるのを覚えるのだつ

た。

丹念にマニキュアした紅い爪、ピウラ

いでそらした長いまつ毛、今宵の客を迎え

るにふさわしい準備は終つた。

今年の始めに東亜レィオンに入社したば

かりのまだ青年と云うより、紅顔の美少年

と云つた方がびつたりする水島洋一を一目

見た瞬間、すみれ夫人の肉体は舌なめずり

を始めた。もの云う度にまるで生娘かなんかの様にぽつと首筋まで赫くする。

切れ長のどこか蜘蛛二に似た一重瞼の若い皮膚を眼でなでながら、彼女は、夫との房事の不満を幾つかの若い肉体で満して、女王蜂のような自分に満足していた。

三原徹は、すみれ夫人の為に、石ころのようにわけもなく墮落の淵に落ちて行つた。

川村巴は、その爛れる様な愛慾の谷に溺れて、自らの命を断つた。

「前途ある幾人もの若い男を、貴女は自分の慰さみのために……貴女の貪慾な肉体のために目茶々々にされたんだ！愛慾のとりこにしておいて貴女はみんな踏みちらして行くんだ！若いものは気が狂うか、自殺するか、そのどちらかへ転落してゆくんだ！貴女は悪魔だッ！獸慾の鬼だッ！」

と、氣狂いの様にわめいて玄關から突き出されていつた浜崎宏のあの悲愴な科白が耳底からまだ消えやらぬ今宵、又一人の犠牲者が生れるのだ――。

未知の肉体を通して快楽をむさぼる時のすみれ夫人は、女豹のようにらんと燃える瞳で、牙をむいて獲物に向つて躍りかかり、全くの野獸と化してしまふ。

それは「ジギル博士とハイド」以上の二重性格であり、当抵屋間のしとやかで、冷たく美しいすみれ夫人の片鱗すらもうかわれない。

心ゆくまで食いつくしたあとは、淋漓とした血潮をなめずる野獸の満足な笑いを浮べて、今ははじめに転つてゐる（彼女

にとつてはまつたくそうとしか思えない）男の姿態を見下すのだつた。

五

「コッ、コッ」と夜のしじまを破つて小さくノックの音がした。

「ガチッ」と金具の音をさせて、水島洋一の表情を硬くした顔が半びらきのドアからのぞくと、

「あッ！」

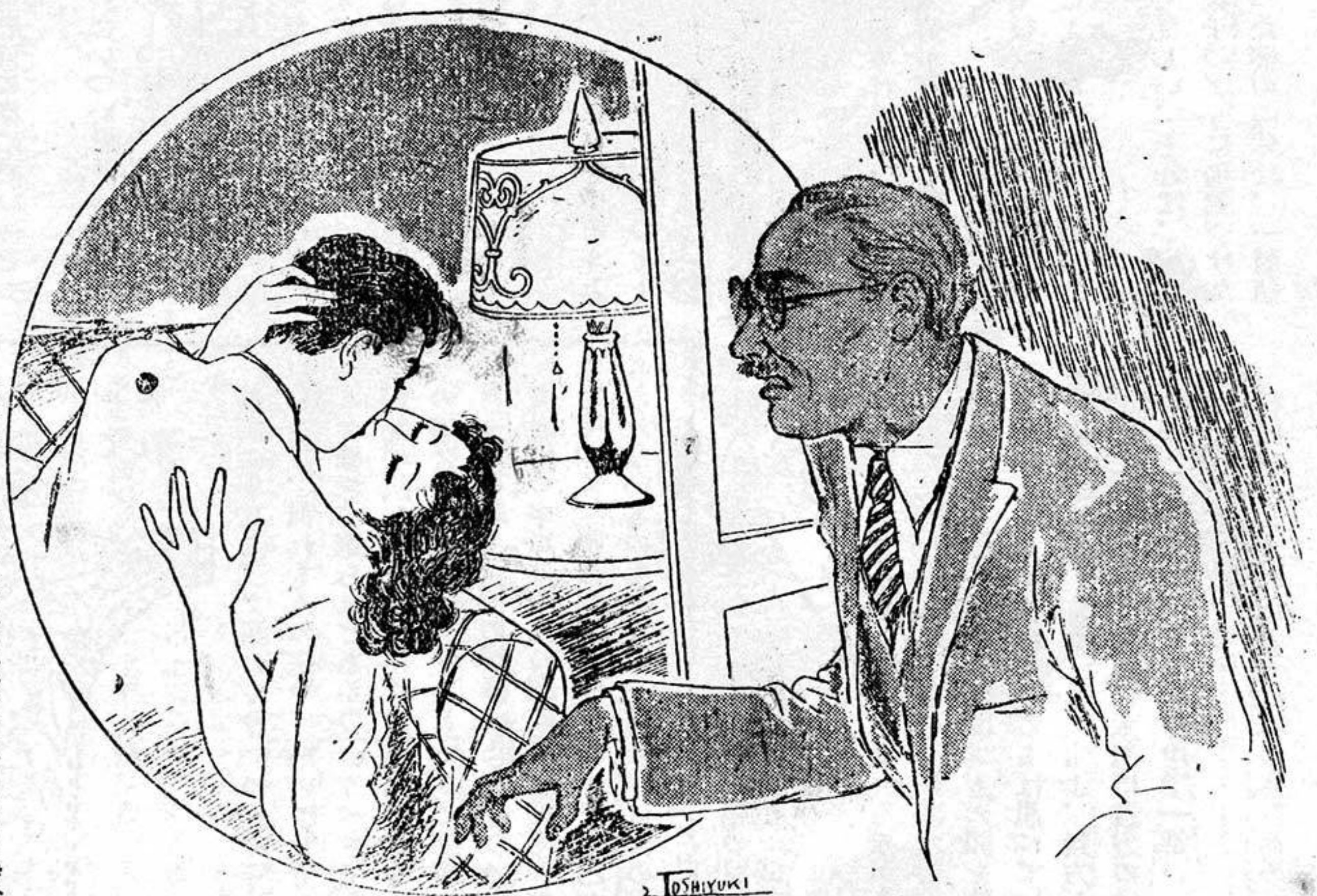
と、彼は思わず声に出した。

すみれ夫人の露わな姿がびつくりする程目と鼻の先にあつたから……。

「ホムム、何をそんなに驚いてるの……？可愛い人！さ、こつち

へ来て青いお酒でもついで頂戴！」

室内は汗ばむ程の暖かさで、グラスを合わせると水島洋一は忽ち強烈なアルコールが血液の中を駆け廻るのを覚えた。男は、常におどろと夫人の裸像から眼をそらすようにしながら



すみれ夫人は、紫色のグラスを突き出し、並々と青いペパーミントをつがせながら

「さ、あんたもおくつろぎになつて……」いきなり夫人の手が迫つて、がむしやりに上着を、ズボンをはぎ取つた。

「あッ、ちよつと！車のエンジンの音がしない？……」

さつと青ざめて水島洋一は力をぬいた。「フムム、嘘よ！憶病ねえ……いじやアないの、見せてやつたら……」

すみれ夫人は、からみつくように言つた「玄關のベルの音かしら？……大丈夫よ、今頃社長は東京で私の夢でも見ているわ」

彼女は、男のなれない手さぐりの動作をおかし氣に笑つて云つた。

その時、突然、音も無くドアが開かれた泉山敏三は一步部屋に足を踏み入れて「ああッ」と、立ちすくんだ。

瞬間にそれが何であるか信じられない氣持で、もつとそばへ近寄つてまじりとみつけなければ当抵判らない氣がした。せわしく眼をしばたき息をつめた。

「これは何だ……？」心のどこかで呻いている声がする。頭のとつぺんから爪先きまで、警鐘のように胸の動悸が打ち始めると、毛細管がふくれ上つて血を吹き出したように、体が真空になつた。

泉山は、目まいを覚え、半ば無意識にドアをボタンとして廊下を突つ走つた。「やつぱり社長だッ！」



異国
情緒

看々明白 吉井川洋

(1)

「大人、いゝところ見ないか」
よれよれの綿服をまとった苦力風の男が呼びかけた。

砂場進吉は街角に立つて、行きかう男女の姿に異国の情緒をあとわつていた。が、こゝに来てもう二ヶ月、馬車の響きと人力車のラッパの音にもそろそろあきて、何か、こゝ変つた刺戟はないものかと考えていた矢先、ふいに横合から呼ばれて、はつと我に返つたほ

どであつた。

「大人、カンカン、ミンバイ」と、苦力風の男はニンニク臭い体を進吉のそばにすりよせる。進吉は、オーバーの襟をかき立てながら、なんだ、カンカンとは看々で見るといふ事じやないか、それぐらいのことは、いくらこの土地の新米だからといつて、と思つたが、

「カンカンつて何だい」と、つい口がすべつてしまつたそれから進吉は、その男のあと

について、繁華街を通り抜け、ごみごみした裏街へ入つて行つた。

表通りの華やかさに比べて、こゝは何といううす穢い事であらう道は真黒なドロドロの泥濘で埋まり鼻でもつまみたいような悪臭が発散する。若し、真夏にでも通つたとしたら窒息するかも知れない男は、いかめしい看板のかかつた質屋の角に来て、進吉の方を、ちよつと振り返り、ついとその横道に入つて行く。これはまた何という狭い事だ。体をまつ直に向

て歩くのがセイいつぱいという広さだ。家の軒と軒がかち合つて、その間にドブ溝があり、そのドブの上に板が一面に敷いてあつてその上が通路になつてゐる。が、その板の上にもドス黒い土が積つて下に敷いてあるのが、板であるのか煉瓦であるのか石畳であるのか判らないほどである。両側の家、といつても、土で練りあげた家は土塀の上に屋根をのせたといった恰好である。その屋根が低くたれさがつて、またしは頭を下げなければならぬ。何処まで行つても同じような道である。右に折れ左に曲り、更にまた右に折れて行く。男はもう振り向きもしない。

進吉は、はじめの好奇心は何処へやら失せて、逃げ出したい心でいつぱいである。が、さてどう逃げたら逃げられるか、いまは来た道さえ見当がつかない。ポケットに突込んだ掌が、いつの間にかねつとりと汗をかいて居る。

ふと、前を歩いて居たあの男が「アーエー」というような奇妙な声を発したそれが、どういふ意味の言葉であるか、進吉にはわからなかつたがふいに、男の前に若い女が立ちふさがつた。髪のかき方、真赤な上衣、縦に赤と青の縞の入つたズボン。一見この街でいますで見て来たものとさして変つたとは思えなかつたが、血の氣のない顔に、太く、長く、まゆ墨をひいて、それがやゝ紫色にひかり、入墨かと思われるほどである。さらに、これも真紅を通り越して、紫がかつた口紅が、これだけは割に形のいい鼻の下で開いて居た。

苦力風の男と、その女とは、二言三言なにか語つて居たが、男はさつさと歩き出す。進吉が女の前を通りすぎるとき、女の手が軽く進吉のオーバーの上から腕を掴ん

だ。

それから進吉は無我夢中であつた。両側に建ち並んだ軒の低いマツチ箱を押しつぶしたような長屋風の家には幾つも入口があつてどの入口にも一人の女が立つていて口々に苦力風の男を呼びつけたさつきのような恰好の女も居ればすつかり浮世の風をすいつくしたような老婆。いや、それよりも進吉が奇異に感じたことは、十五六いや、もつと若いかも知れない。女になりきつていない少女も居るそれらの女が進吉の行くてを塞いで、

「大人。大人」

と呼びオーバーの袖をつかむものもあれば帽子を取ろうとする者もあつた。

内地でずいぶん放埒な生活をした進吉も、その女達の室の中をちらつと見たとき、進吉のあのむら／＼とした心も起らず食指も動かない。それは、その室というよりも物置といつた二坪ほどの建物の中にあまりにも穢らしいためであつたかも知れない。

い。

幾つものそうした家と家の軒をくぐり、女と女のあいだをおよいだ進吉が案内されたのは露路の行きづまりかと思われる一軒のいままで見た所よりずっと大きくコの字型になつた建物の正面の立派な待合室風な所であつた。

中央には円い大きなテーブルが置いてあり、その周囲には立派な昔日本の貴人が腰掛けたようなせの高い椅子が取りまいていた。室の壁には種々様々な絵が、紫と黄赤と青といった具合にはつきりと塗りつけてあつた。日本画に見るような、ボカシとかニジマスとかいつた調子は少しもなく、どこまでもその色そのものの原色を塗

りつけた図柄である。

そこで、今まで案内して来た男は何処へともなく立消えて、そのかわりに、線の細いのつぺりした顔の男が進吉の前に立つた。

「大人、見るよろしい」

と男は言つて、はじめて値段の交渉にかかつた。

案外に安いその金を払つた進吉は、さてこれから何がはじまるのか、まだあの最初に街角で話しかけられた「カンカン、ミンバイ」の言葉と、いま男の言つた言葉の意味がはつきりと掴めない。

(2)

暗い室。この室のみは夜の世界であつた。窓一つない室の四周は頑丈な壁で仕切られ、

いま入つた男の顔さえ判然としないほどの闇であつた。

「こゝはいつたい何処だ」

と、進吉があやしげな支那語でしやべりかけたとき、

「ブシン、ブシン」

と男は、進吉の口を塞ごうとした。いけな。黙つとれというのであろう。

進吉はその真暗な室

の中にしばらく佇んで居るとわずかに明りがさして来た。目が馴れたせいであらうかと思つたとき、

その男が、片側の壁に手を触れたと、そこから、細い矢が飛んで来たかのように光が進吉の眼を射た男はしばらくその光の来る小さな穴に顔をおしあて、居たが、進吉のほうを振り向くと無言のまゝ彼をまねいた。進吉は息をこらしておそるおそる自分の眼を持つて行つた。

「うゝむ」

と、危く出る声をのどもとにおさえた進吉の目には、男と女の一条まとわぬ姿が、つい鼻の先にクローズアップされているのだ。

脱ぎすてた着物は乱雑にちらかり、真赤な女の肌膚が裏返しのみ目に映る。

女の艶な瞳が、につと微笑む。

男はそれに応える術もなく緊張しきつた顔で……。

龍は池にありて雲を呼び、風雨

まさに至らんとし、妖艶なる天女は地に下りて、衣をはぎ、あらわなる肉体を襲いくる嵐に托せんとす。男の首にからんだ女の指先のあやしげな指輪がギリリと光る。

人間としての紛飾もなければ制禦する力もない。歓喜と享樂との頂点に至らんとするの瞬間である。

(3)

「大人。クニニヤン、ヨウ？」
さつきの男が進吉の耳もとでさゝやいた。娘が必要かというのである。

進吉はいつの間にか魂を失つたものゝように、またしてもフラフラと男のあとにつづいた。

暗い室を出て、その家の軒を、こんな所に、と思ふ通路を抜けると、二階建のりつばな家に案内された。内地でいえば小料理屋といつた風の建物。もちろん、アテラ独特な建築で、階段を上るにさえ足もとのはずきりしないような薄暗い家の中であつたが……。

進吉は、階段を二三段あがつたところで、あの哀しくすゝり泣くような胡弓の音を聞いた。それは二階の左の方の室からであることがわかつた。彼の行つたのは、それよりずっと右の方の室であつた入つたところに、古めかしいテーブルが一つ。椅子がさし向いに二つあつた。中国特有の青花瓶がそのテーブルの上に載つて、その花瓶の中には赤いカーネーションが一輪しおれていた。

進吉がポケットをさぐつて、シガーレットケースを取り出したとき女が入つてきた。二十二三といつた年恰好。少い髪の毛を頭の上



にかきあつめて結び、その先に真赤なりポンをつけていた。美しいという顔ではないが、どこことなく特徴のある顔だ。女は、進吉の出しかけたシガーに目をつけると、急いで胸にある小さなポケットから硫黄マツチを取り出して、机の隅で、しゅつと燃る。そして椅子



には腰を下ろそうとせず、進吉の顔を覗きこむようにして、につこりと笑った。
「ネ、アンタ」

こんどはやゝ語尾を長くして呼んだ。そうよんで指先にはさんでいたマツチの軸をボーと床の上に投げ捨て、その手を、進吉の首にまきつける。小柄な、眼の鋭い口だけは達者そうな婆さんが入ってきて、進吉から紙幣を受けとるとさつさと出て行く。
女は、そのまゝの姿勢で、うし

ろにある青いカーテンを引いた。そこは、きよう進吉が見て通つたところとほゞ似通つた室であつたが、二坪ほどの室の半分は上間になつて居りその向う側の半分、畳にすれば二畳敷ほどの座には、ほとんどいつばいに夜具がのべられていた。それは、進吉がいまゝで見たものと違つて豪華なものであつた。狭い室の四囲には、女の服と裸体画、いや春秋写真といつた方が適當かもしれない。それらのものが、あくどいほどに進吉の眼に映じた。なかでも、正面にあるのは、ほんものゝ人間の大きさであるばかりでなく、画面に浮び出た肉体美とその背景との調和によつて進吉の目を異様にかがやかせ

た。
女は上衣をとりズボンを脱いだ。うすい桃色の、肌のすき通るような下衣一枚になつたとき進吉は遮二無二背広を脱ぎすてた。
いまはもう、そこが北京の一廊であるといふことも、女から吐き出す息が、ニンニクのような臭いをおびてゐることも忘れたかのうちに……。

日はとつと暮れて青い電燈の光だけが室のなかを照らし出し、あの薄い肌膚さえも捨てた女の肉体が進吉の眼のまえで手の中で躍つてゐる。
女が、ふつと手をはなして「うつゝ、うつゝ」と、含み笑いをし、顔をそらし一箇所を注視した。進吉は、それにつられてその視線を追つた。
「あつ。うゝむ」と思わず叫ぶところであつたがいまの進吉にはその声さえ出なかつた。

いまゝで気にもとめなかつた入口の上には壁いつばいに大きな鏡が横たわつて居り、その中に、自分と女の二人の姿が隅なく映し出されてゐるのだ。

オールバックにかきあげた髪が前に垂れ下り広い額はそのなかにかくれ、精力的な鼻梁の下にたくわえた鬚もその鏡の中ではむしろ滑稽に見えた。柔道でできた全身を掩う肉も皮膚の色も穢い……たゞ穢いものとしかうつらない。

進吉は、こゝろした場所で、こゝろした自分の姿を自らの眼で見、何かこゝろ食べかけたものが、のどの奥につまつたような感じにおそわれた。そしてその姿から目をふせて逃げようとしたとき、更に、異様なものにその目がぶつつかつてしまつた。それは、最初にこの室に入るとき彼の心を奪つたあの正面の裸体画であつた。その画がいまちやうど反対側にあるその鏡に映りその画の中に光る二つの瞳に不思議を感じたのであつた。画はたしかに画であつたがその瞳はまぎれもない生きた人間の、正真正銘の生きた人間の目。その眼がじつと進吉と女との姿に、動作にそゝがれて……が、進吉がその眼を見返した瞬間その眼は消えてポツカリとあいた空洞……。

蒲団をすつぽりと頭からかむつた進吉は、その画のトリックと大鏡のことを考え合せて、最初に案内されて、男女のあの姿をこの眼で見たのもこゝろしたトリックであつたかと思ひ、さらに、自分のあ

られもない姿を、自分が、この眼で見たと同じように人の眼によつて見られたかと思ふと……。しかも、その見る方も見られる方も金銭を支払つて彼等に二重の収益をあげさせてゐるのかと思ふと、人間の浅間しさと、いまいましてとが彼の心を、あの泥濘の道を歩いて来たときのように真黒くドロ／＼にしてしまつた。
女は、立ち上ると、胡弓をとり半裸のままそれをひきはじめた淋しくすゝり泣くように、これがあのさつきの女かと思われるような音色をのせて……。

(おわり)

「急募」

体験談、冒険譚、告白記

左記の要領にて広く読者諸士のスリルに富んだ冒険物語異色ある体験談、珍奇な告白記等を募集致します。
一、枚数は十枚より十五枚位迄。
二、必ず自分の体験したものに限ります。誌上匿名は御自由ですが、時、所ははつきりと御示し下さい。
三、文章の巧拙は問いません。から資料だけでも結構です。
四、発表篇及び佳作には相当謝礼呈します。

編集部

學生の風紀

當今大學生色談義

花 木 實

薄 田 寛 二・画

總べて含めた洗濯賃

京都大学まで歩いて十分程、立命館大学同志社大学へも市電、市バスを利用すれば二十分とはかゝるまい。そんな恰好の距離にある土地だから、銀閣寺附近の「しもたや」には下宿する学生たちが雲集する。然しそれは理由の一部でしかない。

始業の第一時間めに教室へ顔をだす学生など、眺の空の星くらい数えるほどもないのだから、学校までの距離など凡そ問題外としても、「祇園石段下」から「百万遍」を通つて「タカノ」に通じる市電東山線のその東部、なだらかな高台の地の、どこかおっとりした山ノ手ふらの雰囲気、青年の清潔な感情はあこがれて、下宿を探すなら専ら銀閣寺界隈をと、若者達は選びたがる。また、このあたりは読書疲れや、試験勉強に疲労した頭休めの、まんなとした散策に好適な緑地帯。

秋はどここの小路へ入つても、湯上りの女性のよるな木屋のふくいくとした香りが感能を揺さぶり、春は疎水の桜――

満開のその桜の下を、二人の大学生が教科書の包を片手に、どうせ遅刻と決つた大

学の方へぶらぶら歩いている。

春先の埃ぼく吹く風の連想から、一人は汚れたまま部屋への押入れに突つこんであるシャツや寝巻や枕カバーなど思い出し、連れを振り返つて

「僕のところ洗濯物がたまつちまつたんだが、あの洗濯のおばさんに、君れんらくつかか」と聞いた。

もう一人は吹いていた口笛の青い山脈を止め、ちよつとニヤリ笑つた。

「今熊木の所にいるから、奴に逢つたら君の方へまわすよう云つておく」

「はじめて来て貰うんだが、幾ら位お礼はやつたらいいの」

「そうだね。みんな洗濯させて五百円も渡したらいいよ」

「案外高いんだな。そうすると毎日われわれのところを廻つて歩いてるんだから、月一万五千円か。ちよつとした収入になるな考えたものだね」と感心した。

「親切なおばさんさ。散らかし放しの座敷は掃除して呉れる、蒲団や制服のほころびは繕つて呉れる。まるで母親みたいだ。イヤ女房かも知れん」

学校の、春休み、夏休

みに帰省する時、国の母の土産に、半年分の汚れ物をトランクに一杯詰めこんで持つて帰える労がはぶけるので、問うた方の学生は喜んで

「ぢや頼んだよ」と約束した。

友人はその家政婦に直

ぐ伝えて呉れたものとみえて、翌日登校をサボつて屋まで蒲団をかぶつて寝ている枕もとへ、そのおばさんは頭を下げた。

「溝淵はんで貴方どしたんか。おおきに有難うおした。何でも出しておくんなはれ。

洗たくもの出しておくれやしたらあととは明日迄ネンネしててもかましまへんどつせ、オホホ……」

「何だおばさん案外若いんだな」亀の子みたいに蒲団から出した首を廻しながら学生は眩しそうにおばさんを見た。

「そんなことおへん。もうお婆ちゃんどつせ。若い方相手に仕事しておすよつて気は若うおす。したが歳は争えんものどすなあもうあかしまへんえ」



とは言つても、三十七八だろう。五才の男の子と二人暮しの未亡人だというから、ひよつとすると三十を出た許りかも知れない。彼女が動きだすと何でもテキパキと綺麗に片付いてゆく。学生はうつうつしながら、おばさんのその活潑な働きを夢うつつに頼母しく聞いていた。

夕方、「おばさん、晩飯パンにするから買つてきて呉れよ。ついでにおばさんのこの金の中から買つて来たらしい。起きるのめんどくさいから寝て食べるから頼む」無精たらしく財布を投げた。おばさんは持参した赤い裁縫箱をひろげてズボンの裂けたのを縫つていたが、ニコニコと微笑んで立つて出ていった。

驚くして目ざめると、おぼさんがパンに野菜的のバターいためを添えて枕もとへ運んで呉れた。

「貴方の食器棚見たらバターおましたし、こんなもの作りましたえ。鍋は下のお家からの借り物です、パン食するのどしたら副食にこういう栄養ぶつ採らへんかつたらからだに毒です」

おぼさんは自分でもパンを千切り静かに食べた。学生はおぼさんが返えしてきた財布から五百円をぬき、直かで失礼だが、これでもいいのかと渡すと、おぼさん、ちよつと顔赤らめ「はア」とうなづいて、上目使いで学生をちらり見た。それから急いで濡い物を片付け、洗濯物をたたみ、座敷の蒲

団の敷いてない四隅を掃くと一時休んだ。髪へ手をやつて、少し若やいだ動作でおくれ毛を掻き上げたが、うつらうつらと眠つていた学生が突然「ナ、なにをするんだおぼさん」と飛び上つたのは、若い男の独り寝の蒲団の中へ、足から先にするりとすべりこませたのだ。

九時過ぎにおぼさんは帰つて行つた。その後へ昨日連れだつた学生が風呂の戻りだと寄つたのへ

「おいひでえなあ。まさかあんなこと迄させるとは思わなかつたよ。知つていたら早く教えて呉れたらいいんだ。始めはおぼさんの奴色氣がいかと僕さどもをぬかれたよ。よく聞いたら五百円の中にあの分も含まれているそうだから安心したが、あれならわれわれの仲間に需要が多いのは当り前だ。昨日は五百円ちと高いと思つたが極安ぢやないか君。あれである人妊娠したらどうするつもりか知ら」



「男の子を産んだあと卵巣を切り取つたらいいんだ。子宮外妊娠でね。昨日云おうとしたが、驚かしてやりたくてね黙つてしまつたんだ。然し、みんな洗つて五百円だと幾分匂わして云つた筈だよ万更猫が爪を隠すように

隠していたわけではない」二人はそんな問答を交わし、アハハハと笑つた。

据膳は計画的な仕掛

銀閣寺から北一帯は花畑が多い。山中越えで滋賀へでるハイキングの人達は四季咲きの花の色彩に目をおどろかせる。北白川は京都の花どころで、紺がすりの三幅前垂れに姉さん冠りの美しい風俗の花売女が、朝毎ここから京の町の霧の中へ車を引いて下つてゆく。

父が仕事に出たあと母もそうして一日花売に家を出るから留守居は老人か子供がする。Aという大学生が離れを借りたその家は、一人娘に父母の暮しだつたから、留守居は必然的に歳頃の娘さんの役目になつていた。

「明日では遅すぎる」年齢は過ぎて、もう明後日あたりの歳頃に達している男女が二人限り一つ屋根の下にいるのだから話はずみ、だんだん親密さが倍加するのは水の低きにつくのと同じ必然の理法である。

「映画の話もしつくしたわね」

此頃の娘は京都弁など使わない。標準語で巧く話す。そして会話に魅力を持たせるべく立場にくると挿入するその京都弁に、言い難い色氣がにじむのだ。かかる話術の技巧も心得ているのである。

「野球も相当喋つたし」

「小説の話もう飽きたわ」娘は窓外の青空へ目をやつた。「あ、見とおみやす。風船が飛んでゆく。」

きれいやわ」ほつと溜息ついたが「あれも一時ね、つまらん。ネ何かして遊ぼうよ」

「腕相撲、五目ならべ、将棋、睨めっこ」「もつと女の子とするやさしい遊びぢやないと嫌よ」

「姉様遊び、綾とり、お手玉」

「ウフ、子供みたい」

「お医者ごっこ」

「うわつ恥づかし。けれどそれ素敵」

若い二人に新しい扉はあいた。息づまる興奮で無我夢中の幾日。

「ね、母ちゃんら知つとおると違いますやろか。怒られたら怖いえ。叱られへん先に貴方から話して呉れはらしまへん？」

胸を押さえて男の膝ににじり寄つた。

「しかたないな。僕も言い難いけれど、責任問題だから一度は明らかに述べて、結婚の諸否を質疑せんと」と男は不安ががさんだ緊張から、学生らしく堅苦しい言葉で心情を洩らした。

「しかたないなんて貴方、卑怯な言い方やおへんか。なんやら知らへん人が聞きはつたらうちが悪いみたいに響きますしやろ。ええ頼ましまへん」

男は大いに慌てて「いや、君、なにも、僕は、その」と汗を掻き、手で相手の烈火をあふぎ消すように、鼻先でばたばた振つた。

学生は福井県の織物問屋の二男坊であつた。娘の親達もその事は計算に入れ、真面目な学生の氣質とその背後にあるゆたかな資産に安心して、娘一人を学生一人の家へ

留守番に置いて出てたのだ。いわば関係の生じることと前から計算された縁の上を若い男女は歩いていった。だから女の両親に否やは無い。怒り度いのはむしろ男の両親の方であつたが、伴がのぼせているのだから諦めるより仕方なく、学校を卒業するより一年前に盛大な結婚式をあげた。生活費は福井県から送金してくるので、通学しながら新婚生活に入つたのだ。

サラリーマンみたいに靴を下げ、新妻におくられて家を出るが、何のことはない大学へ講義を聞きに通つていのである。

童貞の破瓜師マダム

昔「小笛事件」というのがあつて世を震駭させた。京大農学部門前の「仕舞屋」に下宿していた大学生が、下宿先の母親と情を交わし、その三角関係の清算を、母親の「小笛」が娘を殺し、自らは廊下の梁に縊れて死んだ。如何にも学生町に起りそうな事件だつた。小笛の頸溝が法医学的に見て死後絞めてから梁にぶら下げたらしくそれなら自殺で無く他殺だといふので世は騒いだ。

六大学教授の鑑定で、大論争となり、他殺とする説三、自殺とする説三に別れ、母娘及近所の幼児二人合計四名の殺害の被疑者として下宿していた学生があげられた。結局無罪にはなつたが、犯人に疑せられた学生こそ迷惑な話だつたらう。

そのように年上の女性と大学生の恋の火あそびも多い。

Bの話をしよう。Bは二十でまだ童貞だ

つた。童貞を棄てるチャンスに恵れないのと、単なる臆病から持ち扱い兼っている貧弱な童貞でなく、Bのは清教徒めいた信念の上に堅く身をつつしんでいる清潔な童貞だから尊ばれて良い。

そのBがラグビーの試合を見物にいつたグラウンドで偶然四十年配の美貌の夫人と話しあつた。相手が自分の母にも等しい年齢の人だから堅くなるBも隔てをとつて胸襟を開き夫人に接したから、夫人の方も他の男性と応対するより接近した親しみを覚えたのであろう。その日はそれで別れたが数日後路上で又行きあつた時レコードの話から、そのレコードなら家に有るからお寄りなさい、と云つた。こじんまりした洋風の家の応接室でレコードを聞き、お茶など接待されてBはそののち度び度び遊びに行くようになった。

Bが清教徒めいた肉体純潔論を言いだすと夫人も

「第一印象で一寸変つて人だと睨んでいましたけれど、矢張普通の人と違ふところ有りますのね。私もこんなさつぱりした気性なのでたくさん学生さんも知つていますけれど、貴方みたいな気持の人今時百人に一人位いしか居ませんわ。映画を見ても直ぐ男女の寝室なんか出て来る時代に、肉体の純潔を未来の奥さんのために取つて置

くなんて方、女性に感謝して良いことだわ私も夫との夜の生活が耐えられなくて、別居していますから、貴方と私とよく似た神経質な点があるのね。だから始めからお話が合うわけだつたのよ。夫人は大発見でもあるように手を打つてはしやいだ。が、いづくんぞ知らんその翌日Bは夫人にあつさり童貞を奪われてしまつた。

「落いません、落いません」とBは自分が誘つたのでもないのに、何か女性を冒瀆した恐怖感からこへこ謝つた。

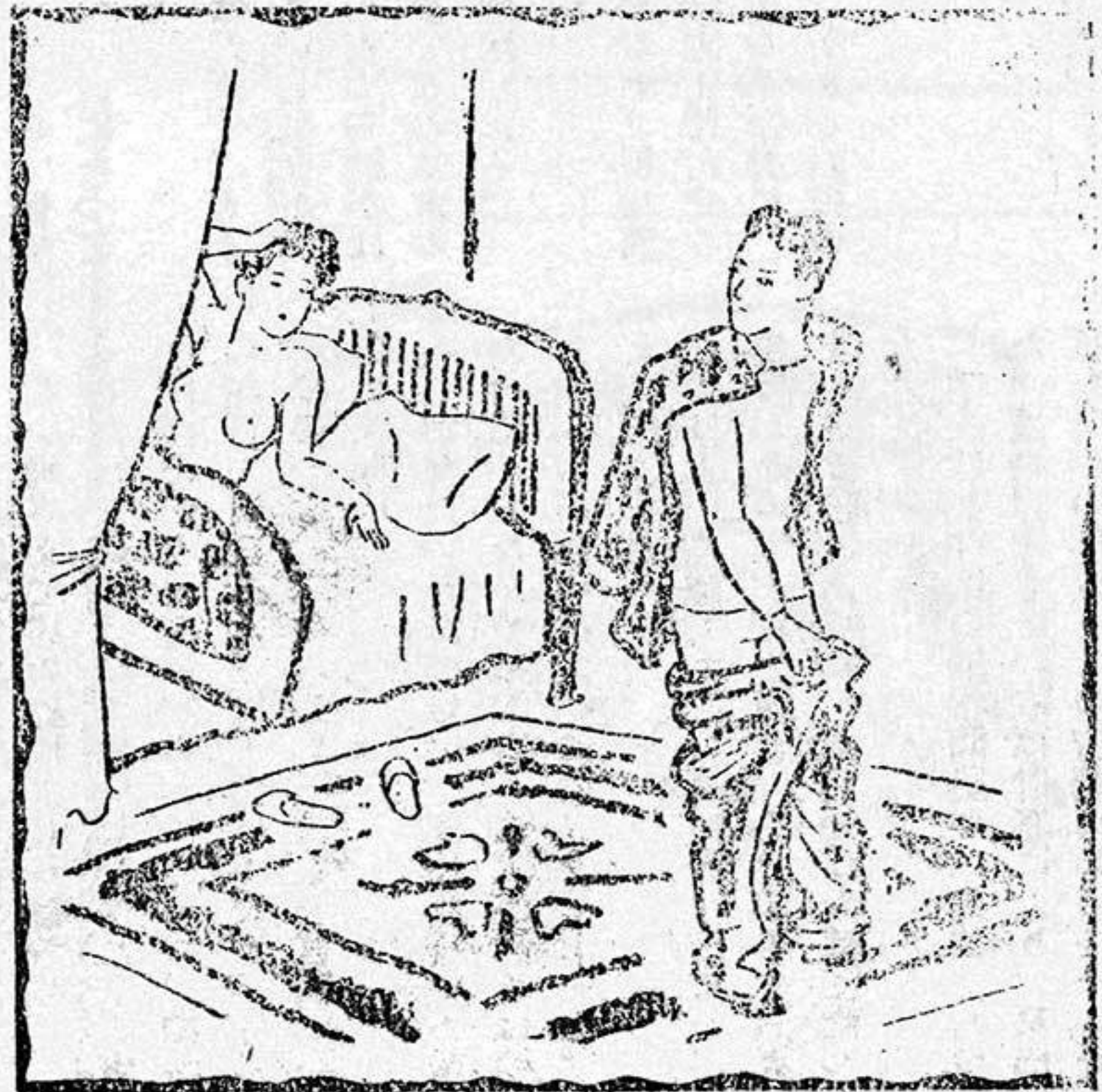
「貴方が謝るなんて反対ですわ。私こそ百千の鞭で打たなければならぬ女です。あんなに性の事を拒否していた筈なのに私つたら貴方にだけは

嫌惡の氣持が起らなかつた。惡魔に魅入られたみたいになんか仕末になつてしまつて、御免なさいBさん。宿命なのよ」

二人は手を取りあつて涙ぐんだ。そしてこんな不倫な關係はこれ限りで忘れよう、その為には逢わぬのが一番いいと冷たく約束して遂に別れた。

Bは犯した過失に悶々として楽しまなかつた。教会へ日参して罪の償いを求めるべく努力したりした。それを聞いたBの友人のCはBのそんなつまらぬ氣苦勞をせせら笑つた。

「よせやい。あのマダムは童貞の破瓜師といふ仇名のある童貞好きさ。青年の純潔に変態的な嗜好を持ち、あの策で幾人の学生



が一緒に寝かされたかわからぬのだ。猫かぶりの好色マダムにかかつてそんなに苦しむなんて馬鹿な男だなあ。俺をしろよ。さばさばしたもんだ。俺だつてあのマダムの温和しいらしい仮面にだまされた被害者の一人さ。最近厚かましくなつて又寝かして呉れと出掛けたら玄關払いを喰つちまつた童貞以外興味をもたぬといふのだからその徹底しているところ、変態的だが意志は強固だ。見上げた女傑さ。エヘン」と真相をバクロしたものだ。

娘を尾行して得たものは

最後に恋を拾う話をする。大学生のD君は行きずりの娘さんを尾行するスリルに快



通な醜態を感じず悪趣味をもつていた。
或日河原町三条から乗ったバスに、黒目勝ちの鼻の高い娘さんを見つけ、午後の閑な時間を消耗するためによき餌物ならんと片唾をのんだ。娘さん、そんなこととは露知らず、今出川でカーヴを切ったバスの窓に、薄く目を閉じて乗客の視線を撥ねかえしている。美しい、とD君は唸った。
百万遍でバスを下りたから、Dも大急ぎで飛び下り、娘のあとをつけると今度は市電に乗換えて「北白川」で下車した。下りたのは娘とDだけだったから彼いささか冷汗掻いたが、娘は気にも止めずさつさとタバコ屋の角からゆるい坂道を上つてゆく。板橋を渡り、ひっそりとした屋敷町の一角

に消えたから慢然とあとをつけていたD君は早速でそのあたりへ出たが、娘さんの花のような姿は無い。耳を澄ますと格子戸の一枚奥の硝子戸が軋んだ音がしたからその家ならんと、胸を下キドキさせてその玄關に近寄った。
D君の間借りしている先は大徳寺の駄菓子屋の二階だからこんな所へ来たのは始めてでまさしく牛に曳かれて善光寺のたぐいである。其処にこの種冒険のスリルとサスペンスがあるわけで、D君ゆうゆうとその玄關の戸を開けて、案内を乞うたのだ。

出て来たのは、あとをつけてきた娘に似ている歳上の女性だから、きつと姉さんである。Dはいいねいに帽子を取つてお辞儀をした。実はバスの中で今お宅へ入った娘さんを見染め此処迄ついてきてしまった。どうか逢わせて欲しい——そんな古風な事を彼は言いはしない。
「実は京都大学の経済科に通学しているのだが今居る下宿は太秦で随分遠イ(巧イ嘘ヲ言ウ)通うのに時間がかかり勉強の間もないのです。この御近所にお部屋を貸して呉れる所ないかと、厚かましいお願いだけれど、此の先の友人にお宅のお噂を聞いたのでお伺い上

りました」と言つた。
「それは、それは」と姉さんは同情したらしく、心当りもある故数日したら又来てご覧なさいと親切に云つて呉れたものだ。
D君こおどろした。今居る駄菓子屋の二階もよいが、こちらへ移れたら申し分ない学生渴望の土地である。然かも美しい姉妹とこりう機縁?から交際が出来るようになるのだから、虎穴に入らずんばの諺は嘘ではなかつた。D君次の訪問の時は、懷中をはたいて、駿河屋の羊かんを包んで持参した。ぬけめがない。その日は座敷へ招じられて、母親も出て挨拶した。益々好調である。

偶然先日娘の話も母の口から洩れ、確かに姉妹らしく、家が間違つてないかと少し不安を感じていた彼も安心した。が、当てにしていた部屋はふさがつてしまつていて「お約束して悪いことしたな」と姉さんも落胆したらしい。D君「何平気ですよ」とウカツに云つた。しまつたと「どうも遠いから困つたものです」慌てて云い直した。
その日は洋傘を置いて帰つた。忘れたふりをしたのである。次に傘を取りに行つた時には妹娘も出御して、端麗な姉妹にかこまれたD君一生懸命座を賑わせ、甚だ好感をあたえた様子である。幸いあとつけられた覚えなどないらしい。D君根が馬鹿正直なたちだから自分から尻尾を掴まれる失言をしてしまつたのだ。

顔の美醜の問題がでて、
「うち乗物に乗ると皆からじろじろ見られるけれど何故かしら」
妹娘がやゝ謙遜に遠い放言をした。今こそ褒めそやして意志表示をする時と許り、D君は口を尖がらせ、
「そうです貴女はきわだつて人目を魅くところが有るんですよ。貴女の居るところだけピカツとかがやいているんです。現に僕もバスの中で貴女を見た時経験があるんです」
「あーらいつかしら。貴方と一緒にたつた時なんて」
「二週間許り前でした。青いセーターに真赤なハーフコート着ていましたつけ。頭のリボンが今日みたいに大きくなく赤ちゃんの手のようなのがちよこんと乗つていました」記憶のいいところを披露した。
「ぢや大丸へいつた時ですわ。うちどこでバス下りた?」
「百万遍で。そして電車で北白川迄来て、お家へお入りになつた」
いかに迂闊なD君と云えどそこ迄云つてドキリとした。言い逃れは出来るとしても真実はそのコースをたどつて大丸帰りの彼女のあとをつけ、彼女の帰宅の直後訪問しているのだから賢明な人なら臭いと思う筈だ。調子につて喋つちまつた失言に赤くなつてドギマギした。矢張純なところのある学生である。辱ずかしくなつてその後訪問は絶つたそらだ。
再度びはめぐつて来ない青春である。学生色談義の種は尽きない。

時代巷談 実説遊女一代



藤田盛治

「云わずと知れたこつちや。照葉が俺に」
「阿呆らし。誰がお前みたいな唐変木に」
「落まんけどなあ、この道だけは格別や。」
色男は辛うてく

「傾城の誓文が当てになるもんか。お前を
トロットさせたのと同じ口説を、毎晩の客
に繰り返してるんや」

「いや、照葉に限ってそんな事ない。傾城
の誓文が当てになるかならんか、お前、八
重桐花魁の話、知ってるか」

「八重桐？」

「ゆうべ照葉から聞いたんや。何でも元祿
の昔、当時の島原で一、二を争った全盛の
花魁や。どうや、聞くか」

京には珍らしく気の早い連中と見えて、
出心の花魁見物も忘れ果てて、二人の男は
トットと四五軒先の縄暖簾をくぐった。

一杯が二杯、二杯が三杯と盃の重なるに
つれて、始めはうる覚えでたどくしかつ
た男の舌が、講釈師のように滑らかになる
題して遊女一代。今も尚、京の島原に伝
わる悲恋の実説である。

一

元祿は五代將軍綱吉の頃、打続く太平が
歳を重ねて、世は愈々爛熟の佳境。

女が衣裳の美を競えば、男は昼夜を忘れ
て色を追う。上下等しく柔弱に流れる世相
とあつてみれば、脂粉なまめかしい遊女の
榮えるのも理の当然であつた。

とりわけ、京都は女の都。島原の里は当
時日本色里の総本家。夜毎に絃歌がさいめ
き、軒を連ねた娼樓の紅い灯が絶える間と

■

島原を出てから三十分、昭和の御代には
ちと相応しからぬ大時代めいた其の行列は
黒山のような群衆の視に見守られて、悠々
と七条通を東へ進む。

京恒例の島原花魁道中——。

大小無数の櫛笄を刺した業々しい髪に、
三寸五寸の厚敷を幾枚ともなく重ねた櫛櫛

をまとい、金糸銀糸の飾りさえ重たげな帯

を胸高に締めた花魁の姿は、錦絵のように
綺麗びやかで物珍らしかった。

わあ凄いと他愛もなく溜息をつき合う
娘の風情があるかと思えば、チエツと舌打

ちをして立去る中年の紳士。現代島原道中
の一点景である。

と、群衆の中から、どいたくと強引に

前へ押し出て来た二人の男。

「ホラ、あの五番目の花魁。ちよつと渋皮
のむけた、姿のえゝの。あれが照葉や」

「日頃はともかく、こうして見ると、大し
たもんやなあ」

「それがなあ、自分の口から云うのも変や
けど、ぞつこん惚れや」

「どつちが、誰に？」

てなかつた。

その島原切つての花魁が八重桐。嬋妍とした美貌と優艶な肢態は、その頃の絵師の間にも嬌名が高かつた。

今と違つて、当時の花魁は極めて格式が高かつた。遊女に階級があつて、下級に至るにつれて芸よりも売色を専らとしたが、少くとも花魁、太夫と名の付く遊女は、本来、素性も賤しからず、多芸多能、媚びを売るのはむしろ副であつた。名妓は容易に人と会わず、心に快とせざれば、千金を積んでも首を縦に振らなかつたと云う。以て彼女等の気概が如何に高かつたかを知ることが出来る。

二

此処は妓樓菱屋の格子の中。折しも遊客を取り逃がした二人の妓が、口惜しさも手伝つて、取り止めもない事を喋り散らした揚句、

「なあ、あの二階の若い御人、今晚で三日も居続け。大丈夫やろか」

「なにが？」

「三日も続けたら持たん筈や」

途端に、色の黒い妓が意味ありげにニツと笑つて、

「腰の立たん年寄りやあるまいし、未だ若い御人。一月が二月遊んだかて、御心配は御無用。嘘やと思つたら、今晚、あの人と寝て御覧」

色の黒い方は笑いもやらず、
「阿呆らし。うちの云うてんのはな、そんな厭らしい事と違ふんや」

「そやから、何が持たんて聞いてるんや」
「——お、か、ね」

「そりや、まあ、そう云えばそうやけど」
「何でも狂言作者やちゆう話やけど、近松西鶴みたいな売れつ子じやあるまいし」

「でもな、八重桐花魁も八重桐花魁や。仮りに島原隨一の太夫と云われる身が、あんな若僧のお名指しに首を縦に振つたのがそもく解せん話や。それに、今日まで三日もしつぱり濡れてる始末」

「何しろ、和泉屋の大旦那が千両積んでも動かなんだ花魁や。そうコロリと男に参る筈もないけどなあ」

三人寄つて姦しいのは女の性とか。物好きな詮索に話の花が咲き始めたら切りがない。

その時、五十がらみの遣り手婆が没面を作つて梯子段を降りて来る。目ざとく見付けた色の白い妓が、

「どうしたんや？ お婆はん」

「どうもこうもない。三日四晩も居続けて結局、お金が御座なく候——呆れ返つて物も云えんわ」

「で——」

「八重桐花魁がな、わちきが其の金スツボリ払つて進ぜやす、つて訳や。焼きが廻つたなかねえ、太夫も。あゝ、勿体ない」

婆の顔が奥へ消えると、漸く妓たちの口も疲れて、通り掛つた酔客の袖を、黄色い声を張り上げて引き始める。

「ねえ、ちよいと。遊んでお行きよ、ねえちよいと」

三

二階へ上つて一曲り、二曲りした突当り張替えたばかりの真白い障子に、行燈の灯がほのかに射して、妖しくもつれる二つの影。

「花魁、落まぬ。初めての客にこんな情けを懸けてくれようとは——常信、身に泌みて有難い。もう、二度とこのような真似はせぬ。二度と此の里へ足を踏み入れぬ」

「二度と、二度と参らぬとお云いかえ？」
「花魁の顔を見ただけで満足の筈だつた。それが、三日三晩も遊び痴れて——余りの果報に目が潰れる」

「目が潰れてはお厭か」

「——」

「いゝや、この八重桐の為に目が潰れてはお厭かと問うて見たまで——。常信どの。

この八重桐は少しは人に知られた花魁。たとえ万金を積まれても、心に染まぬ客は取らぬ太夫でありんす。ぬしはそれを御存じかえ？」

「知りすぎるほど知つてゐる。だからこそ二度と」

「では、ぬしの揚代を、ぬしに代つて取りしきつたわちきの言葉を、何と読まんした三日も枕を並べた此の八重桐の心を、ぬしは何と読まんすかえ？」

「——」

「江戸吉原の小紫太夫は、一目で惚れた白井権八の揚代を、耳を揃えて払つたとか。ぬしも狂言作者と云われるお人。よもや、わちきの心を」

「太夫！」

「このようなあられもない事を、此の八重桐に云わせたお人は、おぬしが始めて。色里に沈めた女の身に、始めて知つた誠の恋」

思いも設けぬ妓の口説に、堪え兼ねるように男が半身を乗り出した。花魁！と叫ぶ声さえ激情に震えて、矢庭に其の手が女の首を抱え込んだ。手繰り寄せられた八重桐の長い衣裳の裾が崩れて、真紅の襦袢が行燈の灯を妖しく吸い取る。

しなやかな女の躰がぐねつて、男の血が其の真白い肌に溶け込んで行つた。何処で流すか新内が、春の夜風をしつとりと縫つて漂う。

四

常信が江戸から京へ来て既に半年。三条河原の芝居役者の座付作者となつてからも早や四月と半。一向に芽が出ないのが、自分ながら情なかつた。

「お前のような能なしに、狂言作者が勤つて堪るか。江戸へ帰つたが身のためだ」
もう、耳に厭の出来るほど聞かされた師匠宗信の叱責であつた。

今日も今日とて、満座の中で、顔を見るなり此の罵言。

「じゃ、此の間の本も駄目でしたか」

「あんなもので芝居が組めるか。あれが狂言か。あれが世話物か」

思わず、涙に据え兼ねて、

「でも師匠、私は力一杯書いた積りです」
「だから、能なしだと云うんだ。いくら力一杯書いたつて、面白くない物は面白くない」

「師匠、あの本の何処が面白くないんです」

「始めから終りまで詰らん。他愛ない素人娘の惚れたの張つたのと、よく洒々書けるもんだ。元祿の人間はな、そんな生つちよろい事には飽き／＼してゐるんだ。それに、色気がない。凄さもない。色恋の本当の沙汰つてものが、お前には根つから判つてないんだ」

骨身に徹する無念さであつた。不覚の涙を人に見られまいと、逃げるようにして戸外へ出る。

師匠の云う通り、自分には一かけらの才能もないのであろうか——自信の喪失が黒雲のような疑惑を呼んで常信を苦しめた。

「真実で筆が震える程の題材を求めて、彼は当てもなく京の町々をさまい歩いた。

彼が八重桐を始めて知つたのは、丁度その頃のことであつた。当世風にふつくと浮き上つた其の顔は、まるで師宣の浮世絵を想わせた。その豊かな頬が嬌然と微笑に崩れ

る時、それは清純さと官能の織りまじつた妖しい魅力であつた。

忽ちにして彼は恋の魔と成り果てた。一目だけと思つていたのが、思いがけなく連日連夜の居続け。天にも昇る心地であつた。狂言への自信の喪失。八重桐を得た恋の喜び。かくて、また、半年の唇がめくれた

五

「近頃どうしたと云うんやろ、えらい荒れてるけど、常信はんと花魁」

「云わずと知れた常信はんの嫉妬や。幾ら惚れたの好いたのと起請文まで交しても、何しろ一方は今をときめく八重桐花魁。常信はなんなんぞ足元にも寄れん大尽が目をつけてるんやもの。好いた妓が他の男に抱かれはすまいかと思うと」

「心配で、夜もおち／＼」

「寝られません」

「そこでや、今晚も、例によつて、抱いて抱かれた後の痴話口論。せんない／＼」他人の痴氣を頭に病む、相も変らぬ妓たちの噂話。それを知つてか知らいでか、当の部屋では、酒にからんだ男の声。

「花魁。狂言作者と云うても、わしは此の通り能のない男。おはつ徳兵衛の曾根崎心中、おつね治兵衛の生玉心中と、近松が矢継早やに世話浄瑠璃を書いて、京大阪を唸らせていると云うのに、この常信は師匠の氣に入る狂言さえ満足に作れぬ」

「だから、だから、どうじゃと？」

「その能なし男が、事もあろうに花魁を独り占めにしたと思ひ込んでゐるのが、我ながら情ない」

弓のように引いた八重桐の細い眉が慄えて握つていた男の手をツイと離す。

「何と、何とお云いやす？」

「能なし男が、事もあろうに——」

終りまで云わせず、後を女が引取つて、「ぬしは、わちきの心を疑つてか」

「——」

「情ないのはこちらの云うこと。熊野牛王の印ついた誓文に、この

指切つて血の判まで押した八重桐の心を、ぬしは、真底、疑つてか？」

「——たえ誓文交したとて、破れる時に破れるのが色恋の沙汰。まして傾城の起請文など」

「常信どの！」

恨みとも怒りともつかぬものが、女の瞳を突走つて、頬の痙攣が痛々しい。

八重桐がいきなりスツクと立ち上つた。

「わちきは、この里で一、二と云われる花魁。その誠を疑う御人は、恋を知る人ではありせん」

長い衣裳を狂わしくさばいて、女が部屋を出ようとする。

「花魁！言葉が過ぎたら許してくれ。わしは、唯、恋さが余つて」

「恋さ余つて憎さが百倍。その憎さで、わちきの誠を疑つてか」

「花魁、待て。待つてくれ、花魁」

恥を忘れて取りすがる常信。それを払つて部屋を出た八重桐が、ビシヤリと容赦なく障子を立てた。

磨き上げた廊下をすべつて行く衣摺れの音が、云い知れぬ惑乱の情を男に与えた。

六

それからと云うもの、八重桐は頭として常信に会わうとしなかつた。

捨てられた！常信の胸が千々に乱れる想いに締め上げられるのであつた。

狂言の筆も捨て、飲みつけぬ酒を無理に流し込んで酔いを買う。激しい絶望が、やがて暗い諦めへと変つて行く日々の苦しさ



切なさであつた。

そうした或る日、菱屋の婢が一通の手紙を彼にもたらした。水莖のしたゝる其の麗簾には、確かに見覚えがあつた。

「常信さま参る。」

今宵、是非とも、菱屋まで御出で下されたく、委細はその折りに。

八重桐

簡単な文言の中に女の意中を読み兼ねて常信は、唯、異常な予感に意気地なく胸を裸わせた。

七

定められた刻限、常信は菱屋の前に立つた。婢の手に引かれて、とある一室へ——彼女は何の故あつて自分を此処へ呼んだのであろうか。解き難い謎を辿つて行く努力が、却つて、幾夜となく褥を重ね合つた八重桐の想い出を甦らせた。そして、その想い出の中を、ひよう／＼と自嘲の風が吹き抜けて行く。ひりひりと骨身にしみる辛さだつた。

静まり返つていた隣の間で、突然、ホッホと笑い崩れる女の声がした。八重桐だ。と、それを押し潰すような男の濁つた声。「なあ、花魁。これで此の和泉屋も本望や太夫を物にしようと思つて、どれだけ通いつめたか分らん」

「その昔、深草の少将は、小野の小町へ百夜通つたと云わすのに」

「そやけど、まあ、こうして晴れてお前を抱けるとなると、この和泉屋、年甲斐もの」



「年甲斐ものう震える胸を、わちきが、さすつて進ぜるわいな——」

サラ／＼と衣裳をさばく音。サラリと帯の解ける気配。男の手が伸びたのか、女の脚がからんだのか、異様な忍び笑いが耳を刺す。そして、後は唯……。

常信の全身がカーツと怒りに燃え沸つた売女！ 襦を蹴つて常信が飛び込んだ。

あわてて床から起き上る和泉屋の姿などは最早や目に入らなかつた。

「八重桐！これは何としたこと」

しどけなく乱れた前を掻き合せて、八重桐が向き直つた。その口元には、ほのかな微笑さえ見せて——。

「わざわざ呼び寄せて、見せてくれようと云うのはこの態か。常信、身に沁みて、し

つかと見た」

「——」

「花魁、何と答える」

「わちきの所作した芝居は上首尾。腹でも立ちやしたか」

「常信はこれでも狂言作者の端くれ。こんな詰らぬ濡れ場は見とうもないわ」

「詰るか詰らぬか、芝居に仕組んで、わちきの名を京に弘めてお呉んなまし惚れた妓を寝取られて、狂いに狂つた男の面体。いい狂言が出来やんすえ」不思議な微笑はなお消えもやらず、八重桐の言葉が続いた。

「近松、西鶴ならいざ知らず、ぬしはまこと能のない御人。出来るとは初手から思わぬが、成るか成らぬか頼んで見たまで、さあさ、人の楽しみの邪魔はせぬもの。早くお帰りなされたが身のため」

おのれ！ 常信の手が我を忘れて八重桐の頬を打つた。足が其の豊満な躰を蹴つて蹴つて蹴りまくつた。

全身を貫く怒りと、破壊のよろこびが——胸に鮮やかだつた。

齒を喰いしばつて苦痛に堪える八重桐がその瞳をじつと猛り狂う常信に注いでいた

八

雲を割つた星影が、淡い光を堀川の水に投げかけていた。

目をつぶつて呑みたいほど苦い酒だつた物も云わず、唯、ガブ／＼と酒をあふり続

ける常信の姿を、居酒屋の親爺が、うさん臭そうにじろく眺める。

酔いが廻るにつれて、激しい怒りが、やがて、舌を噛むような屈辱に変わって行つた生きてこのような恥を受けようとは思わなかつた。この世の終末をさえ祈りたい気持ちであつた。

ボンと肩を叩かれた。師匠の宗信が無然として立つていた。

「師匠！ 口惜しい」

思わず師匠の手を握りしめて、其処へへたり込んでしまった。

「今、菱屋で聞いた。まあ呑め。今晚は何も云わずに呑め。酔つて酔つて酔い潰れた其の奥底に、始めてお前の本当の戯作者魂が現れるんだ」

白粉をべつたりと塗り込んだ酔女が、事情の分らぬまゝに、ナミくつぎ足した杯の遣り場を持て余していた。

「なあ、常信。狂言を書くんだ。骨身に徹説ちゆう話や」

愛慾の港シリーズ

日はもうとつぷりと暮れていた。外が暗くなると共に、部屋のかなかの電燈の光りが明るさを増してきたようだった。土生の港のあちらこちらから、絃歌のさんざめきや媚を含んだ女の嬌声が聞えてくる。電蓄から流れでくる類廢的な流行歌は、ひときわ高く耳につく。玉置康雄は、下宿の二階の畳の上にね転んで、そうした物音を聞き

した其の経緯を芝居に仕組むんだ。今宵の貴重な体験は人の一生に二度とは来ぬ。残酷かも知れん。が、この道はそれほど厳しいものなんだ。よいか、お前が狂言作者として浮び上れるか、上れないか、今がその境目だ。わしの云うことが分るか、常信――」

何処かで、しめやかな尺八の調べ。師匠の言葉を、常信は酔いに濁つた眼を据えてじつと噛みしめていた。

九

明けて元祿八年。

京歌舞伎初春興行の外題が、木の香も新しく、三条河原の小屋に掛つた。

随一の評判は、「近頃傾城廊達引」

「竹田常信つて、聞いたこともない作者やけど、どえらい芝居だつせ」

「何でも、島原の八重桐花魁を仕組んだ実説ちゆう話や」

港々に酒と女に渦まく

獵奇があるスリルがある

ながら、今晚はまた光子のところへでもいつて飲もうか、と考えていた。

とん、とん、とんと、階段を踏む足音がして、下宿の末娘芳子が上つてきた。

「姉さんがね、今晚はお店休むけど飲みにきんさい云つてたわ」

芳子の姉光子は、いまでは料理屋の女将になつていた。

「早くいきんさい、船の人つてお酒が飲みたくつてしょうがないんでしよう」

「芳沢あやめの花魁、よろしうおましたで裸いつきたいような色気があつてなあ。それに、以前の情人に、他人と抱きついてる処を見せるあたり、もう、色氣を通りこして、凄いいこと――」

「でもなあ、あの狂言は、結局、傾城の起請文なんか当てにならないちゆうこつちや。氣を付けや、あんたらも」

噂は噂を生み、評判は次の評判を呼んだ常信作る処の世話物「近頃傾城廊達引」は初春の京を存分に沸き立たせた。

連日大入りの札が出て、狂言作者としての常信の名が、大きく世人の前に浮び上つた。それは、今や、師の宗信の壘を磨るる観さえ呈するに至つた。

十

時を同じうして、堀川に一人の身投げ女の死体が上つた。

八重桐花魁が堀川に身を投げた！ 折り

芳子にそう云われると玉置は足もとを見透かされたよう

「急には起上りかねた。」

「そのかわり早く帰りんさいね。蒲団をし」といたげるから

芳子は、そう云うと、押入れを開けて蒲団を抱え出した。

蒲団を抱える調子に、めくれ上つたのだらう。此方を向いた芳子の水色のスカート

の前は、腿のつけ根までずり上つていた。すんなりと、均育のとれた脚だった。だが芳子は、そんなことには気がつかかなかつたらしく、さつさと、蒲団をしき終り、

も折りとして、噂は忽ち京の町に弘まつた。その懷には、嘗て常信が彼女に与えた一筆の色紙が、びつしよりと水に濡れながらも、固く抱きしめられていたと云う。

打ち日さす宮路の人はみちゆけど

わが想う君は唯一人のみ

八重桐の誓文に偽りはなかつた。男を世に出すために、彼女は恋を捨て、命を懸けた一策を案じた。強いて愛想つかしを装い和泉屋との濡れ場さえ男に見せて、身を以て愛する男に異常な生の題材を提供した。それだけに、常信の狂言は人々の胸を打つ迫力と真実を持つていた。それが大当りに当つた時、誓文の証しを立てるため、彼女は島原全盛と謳われた身を堀川に沈めねばならなかつたのである。

けたましまし鈴の音と共に、瓦版が京の街々を乱れ飛んだ。

その一枚が、折しも二月の風に吹かれてハラハラと堀川に散つて流れた。

「玉置さん花言葉を知っている？」

と、聞いた。

「知らんなあ」

「じゃあ、床の間に飾つていたげたコスモスの花をどうも思わない？」

「コスモスの花――そんなものを飾つてくれたの」

玉置は、首を曲げて床の方をみた。成程花瓶のなかに、紅白のコスモスが、投入にして活けてあつた。彼は、それにはじめて気がついた。むろん、彼が、花言葉で、紅いコスモスは愛情、白いコスモスは純潔

土生

の港

浩魚



を意味することなど、知つていようはずはなかつた。

「まあ、玉置さんたらそんなんだつたの」

芳子は、呆れたというように、そう云うと、くるつと背を向けて、部屋を出ていった。コスモスの花をどうも思わない？というのは、どういふことなんだろう。玉置はいろいろ考えてみたがわからなかつた。

玉置康雄は、船がドック（入港）のため五年振りに因ノ島にきたので、土生町の本通りの、根上という煙草屋の二階に下宿していた。煙草屋の主人は、もう亡くなつていたが、まだ主人が生きていて、船員をし

ていたころ、根上

下山雄

一家は、神戸の中山手に住んでいて、玉置の父が、おなじ船会社の船員だつたり、近所だつたりした関係から玉置の家とは、親戚つきあいした間柄だつた。したがつて、玉置は、下宿とはいつても、家族同様の待遇を受けていたが特に芳

を、待つていたふうだつた。だが、そのころの玉置は、まだ若く余りにうぶだつた、ほのかな恋が燃えるような恋になり、幾夜か一睡もせぬほど思い悩んだが、思うだけで、ついに口には云い出せずに、因ノ島を

子は、部屋の掃除から洗濯に至るまで、なにくれとなく面倒をみてくれた。五年前に、玉置、やはりドックで因島にきたとき、芳子はまだお下げ髪の女学生だつた。それが、今度きてみると、もうすっかり年ごろの娘になつていて、どうかした調子に、眼と眼が合ったときなど、玉置の方がどきり、とさせられることがあつた。年ごろになつた芳子は、五年前の光子をつくりになつていた。

出帆していつてしまった。今度、玉置が因島にきてみると、光子は既に四年前、おなじ土生町の、或る料理屋に嫁いでいつていた。それで、玉置の中断されていた恋が、五年前の光子をつくりになつていた、芳子に振向けられることになつたのは、極めて自然なことだつたが、光子は、嫁いでから三年目に、夫に先立たれいまでは、三つになる男の子を一人抱え、女手一つで亡夫のあとをつぎ、料理屋を経営していた。玉置は、今度因島にきてからたびたびその料理屋に飲みについてたが、彼にとつて、初恋の光子の面影は、また忘れがたいものだつた。

芳子が出ていつたあとの部屋のなかには、洞窟のように虚しかつた。夜が更けていくにつれて、三味線の音や、卑猥な歌声、電蓄の流行歌は、一層喧しくなつていった。夜の因島土生港は、これから淫蕩土生といわれるほどの、情痴図絵を繰り展げようとしているのだ。玉置は、いたたまらなくなり、飛び起きると、外に出ていつた。ところどころに、カフェーのネオン、料理屋の赤い電気看板が明滅し、土生町の本通りは、一本の美しい、花かんざしのように燦めいていた。

玉置は、本通りを横に曲つた。土生の裏街には、思わぬところに横丁や路地が通じていて、ごちやごちやりぬてこんだ家並みのあちらこちらに、紅い行燈をぶら下げた料理屋、ここが、土生の色街になつていた。玉置は、道々、客席に呼ばれてゆくらしい、何人かの芸者に出会つた。土生の芸者

は、二枚鑑札の芸者である。客というのはみな船員に違いない。土生の色街は、造船所に入出入りする船の船員でもてているのだ。

二

光子の経営している料理屋は、連絡船の船着場にほど近い、どことなく酒の香の立ち迷っているような薄暗い路地裏にあつた。底から吊り下つた「喜代吉」という電気看板の燈は消えており、玄關の戸は閉つていた。玉置は、勝手を知つた裏口に廻つた。光子は、丁場の長火鉢の前で、女中を相手に雑談していた。長火鉢の銅壺の湯は、しやん、しやん沸つており、なかには、銚子が二本つけてあつた。

「あんた、もうくるだらう思つて、酒のかんをつけよつたところよ」

光子は、玉置より歳上のような、云い方をした。

「何かいい料理はあるの？」

「あんたのために、ちやんと、ま鯛とかしわをとつといたわ。ま鯛の刺身に、かしわのちりならいいでしょ」

「そりやあいね」

「それじゃあ、わたしの部屋にいつて飲みましよ……あんたたち、酒と料理ができたらわたしの部屋にもつてきてね」

光子は、女中にそう云つて立ち上つた。

光子の部屋は、縁側から廊下伝いの離れだつた。壁にお召の外出着が、長襦袢を重ねたままぶら下つていたり、乱れ籠のなかに、タオル地のねまきが、細帯とともに脱

ぎ捨ててあるのは、なまめかしかつた。片隅には、蒲団がしいてあり、三つになる男の子がねむつてゐる。熱があるのか、頭の上には氷嚢が載せてある。

「坊や、病氣なの？」

「え、ゆうべから熱が出たんですのよ、肺炎じゃないかとびつくりして、今朝お医者さんに診て貰つたら風邪熱だというので安心したわ。それで今日はお休みにしたの。でも何んだか心細くつて、あんたに来て貰つたのよ。」

女中が、かんのついた、酒と料理をもつてきた。

「今晚は、わたしも飲むわ」

光子は、玉置の盃につき、自分のにもついだ。

「さあ、かけつぎ三杯をしましよ」

「光子ちやん、飲むんかい」

「あんたが相手なら飲んでもいいわ。ひよつとすると、飲んで云いたいことがあるかもしれない」

光子は、妖しく眼を光らせた。

「何だい、その飲んで云いたいことつて？」

「まだ飲んでないから云えないわ。さあ、飲んで、飲んで」

光子は、盛んに玉置に向けて酒をさし、自分でもぐいぐい盃をあけた。

「おいおい、そんなに急がなくても秋の夜は長いで」

「酔わせて聞きたいこともあるの」

「そうそう、聞きたいことがある云うから思い出したんだが光子ちやん、コスモスの花

いうのは、どういふことを意味するんだい？」

「コスモスの花がどうしたん？」

「芳ちやんがさ、ぼくの部屋の床の間に、コスモスの花を活けといて、それをどう思

ひかつて云うんだよ」

光子は、「あら」と云つて、呆れたような顔をしたが、次には、「くつ、くつ」と腹を抱えて笑い出してしまつた。

「康雄さんたら困つたものね。芳子はきつとあんたが好きなのよ。花言葉でね、赤い

コスモスは愛情、白いコスモスは純潔を意味するの、だから芳子が、あんたの部屋の

床の間にコスモスを活けておいて、あんたにコスモスの花をどう思つて云つたんなら

とりもなおさず芳子は、あんたに愛情と純潔を捧げますがどう思いますか、と聞いた

ことになるじやあないの」

「そ——うか……」

夜は次第に更けて、もう喧しい電蓄の音は聞えなくなり、三味線の音も低い爪弾き

にかわつてゐた。ボン、ボン、ボン、という発動機船の排気の音が、船着場の方から

寂しげに聞えてくる。女中は、かんのでき

た銚子を、つぎつぎ搬んできたが、すぐに部屋を出ていつた。銚子を七、八本もあけ

玉置は、すつかりいい気持になつてゐた。光子も、大分酔いが廻つたらしく、襟首か

ら真赤になり、膝を崩している。

「大体康雄さんは、勘もにぶいけど意気地もないことよ。それ、あんたが五年前にき

聞きたかつたの」

光子は、仇つぽい眼で、まともに玉置をみた。男を知りつくした女の、大胆な眼ざしである。

「ほんとうは好きだつたさ」

「好きだつたら好きで、なぜあるとき云つてくれなかつたの」

「好きなことから云えなかつたんだよ」

「そんなこと云つてたらちががあかないわ

わたしだつてあるとき、あんたが好きだつたんだよ。それなのにあんたつたら、からき

し意気地がないんだから……わたしあのと

き、あんたの云うことだつたら何でも聞いたわよ。いま考えても、あのころのあんた

の意気地なさは齒がゆいわ」

「そうだつたんか」

「そうだつたんかじやあないわ。男つても

つとはつきりするもんよ」

「実を云えば、いまだつて光子ちやんが、好きだよ」

「もう手遅れだわ。三つにもなる子供を抱えて結婚したら、あんたにも氣の毒だし、

それにわたしもう結婚なんておかしくつて

できないわ——あんたはね、結婚する氣があつて、あんたも好きだつたら、芳ちやん

と結婚してやつてよ。芳ちやんとあんたとだつたら、お母さんも喜んで許してくれる

と思うわ。わたしはね、もう一生自由な体でいたい、自由な体で自由に好きな人と

恋愛したいの。康雄さんとはね、あんたが芳ちやんと結婚しても、恋愛だつたらして

もいいことよ」

光子は、そう云つて、体をすり寄せてき

た。着物の前がはだけて、裾から赤い長襦袢がのぞいた。

「そんなことをしたら、死んだ主人にも悪いし、子供だつて可哀そうじゃないかい」

「可哀そうなのはわたしよ。主人は死んだのが悪いのよ。子供は可愛いいわ、でも女は、子供だけでは満足できないわ。そんなやばなことは云わないでよ」

光子は、そう云うやいなや、矢庭に抱きついて、玉置の唇を、自分ので覆つた。

玉置は、今宵、女体の秘密を、眼のあたりみせつけられたのだつた。痴情から醒めた彼は、深い絶望と悔恨に襲われ、それを紛わすために、飲み残していた銚子を、片端からラッパに飲んだ。

「待つてね、いま蒲団をしくから。今晚はゆつくり泊つてね」

光子は、しどけない姿で立上ると、押入れを開けた。襖のふちが、鴨居の溝にきしつてぎ、ぎ、と、齒の浮くような音をたてた。

眠つていた子供が、眼を醒まし、「うわー」と泣き出した。光子は、蒲団を放り出すと、子供の傍にいつて、

「母ちゃんいるよ。母ちゃんいるから、坊やいい子してねんねしんさいね」と、あやした。

玉置は、索莫とした、よりどころのないような、悲哀を感じ、ふらふらと立上つた

「光ちゃん、今晚もう帰るよ」

「あら、どうして」

光子は、驚いたような表情で振返つた。

「光ちゃん、ここに泊つたりしたら、お

ばさんに変に思われると困るから」

「お母さんには、あしたでもわたしからよく云つとくわ」

「まあ、とに角今晚は帰るよ」

「薄情なひとね、あんたは」と、睨むようにした光子の眼には、怨みがこめられていた。

三

土生の港はもう夜のしじまに眠つていた。

庇の迫り合つた屋根、

と屋根の間に、星が冷

く光つている。玉置は

ふらふらとした足どりで、

帰つていつた。瀬戸内海を渡つてくる夜

風が、酔つた体には快

つた。

下宿の表の戸は閉つ

ていて、なかから鍵が

かかつていた、玉置が

起そうか起すまいかとしばらくためらつて

いると、どこかの柱時計が、鈍く一時をう

つた玉置は、もうどこにもいけそうにはな

いので、仕方なく表の戸を叩いた。

出てきたのは、芳子だつた。いままで床

のなかにいた彼女は、ネルのねまきに、羽

織をはおつていた。

「遅かつたのね。もう泊つてきんさる思つ

て戸を閉めたわ」

「すまん、すまん」

なかに入る調子に、玉置は、敷居につま

づいて、よろよろと、よろめいた。

「危いわ。ずい分飲んだのね」

芳子の柔かな体が、抱きとめた。

張りきつた乳房の感触、甘酸っぱいよう

な処女の体臭は、たつたいま、光子と痴戯

の限りをつくしてきた玉置の情慾を、再び

燃え上らせた。

——芳子は確

かに自分を愛し

ている。自分も

いままで芳子に

秘かな思いを寄

せていた。五年

前おれ

は光子

を愛し

どうだ。あれが五年前の光子の正体だつた

のだ。女なんて結局みなあんなものかもし

れない。遠慮することはない。反つて少年

のように、もじもじと尻ごみばかりしてい

るおれを、芳子も意気地なしと笑っている

かもしれない——

玉置は、芳子の肩に手をかけ、一段一段

と階段を上つていきながらそう考えた。二

階に上つて部屋に入ると、玉置は、暗がり

のなかで、矢庭に芳子を抱きすくめた。は

つ、と驚いたらしい芳子の心臓が、大きく

波打つのが、はつきりわかつた。だが、芳

子も玉置の背に手を廻し、強く抱き締めた

「芳ちゃん、ぼくは君が好きだよ」

「わたしだつて好きだつたわ」

芳子の声は、らわづつてかすれた。



表通りに面した窓の硝子戸から、ほのかに忍びこんでくる街燈の光に照され、芳子は、失神したように眼を閉じ、バラの花舞のような唇を、期待にわななかせていた。

「いけないわ。お母さんにわかるわ」

芳子は、あえぐように云った。

「わかつてもいいよ。おばさんには、ちゃんと結婚するからつて話すよ」

「でも余り長く二階に上つていたら、お母さんが眼を覚したときへんに思うわ」

芳子は、今はのきわになつて、ためらうふうだつた。

芳子は、蒲団で顔を隠し、声を忍んで泣いた。いつまでも泣きやめようとはしなかつた。玉置は、あれほど母のことを気にかけていた芳子が、いつまでも泣きつづけて下りていかぬので、不思議に思つた。彼にはまた、芳子が何故泣くのかもわからなかつた。だが、彼は、じつと芳子の泣声を聞いていると、たまらなく彼女がいとほしく思われた。

「どうして泣くの？」

玉置は、芳子の肩を揺つてみた。

「いいの、何でもないので、放つといてちやうだい」

芳子の声は、いままで耳にしたことのないほど、甘く艶つばい声だつた。

四

玉置は、下宿のおばさんが何となく苦手だつた。一人息子として育てられた彼は、母親から盲愛されて大きくなつた。母親は彼がどんな無理を云つても、「よし、よし」と云つて、まるで飼猫を可愛がるようにして、彼を大きくした。玉置は、子供のころにはそれを何とも感じなかつたが、しかし彼も成長するにつれて、そうした盲愛を何だか不自然に思うようになっていた。

ところが、彼は、両親同志が昔から親戚づきあいしているとはいへ、根は何の縁続きもないはずの下宿のおばさんに反つて母性的なものを感じ、時には本当の母親のように思うことさえあつたのである。おばさんは玉置に向つて滅多に口をきかなかつたが、話をするとなんか論議するような言葉のうちに、何とも云えない愛情を感じられた。またおばさんと視線が合ったときなど、おばさんは穏やかな澄んだ眼をしているけれども、ときどきその眼からは、稲妻の閃きのやうな愛情を感じることがあつた。玉置はそうしたやうな愛のやうな、ほんのりとした愛情で彼を包んでくれるおばさんが、何となく苦手だつたのである。彼は「芳ちゃん」と結婚させて下さい」と、なかなか云えず、今日までそれを切り出すのを延び／＼にしていた。しかし、今晩はどうしてもそれを云わねばならなかつた。彼の乗っている船が、いよいよ出帆し、明日の午後には、この因ノ島を出帆することになつたからだ。

芳子は、店の間で編み物をしていた。玉置が茶の間に入つてゆくと、おばさんは、芳子の春の晴着らしい、紫の綸子ちりめんの着物を縫つていた。

「おや、お帰り、きようは遅かつたね」と、おばさんは顔をあげた。六人もの子を、それぞれに育てあげたおばさんは、ど

りもなく落着いていた。

「ええ、いよいよ明日は出帆するんで、きようは残業をやつたもんだから……」

「予定より早く出ることになつたんだね」

「突貫作業で工事が早くすんだんですよ」

「何かご用？」

「実は折入つてお願いがあるんです」

玉置は顔をこわばらせた。

「どうのこと？」

「芳ちゃんと結婚させていただきたいんです」

玉置がそれだけ云うと、おばさんは、はつとしたやうに真顔になり、玉置の方に向き直つた。今迄見たことのない真剣な顔だつた。

「康雄さん、他のことでできることならとも角、それだけは絶対にいけません」と、哀願するやうに云つた。

「な、なぜだめなんですか、芳ちゃんには誰かもう決つたひとでもあるんですか？」

「決つた話つてないけど、いけません」

「どういふわけですか、ぼくでは不足なんですか、理由を云つて下さい」

「別に康雄さんが不足だからではないけど理由は云えないわ」

玉置は、なぜ芳子との結婚をおばさんが許してくれないのか、おばさんがその理由を明かにすることを拒めば拒むほど知りたくなつた。

「それでは納得がいきません」

玉置は、どこまでも理由を聞こうとするやうに、にじり寄つた。

「その理由はどうしても云えないわ」

おばさんは、きつとした調子で首を振つた。

玉置は、昂奮のため蒼ざめていつた。

「それじゃあおばさん、もうぼくと芳ちゃんが身も心も許し合つた仲でもだめなんですね」

捨てばちで投げつけるやうに云つた。

「え、それはどういう意味？」

おばさんは、はつ、としたやうに狼狽の色をみせた。

「二人はもう相愛のなかで、体の関係さえできてしまつていふということですよ」

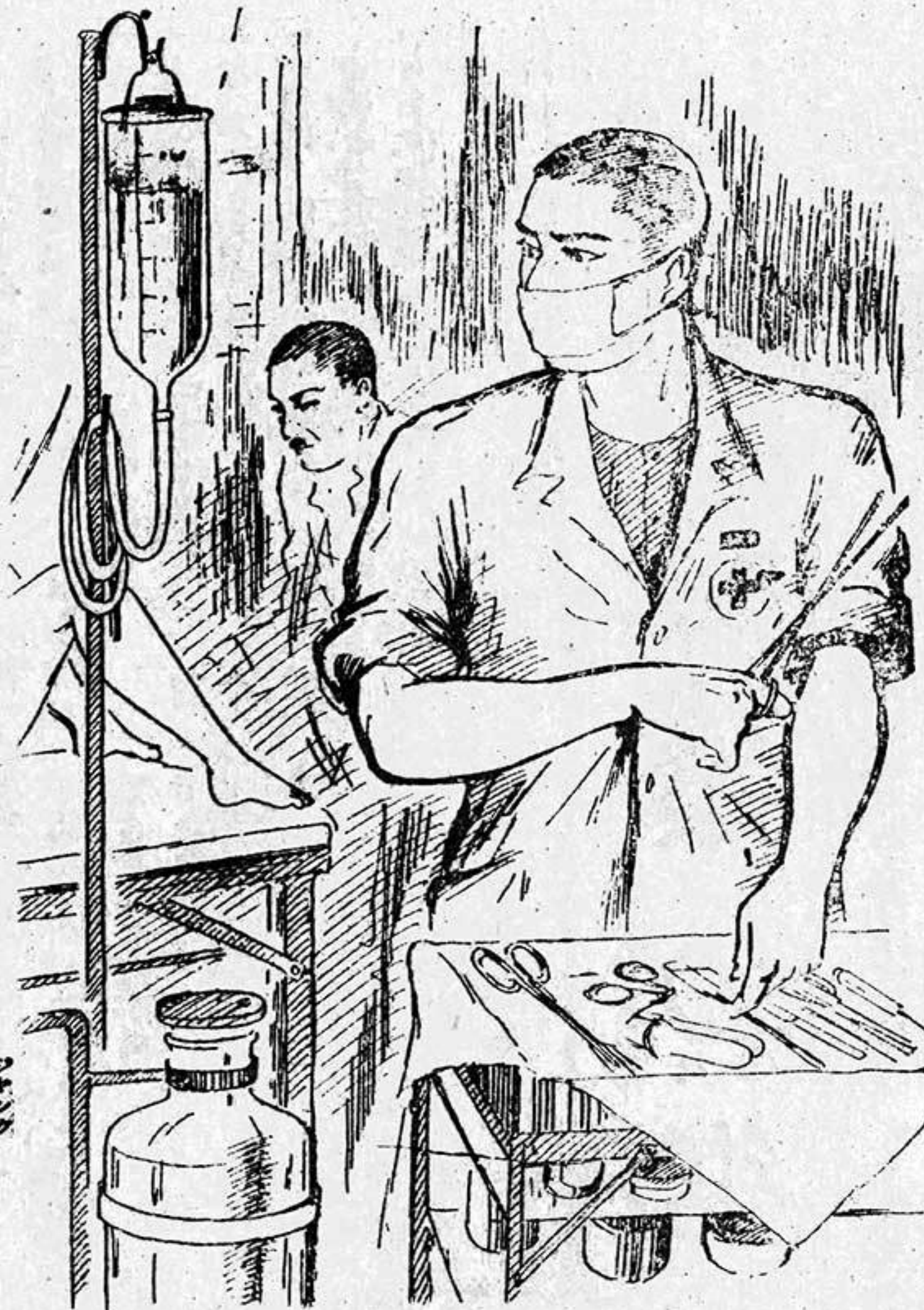
「えつ！」

おばさんの顔から、みるみる血の気がなくなつていつた。

おばさんが愕然としたのも無理はない。玉置康雄は、実はおばさんの実子だつたからだ。つまり玉置は、芳子と光子との兄だつたのだ。根上の主人が生きていて、根上一家がまだ神戸の中山手に住んでいたころ既に三男一女をもうけていた根上夫婦は、おなじ船会社の船員であり、近所ではありして懇意にしていた玉置の両親に、生れ落ちたばかりの康雄を子にやつた。玉置には子供がなく、切に懇望されたからだつた康雄は、生れ落ちると玉置にもらわれてゆき、すぐに玉置の実子として入籍されたから知らないけれども、こんな具合で、本当はおばさんの腹を痛めた子だつたのだ。康雄のあと、根上にはつづいて二年おきに女の子が二人生れた。それが光子と芳子だつたのだ。

しろ はな 白い花びら

夢 野 一 平



大陸の僻村に駐在する日本軍を慕つて
私達の部隊にも慰安婦の一隊が配属さ
れてきた。彼女たちは、その女体をば
つて健氣にも生きてきた。

彼女達

部を露出させるなんて……

は、自分
に与えら
れた、使
命は知つ
ていた。
輸送船の
中で、あ
るいは大
陸の各地
に、転属される戎克ジョウキョクの中で、あらゆる男た
ちの凌辱に堪えてきたのだ。

私の部隊に配属されてきた慰安婦たちは
いつか男ずれのした、男を男とも思わぬ、
男に対してケダモノを見る、訓練がつけら
れていた。

彼女たちの人肉売買いの前日、一応の性
器に対して内診が行われた。一枚のカーテ
ンも吊されぬ、自由の男性たちの前で、恥
を露出させるなんて……
農村出身の中山が、好色にやに下がった
眼で検器の準備をしようと、若い医官が冷た
い銀色の医療具を、無造作に挿入して内部
を眼鏡越しに覗くのだ。
私は彼女たちの氏名と、年令を記入した
帳簿に、医官の言葉を丹念に書きこんで行
くのが、その日の仕事である。
肢体は蒼白く、腰骨は十分に成熟しきつ
て密林が孤独して見られる。みんなが同じ
形に、固い粗末な寝合に、仰向くのである
若鮎もこんな検微に対しては、全く水を
離れきつた魚の如く、意気もなく、時には
呼吸さえ忘れていようだ。
「あら、痛いですよ、もつと丁寧にして
頂戴！」
疲れた肉体の女が、ヒステリックに抗議
の叫びをあげても医官は手心を加えない。
「静かにしろい！」

日本からこの大陸へ——玄海灘を越えてき
た。多くの慰安婦たちを、私は悲しい眼に
眺めた。
孰れもが若く、いずれもが健康で、まだ
穢れを知らぬ瞳には、六月の清流にハッテ
ッとして魚鱗を閃めかす。若鮎の感じがするの
である。

一美しの若鮎

に、転属される戎克ジョウキョクの中で、あらゆる男た
ちの凌辱に堪えてきたのだ。

私の部隊に配属されてきた慰安婦たちは
いつか男ずれのした、男を男とも思わぬ、
男に対してケダモノを見る、訓練がつけら
れていた。

彼女たちの人肉売買いの前日、一応の性
器に対して内診が行われた。一枚のカーテ
ンも吊されぬ、自由の男性たちの前で、恥

これは医官の言葉でなく、準備をやつて
いる中山の、間違つた優越感である。

医官が私の眼に覗いたので、私は異様な
昂奮と好奇に、そつと眼を寄せて見るので
ある。何れも同じ構造の肉体の神秘である
子宮頸管部が、ぐつとはみ出す仕組みに
なつた検器の精能には狂いが無い。これが
発情の発祥地かと想うと、私の好奇心も昂奮
も蒼ざめて行くのである。

彼女たちの去つたあとには、特有の臭氣
がいつまでもたゞよつていた。一名の営業
停止を出したのみで、あとはパスさせたの
だ。

「美しいのがいたな」

中山が消毒液の中で検器と、手を洗いな
がら、こんなことを私に呟いたが、私はさ
き程のグロテスクとも想える神秘があたま
に不愉快にこびりついていたし、彼女たち
の顔の印象には全然記憶がなかつた

二夜のタンゴ

その夜九時を過ぎた頃、慰安所から急患
を知らせてきた。中山は待つていましたと
ばかり、「オイ行つて来るぞ」と弾んだ声
で、注射器などをポケットに入れると、口
笛と共に出かけた。

小半時もしたとき、中山はポンポンと面
を膨らし、不機嫌に帰つてきた。「莫迦に
していらあ！」私はつり込まれたように
「どうした？」と訊ねると、「お前に来てく
れというんだい。全く莫迦にしていらあ」
再び迎いにきたとき、「悪く思ふなよ」

私はこんな軽口の冗談をもらして、その使
いの男に、足元を照らされて慰安所に出か
けた。

「誰れだいわるいの？」

「しげるさんですよ」しげるという女には
私は記憶はなかつた。数字の札を一枚、示
されたような撫然たる感慨である。

彼女の部屋は二階の隅だつた。

「開けてもよい？」私は乱ぼろに固い扉を
ノックで声をかけた。

「這入つてちようだい」病人とも思えぬ、
華やいだ、元氣のある応えである。

「どこが悪いんだい？」私は事務的に、横
になつてゐる女に声をかけた。真赤な長襦
袢一枚に、白襟をのぞかせた、媚態と思
える姿を、正視出来ない私である。

「もう少し優しい声に訊ねてよ」甘えた声
である。

「どこが悪いのかね？」さき程の甘えた声
から、私には郷愁のような感慨が滲み出
いたので、こんどは新派の科白のように、
優しく恋人にでも訊ねる声色に……。

「あゝやつと想ひ出した、あんた青木さん
だつたのね」

「君は？」

私はハット自分の名を呼ばれたことに、
驚きを感じながら、しげるの顔を眺めるの
である。

「忘れて？わたし松島にいた事があるの
よ」

「大阪の？」「えゝ」女は私の腕を引き寄
せると、柔かい乳房のあたりに、しかと抱
きかゝえるのである。

「偶然だつたわ、とても嬉しいわ、わたし
午前中見た時からよく似ていると思つてい
たら……」

「松島の松ヶ鼻あたりかな」

「えゝ富田桜にいたのよ」

「いやはや悪いことは出来ないものだね、
世間は広いようで狭いものだね」

「でもあなたがいて下さつたら、心丈夫だ
わ」

「それで病気というの？」

「嘘！嘘よ、ケ病を使つて青木さんに来て
欲しかつたの」

「それは困るね！」

「だつて、明日のいのちを誰れが知つてい
る？いゝじゃないの、今夜泊つていつて、
わたし休んでいるのだから、無料サービス
するわ」

「困るよ！」

農 村 風 流 譚

母 娘 の 復 讐

庄 司 浩 平

△ 近付く盆踊り

湯のように沸いた田の水に足
をつけて日々辛い苦しい草取り
がつづく。然かしそれも暫くの
辛抱で三番草が終るころになる
と、村人、殊に若者達にとつて
楽しい盆踊が近付いてくる。日
常の仕事が全然たのしみのない

重労働の連続であるだけにこの
盆踊を一日千秋の思いで待ち侘
びるのも無理のないことだつた
伊勢の国、四日市在の一農村
赤い陽が江勢国境、御在所山の
彼方に落ち、うす闇迫る頃にな
ると、一日の疲れも事ともせず
若者達は夕飯もそこそこ、踊り
の練習に鎮守の森につめかけ

る。ドーン、ドーン、若者達の
胸を揺さぶるような太鼓の音が
招くようにとどろき渡る。泥に
汚れた野良氣着をさつぱりした
浴衣に着替え、うちわ片手にす
がく／＼しい気持ちに浸りながら
男女の二組があちこちから現わ
れる。

ところで、この地方の盆踊り
な風紀問題は起らない。が然し
に一つの風習があつた。それは
盆踊りの当夜、青年達が村内の
年頃の娘を招待するのである。
招待に応じて共に踊つた娘は、
慣習を履行したものと見なして
青年達は敬意を表して鄭重に自
宅まで送りとどける。それで当
夜は他地方で往々見かけるよう
な風紀問題は起らない。が然し

「イヤ？」
階下からかけるレコードの夜のタンゴが
抱きついてくるしげると、困惑の私の耳へ
ゆるく流れてきた……。

三 共 同 妻

私はそんなことがあつてから、慰安所の
方へは極力足を向けないようにした。しか
し週一度の検徴には、どうしてもしげるの
顔を見なければならぬ。それが苦痛であ
つた。

別に親しい言葉をかけるでもないが、検
徴の日の彼女の顔には、夢のような希望の
焰が漂つてゐる様な気がした。

他の女たちが、汚れのついた下着で平氣
にいても、しげるはほのかな化粧を施し、
濡れた口紅を塗り、下着もいつも清潔なも
のをつけてくるのである。

これは私ばかりでなしに、若い医官もそ
れと氣ずき好感が持てる口吻をいつか陰話
にきくようになった。

それと共に、医官の彼女に交渉の印鑑が
押されたと聞いたとき、私はやれやれと安
堵の気持ちになると同時に、何か一抹の嫉
妬めいた感情にも流されるのである。

しかし何といつても男の絶対数に比して
彼女らの定数は限定されている。誰れもが
独占を許されない。はかない共同妻であ
る。

しげるは莫迦！と罵つてやりたい程、自
分を買つてくれる男たちに、自分の熱情の
手紙を託してよこすのである。

同じ様に起居する医官にでも、大胆に手

もし当夜、踊りに出なかつたならばその後が大変である。アタをす

るといつて若者達は団結してその慣習不履行の娘を襲い、なぶりものにするのである。

明日に迫つたお盆のその前日

「こんには盆にはお願いします」
「明晩は是非たのみます」
宰領の男を先頭に若者達は娘の居る家々を軒別に頼み廻る。

「さあ、これで大体すんだ訳じやが、残りは川ばたのお美代だけじや」

一通り廻つたところで宰領の男が一同をかえり見た。

「そうじやな、あいつ近頃めつきりおなごらしうなつたな」

「十八やものなあ、」
話しているうちに部落から少しはなれていゝお美代の家に近付いてきた。家の前の流れで噂のお美代が洗いものをしていたおりからの夕陽をその顔にうけて花が咲いたようにかがやいて



視されていた。

「こんにちわ」

宰領が先ず声をかけた。

眼の前に若者達が太勢現われたのに驚いてか、お美代はちらと振り返るなり眼を伏せた。

「あの、踊りに是非頼みますぜ」

「……」
うつむいたまゝだつた。

「お願いします」

「べつびんさん、拝ましてお呉れな」

ひやかし声も交えながら一同がや／＼とそれでも型通り頭を一つ、びよこりと下げて引返した。

△踊りの夜

待かねたうら盆の当夜、とう

いた。袖をきり／＼とたくり上げあらわに見ゆる二の腕うす膚を透かして盛りあがつた胸のあたり、ずつしりと量感の現われている腰のうねり、若者たちの眼はひとしくそれらの部分に注

「ばんのお月さまーあ

ちん、まんまるーう」

声自慢の男の張りあげる音頭につれて人々は、てんでに趣向をこらした服装で踊り狂うのだつた。

村の娘たちは殆ど踊りに参加していたが待望するお美代の姿が遂に最後まで見られなかつた

そのことがひどく若者達の気持ちを刺戟した。失望がやがて憤りに変つた。

「やつ、とうとう来なんだな」

踊りの終つたところで宰領の男は若者達を集め、その処置について協議した。方法は例年の慣習で別に相談する迄もなく、

はつきりしたものであるが、さて実行となると、なか／＼困難である。先づ夜間、本人の外出の機会を促えることである。だ

から本人が夜、外出しなかつたならばそれ迄である。慣習不履行の場合、こんなこらしめを受けるというところが、村人に黙認されていても、方法が方法だけ

に、まさか白鳳決行という訳にも行かないのである。

「あの、あまつちよ、あんまり家を外にせん奴よ……」

竹藏とよばれる男が不意に云つた。

「うん、わしもあれの外出を見かけたことないわい」

宰領もそう云つた。

「なに、氣遣いがない、おらに委せな」

政という男が自信あがりな口をきいた。

「そんなら政、おぬしに委せるぞ」

と云つてから宰領はまた一同に向つて

「けど、みんなもよう氣を付けといてくれ」

と念を押した

「おつと合点、承知の助」

「こりや面白うなつてきたぞ」

若者達は淫らな表情をてんでにその顔に見せてにたりと笑つた。娘を捉えてなぶりものにす、そのこと自体に得もいえぬ好奇とスリルを感じているのである。それも相手がおかめ面ならば兎も角、お美代のようなきりより好しであるとその期待も頗る大きい訳である。

「また、たのしみが出来たわい」

紙を……。医官は人のよい微笑と共に、その託されたラブレターを、私に渡し「よい品物をしているよ」と云うのである。

「青木！殺生やないか、偶には顔ぐらい見せてやれよ」

誰れ彼れの、手紙を託された男たちは、遂に私を責めてくるのである。しかし私は毎日大陸性の淋病なり、横痃なりの、至極悪質の治療をしていて、どうしても性的昂奮を覚えないのだ。

ある日曜日、風頃から飲み出した、鶏料理の強い酒にした／＼か酔を発すると、群衆心理も手伝つて、私としては珍らしく、みんなと慰安所に出かけた。

「しげるさん！青木を連れてきたぞ！」

みんなは門前に、仁王立になると、こんなことを大声に喚き、それぞれの馴染みの女に抱きついて行くのである。

「弱虫！酔わなかつたらこゝへは来られないのね」

「そうだよ、酔つてくるところさ」

「意地悪ね」しげるは、この言葉を半分ほどにした途端、ガッツと私の肩に噛みついた。そのしげるの歯形のついた紫色の内出血が、いつまでも消えなかつた……。

「みんな赤札、それとも青札！」しげるはそんなことを叫ぶように口にして、私のために長時間の白札を、女持の塩瀬の紅の財布から自ら求めてくるのである。

「今日は、わたしもうんと飲まして、うんと暴れてやるわ」

友達はやんやとかつさいした。

「けど、ちつと難かしいの」
「なに、万事はおれにまかせな
つて云うことよ」
そんな会話を交わせながら若
者達の姿は月夜の田圃に消えて
行つた。

△ 闇に散る

盆踊りに出なかつたことを流
石にお美代は気にしていた。彼
女はアダされることを要心して
日暮れになると家にこもり極力
外出しないようにしていた。一
方、宰領の命をうけた政は、お
美代のやしきの周囲を鵜の目、
鷹の目で監視していた。だがい
つこう利き目がなかつた。

そのうち、夏も漸く過ぎて秋
風そよぐ九月も末となつた。お
美代の緊張も少し弛んできた。
他の人々にさいそくされて政は
一層きびしくつけ廻つた。やが
て奸智に長けた政は一計を案じ
た。彼は自分の妹をうまくおと
りに使つて或る夜、お美代を貰
い風呂に連れ出すことに成功し
た。

「どうじやおれの仕事は」
自慢 vari に早速、仲間に連絡
した。

通知を受けた若者達は意気込
んで集合した。貰い風呂の帰途
を待ち伏せしてアダをしようと

いう計画である。宰領は若者達

にそれぞれの分担を命じてやが
て街道の両側の草むらに散つた

目の前に若者達の伏兵がいる
とは露知らず途中の辻で政の妹

に別れたお美代は一丁ばかりは
なれてゐる我が家へ急いだ。生

憎、うす曇りの暗い夜だつた。
そよ吹く風に妙な予感を覚えて

お美代は走つた。不意にすゝき
が大きくゆらいで道の両側から

ばら／＼と数人の人影がおどつ
た。宰領の命令通り竹藏が美代

の後から抱きすくめると、政は
横合いから素早く口を押さえた

つづいて一名は手拭で猿ぐつわ
をはめると、必死に跳ね廻るお

美代を手取り足取りして走り出
した。まだ湯上りのほとぼりが

娘の身体に残つていて脇のあた
りを支えている。政の五官をく

すぐつたく揺すぶつた。政はい
つ迄もこのまゝかついで居たか

つた。
「さあ、こゝへ放り込め」

お美代の身体は、どたりと鈍
い音をたて、水車小屋に転がつ

た。

△ 母娘の反撃

「お美代坊がアダされた」

「水車小屋へかつぎ込まれたと
よう」
「可愛想な」

「踊りに出んのがわるいのじ
や」
とりどりの村人の声だつた。

村のおきて？のこととて取り
立てて問題にならなかつたが、

やはり女達の間では相当大きな
話題だつた。

お美代は当夜、急激なシヨク
を受けたためか、暫らくは臥つ

たまゝだつたが落付きを取り戻
すにつれ、若者達の仕打ちに対

して、むらむらと憤懣の情が昂
じてきた。とりわけ母親は仕事

も手につかぬ程の腹立たしさを
覚えた。

「おのれ、どうするか見てろ」
母親は娘を擁して泣きわめい

た。家には父親がなく母一人娘
一人だつたこ

ともこんな際
余計、みじめ
に思われた。

「どうやら張
本人は政らし
い」

こんな声が
母親の耳に入
つた。若者達

に対する母娘
の憎悪はやが
て政一人に向

けて集中され
た。

「なあ、お美代、アダを返して
やりなよ」
母親は娘に言つた。

「返すつて、いつたい女手でど
うすりやえゝの？」
娘は解せぬ面持ちで尋ねた

「わしや、若い頃、ばあさんに
聞いたことじやが」
そう言つて母親は娘の耳に口

を寄せた。

△ 躍る木綿針

数日後、星月夜の街道にぼつ

かりとお美代の姿が浮いて見え
た。目標は政だつた。宵に町へ

出かけた政を見とゞけて、いま
その帰途を待ち受けているので

ある。虫が鳴いていた。



幾人もの男の

血が我が身に

沁み入つてい

るのかと思ふ

と堪らなかつ

た。過ぐる夜

の出来ごとが

目まいを起さ
んばかりに脳
裡を駆けめぐ
るのである。
はた、と虫
の音が止ん
だ。すたすた
と草履音が聞

四 白い花びら

翌日の午後、しげるは入念とも思える化
粧の、美しい顔を私の前に現わした。誰れ
もない私一人の留守だつた。

「少し診て欲しいわ、変なのよ」

「どこが？」私は不用意に、こんな言葉を
吐いて苦笑した。女が診て欲しいというこ
ころは、こゝでは決つてゐるのじやないか
と――。

しげるは別室の隔離された寝台に、腰を
落すと、美しいぬれたカンナの唇をつき出
してきた。私は昨夜のことは大醉に知らな
いが、甘い接吻をうけるのである。

私はいつもは冷水に溶かす、プロタルゴ
ールの紫の液を、彼女のエチケットに微温
湯に溶かし、作業衣の袖口を、くるくる巻
きつけると、しげるの神秘を覗くのであ
る。

「恥かしいわ！」
この女にも未だ恥羞のこゝろがあつたの
か、私は口だけの恥かしさと思つていたが

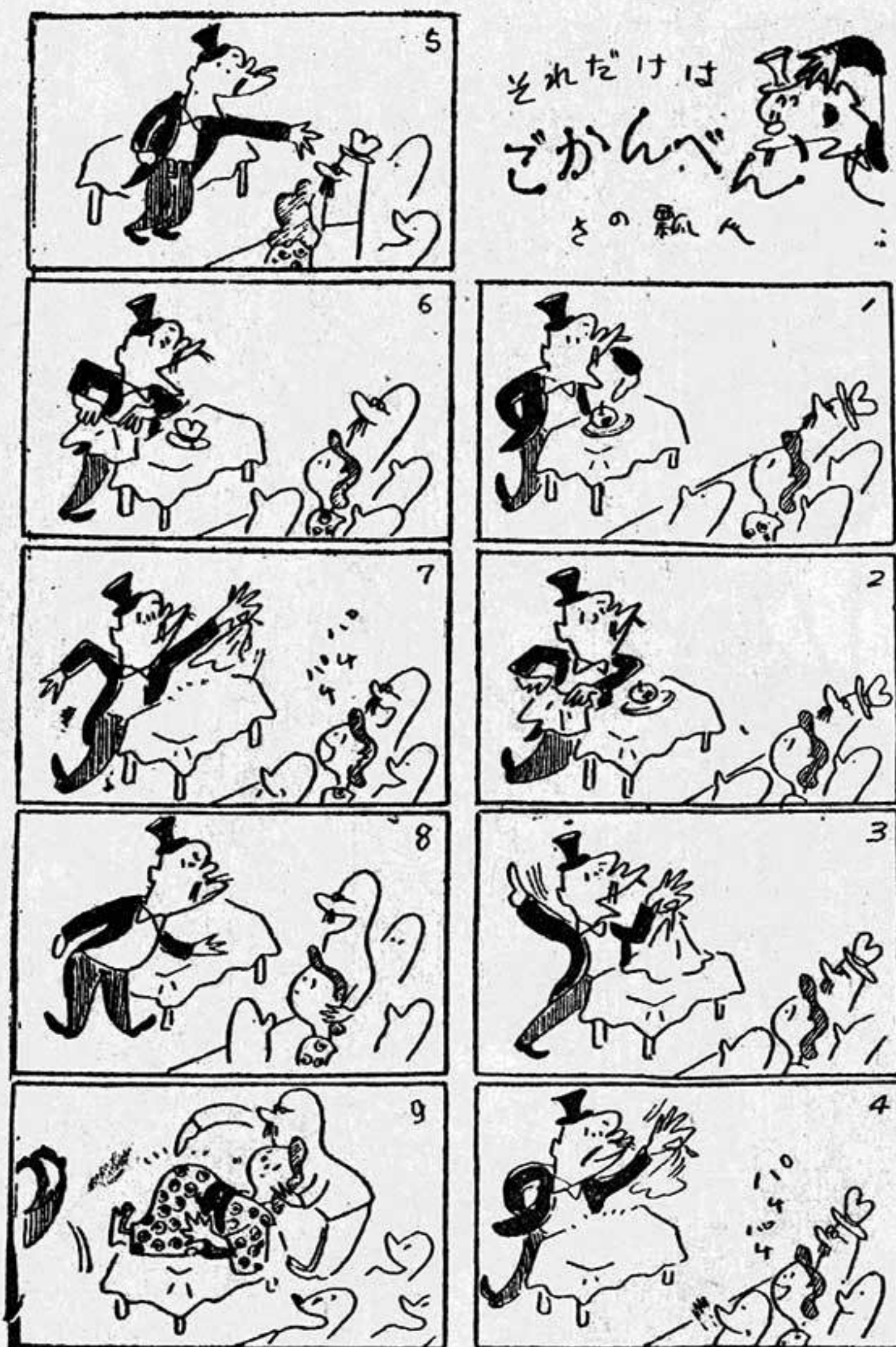
両の耳たぶまで真赤にしていることが、今
更に女の純情が解つてくるのである。

覗いた神秘の奥に、白い花びらが、狭い
部位なので、ピンセットも使えず、そして
その白い花びらが何であるかを……。

私は硼酸水の二プロのもの三〇〇Cの
太い注射器に吸わせると、幾度となく注入
するのである。

しかし……その白い花びらはとれてこない
のだ。

箸の一本を丸味に削る間に相当の時間が



こえてくる。美代はそつと横道に身をひそめ、やがてそれが政であることを見とけると、横道から歩いてきたように見せかけて街道に出た。美代は大仰におどろいた素振りをして立ち止まると政も、不意の美代の出現に面くらつて棒立ちになつた。

「……」
政は複雑な表情を泛べて言葉も出ない様子である。
お美代は黙つてゆつくりと歩き出した。政は惹かれるようににこころげた。

「う、う、」
歓喜に満ち満ちたような政の呻きが狭い小屋にひろがつた瞬間、忽ち
「ぎやうつ」
と、いう鋭い悲鳴に一転し、政は仰向けにのけぞつた。その時不意にまた一個の影が現われて政を袋叩きにした。

我が家へ駆け戻つた。彼女たちは政の急所に木綿針を、ちくりと一本見舞つたのだつた。
「政が怒つてきやせんじやろか」
お美代が心配すると
「なあに、誰が男の恥をさらけにくるものかよ」
そう言つて母親はお美代の身体をゆすぶつて笑つた。久しぶりに母親の快よい笑い声が家の外まできこえてきた。

(完)
とれた。それでやつと、白い花をとり出すことに成功したのだ。
「ルーデサックじゃないか！」
白い花びらと思つていたものが案外長いゴム製品であるのに私は一驚したわけだ。
「あとは何とも異状なし、未だ気持が悪ければ搜索でもするか」
「いや！」
とまたしげるの特色のある、アクセントの「いや……」を始める。
「誰れの残りだい！」
「知らん！」しげるは腰を浮かしたと思うと私の油断を突くように立ち上つた。
「女つてきらい。それともわたしだけ……」しげるの熱い呼吸が私の頸に感ぜられ、いまとり出したゴム製品の、彼女の神秘に夜を越した、特有の臭気の脳裡に滲みこむ私の感情と神経をいやにと迷わせて行くのである。

浮世三文経

◎ 剣難女難

女剣劇、流行で
ままごと遊びもそつちのけ坊やは何時も傷だらけ。

◎ 入学期

春が来た来た何処に来た菓子折さげて○添えて袖の下からやつて来た。

◎ 皮算用

競馬競輪、宝くじ
大穴狙つて居るけれどあくのは財布の穴ばかり。

◎ 妊娠女学生

思ふにまかせぬ産前、母の苦勞も何のその課外実習で子を妊らみ。

私はこの時から一つの発見をした。女を主体的に見る美しさと、併行して横から眺める女体の美が、かほどまで異なり、美しいほりのある塑像的の感覚をゆすぶるものかと。
しかもその美には情熱の血が通い、顔の表情には愉悅の哀歓とも想われる、極楽莊嚴の色のあることを――

(おわり)

x x x



松井 頼子

絵 七比尋 玲子

腰紐や帯どめが、小さなショールウィンドーいつぱいにあでやかな色彩で飾られているのに、龍次はふと蛇屋のショールウィンドーを連想した。これは七色の蛇のうごめくの似ていると思つたのだ。そして、蛇という生きものが、ヌメリと肌に冷たく感じると同じ妙な皮膚の抵抗を感じた。

「あれ買おうかしら？」

美津枝がいうのに

「どれ？」

何でもない声の調子をつくるのに一寸手間どつた。

それでも美津枝の買物が自分の帯どめでもえらんでいるのだろーと思つて、「あれ」という彼女の視線を追うと、黒とねずみ色とで細かいうろこ模様になつて腰紐をさしている。

「あんな地味なの……いつたい誰のを買うんだい？」

と聞くと

「先生の」

平気な顔で美津枝が答える。

「僕の？」

「そうよ。だつてネクタイは月なみだし、靴下なんて足にはくものを目下があげては失礼だということだし、ワイシャツときばる程のお金はなし……ねえ、先生、手ごろでしようあの紐……」

「そりやあいだが、しかし……」

「男の人だつて、まさか寝巻の上に黒い兵古帯を

ぐるぐるまきつけて寝るわけではないんでしょ？なんて……靴下あげるより失礼かしら、寝巻の紐なんて……」

「ううん、それはかまわないが……」

龍次は割切れない顔で言つた。

女からの贈りものに、寝巻の紐とはどうも意味がありそうだとまどついているのだ。それに若くてモダンな美津枝の案外な粋ごのみもおもしろい。なんにしてもさつきから、体をつけるようにのぞきこんでいるショールウィンドーの前で、龍次は美津枝の背中や腰の感じが変に刺戟してくるのに困つていたのだ。そのショールウィンドーの飾りつけを七色の蛇と思つたのも、男の体の一部が思つたのかもしれない。

龍次は妙に興奮していた。尤もこうした興奮は放送局からのつぎだつたのだ。

龍次の書いた広告用の放送劇に美津枝を推薦してはみたものの、彼の思うように演じてくれるかどうか不安だつた。アマチュア劇団で舞台をふんではいても、まだマイクなれのしない美津枝を推薦するということでは、夏代と一ともめあつたあとだつたのだ。夏代が聞いていてやつぱり自分ではあの若さは出ないと思わせた意地もあつた。

夏代との情事は情事、いくら若くみえても四十を越した夏代に未婚の娘の役は無理だつた。美津枝を起用したのは彼にしたら個人的な愛情ではないと思つてゐる。

しかし、どうしたことがテストの時から、龍次は美津枝がせりふをいう前になると、自分がその役を演じているように胸が鳴つた。こんなことは長年脚本を書いていて、幾人もの女優を使つて来た彼にしては珍らしいことだつた。

演出家やミキサのいる部屋と、役者の演じるスタジオとは硝子でさえぎられているのだが、その硝子をとおして、美津枝の上氣した頬の色がそのまゝ彼の心を赤く染めるのか、高ぶつた気持のまゝ、三十分の放送劇が終

つた。

「おつかれさん」

と、声をかけたりかけられたりしながらスタジオを出て廊下に立つていと

「先生」

と美津枝が近付いた。ふだんみている彼女とは別人のような、なまめいた眼にみえた。ふとそれは、男と女の愛情を体で語り終えたあとの、まだ血の動きの静まらない目の色を思い出させた。三十分という時間一つばい緊張した神経が急にときほぐされたけだるい感じが、生理的に同じような条件を呈するのかもしれない。かつた。

「先生、何にもおつしやらないでね。もうこわい、お叱言が……」

子供っぽくいう美津枝に

「お茶でものみに行こう」

と誘うと

「おこられない？」

「ああ、沢山ダメを出してやる」

「いいえ、それよりも……」

誰かさんにおこられない？とまでは商売女のようなひやかしも出来なかつたのか、美津枝はいたづらっぽく龍次に笑いかけた。

龍次に夏代というおんなのあることを、美津枝も承知しているらしい顔だつた。

それなら何故寝巻の紐などをプレゼントしようというのだらう。まさか自分の手のかわりに、そのうろこの模様の細い紐で彼の腰をしめようという謎でもないだらう。うろことは蛇のうろこに他ならない。たゞその柄と色とが美津枝の好みにあつてえらんでくれたプレゼントにしても、どうもおかしなおくりものだつた。

龍次がまだショーウィンドーの七色の蛇の不思議な幻惑の中から脱しきれずにいるうちに美津枝は中へ入つて買物をすませると、

「はい、先生、今日のお礼に」

と、包み紙のまゝ彼の手にその紐をのせた。

二

間借している離れに帰つて外套をぬぐうとする龍次の手をそのまゝ上からしめつけるように、夏代が唇を近づけた。

「おい、待てよ」

言うのにきかず、夏代は片手を彼の首にまきつけて、無理やり唇を押しあてた。

「のんできたな」

龍次は言葉に出さず、顔をしかめる。その顔にもう一度唇をこすりつける夏代を

「もういいじゃないか」

と、つきはなすと

「変つたわね」

と、夏代はそこへくづれるように座つてしまつた。

龍次は問答無益とひとり外套をぬぎ、背広をぬいで和服に着かえた。

「お水もつてきて」

夏代がいう。

「ひとりでのんできたらいじやないか」

「もつてきて！」

甘つたれた言い方を通りこしてヒステリカルになつてゐる。

龍次は夏代に横顔をみせたまゝ電気コンロのスイッチをいれると、机の前に座つた。

心斎橋から難波まで歩いて、帝塚山まで帰つてくる間に、龍次の頭で七色の蛇が七色の虹に変つて、次の作が書けそうな気がしているところだつたので、その想いをこわされなくなかつた。しいて夏代を無視しようと思ふのだが、そんな時、そつとしておいてくれないのも彼女の癖だつた。

の癖だつた。

いつもそれをいうと、

「だつて、あの時だつて仕事に行つたんじゃないの。でもあんたは仕事より私の方がよかつたのでしょ。それを自分のものにしてしまつたとなると仕事の方が可愛いのか？」

と、夏代がいう。

あの時……

三年程前の冬だつた。

映画の撮影で行つていた夏代に、箱根の宿で紹介された。紹介してくれたのは龍次の友達の俳優の志摩だつた。夏代とその男との間に体の交渉があるくらいのこと。は一目で見ぬいた。箱根は寒いから、熱海か伊豆であたたまつて帰ろうという夏代たちのプランに龍次もさそわれて、どうせ原稿用紙とペンさえ持つていれば仕事はどこでも出来るだろうと伊東までのしてしまつたのも、いわば夏代にひかれるものがあつたからかもしれない。撮影の一行は十人程の人数だつたが、夏代と志摩を残して一と足さきに京都へ帰つた。

伊東の宿屋で

「僕は少し仕事をしたいから、別の部屋にひとりで寝よう」

気をきかしたつもりでいうのに

「あら、先生、そんなに心配してもらわなくても、そんなことは京都へ帰つてゆつくり……ホホ、。それより三人一緒に寝ましようよ」

と夏代がいう。

志摩までが、

「君みたいな童貞居士は少し刺戟される必要がある」と言つて、わざと夏代をくすぐつてみたり鈴首へ接吻してみたりした。

その度に夏代は「ごめんなさい」

という目ざしを彼におくつて来ていたが、夏代を間にして三つの寝床をくつつけるようにして寝ると、彼の方へ手をのばして来たものだ。

天井をむいたまゝの姿勢で、やわらかい手を彼の体に這うように動かしていたが、弾力のある手の平の感じにそれと知つたのか、そこから手が動かなくなつた。

志摩の手前、たとえ夏代から誘いかけられたことでもそれとさとらせて、変に誤解されるのも厭だつたし、大声で夏代をきめつけて恥をかかせるわけにもいかない。龍次は自分で自分をどうおさえようもない、別の生きもののような体にしばらく困つていたが、

「どうしたんだらう？ どちらも腹工合が変だ。おい、夏ちゃん、紙くれよ」

と、便所へ立つていつた志摩の留守の僅かな間に夏代と一つになつてしまつたのだ。

女はよく処女をうばわれた、貞操をうばわれたというが、龍次のこの始末は男をうばわれたというのにふさわしい夏代のはたらきかけだつたのだ。

童貞居士とひやかされたが、勿論童貞ではなかつた。しかし、女の体の上でいつまでもヒクヒクと波打つようなおののきを感じたのははじめてだつた。

夏代だけ東京へ、かけもちの撮影で向うというのに別れて、志摩と一緒に名古屋まで帰つたが、伊勢にいる先輩の作家をたづねるといふ口実で志摩と別れると、夏代のあとを追つて東京へ行かなければいけない程、龍次は夏代の体におぼれてしまつたのだ。東京の宿での情痴のかぎりは、龍次にしたら旅先での説切で、連載小説になるつもりはなかつたのだが、心とはうらはらに体が承知しなかつた。

そしていつか三年たつてしまつたのだ。

映画俳優の浮気つぼさはとりたてて問題にする方がおかしい位で、志摩は夏代と龍次の間を知ると、あつさり夏代から手を引いた。もうくだり坂になつて夏代の

人気にくらべれば、志摩はまだく男の盛りで女に不自由はなかつたのだ。

「先生」と云つていた夏代が、いつか「あんた」になつて、帝塚山の龍次の部屋に同棲してはいるものの、女房にする気も、なる気もないらしい。龍次は万年チョンガで通つてゐる。

三

その晩、龍次はおかしな夢をみた。

夏代が気違いになつてしまつたのだ。うつろな笑聲をあげながら、簞笥の小ひき出しをぬいて、部屋いっぱい帯どめや腰ひもをなげ出す夏代を押さえて、静めようとする、意外な力で夏代

に組伏せられ、腕に足に、蛇がまきつくように、色とりどりの紐をまきつけられて、身動きの出来ないように縛られてしまつたのだ。

「フ、フ、フ、いゝ気味だわ。動けるなら動いてごらんなさい」

夏代はいう。

「お前は……。気がついたのか？ 何でもないので？ 正気でこんなことをしているのか？」

「と、驚いて龍次が問うと「フ、フ、フ。気違いかもしれないことよ。誰が気違いにしたの？ 私の頭を狂わせたのはあんたでしょう？ 気違いでなければ出来ないこととしてやるわ」

夏代は龍次を腹這いに押しころがすと、棒の様になつた龍次の体にさらに太い綱をかけて、中づりにつりあげた。

「そら、あんたの体は撞木しもぎになつたのよ。これから鐘をつくのよ。ゴーン、ゴーンつて……」

いくら身をもがいても龍次の体にくいいつてゐる紐や綱はびくともしない。中づりにされた体はもがきようもない。龍次は頭のどこかで、何かでこんな絵をみたな、と思つた。縛られているはずなのに体は痛くはなかつた。

しかし、

「ほら、ゴーン」



と、夏代がかけ声をかけて龍次の体を手もとに引いてはなすと、龍次の頭は、何かやわらかい、そのくせ弾力のあるスポンジの枕のようなものにつき当たった。

「ああっ！」

切ない叫びが龍次の頭の向うであがつた。女の声だった。

うつむきにされている龍次には見えない。

「一つ……二つ……」

夏代が数えながら龍次の体を動かすと、その度に

「ああっ！ うっ！」

という短い叫びがおこるのだ。

「百八つの煩惱というけれど、百だけまけてあげるわ」

夏代は龍次の体をおろした。

「あんたが今、何の鐘をついたか見せてあげるわ。鐘にうらみはかづくごさる……」

夏代はやじるように終りを唄にすると、龍次の体をほどいて、手足はまだ縛ったまま、体をおこした。

鐘……

ああ、それは美津枝の体だったのだ。やわらかいと思つたのは、えびの様にまげられた美津枝の尻の肉なのだ。彼女は裸にされていた。

龍次にまといいついている七色の蛇は、美津枝の体をもぎゆうくにしめつけて、さらに太い綱が美津枝の体の中ずりにつりあげているのだ。

「女の執念つて道成寺じやないけれど、おそろしいものなのよ。いいことしてみせてあげるわ」

なおも夏代は、地獄の悪鬼が亡者を苛めるのを面白がるような薄ら笑いをうかべるのと、美津枝の体も下へおろした。

美津枝はぐたつと首をたれて、畳の上どころがされたまゝになつてゐる。

夏代は龍次を床柱に縛りつけると、美津枝を櫓の柱に縛つた。そして白い液体を美津枝の裸身にあびせかけた

何か甘い匂いが漂つて、龍次はそれが牛乳であるのを知つた。

髪の毛も肩も、腕も白いミルクにぬりそぼれて、美津枝はぐたつとしていた。

「タマ、タマ、ミケもおいで」

夏代がよんだのは数匹の猫だった。

「ニャオン」

猫は甘えたように夏代を見あげたが、じきにミルクの匂いにしたいよつて、美津枝の体をビチャビチャと音をたてて舐めだした。

死んでいるような美津枝の体がビクビクとうごき出す。

「どう？面白いでしょう？あんたにもしてあげようか」

夏代は龍次の体へミルクをかけた。しかし猫は女の肌の匂いの方がいいのか、なめいいのか、美津枝からはなれない。猫の舌が彼女の全身を刺戟する。美津枝は次第に奇妙な声をたてはじめた。そして美津枝が身もだえる度に、彼女の体の七色の蛇がうごめく。七色の蛇……七色の蛇……

龍次はびつしより汗をかくて目がさめた。目がさめてもまだ、自分の体の汗がミルクの匂いをするような気がして、しばらくぼんやりしていたものだった。

四

「あんたがあの子を使うのは我慢するわ。でもいつたい何の真似？こんな紐をくれるなんて……」

夏代は龍次が早速腰にまいた紐の間に手をいれてしめつけた。

さつきから一つ寝床で夏代の手がその紐をしめつけていたのかもしれない。それがおかしい夢になったのだと思ひながら

「いいかげんにしろよ、やきもちも。溜美津枝と俺と何



鈴子

かあるんなら、お前と寝る寝床でこの紐をしめやしないよ。溜にもらつたんだとはつきり言つて、こうしてしめているんだから、何でもないぐらいわかりそうなもんじやないか？」

「さあ、どうですかね、あんたのことだもの、丁度私がああ、どうですかね、あんたのことだもの、丁度私があの衾屋の前を通りかゝつたのを知つていて、せんをこすつもりでそう言つてゐるんでしよう？」

「通りかゝつたの？、何故声をかけないんだい？」

「いい人つれていたの」

「誰だ？」

「心配？」

「べつに……」

「どうせそうでしょうよ。教えてあげましょうか。志摩

よ、志摩と飲んでいたのよ」

「ふーん」

「ああ、やけないね」

「薄情者！」

「あつ！痛つ！」

「あんたはこの頃私なんかどうでもよくなつたのね。でも私、あんたをあんな小娘にとられやしませんよ」

「おかしい話だね、随分……。お前は志摩君と歩いていんだらう？それでも何でもなかつたんだらう？だつたら俺が滝美津枝と歩いていたつて何でもないじゃないか」

「この紐がしやくにさわるのよ、こんな紐……。まるでしつかり寝巻の前をしめときなさいつて謎みたいじゃないの」

「ふーん、そうか」

龍次は女の邪推というものが奇妙な頭の廻り方をするものだと思心した。

「しやくだから私はこの紐であんたを縛つていじめてやるわ」

「そんな夢みたところだ」

「あら、そう？されてもいいの？どんな風にしたの？」

「それがね」

龍次は夏代に夢の話は出来なかつた。どうも女の裸の体と白いミルクなんてものは、フロイドをわづらわせなくともおかしい夢だ。まして夢の中の女が夏代はともかく美津枝とあつては、夏代の角が大きくなるのは目にみえている。

「お前に可愛がられた夢だよ」

やけ気味の殺し文句だつた。

「フフ、。じや縛るのはかんにんしてあげる。だけど私はこの紐にこだわるわ。何とか汚してやりたい。私たちの情事で汚してやるの。別段きたなくするという意味ではなしにね、ああ、いいこと考えた」

夏代は龍次の胸に唇をよせてきた。お目ざのような朝の受撫の幕をあけようというのだ。

時々龍次は夏代に背を向けて知らん顔していることがある。しかし執拗な夏代の口と手にはかなわない。口と

はしやべる口ではない。言葉を発する以外にも舌の効用はあるものだ。

どぎつい情事にそのうろこの模様の紐がどう使われたか、語るまでもないだらう。

やつと夏代から解放された龍次が、次の脚本の打合わせに北へ出た頃はもう午後の太陽になつていた。

三越に近い広告社から出ると、阪急まで歩いて行くつもりで龍次を、大江橋の上でうしろから

「先生」

と、美津枝が追いつがつた。

「あつ、君か。どこへ行つたの？」

「朝日……。先生は？」

「次の放送のことだね、一寸……。そうそう、又、君に」と役あるんだが……」

「まあ、うれしい」

目をかがやかせる美津枝の顔が若々しかつた。

夏代に感じるとは全然違つた清涼剤のようなものを龍次は美津枝に感じるのだ。昨日の放送局の興奮は少しどろかしていただ夏代が心配するような、美津枝を女としてながめている目ではない、そして情感の伴わない清純な思いだつてあるものなのだ。美津枝はまだ少女から女に変化しきつていないような気がする。レモンの匂いだ。しかし、昨夜みた夢の中の美津枝はもうすでに立派な女だつた。レモンの酸っぱさははない、といつてバナナほどのあまさはない、少し早もぎの白桃のような女体だつた。

「ねえ、君、こんな質問は作家としてすると思つてくれ君は接吻したことあるかい？」

ふとそんなことがたづねてみたくなつた。

人の波の中の歩きながらの会話はわりにそうしたことも何の気なしに言えるらしい。

「接吻？したことないわ」

「本当に？」

「ええ」

「じやあ、何故……」

と龍次はいつたん言葉を切つて、思切つてたずねた。

「僕に寝巻の紐なんかくれる気になつたの？」

「だつて、うちの父さんがいつもいうんですもの。お前の赤い紐はしめられないし、兵古帯じや長すぎるし、何かないのかね、寝巻にしめるような紐がつて……。父さんつてそう云いながら母さんの腰紐しめてるのよ」

「そうかい」

龍次は明るく笑つた。肩の荷が軽くなつたような気がしたが一寸残念でもあつた。

しかしすぐに仕事の話になつて

「こんどの役はラブシーンがあるんだよ」

「あら、大変」

「出来るかな」

「出来るわよ。だつて、私、接吻したことはないけれどされてもいいと思つたことはあるんですもの」

「おやおや、おだやかでないぞ」

「大丈夫。でもね、先生、私、はじめて唇を許したら、何だかその人を本当に好きになつてしまひそうな気がするわ。誰でも……」

そう言う美津枝は恋にあこがれる女の目になつていた

五

龍次の放送劇に又美津枝を使うということ、彼は夏代にだまつていた。仕事がいそがしい時に夏代のやきもちで邪魔されなくなつたのだ。もう一回その放送が済めば他の作家がその番組を引きつぐことになつていたから手があくるのだ。放送のすんだ晩にゆつくり喧嘩すればいい。

龍次は時々やれやれと溜息をつく。へたに別れ話をもち出すと、夏代が何をしでかすかわからないので心配なのだ。夏代の方から去つていつてくれればいいと、し

つて冷い顔ばかりもしてられない。そのうち軍資金をためこんで東京へでも雲がくれしてしまふより道がないと思つてゐる。

「私は絶対にあんたを離さないわよ」

夏代はいう。

「あんたにくつついていて一生困らせてやるの」

「そんなに俺が憎いか？」

「憎らしくて仕様がな。私だつて男の数は職業柄素人の奥さんよりは知つてゐるわ。随分惚れてくれた男もあるわ。それなのに、あんたを知つたら、あんたでなければ駄目になつちやつた。いくら冷たい顔をされても、あんたの体が私の体に惚れているように、私の体があんたの体に惚れてゐるよ。それだけよ。それなのにあんたはだんだん冷たくなるんだもの、憎らしくて……。一生憎んでやるんだわ」

蛇のような女だと思ふ。そしてそんな蛇のような女だからこそもつてゐるのかもしれない肉体の美味は、龍次にとつて悪食というか麻薬の魅力というか……。

夏代は映画女優をやめてしまつていたが、友達の酒場へ手伝いに行つたり、場末の芝居小屋に出てみたりして龍次には経済的の負担にはならなかつた。むしろ龍次の稿料が不払不払で、おくられば、煙草錢ぐらゐは夏代に厄介になることもある。それをことさらにおぼえていて、たまに龍次の方にまとまつた稿料が入つて、梅田の「たくみ」あたりで本染の黄八丈を買つてやつても、そんなことはケロリと忘れてしまふのも夏代のおはこだつた。

夏代の耳には龍次の周囲の女のことばまるでスパイでもつてゐるようにきこえていくのが常だつたから、放送前に今度もまた滝美津枝を使つたのを知つてしまふだらうと思つていたが、夏代はそのことに奇妙にふれなかつた。

しかし、その放送の日になると

「私も一緒に行つていいでしょう？」と、龍次にねだつた。

観客席は別にあつたが、公の席で夏代に女房顔をされるのは龍次にとつてころよいことではなかつた。返事をしづつてゐると、一緒に行くつもりで仕度してゐる。なまじこでさからつたらすぐに口喧嘩になることはわかつていたし、四十女のヒステリーがこうじてきた夏代が、喧嘩のそばつちに放送中のスタジオにとびこむぐらいのことはしてのけるかもしれないと、はれものにさわるような氣持で一緒に出た。

放送局へ行くと、演出をしてゐる村瀬がとんで来て「急に役者が変更になつたんですよ。御連絡のしようがなかつたのでお待ちしてました」といふ。

龍次はとつさに夏代をちらつとみたが「滝美津枝がどうかしましたか？」と、思わずたづねると

「いいえ、滝さんではなく、相手役の方です。それで志摩さんがかわりに出てくれるというので……」

「志摩つて、映画の……？」

「そうです。丁度体があいていて急場を救つてくれるというのです。放送時間はせまつていますし……」

「そうですか」

龍次は仕方なく承諾の意味でうなづいた。

NHKとは違う民間放送では、スポンサー広告主との契約の手前

役者が急病だからといつてその時間を変更するわけにも

いかない。志摩が出るといえは広告主はかえつてそのネームバリューで喜ぶくらいで、作家が文句をいつてもは

じまらぬのだ。

たゞ龍次は何かおかしな予感がしてならなかつた。夏代は知らん顔でそらうそぶいてゐる。

龍次は夏代と一緒にミキサのいる部屋の方へ入つたその部屋から硝子越しに演出家が手まねできつかけの合

図をする。

スタジオの方には効果の係が二三人と、アナウンサーそれに俳優がゐるのだが、今度の脚本は前もつて録音された声と、なまのせりふとを交互に使う新形式の脚本で俳優は志摩と滝美津枝のかけあいになるのだつた。

マイクをかこんで立つ二人のうしろに丈の高い屏風のやうなものが立つてゐる。それでさえぎられて、龍次のいる部屋からは演出の村瀬と、その後立っている龍次以外には俳優に目とどかなかつた。

龍次は不安な氣持で劇の進行を見まもつてゐた。

——なんて今日は嬉しい日だろう——

——本——

——ねえ、ほら、僕の胸に手をあててごらんさい。こんなに鳴つてゐるのがわかるでしょう。ほらね、ブルンブルンブルンつて……

志摩はセリふを言いながら美津枝の手をとつた。舞台の芝居ではないのだから、自分で自分のセリふのしぐさはしても、相当役まで手をのばすことはあまりない。美津枝は驚いたようだが、とられた手をそのままに、足音をしのばせて志摩のわきへより仕方なかつた。敏感なマイクの前で、劇に關係のないよいけいな動きは出来なかつた。

——さあ、目をつぶつて、じつとしていらつしやい。僕だつて今日がはじめて、生れてはじめての口づけをあなたに贈らうというのです。さあ、うけて下さい。僕の愛のしるしを……

志摩はいきなり美津枝をだきよせると、マイクの前で本当に接吻してしまつた。

龍次ははつとしたが、今はそれをどうしようもない。彼はやつとすべてが夏代のおぜんだつたのだと氣がついた。志摩にしても、志摩のおんなだつた夏代をとつた龍次に含むものはもつていたろう。それを利用した夏代のずるさ……。龍次はけわしい目で夏代をみたが、夏代は知らん顔してゐる。

接吻は一回ではすまなかつた。

見ているのは演出家と龍次だけで、他の者にはスタジオの屏風のやうな装置にさえぎられて見えない。龍次が

犯罪實話

まだ接吻したことがないと言つていた美津枝の清純な唇は、彼の目の前で汚されてしまつたのだ。そして、そうしたことが夏代の謀計だとしたら、龍次は何といつて美津枝に詫びればいいのかのだらう。

長い三十分だつた。

スタヂオから出て来た美津枝は上氣した頬をしていたが、龍次の視線に合うと氣弱く下をむいた。それは志摩の行為を怒つていない目だつた。

志摩のような美貌な映画俳優に抱かれたことを喜んでゐるのだろうか。娘心とはそんなものなのだろうか。

何かしらんそわそわと志摩の方に視線をほしらせている美津枝が、急に自分から遠くなつてしまつたのを龍次

「おつかれさん」

わきを通つて行く人に声をかけられても、言葉をかえすすべも忘れたように、龍次はひとりで階段をおりて、暗い夜道に立つた。

うしろから夏代が近付いてきた。

二人は「何事が起つたのである

う」と思つて便所へ行つてマツチ
をすつてみたら、母親はもう息切

れておつた始末で、驚いて近所の人を叩き起して救いを求めたので

人々が騒ぎ出して、駐在所に急が
報ぜられ、平和な村の人々の間に

一大衝動が投げかけられたのであつた。往在所の巡査は一寸兎見し

た後、大至急に警察に報告、警察

から県警察部の刑事課や裁判所、
検事局へ報告された為、その日の

午後之二時には予審判事が検事、
法医学専門の博士等が到来して、

直ちに現場の検証が行われた。

死体は身に葡萄酒が染し付てあつた。死体や着衣には一面に血液が

附着している。又見ると狭い背戸庭の便所近くの漆喰の上には一面に血糊が滴つている。予審判事は

龍次は夜の空に大声で吠えたらさぞさつぱりするだらうと思ひながら、ふと手をのぼして柳の枝をぐんとひっぱつた。

「あんた、あんた！」
と、夏代の追いつがついていく声がきこえていた。

死体について「創傷を発見せしめた用器や死因」について博士に鑑定をする事を命じた為に、その場で死体の解剖が行われた。

その結果、創傷が皆で九つある事が明らかとなつた。その中主な

る創は、顔面の左側顴顙の所から（頬の下側）を通過して下口唇の所

まで達する長さ十センチ位の創と後頭部の下の方の毛の生えている

部の長さ約八センチの大きい創で、

いづれも校舎のまはりに開いている
惨らしいものであつた。が、三番

目の創で頸動脈が切断されて出血が多量の為、死んだものであり、

兇器は出刃庖丁であらうと云われ
た。強姦された様な形跡も認めら

れなかつた。

警官達は事件が警察へ通知されると同時に警察署長の指揮を受け更に遅れて特派された刑事課の腕利きの刑事達も加つて、箕島の町の内と云わず町外れと云わず、全

後ご家け殺ころし
山形星雨

昭和×年の二月初旬の事であつた。和歌山県下の箕島みのしまの浜に沿うた小浜という所に、漁夫の小部であつた。

何んでも被害者は二人の娘と一緒に店の間の次の四畳半に寝て居つたが、夜中の二時頃に少用を催

落に混つて存在する唯一の呉服屋兼雜貨屋である桜井屋の女主人桜井ハルという婦人が夜中忍び込んだ怪漢のため惨殺された事件があつた。田舎にしては大事件で、漁夫達や町の人もびつくりして大変な騒ぎであつた。この女主人は一昨年、働き盛りの主人健吉に死に別れてから、独り者であつた。

この婦人はまだ三十八歳の姥姥であつたが平常から浮いた噂は一切なく、十七歳と十三歳との二人の娘の養育に一生懸命になつて、二夫に見えるまゐ様な考えは一切持たず、貞淑に暮して、姉妹の方が追々嫁入り近くになるのを楽しみにさゝやかながらも開いている店の商売の方を励んでおつたという事であるから、多分痴情ではなからうという推察も有力であつた。そうすると強盜の疑が濃厚であると

した為に眼が覺めて、その間の障子を開けて縁側からたゞきの背戸に出て三間程歩いて便所に行つた時分に「恐い恐いッ」と叫んだ声を長女のうめのさんが聞きつき、それからバタリと物の倒れる音がして、もう歸つて来ない。この不思議な物音を聞きつけた氣丈なうめのさんは、十三になる妹のたまえさんを起して、二人で起き上つて障子を少し開けて、背戸を見た時、真夜中の暗闇の中にも白い布

つた。駐在所の巡査は一寸檢視した後、大至急に警察に報告、警察から県警察部の刑事課や裁判所、検事局へ報告された為、その日の午後の二時には予審判事が検事、法医学専門の博士等が到来して、直ちに現場の検証が行われた。

死体は実に惨酷な殺し様であつた。死体や着衣には一面に血液が附着している。又見ると狭い背戸庭の便所近くの漆喰の上には一面に血糊が滴つてゐる。予審判事は

いづれも柘榴のように開いている。惨らしいものであつた。が、三番目の創で頸動脈が切断されて出血が多量の為、死んだものであり、兇器は出刃庖丁であらうと云われた。強姦された様な形跡も認められなかつた。

警官達は事件が警察へ通知されると同時に警察署長の指揮を受け更に遅れて特派された刑事課の腕利きの刑事達も加つて、箕島の町の内と云わず町外れと云わず、全

町に亘つて蟻も洩らさぬ捜査の網を張つた。捜査の一番有力な手掛りは現場に残つていたこの辺の漁師が巻いている紀州ネルの白い首巻でこれによつて犯人は他所から来た者でないと推定され、それともう一つは、現場から数十町も続いて滴つている血痕で、これが或る小さい川の流れ迄行き、更に薄いかすかな痕跡になり、これに伴う足跡が海岸のうたせ船の出る処迄続いて居つた事であつた。てつきり犯人はうたせに乗つて出かけたものに違いないと推定される様になつた。

うたせというのは大阪湾の海岸即ち大阪府や兵庫県又は和歌山県や淡路の海岸の漁夫のする漁りの一種類で、船なら精々十人位乗れる程度のもので、片方の舷へ船の前後の両端に一本宛の長い竿を突出して、その間へ網を張つて、深い海の底の方へたらし、網をゆつくりふくらして、帆を上げて、船を風のまにまに浮ばせ、その二本の竿の間に張られた網の間に入り込む魚類はどうしても逃げる事が出来ない様になるので、自然海の底に住んでいる種類の魚が網の中へ入り易くなるのである。

この様に船は帆を一枚あげているだけで櫓も使わず全く風にまかせて大阪湾の中をあつちこつ

ちと駆け廻るのであつて、風がなければ商売にならないものである。朝早く幾分の食糧を積込んで沖に出て、それが尽きたら夕方元の古巣へ帰つてきて其の日の魚獲の統締めをするので、彼等は和歌山から淡路、神戸へかけて往つたり来たりしているのである。

さてその日は出漁禁止の命令が出された為に出漁したうたせは只一艘だけであつた。刑事達は凱歌を奏して元気に鼻唄うたつて続々と帰つてくる漁船を夕方拘留した漁夫達は据えた獲物を早速市場へ出して現金に換え、家内や子供を喜ばせようと思つていたのに、其の日はそんな事は一切罷りならぬ事になつた皆ブツ／＼云つた。しかし、彼等が沖に出て何にも知らぬ訳であるが、陸では田舎に珍しい殺人事件があつた為に大騒ぎが持ち上つて居つた事を聞かされて素直に皆、警察署の取調べを受けた。

その中で、左の掌に五センチ位の切り創を受けて粗末な繃帯をしている一人の漁夫があつた。警官達の視線は期せずしてギロリとその男に向けられた。そして怪しい奴だといふので更によく調べてみた処、下に着ていたシャツや猿叉にも生々しい血痕が発見された。彼は其の場から有無を云わさず引

捕えられ、捜査本部へ連行され、嚴重に訊問された結果、包みきれず犯人であると言を割つたのである。「全く悪うございました、あの女の人を殺したのは私でございます」と自責の念に打たれた様な顔付で一切を自白した。

彼の名は朴春千という朝鮮済州島の生れで取つて二十七歳であつた。五年前日本に渡つてきて、先づ下関に上陸した。その時和歌山県の箕島から朝鮮海峡の方面へ漁に出ていたトロール船が、漁業の都合で下関に碇泊している間に漁夫が一名入用だつたので物色している所であつた。丁度その船に彼は傭われて一ヶ月

程後、母港の箕島へ帰つたが、そのトロール船の会社は不況のため解散になつて

しまつたので、彼はそのままこの箕島でうたせの漁夫に傭われる様になつたのである。

彼は二年の間、極く真面目に働いたのだにがしかの金を貯めた。そして初めは殊勝にも親を喜ばすつもりで一旦朝鮮へ帰つたが、却つて悪友に誘われて酒色の味を覚えたために皆よからぬ事ばかりに



費つてしまつて、再び日本に舞い戻り、馴染みも深くなつた箕島へ帰つてきたのであつた。しかし今度の彼は以前の彼とは全く變つていた。毎日酒、酒、酒であつた。そんな事で金の貯る道理がない。借金殖えるばかりであつた。時にはやむを得ず真面目になる事もあつたが、少しも永続きはしないで、一日一日と彼は窮地に陥つて行つた。

そして其の間に沖で捕えた獲物を浜であげる時にビン／＼跳ね上る魚類を砂地に投げつけたり、その場で腹を割つて料理したり、荒んだ心で行うので彼の残忍性は極度に養成された。

二月の或る日、おどすつもりできら／＼光る出刃庖丁を懷にひそませて、地道に金を貯めていると評判されておつた被害者の家へ十二時頃から忍び込み、背戸の漬物石の傍へ踞んで時機はよいかと窮つていたのである。所が夜中になつて被害者であるハルさんが便所の方へやつてきた。智恵の浅い彼にとつて全く思ひがけない事であつた狭い背戸を歩いて便所へやつてくるのであるから途中で身を隠す余地がなかつた。彼は彼女によつて追いつめられたような恰好で全く袋の鼠になつた。遂に彼の平素からの残忍性がむら／＼と燃えさかりかくし持つていた兇器をふるつたのであつた。

告白 實話

非処女流浪記



電車の青桐はスツカリ枯葉を吹きさらされて夕闇の中に寒々と立ち並んでいる。

幹をふるわせる冷たい風はガラスを切るような音だ。すみ子は心の底まで冷えと凍るようであつた。
彼女はオーバーの襟を立てて背を丸めた

壬生すみ子
美濃村晃画

家具類のまるで無いアパートの一室が火の気もなく待つているのかと思うと、堪らない気持ちになる。布田喬太郎との長い同棲生活が絶たれてしまった今は、一層の憂鬱がこの部屋に匂つていようだ。

すみ子はオーバーのポケットの紙幣をイジクリながら、焼酎をあふつて酔いつぶれてしまいたい誘惑を抑えることが出来ないお腹の皮と背骨とがくつついてしまいそうな位に空腹なのだ。

しかし、滞っている部屋代、電気代——八百屋、米屋のツケ等を思うとそれも出来ない。縊れて死んでしまつたらどんなに楽だろう、などと思う。路次のかどに赤いれんを吊した屋台のある、その前を通りかかった時、ブーンとヤキトリの匂いが空腹のすみ子の臓腑を刺戟した。もうヤもタテも堪らなくなつて彼女はベレー帽の頭で、れんをはじくと、焼酎を注文した。

ほのあたたかいヤキトリをかみしめながら、コップの焼酎をあけていると、胃のあたりが火のついたようにクワツとほてつてきた。すると、何故ともしれずに感傷的な涙がポロポロとこぼれてくる。喬太郎との

思出が切なく胸を締めつけるのだ。

持金も衣類もすっかり手放してそれで悔いなかつた二年間の同棲生活が、胸の底にじいんと懐しく甦つてくる。喬太郎は自分の体のスミズミまで知つていた、彼の体臭はもう自分の細胞の奥にまでしみこんでしまつていのだ、と思う。その感慨は不思議に哀しい感動をよびおこすのであつた。

最後の三ヶ月を寝たり起きたりの生活ですみ子を焦立たせ絶望のドン底においやつた喬太郎の暗い顔付きが、今はホノボノと懐しくすみ子の記憶を暖めるのであつた。二年間続いた同棲生活も、そんな喬太郎の発病でピリオドが打たれたのかと想うと、妙に切なかつた。

二杯の焼酎で辛じて人心地をとりもどすと、すみ子はポケットに手をつこんで再び歩き出した。どうしてあの時心中してしまわなかつたのだろうと悔まれてくる。

「すみちゃん、じゃあない」

不意に肩を叩かれてふりむくと、松本が人の好きそうな目を細めて立つていいる。松本はミネルヴァ美術工芸社の社員だ。工芸社といつて大きなものではない。社員は松本と女事務員二人、合計三人なのだ。

すみ子は美専在学中から、ミネルヴァ工芸社で挿絵や壁紙の下絵などを描いていたが、卒業後定職もなく、二度勤めた小学校は二度ともたいくつになつて止してしまひそのうち喬太郎と同棲をはじめてから何時の間にか、アルバイトが本職になつて、挿絵や下絵のためにセツセと絵筆をとらなければならなくなつていた。前借やその他の

交渉で、彼女は松本とは親しかつた。廿七八——卅には手の届く小心な男であつた。

「不景氣な顔してるなあ」

銭湯から遠ざかつてるので化粧ばえしないすみ子のカジカンだよな顔色をしげしげと覗きこみながら、松本はいう。そのくせ色の褪めたようかん色の、そでぐちのすり切れたジャンパーを、自分は着ているのだ。

すみ子は冷たそうな表情でそんな松本を一べつし、

「寒いわ、おごつてよ」

表情も動かさないでポツリという。当然のような口の利ける位、神経の働さがにぶつていた。とりつくろつたり見栄をはつたりする気持は失せている。何だか減入るような気持であつた。人の思惑なんぞ気にしてみろユトリがない。

松本はパチパチと目を瞬かせて、突差に何か口実を探すような氣配だつたが、うまい口実を見つけないことが出来ないのか、それとも性来の人の好きに負けてしまつたのか、

「う、うん。おごつてもよい」

と、氣弱そうな曖昧な笑いを浮べて、下駄ばきの足もとに目を落した。

吾社が裝飾してやつたのだ、というスタンド・ふくろりに松本がすみ子をつれてはいつたのは、卅分ほど後だ。

繁華街の数多くの袋小路の中に、小さなスタンドばかりがズラリと並んでいる露地のある、その中ほどにスタンド・ふくろりが在つた。一間ほどの間口だつた。ふくろ

りの主人、甚造は腎臓が悪いのか、それとも青いネオンのせいか、顔色の秀れぬ六十近い男であつた。

スタンドと天プラ屋を経営しているらしく、串カツやコロッケを揚げてゐるその横のガラス戸ばりになつた窓から、隣のスタンドが見えるようになってゐる。

背の高い三脚の椅子に腰を下したすみ子は浅間しいほどコロッケを食べた。翌夜から丸一日、うどんの玉を一つだけ生で食べたきりなのだ。見栄も外聞もない。他人の財布をあてに食い散らす意地汚ない自分にかえつて自虐めいた心よさを味わつてゐる「よく食うなア」

と、松本は情ない声で彼なりのイヤ味をいうのだが、

「ええ、私、お腹ベコベコなの。とても空いてるのよ」

すみ子はたじろがず彼の顔を正面から見る。松本は眩しそりに目を伏せて、串カツのクシを心の中で勘定してゐる。

「君、今日は一寸ヘンだね」

「ヘン？そり、ヘンかもしれないわ」

「失恋したみたいだ」

すみ子は手にした串カツをふと止めて松本を見たが、

「凶星だわ。失恋よ」

ニべもなくいい放つと、

「それからキン欠と、両方ね」

「だつて今日勘定日だつたじゃないか」

「そんなもの残つてやしないわ」

すみ子の頬は次第に色づいてくる。心の暗闇に鬱積したものが、久しぶりにはいつ

てきた酒氣に誘われてムクムクと頭を擡げてくる。

うるんだ目にキラ／＼と輝きが増してくると、松本は何故か酔以上に赤くなりながら、

「一人だつたら大変だろう。」

「ええ、大変よ。アルバイトの口ないかしら、本当に私困つてんの。いい儲け口紹介してくれたら恩に着るわ」

すみ子は平生、松本が自分に淡い好意をよせてゐるのに漠然と氣がついてゐた。そんな松本をも利用しようという計算が脳裏を横切つていく。今は一寸でも金が欲しい松本はフムフムとうなづいて

「そらだなア」

と、焼酎をチビチビなめていたが、

「ここはどうだい。仲居にならないか」

急に思い出したというような顔だ。

「仲居？仲居つてどんなことするの。いやよりごのみなんかしやしない。なるわよ」

「本当かい。じゃあ、きいてみてやろう」

松本がヒョロつと立上つて、コロッケを揚げてゐる主人の甚造の方へ行つた後、すみ子は焼酎をゴクゴクと傾けながら、四十近い仲居の濃く白粉をはいた顔をジロジロとぶしつけに眺めていた。

仲居になる。それもよからう。すみ子は仮面をかぶつたような仲居の濃い化粧に、何かうらぶれたものを感じてゐる。洗い落したら深い皺の刻まれた色の悪い四十の顔が、寒々と現われるのであろう。そう思うと、廿八という自分の年を、すみ子は氣の遠くなるような切ない思いで噛みしめるの

だ。コップを傾け続けるのに酔つてきそらない。

その夜、明日から仲居に出るといふ約束をすませてスタンド・ふくろりを出たのは十時近かつた。酔がドツと頭にきて何もわからない。地面が船にのつてゐるやうに左右にゆれる。溝にしゃがみこんで幾度も吐いた。臓腑を絞りつくすような苦しみが胸の底から突上げてくる。

松本の腕に獅噛みついてアパートにもどつてくると、續けて幾杯も水をのんだ。

「あんた電車あるの」

「うん？……さあ」

松本は畳の上にべつたり坐つて、チラチラと敷つばなしのすみ子の万年床に目をやつてゐる。

「ないかもしれないんだ」

ヘンにぎこちない声だ。思いなしか上ずつてゐる。

すみ子はオーパーも上衣も脱ぎすてる。一刻も早く寝こんでしまいたい。松本になんか構つてられやしないのだ。カツカツと頭が火照つてゐる。バンドをゆるめてズボンをぬぎかけると、急に松本の酔つた目に火のような興奮が燃え上つた。

「す、すみちゃん、電車もうないんだ」「そう。じゃあ、どうする。自動車にでものつて帰つて」

「いや、ぼく、キ、キミに……」すみ子は不意に松本のあえぎを耳たぶに意識した。興奮で血走つた男の顔が迫つてゐた。

「すみちゃん、ぼくは、ぼくはずうつと以

前からキミが好きだったんだ——」

一一

夕方六時から十一時頃まで、すみ子はスタンド・ふくろで働いた。慣れない彼女は酔客に手を握られたり首をかかえこまれてキスされたりする際があつたけれど、それがかえつて色気と呼んで客のうけはよかつた。

すみ子相手に酔態を演じる客を、ガラス戸越しに甚造は苦々しそりに横目で見るのであつたが、彼女は時おりそんな甚造の視線と目を合はして妙な困惑におちこむのだ。仲居が客をよるこぼせるのが、主人の氣にいらぬ筈はないからだ。

「泊ろうといつたりする客には相手にならんようにな。さ、これは給金の前わたしだよ」

二日目にそいつて甚造はすみ子に紙幣を握らした。年甲斐もなく眩しそりに赫らんでいる甚造に、すみ子は変に氣まゐり悪いものを感じたが、この爺さんは自分に氣があるのかしら、と思うと何だか情なくつて仕様がなかつた。

風間近くで見ると甚造はしなびたツルシ柿のように、たるんだ油つ氣のない爺さんで年は五十九だつた。甚造自身は五十だとすみ子に話したが、通いで来ている先の仲居がコソコソ教えてくれたのだ。

後頭がうすく禿げていて白髪がまじつてゐる。若い頃沖仲仕をしていたという中背の骨ばつた体が、それだけはかくしやくとしていた。

彼は女つ氣のないスタンドの二階に寝起きしているのであつた。金銭的にはケチな方で金の溜るのを楽しみにしていた。しかし、ガリガリの守銭奴ではなかつた。

これまで三度変つた妻君は死別したのではなくて、彼のしつこい愛撫に堪えかねて出ていつたのだ。最後の妻君は小またの切れ上つた色の白い、ポツチャリしたい年増であつたが、終戦直後店の売上金を搔つさらつて姿を消した。

それ以来、甚造はヤモメ暮しを守つていた。何事も意のままになる金を、女代りに溜めることに精出し始めたのであつた。

すみ子を一目見たとき、甚造は最初の恋女房の面影を認めて、長い間忘れていた血が乾いた胸にトクトクと妖しく脈打つのを覚えた美しいのではない。どちらかといえば不美人に属するが、かたぶとりのコリコリした体つきや、やや出つぱつたおデコの下、夢を追つてゐるような黒い愛らしいひとみが、初めて甚造に女の味を教えしてくれたその恋女房を想い出させて、やつぱ

り心がひかれた。

「あの女、生娘かね」

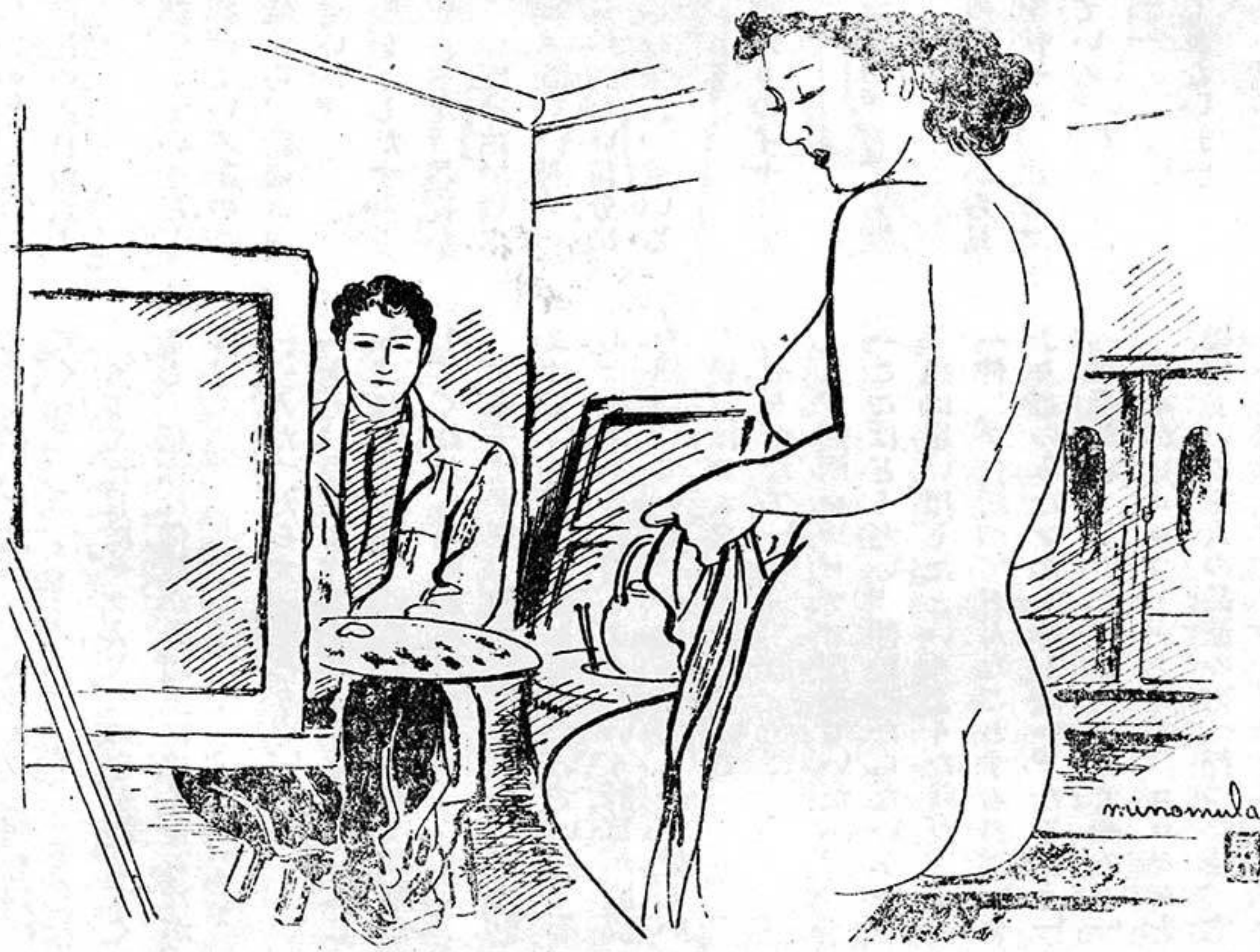
松本にさり氣なく尋ねると

「だろ……しかし、どうしたんだい」

探るような目つきで松本に見られると、

甚造は返答に窮した。

廿八なら男の一人くらいしつてゐるだろう、と甚造は心の底でうなづいてゐる。戦争未亡人かもしれない、と思う。



甚造は串カツやコロッケで、すみ子に夜食を食べさせる。美味しそりに頬ばつてゐる彼女を見ていると、彼はふと、家においてやつてもよい、などと空想するのであつた。

しかし年とつた自分の所に来るか、どうか——そう思うと嫉妬めいた感情がわいてくる。小金を持つてゐるといふことを話の端にホノめかして暗に彼女の氣をひいてみることも忘れなかつた。

布田喬太郎と同棲する以前、すみ子は姉の婚家に身を寄せていた。田舎の家を飛出して都会に出て来たのだつた。ガン迷な両親が彼女を強いて、氣のすまぬ結婚をさせようとしたからだ。そのとき、もうすみ子は処女でなかつた。盆おどりの夜、頼むりをした青年に手をひかれて神社の境内の森につれこまれた。体を自由にされてから相手の男が村の軟派青年であることを知つた祝言をとりかわす日の前夜、すみ子は男とカケオチの約束をして神社の境内で待つたが、一番どりが鳴きはじめるころまで待つて始めて欺されたのだと知つた。

姉の婚家に身をよせたすみ子は、好きな道で名を上げる決心をして美専の洋画科にはいつた。半年ほど姉の家で暮すうちに懐妊していた姉が産院にはいつた。すみ子は留守をひきうけて家事や産院の用事に骨身を惜しまなかつたが、或る夕、台所でコトコト庖丁を使つてゐると、丹前を着た姉の夫の誠也が近よつてきた。「手伝つてやろうか」

「いいわよ」
上気した頬をチラと上げてすみ子が笑うと、

「ぼくに料理させてくれないか」
とたたみかけてきた。

「だめよ、義兄さんは下手クソだから。何をするかしれやしない」

「そんなことないよ」

誠也はヘンに真面目な顔になつてすみ子の背に手を廻すのであつた。彼女は赤いセーターの背をビクツと顫わせて

「いけませんわ。姉さんにいつけてよ」

禁慾生活を続けざるを得ない誠也が妙な目で時おり自分の方を盗視るのに、最近気づいていたのだが、本当に要求されてみると、彼女の胸は痛いくらい脈打つばかりだ

すみ子はしつかりと胸を手で抑えて身を反らせたが、腰に手を廻した誠也は彼女の下半身を自分のそれにぐつと密着させた。

すみ子は田舎の神社の境内での経験が不意に甦つてくるのを覚え、あつと力のゆるんだ隙に誠也に首をかかえこまれた。

産院から姉がもどつてきたとき、すみ子は家を出てアパートに移つた。何もしらない姉の顔を見て暮すことが出来なかつたのだ。

その頃彼女は同窓の画学生、布田喬太郎に思慕をよせ始めていた。せんさいなタツチの洋画は性格をそのままキャンバスににじませたようで、すみ子には興味深かつた。長身のホツソリしたその姿は女のような優美な匂を漂わせていた。すみ子が編んでやつた毛糸のペレー帽を横かぶりにして、

ニツと微笑してみせる喬太郎の唇は少女のように紅く、桜色に染つた水々しい頬は彼の体の少年を物語つてゐる。

織物問屋を手広くいとなんでいる両親は病弱で商業に関心を持たない彼に好きな道を歩ませて、家業は次男に継がせるつもりなのだ、という。

「結局、気が楽なんですよ、その方が」

喬太郎はアパートに遊びに来たすみ子を羞んで、そりいつた。長い間、彼はすみ子に敬語を使うことを止めなかつた。

「あんた恋人あんのでしょ。写真見せて頂戴な」

獨り半分に、濃い捷毛の下の澄んだひとみをのぞきこむと、彼は耳たぶまで真紅に染めて、

「ありませんよ、本当に」

力をこめて彼女の言葉を否定するのであつた。美貌を持ちながら性来受身な喬太郎は、異性の友というものを持たないのであつた。

すみ子は男が女に対するような仕方では、喬太郎の少年を水あげした。皮膚のすぐ下を血が流れているくらい、透きとおるように真赤になつて涙ぐんでいた彼の、童女のような顔を美しいと思つた。

或日、扉に錠を下している時、同級の者たちが遊びに来た。皆に冷かされて赧くなつた喬太郎をかばうようにすみ子は「私がモデルになつていたのよ」といつくろつた。間もなく秋の展覧会にすみ子のヌードが出品されるという噂が拡つた。すみ子は本当に喬太郎の前に裸体

を見せなくてはならなくなつた。

喬太郎の部屋で秘密と興奮に満ちた製作が始つた。彼は慾情を抑えることが出来なくなると、モデル台から一糸まとわぬすみ子をひきずりおろして抱いた。

「やがて同棲が初つた。」

喬太郎の両親は憤つて、女と手を切らねば仕送りを断つと脅かした。生活力のない喬太郎は顔色を失つたが、すみ子は自尊心が疼いた。二人の生活を支えるために彼女がミネルヴァ美術芸詔社の仕事に追われ始めたのはその頃からだ。

「金が失くなると喬太郎の顔は暗く翳つた。油繪の方もロクロク手につかぬようであつた。すみ子は喬太郎にみじめな思いを味わせたくな、身を粉にして働いた。自分の衣類や調度品は惜し気もなく手離した。」

三

すみ子が甚造に聞かせた身上話は、喬太郎とわかれるようになったその部分からだ。二度の食事を十分食はず、喬太郎とすみ子は暮していたが、とうとう喬太郎は体をコワしてしまつたのであつた。肺濕潤と診断されて帰つてきた喬太郎は急に元気を失つた。すみ子は目前が真暗になるのを感じた。

「お互いのために別れるのがいいと思う。ぼくも養生に力をつくして、何とかして初志を貫く決心だ——」

そんな書置をのこして或る日喬太郎は両親のもとへ帰つて行つたのである。甚造はその結果をすみ子に慰めた。

「何なら家で寝泊りしてくれるとよい。わしはこちらの部屋を使うし、あんたはそちらを使えばさしつかえないんだが——」
甚造は煙草をジュジュと吸いながらすみ子の顔に素早い視線を送つた。

すみ子はその親切が単なる好意からくるのか、何か野心があるのか、それを確かめようとして甚造の表情を伺つたが、彼は何気なく火鉢に煙管の雁首をうちつけて、新しいタバコに火をつけている。

すみ子には、甚造の申出が願つたりかなつたりであつた。アパートで雑費に喰込まれる日々を想うと、身の毛がよだつようであつた。喬太郎との思い出が、一人寝の彼女を侘びしくさいなんだ。しかし、新しい貸間は仲々見つけることが出来なかつたのだ

すみ子はもう一度甚造がそのことをいい出すまで黙つていようと思つた。こちらに引越してくるとすれば、おそらく絵に対する宿望を棄てなければならぬ。一生断念するつもりはなかつた、一時的な抛棄が再び絵筆をとらせるような境遇に彼女を生かすことが出来るかどうか、という危惧がすみ子を躊躇させるのであつた。

しかし、風は風、夜は夜で働き続けなければならぬ今は、寝るためにだけアパートを借りるなんて、非常識すぎる、とも思つてゐる。すると、すみ子の心は又動揺し始めるのだ。

四

「すみちゃん、来てる？」
と、聞き覚えのある声が串カツを上げて

いる甚造に問いかけている。すみ子は小皿を拭いていた手をふと止めて耳に注意を集めたが、ああ、松本だ、と思うと流石に頬のあたりがヘンにこわばった。

「なーんだ、やつぱりここかあ」

勢よく格子をあけてはいつてきた松本は人の好きそうな柔和な目を細めながらホツとしたように白い息をはいた。まだ卓の上に逆さにおいてある三脚の椅子をすみ子がおろそうとすると、松本は卓のそちら側から受けとつてそれに腰をおろしながら

「心配したンだけ、アパートに帰つていないつていうから……」

「あら、それはお気毒さま」

すみ子は酷い齒の間から小さな舌の先を出してみせたが、それに続く松本の間をさけるように故と何気なく

「今日は少し分冷えるわね、夕方になつて風が出たみたいだわ」

と、いつて鼻の先を赤くしている松本を見た。

「うん、寒い」

思い出したように松本はジャンパーの襟からはみ出している安っぽいネズミ色の人絹のマフラーを掻きあわせた。

「どうしてたんだい、三日も——」

「どうしたつて構わないじゃないの」

ツンとむくれてみせるすみ子だ。トクトクとついできた焼酎をぐつとあふつた松本は、濡れた唇を手の甲でふいて

「そりやあ、構わないけどさ」

と、鼻白んだ様子で咳いたが、気弱そうになまなざしをチラと走らせて

「オヤジがぼやいていたぜ、ミネルヴァの——。挿絵を引受けたままなんだろ？」

「あそこはもう止しちまうつもりよ」

「へえ、じゃあ、どうするンだい」

「このマダムになろうかと思つてんの」唇をキュツと結んですみ子は自嘲的にわらいを見せた。

「あんたが紹介してくれたンだから、これから大きな顔でくるといいわ。あんただつて便利でしょう、カオの利く所があつたら——」

松本は平然としたすみ子の態度に、かえつて自分の方が狼狽したように

「ふうん、まあ、いいやな」

と、水ばなをすすりあげてそそくさと財布を出した。

四日前、すみ子は始めてスタンド・ふくろうの二階に泊つたのである。

「なア、お前さん。マーさんはお前さんとその……体の関係もあるような口ぶりなんだけれど……」

その夕方甚造は店にきたすみ子にそり切り出したのだ。マーさんという常連がすみ子に二号の相談をもちかけたのは、一週間ほど前だ。すみ子は大していい条件でもないのでその都度曖昧な返事をのばしていたのだが、甚造の方にも相談をかけたらしい二月近くスタンドに出るとチップで生きる仲居の苦しさをすみ子は味わねばならなかつた何時も気持よくチップを握らせる客が「送つてやろう」

などと看板がハネてから表で待つていた。すみ子はそんなとき断ることが出

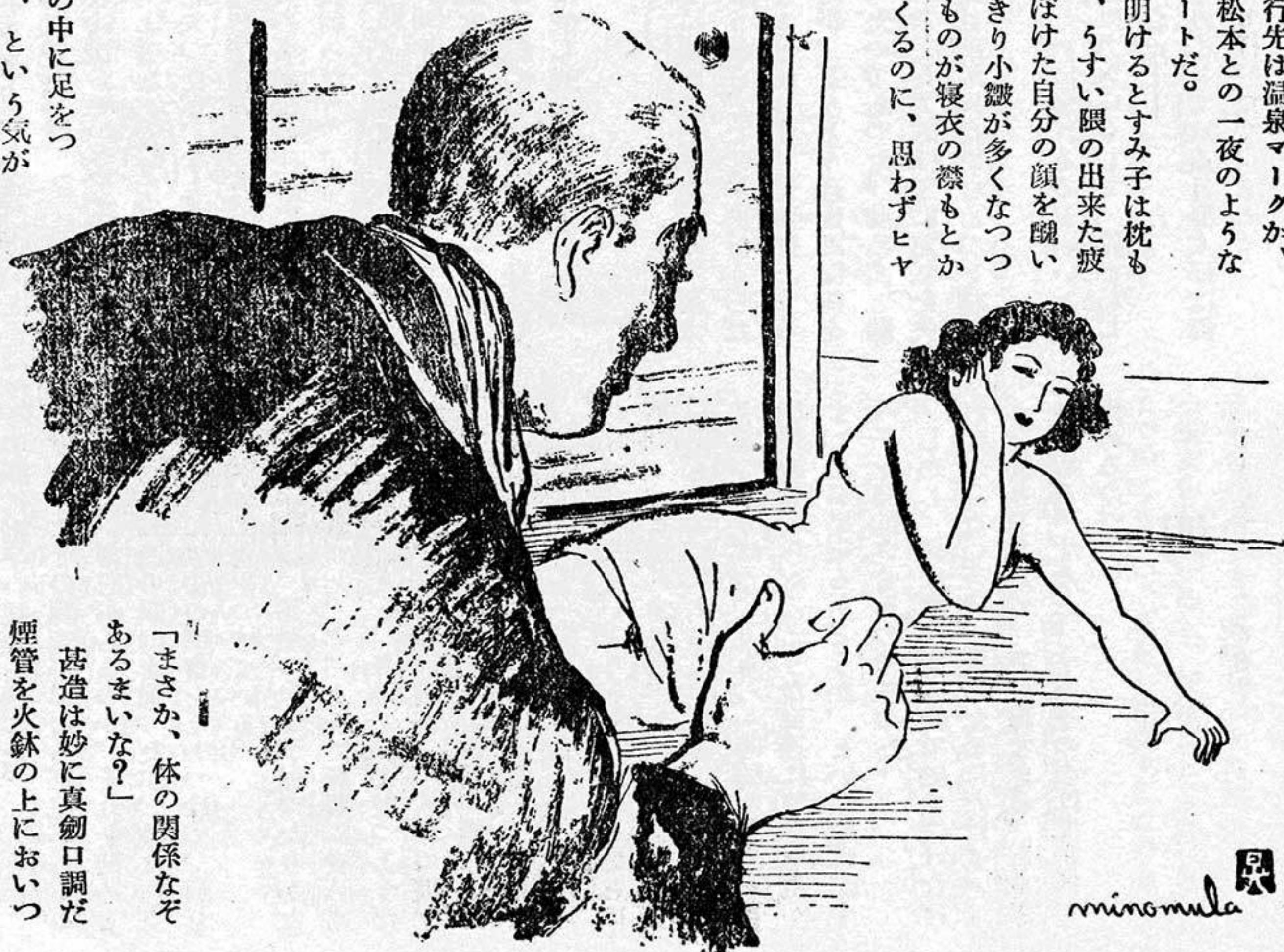
来ないのだ。行先は温泉マークか、或は何時かの松本との一夜のようなすみ子のアパートだ。

そんな夜が明けるとすみ子は枕もとの鏡に映る、うすい隈の出来た疲労の目立つ古ぼけた自分の顔を醜いと思う。めつきり小皺が多くなつて、うそ寒いものが寝衣の襟もとかから忍びこんでくるのに、思わずヒヤリと鳥肌立つ

使い古しの手袋のように老けこんでゆく青春に声を放つて縋りつきたい思いた。

蟻地獄におちこんだ小さな昆虫が、醜怪な虫に足を掴まれて懸命になつて逃れようとするとさまが、ふと脳裏に浮んだりする。もう逃れようのない泥の中に足をつつこんだのだ、という気がする。

一夜の歓楽に酔いしれて居汚なく眠り呆けている男の顔を不潔な気持で眺めやる。何故か切ない哀しみが電光のように五体を貫いていくのを、感じるのであつた。



「まさか、体の関係なぞあるまいな？」

甚造は妙に真剣口調だ煙管を火鉢の上におい

じつとすみ子の表情をうかがつてゐる。すみ子は無言で畳のへりをみつめていた。

「あるのかい？」

甚造は黙つてゐるすみ子に焦々と返答をせまつた。すみ子はうなずいた。

「なんだつてエ」

一瞬息をのんだ気配であつたが甚造の聲は予想を裏切られたという憤りに慄えを帯びていた。

「本當かい、そりやあ……」

すみ子がもう一度うなづいてボツと頬を染めると、甚造の目にはにわかに狂暴な色が漲つた。

「たつた二月くらいで、たつた二月くらいで……」

すみ子は激怒にふるえた甚造の聲にサツト顔色を失つて身をおこそうとすると、いきなり襟くびを掴んでひき倒された。何故甚造が憤つたのか彼女はわからなかつた。

「何をするんです」

「バカものが。こうしてくるわ」

甚造は目の色をかえてすみ子の髪の中に指を突つこむと、ぐいぐいと畳に頬をこすりつけた。すみ子は顔をひつすらせて

「何をしたつて私の勝手じやありませんか」

「私の勝手？よくもいうたな。お前さんはわしのものだ。勝手にはさせん」

甚造は我れを忘れてのしりかえした。

すみ子は彼の自分勝手にあきれて語がつげなかつた。甚造は表の格子をあけはなしたまま、中の暗い二畳へすみ子を引き摺り込んだ。

すみ子はアパートに戻らずに、四日間甚造と一つの寢床に起き伏したのであつた。

五

ミヅレがふつて凍りついたような寒い夜

が続いた。スタンド、ふくろろにミネヴァの仕事で食つてゐるすみ子の仲間が顔を見せるようになった。或る日、男友達の一人が喬太郎の消息をきかせてくれた。喬太郎は結婚して東京のS撮影所の美術部に勤めてゐる、というのであつた。

「だつて病氣だつたじやないの」

「へーえ、そうかね。俺の会つたときはとてもいい血色で肥つていたけどなあ。すみ公が可哀そうだつたから病氣だなんていつたんじやないのかい——と、するとこれはマズイことを喋つたもんだ」

蒼ざめたすみ子の顔に氣付いて男は氣まづそりに口をつぐんでしまふのであつた。すみ子は胸の中に虚ろなあのアタのを感じた。よりかかつていたものをバツとかわされたような惨めな氣持であつた。喬太郎らしい小細工を弄したものだと思ふと、そんな彼の薄情さが彼女の屈辱をよんだ。子供だと思つていた彼に欺かれたということが口惜しくつて堪らなかつた。

「何処か他ン所で飲まない」

すみ子は放心したような焦点のない目を格子に凝つと見すえて咳いた。涙がポロポロとこぼれた。

「だけど、ここかまわれないのかい」

男は甚造の方にチラと視線を走らせていた。すみ子は通いの仲居に後を頼むと、奥へひつこんでショールを首にまいて出てきた。

「おい何処へ行くんだ」

甚造は醜しい顔付ですみ子の袖を掴みそりにした。

「何処へだつて構わないじや、ないの。私の勝手よ」

すみ子は冷やかな一べつを甚造に与えて故と男の腕するがうにして店を後にした

男が帰るのを物憂げに寝たまま見送つたすみ子は、一人でウツラ／＼していたが、再び目を覚めた頃は正午を過ぎていた。淡い日ざしが畳の上に白くひろがつてゐる。

ゆつくりおき上つて宿の鏡台に向くと、色の秀れぬ宿酔の顔が生氣なくじつと此方を見ている。自分の顔のようでなかつた。四十過ぎた女のように、それ以上見続けることに堪えられなかつた。

これから何処へ行くという当もない。甚造のもとに戻るのにはイヤであつた。自分の青春は喬太郎との同棲の間で終つしまつたのだと思ふと、ヤルセない涙が胸を掻きむしるようであつた。どうしてあの時喬太郎を殺して自分死んでしまわなかつたのだらうと、愚痴めいた想いが暗く廻つてくるのであつた。

フラリと宿を出て数歩と歩かぬ内に、すみ子は強い力でムンズと手首を掴まれた。顔を上げると血走つた甚造の顔がそこにあった。

彼は物もいわずにグイグイとすみ子の手をひつぱつるのであつた。

「離して！」

すみ子は親しみのない気色ばんだ白眼で甚造を睨んだが、彼は腕の力をユルメようとはしないのだ。通行人は異様な二人をあとにつけにとられて眺めていた。

スタンド、ふくろろにもどつてくると、彼は屍でも昏い階下の二畳にすみ子をつき倒した。そうしてたるんだ喉をふくらませながらゼイゼイと息をはいた。

「お前さんの勝手にはさせんぞ」

そういうと、息がつまつたように再び肩で烈しく息をするのだつた。

「ふしだらな真似をしたら、コ、コロしてやる」

ギラ／＼と異様に光つた目に射すくめられると、すみ子の顔もこわばつた。

「殺すのなら殺してよ。私はあんたみたいな爺さんは大キライ」

「なんだとオ」

甚造はカツとしたようにコブシを握りしめたが、思いがけずその目には口惜し涙がひかつていた。乱れた裾を直そうともせずすみ子は不態くされて横をむいたが、不意に何ともいへぬ悲哀が棒のように胸の底から突上げてくるのを感じた。昏い部屋の隅を凝視しているとポロポロと涙が頬を濡らしてふと自分の体が透明に薄れてゆくような錯覚にとらわれるのであつた。(終)

愛讀者の皆様へ

昨年来御愛顧を頂いておりました二俣志津子さんは、目下花嫁修業のため忙しくて本号には残念ながら、その作品を載せることは出来ませんでした。やがて想を新たにして異色に富んだ作品を寄せられるよう申しておられますので期待して御待ち下さる様お願い致します。

〔編集部〕

巫女屋敷の責め絵巻

岡田咲子
喜多玲子・画



1 吹雪の駅で――

汽車は、いつ降り止むとも知らぬ吹雪について、駅のホームにすべり込んで来た。信夫は妻の手を固くにぎりしめて「二週間の辛抱だよ。さみしがらずに待つ

て居ておくれ。いいかい。母や姉妹が君につらく当るかも知れないが、僕が帰つて来るまで何事もじーとがまんしておくれ。良ね、判つたね。」
加津子は、涙のにじんだ瞳でじつと良人の顔を見守り、無理に微笑してうなづいた

居る間に、それも二三回友達に連れられて来た村田に、加津子は何時か知らぬ間に、こんな人なら結婚しても良いなと思う程、このキャバレーで知合つた数多くの男たちと比べると、村田は純真で素朴だった。だから村田に結婚の申込みを受けた時には前

「ええ、判つてます。心配せずに行つてらつしやいね。でも仕事が終わつたらすぐに帰つていらつしやつてね。」
名残り惜しげに手を握る良人を見せて、汽車は吹雪の中へ消えて行つた。加津子は降りしきる吹雪を顔に受けながら、何時までも白一色の中に消えて行く煙のあとを見送つていた。

後の考えもなくうなづいてしまつたのだ。結婚して半年の間の、アパート生活は二人にとっては夢の様な毎日が、すぎ去つて行つた。だが加津子にとつて、ただ一つ心残りがしていたのは、自分が結婚後まだ一度も、信州に有る村田の実家へ行つたことがなく、話に聞いている村田の腹違いの姉妹たちとも会つたことが無いと言うことであつた。

村田の実家と言つても、中学の時に母と死別した村田は、すぐ東京の叔父の所へ引とられて東京の大学へ通学し、そのまま学徒出陣で出征し復員するまで、信州の父が死んだことも知らなかつたし、信夫が出征して間もなく来たと言う後妻のことも、後妻の連れ子だと言う姉妹たちのことも、復員して来てはじめて知つた出来ごとだった。だから復員後たつた一度、父と母の墓参に帰つてから未だ一度も郷里へ帰つたことがなかつたのだつた。

その時、実家で知つた義理の母や姉妹の顔にも、信夫にとつては見知らぬ人間の顔を見る気持で深い感情もわかなかつた。ただ出戻りだと言ふ信夫より一ツ上の君江と呼ぶ姉の嫌に鋭い病的な目や、妹の夏代と言ふ娘の姉に似ずブヨブヨと肥つた体つきや、義母の満子が想像したより年が若く見えてはいるが頭は全然銀髪をたばねている姿が、なんだかその顔とバランスがとれず異様に信夫の目に残つている位な印象しか実家のことについては知らなかつた。

だから、信夫は加津子と結婚しても、愛

妻を郷里へ連れて帰らなかつたし必要も認めずそのままになつていたのである。

だがある日、信夫は一通の電報を受取つた。それは家督相続の問題であつた。放つておく訳にも行かず叔父とも相談の結果、ひとまず東京を引上げて信州大町の実家へ落つくことに決心した。丁度、今勤めている会社の支店が、大町から一時間で行ける松本市に有つたので、そこへ転勤と言うことにしてもらつて信夫は加津子連れて、大町の実家へ移つたのであつた。

2 古い邸の生活が――

加津子は、吹きつけて来る吹雪の大町駅を出てバスに乗つた。加津子が此処へ移つて来てから三週間目、良人は社用で東京の本店へ出張することになつた。加津子に見れば矢張り東京は、なつかしかつた。一緒に連れて帰つてもらひたかつた。だが社用では一緒に行くことも出来ず大町駅からバスで四十分はかかる周囲を山で囲まれた、村田家の広大では有るが、陰気なじめじめした様な家の中で、あの変に鋭い目つききの姉の君江や、一目見ると馬鹿かと思われる様な妹の夏代のいじ悪な顔、そして広大な邸の主かとも思われる母の満子などのことを思うと、良人には微笑しうなづいたけれども、本当は良人が居ないあの邸には二週間がまんして待つて居られるかどうか心細かつた。

ある日、こんなことがあつた。自分たちの部屋を掃除して居ると、急に奥庭の方で

下働きの女中であるお時の悲鳴が聞えて来た。加津子は如何したのかと思つて庭へ降りて行くと、姉の君江と妹の夏代が荒縄で縛つたお時の泣きさけぶのも構わず、土蔵の中へ引づり込もうとしている所だつた。乱れた着物はほころび、痛々しいお時を加津子は助けてその訳を聞いた。夏代がニタ笑いながら、

「私の茶碗を割つたからさ。」

とこともなげに言う。たつた茶碗一個のこととこんなにすることはないのにと加津子は思つた。その日はそれで終つたのだが日がたつにつれて、君江や夏代の目が次第に加津子を敵視する様な目つきになつて来た。そして目つきが次第に行動にも及ぶ様になつて来た。ある晩加津子が入浴していると風呂場の中へ窓からねずみをなげ込んだ者がいた。ねずみのきらいな加津子と知つての、いたずらであつた。加津子は真青になつて、悲鳴を聞きつけた良人が助けに来て呉れなかつたら、全裸体のまま、そこにぶつ倒れて居たかも知れなかつた。何故こんなことをされるのか、加津子には全然判らなかつた。

またある時、こんなこともあつた。加津子が御不浄へ入つて用をたしている、上の明り窓から輪になつた細引きが下がつて来てあッ!と思ふ瞬間、加津子の首に引かかつた加津子は悲鳴を上げて細引きにしがみついた。ばたばたと逃げて行く足音と笑い声は夏代に違ひなかつた。夜になつて良人の信夫が帰つてから話すと、夏代を呼びつけて叱つて居る信夫の声も聞こえぬ風で

ただニヤニヤ笑つて居るにすぎず、叱る方が馬鹿らしくなつて止めてしまふ有様だつた。良人は

「なあに、東京から来た、美しいお前に嫉妬して居るんだ。嫌がらせをして居るだけさ。」

とこともなげに言っているが、もし出張にでもなれば加津子は一人で留守居していることも出来ない思ひだつた。だが、その最悪の日になつてしまつたのであつた。とうとう加津子一人でそれも二週間と言う長い間、ここで、じーとがまんして居なければならなくなつてしまつたのである。

バスは吹雪の中をスリッパする音をたてながら、生きた心持ちもしない加津子に乗せて走り続けて行く。この土地特有の吹雪は何時止むか見当もつかなかつた。

3 キツネつさだ――

それから数日間、無気味ではあるが静かな、毎日が過ぎて行つた。

ある日、加津子は母の満子から呼ばれてなんだろうと不安な気持をおさえて廊下を渡り母の部屋へ行つた。そこには妹の夏代が泣きぐずれ、そばに君江が座つてじーと特有の鋭いものにつかれた様な目で加津子を見守つていた。満子が

「昨夜、夏代の指輪がなくなつたんだそうだが、貴女は御存知ありませんか。昨夜風呂場で紛失したのですつて――。夏代のあとに入つたのは貴女でしたね。」

「はい、でも私は全然みかけませんでした。私が入りました時には、なにもありませんでしたけれど?」

本当に知らない加津子は、そう言うより仕方がなかつた。それを聞くと夏代は一段と声を張上げて泣く。すると横から君江が「ねえ、お母さま、加津子さんも、ああ言うんですから御存知ないのよ。それよりも何時もの巫女さんをおよびになつて、おたずねになつたら?」

「うん、そうだね、それが一番早判りかも知れないね。」

「ぢや私が行つてお連れして参りましょう。」

三十分行して、白い着物に緋のはかまをつけて首から珠玉を胸につるした中年女の巫女を連れて来た。

巫女は満子から話を聞くと「それはお困りのこと。では唯今から、紛失された夏代さんの、お体を通して八百万の神々におたづね致してみましよう。では夏代さんの御召物を――」

心得顔で君江は、夏代の着物を脱がし、ズロースまでも脱り、全裸体になつた夏代を床の間に座らせる。そして意味もなにも判らない事をブツブツつぶやき、胸の玉をまさぐつて居る巫女の声が次第に熱をおびて高くなつて行く。加津子はこの光景に、自分が裸体にもされて居る様な気持で正視して居ることが出来なかつた。

突然巫女は立上り、床の間に正座する夏代の体に両手をかけ、両方の乳房をぐつとにぎり、上下左右にさすり始める。夏代の

顔は次第に上気し桃色になつて行く。

「えーい！」

巫女は大声で気合いを入れて、なにか念じて居たが、急に後ろを振り返つて

「神様は、ここにお一人、神様の御存知ない方が居られるそうですが誰方ですか？」

と見廻す。皆の目が一齋に加津子にそ

そがれると満子が

「東京から参りました信夫の嫁、加津子で御座います。」

巫女はうなづき祈つていたが再び

「では私が神々に御引合せ致します故、御召物をお脱ぎになつて下さい。」

「でもー」

と青くなつた加津子を見て満子は

「なにをしてーさあー早く裸におなりなさい。」

君江が立つて来て

「私が脱がして上げましょう。」

嫌がる加津子をおさえる様にして、着物を脱し、帯をほどき、長襦袢を脱がせる。

加津子の美しい乳房が、こきざみに波うつている。遂に最後のものを包む腰巻も、君

江の手でとり除かれてしまつた。

「そのまま床の間へ横になつてー」

君江は、おどろき、体を固くしてふるえる加津子を抱く様に床の間へ仰向けに横た

える。加津子は泣き出したいのをこらえて両手で両肩を固くつかみ目を閉じた。巫女

は命令でもする如く、加津子のそばへよつて来て

「両腕を頭の上で組んで下さい。」
観念して言われるままに両腕を組むと、

巫女は数珠をはずして、それを加津子の両手首へ縛りつける。次にのびた美しい加津子の足元へ行き、両方の足袋を脱がせて、

懷中より取出した麻縄で足首をギューと縛る。美しい自由をうばわれた人魚のように

加津子は横たわる。巫女は呪文をつぶやき祈つて居たが、急に祈るのを止めて

「これは大変なことぢや。いや良く判りました。もう結構です。」

加津子の手足の縛めをほどき、着物をつける様に命じると、一同を見て

「これは一大事ですぞ。夏代さんの指輪はキツネが持つて居りますのぢや。そのキツ

ネをまず捕えねばなりません。そのキツネ奴は、加津子さんのお体の中にかくれて居

りますのぢや。そのキツネ奴を追出すには矢張り五日はかかりましようが、その間、

加津子さんはぜつたに日の目を見てはいけません。着物を着てはいけません。そして加津子さんのお体が弱りますと、次第に

キツネはいたたまれなくなりまします。そこを一齋に追出して捕まえる方法、ただ一つで御座います。」

恐怖して、加津子は我を忘れて立上ろうとしたとたん、両腕を君江と夏代にねじ上げられて、その場へおさえつけられてしま

つた。おさえられながら加津子はもがき「そ、そんな、そんなこと迷信ですわ。一

嫌、放して、放して！、あー」

全部を言わせず、君江の細い汗はんだ由い掌が加津子の口をふたしてしまふ。冷たい目でその様子を見て居た満子が、おごそかに

「神々のおつげによつて今日から貴女は、体内にかくれて居るキツネが取れるまで、この家の地下室や土蔵の中で暮らすのです。

信夫が帰つて来るまでに、キツネを追出し

ておかねばなりませんよ。さあ、君江と夏代で加津子を、土蔵の中の地下室へ連れて行くのです。」

加津子はおさえられた口の中で、信夫の名前をさけびつづけた。君江と夏代に両腕

をねじ上げられたまま、引づられる様に土蔵の中へ連れてこられ、床板を上げて、石

段を引きずりおろされて、ムーと一種異様なにはいのする地下室の席の上へ、おしこ

ろがされた。

「夏代さん、加津子さんを真裸にしてしまいましようよ。」

自分におそいかかつて来る君江と夏代の手を振り切り逃げながら

「なぜ、なぜ、私をこんな目にあわせるの余りだわ。嫌、嫌、放して、誰れか！誰れか助けて！」

さけんでも無駄だとは知りながらも、今の加津子には、さけび助けを求めなければ

いられなかつた。だが髪毛をつかまれ、おし倒されて着物も下着も、次第に脱がされ

たりと一糸もまとわぬ全裸体にされてしまつた。そして両腕を後手にねじられ、君

江が持つて来たロープで両手首を縛り上げられ、ロープのはしを柱に結えつけてしま

つた。

加津子の美しい両方の乳房は、はげしく上下し、苦しうに体をもがかせている。君江はその姿を見下して

「あんたがこんな美しい体をして生れてくるから悪いのよ。今晚からうんといじめて苦しめて、楽しんで上げるわ。」

と言つて、なまめかしい素足の、ねつとりとした足裏を、加津子の顔へのせて足指

で加津子の鼻をつまみ、もがくの見下しながら

「きれいな顔ね、だけどこの美しい顔も、もうじき、垢と埃と汗で、まみれて見るか

げもなくなるわ。そんな顔を信夫さんに見せたらどう言うかしら！、面白いわ。」

横から夏代が

「御便所はどこですの？」

「その辺へ、たれ流すでしようよ。丁度犬みたいにさ。」

「御飯は？」

「そんなこと心配しなかつたつて、そこへ置いておけば、なんとか食べちまうわよ」

二人は、こんなことを笑い話しながら、石段をのぼつて、床板をボタンと閉めてしま

つた。静まりかえつた心細さが、ひしひしと加津子には感じられて来た。天井の明

り通りの窓から差込む光線だけが、ぼんやり縛られた加津子を照らし出して居るだけ

であつた。外は吹雪が荒れ狂つていたが、此処は地下室特有の暖かさでムツとしてい

た。

加津子はすでにもう泣きさけぶ氣力もなく、席の上に、横座りになつて背中縛られて居る両手首のロープがほどけないものかと、両腕を右に左にもがいてもみた。縛られた手首を動かしてもみた。だがそんなことではどけるのなら、最初から縛りもし

なかつたであらう。ただロープは、ますます手首の肉に食い込み、痛みが倍加するだけに役立つだけで縛られたロープには一分のたるみも出来なかつた。加津子は、もう断念した。そしてぼんやりと、天井から差込む薄明りを見ていた。

4 ねずみ責めで――

何分たつたのか、何時間すぎたのか皆目見当がつかなくなつた。きつと外はもう夜になつたことだろうと思つと、急に空腹を感じはじめた。本当に私の体にはキツネが住んでゐるのか知らとも思つた。なんだか急に悲しさがこみ上げて、涙がとめどなく頬を伝つて流れる。その涙すらふくことも出だない。両手首の感覚はなくなり、無性に來るかつた。その時上の床板が開いて、君江が皿に飯を盛り椀に水を入れて降て來た。「如何？可愛想にお腹がすいたでしよ。御飯もつて來たわ。でも両手をほどく訳には行かないから、私が食べさせて上げる。」と皿を持上げて加津子の口へよせて「さあおたべなさいよ。」

加津子は、あんまりな仕打ちに、顔をそむけたまま返事しなかつた。君江は舌打ちして

「チエ、親切に言つて上げてゐるのに、じや無理にでも食べさせてみせるわよ。」

皿を置いて、君江は嫌がる加津子の首をかかえて、手づかみにした飯を無理に加津子の口へおし込み始めた。息がつまり苦しくて、もたえる加津子の鼻をつかみ、椀の

水を流し込む。白い飯粒が、太腿の上に散乱し、水が口からあふれて乳房の間へ流れおちた。君江は笑つて居たが、立上り柱に結えたロープの端をほどき、美津子を上立たせ、柱の所まで引つて來て、柱ごと加津子の体をぐるぐる縛りつけ、なげ出した両足首を縛りうごかない様にしておいてから

「今夜は一人でさみしいでしよだから貴女の大好きなお友だちが、たくさん來る様にして上げるわ。」

と皿の飯をつかんで加津子の顔へ、乳房へ、そして太腿へ、最後には内腿へたんねんに飯をこすりつけて行く。加津子はうごかぬ体をもがかせ

「嫌、そんなこと、もう許して！」

「そんな嫌がらなくつても、夜になつたら友だちが、この美しい顔へも、この大きな乳房にも、それから一番大事な、ここへも、うんとキッスして呉れるわよ。ぢやうんとお楽しみ！」

君江は笑つて出て行つてしまつた。加津子はつかれはて、君江の言つたことを考えることも出来ずに、ただ頭を柱にもたせかけたまま、うつらうつらし始めた。突然加津子は、なにかが自分の体へ、はい上つて來るのを感じて目をさました。

「キャッ！」

加津子は、自分の体に、はい上つて來る



ものが、ねずみで有ることを知ると真青になつてふるえ上つた。それも一匹や二匹ではなく、二十四、三十四匹が群をなして、足首を上り内股へ、乳房へ、顔へはい上つて來る。加津子は悲鳴を上げ、泣きさけび身をよじつたが、最初は散つたねずみも、対手が自由をうばわれた人間であることを知ると、大胆に、もそもそ、はい上つて來て体にこすりつけられてゐる飯粒を食べ始めた。その気味悪い感じからすこしでも逃げ様と、加津子は右に左に体をよじつた。腰を曲げた。足首をうごかしてみた。首を振りつけた。

「助けて！助けて！」

さけびつけた。その声は地下室の周囲

に反響して、がんがねはね返つてくるのを聞いている中になにがなんだか判らなくなつてしまつた。

5 くすぐり責め――

信夫がニコニコして立つて居る。加津子は早く良人のそばへ行こうと思ふのだが、如何した訳か、体が前へ進まない。あせつて居る間に不図小さな声で自分をおこしたのが目を覚めた。加津子は元の様に後手に縛れた裸体でねむりつづけて居たのだつた。加津子は自分をおこしたのが女中のお時であることを、ようやく知つた。「お可愛想に、なんと言ふ人たちだ。でも

若奥様、もう少しの御辛抱です。しつかりして居て下さい。私がひどい目に合わされた時に、助けて下さったのを忘れは致しません。必ずお力になりましょう。もうじき夏代さんが来ます。どうか、しつかりしてがまんして下さい」

加津子はあわてて出て行くお時の姿を見送り、地獄で仏に合つた気持だつた。私にも味方が居ると思うと、急に目の前が明るくなつた心持がした。

しばらくすると、夏代が降りて来た。加津子は、にらむ様に夏代をみつめながら、じりじり後ずさりした。夏代は無言でニタニタ笑いながら迫つて来る。ねずみを追つめた猫の様に——。遂に加津子は一隅にお

しつめられてしまつた。夏代はのびたロープをにぎつて手元へ引寄せ始める。ロープは加津子の手首にくい込み、反動で加津子の体は、横ざまにころがり、ずるずる次第に夏代のそばへ引寄せられてしまつた。起上ろうとするのを、おし倒し加津子の上に馬乗りになつた夏代は、

「苦しい?。でも、もつともつと苦しなけりや駄目よ。でも私は姉さんの様なことはしない。もつと静かに、ねえ、こんな風に——」

片手で加津子の口をふさぎ、片手で加津子の体を所かまわす、くすぐり始めた。夏代の肥つた指が腋下を乳房を横腹をくすぐり、次第に、曲げ、くねらせ逃げ様とする

腰から内股へ夏代の指は間断なく、はい廻る。加津子は顔をほてらせ、おさえられた口から、もれる悲鳴に似た泣声は次第に、うめき声になつて行つた。責める夏代の額からも汗が流れ、息を荒くして責めつづけていたが、もがきつかれて、ぐつたりとなつた加津子を見ると一息ついて汗をふきながら

「ウフフー気持良さそうね。次はどんな料理にしようかな?」

鼻で笑つている時、急に土蔵の外から「かんにんして下さい。私はなにもした覚えはありません。許して下さい!」

ときけぶ、お時の声にまじり「待つておいで、云わなけりやあ、云える

様にしてあげるまでの話だよ。さあ、来るんだ!」

と、ののしる君江の声とが次第に近くなり土蔵の床板を上げ、君江が、泣きさけんでもだえる腰巻一枚のお時を、引づる様にして石段を降りて来た。君江はお時を突倒して腕を逆にねじり上げ

「ねえ夏代ちゃん、お時は加津子さんを助け様としていたんだよ。ねえお時そうだろ?」

お時は腕の痛みに顔をゆがめて「ちがいます。そんなこと私——」

「よし、云わいでも良いよ!」

君江は、お時のもう片方の腕もねじ上げて、落ちてゐる荒縄で高手小手に縛り上げ縄の余りを両足へ、がんじがらめに縛り、つけてしまつた。そして無惨にも手荒く、むしり取る様に腰を包む衣を、とつてしまつた。一糸まとわぬ、加津子とお時とを見下ろしていた君江は、ねつとりとした素足で、お時の乳房をふみにじりながら

「さあ二人一諸に責め殺してやろうね。」

しばらく考えて居た君江は

「夏代ちゃん、良いことがある。貴女、加津子さんを立たせて柱へ縛りつけて頂戴よ。」

夏代は云われるまゝに、加津子を抱えて柱を背にして立たせて、ロープを胸へまわし柱へ結べる。

「そう、それで良いわ。次にお時を、その前にひざまづかせるのよ。両手で腰を抱く様に——」

そう云いながら、お時を加津子の足元へ

〔奇譚艶笑風土記〕

南國鹿兒島の盛り場歩るき

春山耀子

とうの昔に華族という称号さえなくなつた現在でも、未だ士族と平民の区別のやかましい封建色濃厚な鹿兒島ではあるが、

に、シラス土壌の悩みや、毎年数回おそろし風風による被害が、どんなに、鹿兒島をマイナスしても、鹿兒島を故郷とする人々

児島といえ、火山脈の上に立つている国といふことが出来る。だから何処でも掘れば温泉が湧く。到る所に温泉がある。

別府にしても、熱海にしても温泉を土台にして出来た町だが鹿兒島は、まずちゃんとした町があつて、町の中の到る所に温泉が湧く。鹿兒島人が、もつと

光客は引きつけられる筈なのに熱海や別府でみる温泉旅館なんて殆んどない。大ていの観光客は、城山に登り、鹿兒島市を賑かにして、桜島に渡り、そのまゝ霧島温泉に行つてしまふのだ。これでは、折角の観光資源も泣く、温泉が、折角出てもそんな状態だから、普通の銭湯のように市民は、金十円也でいつでも温

映画「南国の肌」にもある様

いう宣伝文句程ではないが、鹿

絵の国・話の国・夢の国・と

商才にたけておつたらこの温泉

泉の効能には浸れる。

市民にとつてはぜいたくな話である。

町の盛り湯は何といつても天文館通り、こゝは昔島津公の天文台のあつたところ、大商店が軒並みになら

び、映、画館、食堂、料亭も

パチン

コやが

ぎつし

りとつ

まつて

いる。

盛り湯

裏は、

いずれが多いように、こゝも又

、日夜絃歌さんざめく所こゝの

奇麗どころは大い海外引揚者

とか、戦争未亡人でしめられ、

言葉も通り一遍の標準語で、鹿

児島色をこゝに求めようという

のは、ちよつとむり、強いて求

めれば、ときど蛇味線(単調

な音いろで、大島あたりの島人

たちが、かなでる楽器)・音も

とれるというこゝらくらいです。

次は納屋馬場通もと魚河岸の

あつた所とか、せまい道路をは

さんでいすれも生きのいゝ商売

をしている。

浅草観音前にぎわいを想像して下されば間違ひはない。

客筋は天文館の次というところ。

最後は、西駅前の朝市……之

がまたて

んやわん

やの混雑

ぶりです

まだ閨

取引華か

なりし頃

指宿とい

う鹿兒島

より遙か

まだ南方

の温暖の

地から、

野菜や芋や米を運んできて、市

中の物資と交流したのが、こと

の起りで、いくども警官から追

われ乍ら、夏の蠅のように根す

よくがんばつて、とうとう今日

の土地を獲得した。

最初朝だけたてた市が今日

では終日のにぎわいで、卸物価

で取引するというのが評判とな

つて、やりくり上手の奥様方の

よきお相手をつとめてくれてい

る。

で商取引を初めた女の人が、そ

の功勞によりて、その役目をあ

たえられたという話だが、真偽

のほどはわからない。

商店街のことを書いたついで

に、ちよつとひとこと。客と商

人の応接について。

鹿兒島では、むかしからお客

より商人の方がいばつていた所

で、商人の方が、品物を売つて

やるんだ。という思慮的な立場

から、品物を買ひに来た客に、

「ありがとうございまして」と

挨拶をしなかつた。

反対に、客の方が「あいごと

うもうさげました」(有りがと

う申し上げましたの意)といつ

て、礼をしてゆく風習であつ

た。

しかし今日では殆んど、商店

の方で頭をさげる

が客がありがとう

ございましてとい

うて出てゆく習慣

は未だにのこされ

ている。

南日本の新聞社

ある易居町附近は

特殊料飯店さかん

なの所で夜ともな

れば、いすこから

ともなく、いろん

車通りに集つてきて、客の袖を

ひく。

夜、男の一人歩きが出来ない

場所ではある。

本駅の近くであるから、風記

上甚だ面白くなく、外来客に、

いやな印象をあたえるので取締

りもやかましい様だが、やつぱ

り之も又夏の蠅である。

遊客にとつて、なくてはなら

ない存在、公認の遊廓は、沖の

村といつて、与次郎が浜の近く

甲突川の下流の風景勝れた地

にある。

此処は戦災をうけていないの

で高樓が軒をつらね、遊子の旅

に、浪の音も通ようというもの

である。

ひざまずかせて縄をほどきお時の両腕が加

津子の腰を抱く様な恰好にさせて、お時の

手首を加津子の臀部で、固く縛り上げた。

だからお時の顔は嫌でも、加津子の内腿へ

おしつける様になる。そうしたまゝ、君江

は、お時の頭から胸へかけて、別のロー

プをぐるぐるまきつけて縛り上げてしまつ

た。

「さあ出来た。如何？気分は、お時良いに

おいだらう？若奥さんにうんとサービスし

ておあげよ。」

笑つて、そこにあつた棒切れでひざまづ

いたお時の尻を、背中を力一杯ひつぱた

く。お時は悲鳴をあげ、身をよじりもたえ

る。加津子の内腿は、お時の泣きさけぶよ

だれと脂汗とでネトネトになつて行く。

狂つた様に手をたたき、狂笑する君江と

夏代の声を聞きながら次第に気が遠くなつ

て行く様な心持で、土蔵の中へなだれ込ん

で来た多勢の足音を聞いたと思つた瞬間失

神してしまつたのであつた。

加津子は今、しつかり良人信夫の温い腕

に抱かれて居る。以前に助けられた恩返し

に警察へ密告したお時は、責められた時に

叩かれた棒の当りが悪く、加津子の腰へぶ

ら下つたまま失神していたのを警官に助

けられて、今は病院で手厚い看護を受けて

いる。満子、君江、夏代は診断の結果、狂

人として精神病院へ送られてしまつた。

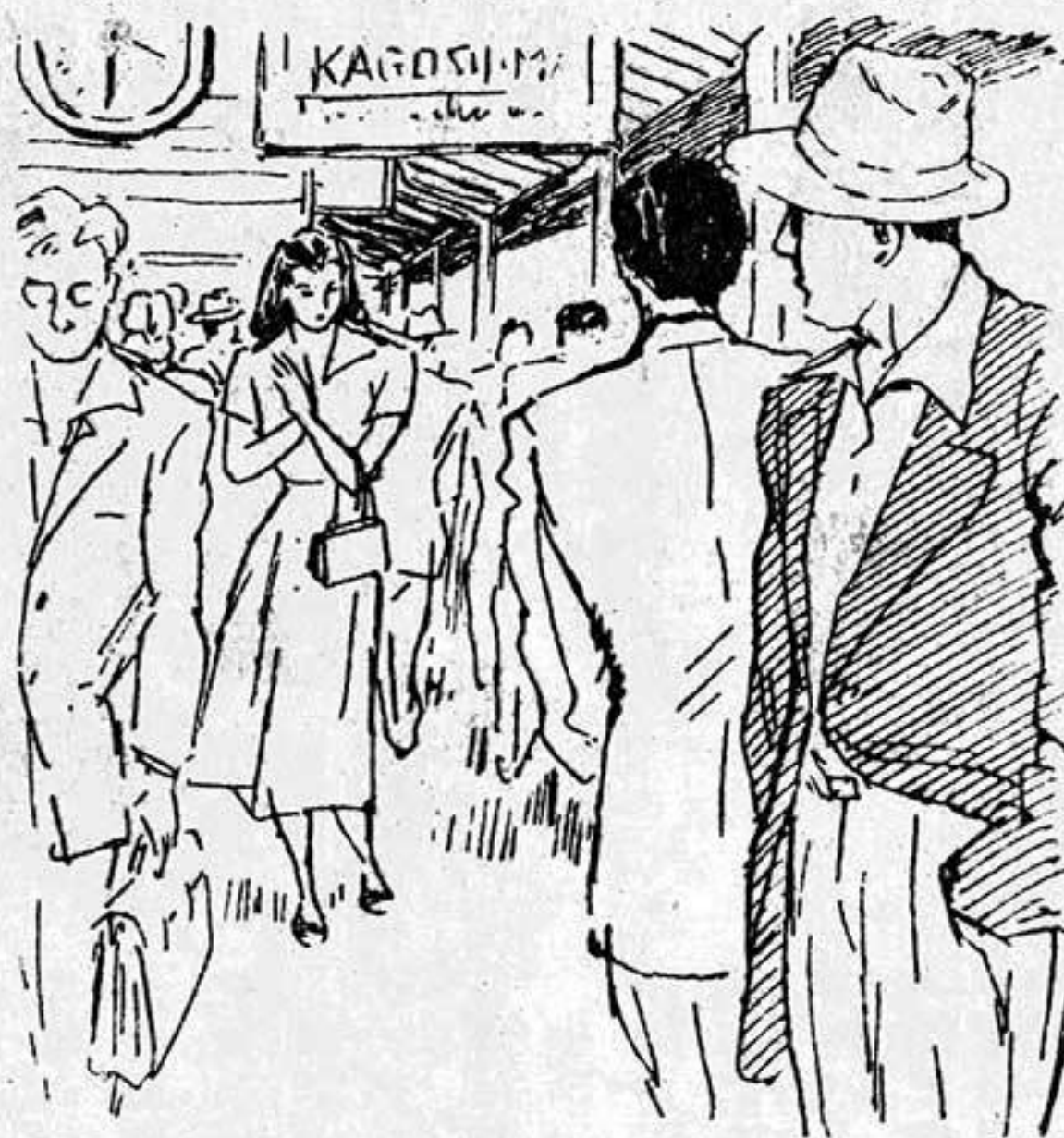
では何故そんな狂人を、信夫の父は後妻

に入れたのだらう？だがその疑問が解ける

人は、この世の人では無いのだ。考えても

無駄なことである。それよりも幸福を取戻

した夫婦に祝福あれ——。(終)



観々堂手柄話乃内

まくら絵詮議



枕繪を握つた別嬪 が殺されていた

「いやに落着いてるね——。え、何とか云つておくんなさい。ぐつとこ握りしめてより、絹羽二重の緋布団の中でしどけなくたつた今済んだ許りと云う恰好で死んでたんですぜ——」

「焦れつたいね。先生——、聞えてるんですかい。やい先生、へぼ八卦見——」
「何じやな——」
「チエ、聞えてたんですかい。尾張町小間物渡世大黒屋の若新造でお志乃さんと云やいくらト念人の先生でも知らないとは云わさねえ。今評判の一枚絵にも描かれた程の水も滴る別嬪だ。それが雌雞の様にキユ1ツ、燃え立つ許りの緋のしごきで絞め殺されて、掌の中に半分にちぎれた艶めかし

一のけたましましさに、春眠甦を覚えぬ朝を叩き起されて、観々堂先生は大きくのびをする。眼ヤニのたまつた眼をショボくさせて漸く煎餅布団から半身を起しました。安永年間——、將軍家治は政權を田沼意次に任し切つて、酒池肉林に浸つておりましたが、下々は至つて天下泰平、早咲きの桜が向島で綻びたとて、何がなし氣も浮々する彌生半ばの事でした。
観々堂先生——。氣が向けば浅草の観音

様境内で観相手相の八卦見商売。当るも八卦、当然ぬも有卦には入ると香氣に構え込んで、春秋のない羊羹色の紋付に、草臥れたたつた一枚きりの裾すり切れたはかまをはいて、商売道具と云えば、天眼鏡とせいちくを包んだ風呂敷包み唯一つと云う至つて香氣な暮しでした。山羊髭をしごきつ、時たま天眼鏡の奥より、紙背に徹する爛々と光る眼が、素姓を秘して居るものゝ、事に當つて非凡の推理を働かせるのを裏書する様にきらめいているのでした。
岡ツ引のから六が、観々堂を先生と呼び始めたのは、昨年の暮、思い余つた拳句、濁るゝものゝ、事件の端緒を占つて貰つた、それがビタリと當つたからで——。
竹を割つた様な江戸ツ子根性で、氣に入つたとなるとすつかり先生々々で、少し厄介な事件にぶつかるゝとすぐ先生ノ——。
二三日先生の顔をみないと飯も不味いと云う位で、のんびりした先生とせつちの源六のコントラストは、そろゝ噂の好きな江戸ツ子の話の種にもなるくらい奇妙な仲の良い取合せでした。近頃お奉行所でも源六のおおぼえは目出度くなる一方で、勿論先生の蔭の力であることは云う迄もありません。今では、先生の為なら命までもと思ひ込んで、慌て者だが、いかにも愛すべき男でした。
「大黒屋の若新造がなくなられた?——それはそれは……」
「それは……どころじやありませんよ。殺されたんですよ、あの別嬪が——、惜しいじやありませんか。全く勿体ねえ事をしや

がる。」

「コレ／＼そう力んで火箸を曲げて貰つては困る。惜しくても人の女房、扱ては源六気があつたか——」

「よしておくんない。いくら何でも人の女房に懸想する程源六さんは女に不自由はしていねえ。冗談はさておき、ベラ／＼つと早いとこ由緒纏末を述べちまうから、先生はその間サラ／＼と茶漬などかき込んでしまいなせえ——」

道草たら／＼のかち六の話を要約すると事件はこうでした。

娘の頃は尾張小町と騒がれ、其の頃人氣のあつた浮世絵師北尾重政の一枚絵にまでなつた尾張町信濃屋の妹娘お志乃が同町、大黒屋へ嫁入りした時は、江戸中の若い男が何がなし落胆した程の評判娘で、眉そり落して鉄線つけた若女房振りが又初々しく大黒屋の小間物は一時、女客より男客の方が多しと云う異変を捲き起した位、容色抜群の、素晴らしく綺麗に出来上つた女でした。

大黒屋惣兵衛の跡取り惣太郎との仲も至極円満に、早や新妻振りも板についた三月目、似合の夫婦、駕籠めうと岡焼半分に近所界限でも噂をされていた、その新妻お志乃が、無情にも何者かに絞殺されて、紅閨で冷たくなつてゐるのを今朝家人に発見されたのです。

その夜若旦那は一緒に寝ていなかつた

「と云うんだね——ふむ。」

源六は思はず唸りました。騒ぎは忽ち拡がつて大黒屋は蜂の巣をつゝいた様になり彌次馬の注進で逸早く源六が現場へ駆けつけて、家人を集めて聞き訊いた迄、その夜に限つてお志乃の夫惣太郎は、何故ともなく宵から家を脱け出して姿を消しており、お志乃ひとり添寝の間に、惣太郎の帰りを待ちあぐね乍ら床についたと、最後に惣太郎を見かけた下女のお鉄は涙でぐち／＼に頬を濡らしてそう語るのです。

表の格子戸は一ぱいに開け放されて、彌次馬やら親戚やらが何をしてもなく、唯ザワ／＼と店の間を右往左往しております。店から居間に続き、そこには手代の信七が寝ており、次の十帖の間が惣兵衛主人夫婦の居間、納戸横の六帖には番頭の喜六と丁稚の千吉が一緒に暮しており、下女のお鉄はお勝手元の三帖で寝ております。その外飯炊婆さんのおとはは通いで、これは夕食をすますとさつさと帰り、新婚夫婦は離れに寝ていたのでした。

店の間からず／＼と直線に廊下続きの離れ座敷は、新婚夫婦の為に新築したらしく木の香が仄かに漂つており、調度は艶めかしく豪華で、この部屋で結んだ二人の夢が如何に愉しかつたかは想像されます。

御検死の到着せぬ為か、お志乃は殺された時の姿で、離れ座敷は手をつけずにその儘にしてあります。

ずい／＼と源六は離れに通りました。形許りの手を合せて死顔に被せられた晒布をとり上げると

「こいつは非道えや——」

源六は妙にしめつぽく呟きました。恐らくお志乃の娘時代には、人並みに及ばぬ醜の溜まりの片想いで、彼も一度はお志乃に焦がれた事でしょう。

首を締めた紐は、お志乃の下締めらしく不気味に蛇のように、ぐる／＼と咽喉に巻きついていきます。傷といつては首筋にくつきりと紐の跡が残っているだけで、締められて少しむくんで見える外、いかにも美しい十九の春を去年過ぎた女盛り。駕籠の契りが、そろ／＼何ものにもかえ難い魅力となつてか、体の隅々迄しつとりと艶めかしい色づぼさが沁み出ていて、人の心と妖しくかき立てずにはおかぬ美しさでした。

「いつもなら一番に起きる筈のお志乃様はその朝に限つて、離れの方でコトリとの音もしません。若旦那もお在でじやないのに余り遅いと氣になつて、離れの雨戸を全部繰り終つてから、ソツと障子を細目にあけて、お志乃様と呼ぼうと致しますと……」

下女のお鉄はその時の驚愕を再び思い出して、ブル／＼と体を震わすのでした。

「雨戸は表からこじ開けた様な気配はなかつたかい——」

「はい、それは絶対に。夕方戸締りを致しましたその儘で御座いました」

「フム、すると内らの者と云う事になるが——」

仔細らしく首を傾げ乍ら、かち六の眼は眩しそうにお志乃の無惨な断末魔の姿にそ／＼がれて行きました。

むつちりと恰好のよい乳房が双つ、くつきりと現われており、裾は乱れて太股までまくれ上つて、その白い陶器の様なすんなりとした片脚は、死の瞬間の苦悶を現わして絹夜具の上にむき出されて硬直し、微かに深奥の部を覗かせております。

片手に確つかり握りしめた彩色の紙片をこじ開けて眺めて見ますと、男女の下半身の部が露わに描かれた、それは枕絵の妖しくも浅ましい半片でした。

「どうぞ親分さん、可愛い、嫁の仇をとつて下さいまし」

後から従つて来た惣兵衛夫婦はこう云つて、六十過ぎの愚痴つぽさでサメ／＼と泣き沈むのです。

精一杯の智慧を絞つて見ましたが、証拠の品と云つてはお志乃の手に握られた枕絵の破片一枚、外にこれと云つて、証拠品らしいものも残されておらず、源六の頭では最早手のつけ様もなき始末です。

家人を一人／＼当りましたが、惣兵衛夫婦は人に恨みを受ける筋もない至つて平凡な好人物揃い——。

番頭の喜六。精氣のない中年男、早くに女房に死別してからは独り者を通して、十二年もの間勤め上げている実直さで、その夜も風邪氣味で卯酒をぐつと一杯引つ掛けて、早くから寝て終つております。

手代の信七は店が退けると、好きな二輪加芝居を覗きに行き、閉ねて戻つてくると丁稚の千吉に大戸を開けさせ、後の戸締りをして寝たと云つております。

丁稚の千吉——。これは唯喰うのと寝る

より外に楽しみのない白雲頭——。

お鉄は草加生れの器量は不味いが、よく働くので重宝がられている出戻りの三十女——。

飯炊きのおとはは夕暮、飯を炊き終るとサツサと戻つてしまつた。と、こゝろ並べると、残るは若旦那の惣太郎が一番怪しくなつて来ます。それに今朝になつても未だ戻つては来ず、杳として足どりは不明で、彼の昨夜の行動と所在を探すべく、下ッ引が八方に散つて行きました事は申す迄もありません。

原因は物盗りではなしに、恐らく怨恨か痴情の果でしょう。兼ねて嫁入前、お志乃に想いをかけた男も相当いるだけに、或いはそれらの仕業とも思えますが、外部より侵入の形跡は皆無で先づ望が薄く、疑いは愈々失踪した惣太郎に集中されて行きます惣太郎とすれば何故可愛い、恋女房を殺したか？——。

お志乃の握つていた枕絵は何を意味するか？。それは疎雑な源六の頭悩では、も早どうしても解き様のない深い謎でした。

源六が観々堂先生を叩き起したのは、それからほんの暫くの後でした。

江戸中の枕絵を

蒐めるんだなあ

「いくらなんでも先生、そりやチト無理ですよ。何しろ枕絵、春本と云や、そうおいそれと一般に売つちやありません。一昨年の御取締以来、こいつはすつかり影を潜め

てしまいましたよ。こんな商売のあつしが出せと申してもそこはそれ知らぬ存ぜぬと来るは必定。第一江戸だけでも枕絵はゴマンもありまさあ——。」

「ハハ、源六旦那、冗談じやよ。心配するな、ほれそなたが持つて来た、この枕絵の半分をよろしく見ると、重政と云う画家の名がしるされてある。この絵師重政の枕絵春本の類を集めるのじやよ。蛇の道は蛇、どうじやな、商売柄での枕絵探しも悪くはあるまいが——ハハだ……」

「話だけでも体の奥がムズ／＼してくらあようがす、早速当つて見やしよう。」

「あ——、これ／＼あわてるな。チョイト待て——」

と云う先生の声も聞かばこそ、先づ枕絵詮議の智慧を授けられて何が何でも先生のやる事にソソはねえと、源六は糸の切れた奴風の様に、先生の許から風を切つて飛び出して行きました。せつかちの本性は、自分の仕方話にしびれをきらせて、待てしほしもなかつたのです。

事件の日から三日経ちましたが、惣太郎の行方は杳として知れま

せんでした。彼に対する容疑は今や決定的となりましたが、町方の必死の探索をどうして潜つてゐるのか、依然としてその足どりは不明でした。

恐らくは脅したり、すかししたり、拝み込んだりして集めたのでしやう、それでも次々重政の春画本が、源六の手によつて、先生の手許へ集つてまいります。

北尾重政（文政三年——一八二〇年——歿）——、宝暦時代の紅絵摺の頃から頭角を現し、文化年間に至り一世を風靡したこの好色画家の作品は、時には清長、春章らとも混合され勝ちでしたが、風流人士間に

於ては隠然たる人気を保持しておりました「さかりの花の久しき榮姿」「下掛謡曲色道番組」「艶奈ねふ乃花」「世話浄瑠璃見立男女」「笑東契夜の齡」……

これらの艶に悩ましい男女交合態々の肢態を、先生はいとも無関心にバラ／＼とめくつて行きます。傍らで興奮した源六が、ゴクリ／＼と呑み込む睡の音まできこえる春の午下りです。次から次の飽く事なき紅閨の彩りに流石にげんなりし乍ら、先生は最後の一冊、「好色玉手箱」を拵げた瞬間サツと緊張しました。一枚又一枚——念入りにくつた数枚目、先生の眼はビタとその一点に釘付けになりました。おもむろに懐ろから取り出した例の枕絵の端片をその上に当てると、ビタリと本の図に符合します。

「分つたよ源六——。お志乃さんが犯人からチ切りとつた枕絵本はこれだつたよ——」

「へえ——、では犯人が分つたんで……」

「犯人が分つたと誰が云つた。握つ



「いた枕絵が判つたと云つただけだよ。」
「なーんだ、枕絵なんかどうだつていゝんですよ。犯人が分らなきや仕様がねえ。」
「相変らずだねえ。これを御覧、この枕絵の美人をさあ——。誰かに似てやしないかい？」

「どれ——、あッナル……、こりや殺されたお志乃さんそつくりだ。さして分らねえ。殺されたお志乃さんの握つていた枕絵の女が、お志乃さんの似顔。するて——と、あッ分つた、分つたよ先生ッ——」

「何にが——」

「犯人がでさあ。こいつは矢ッ張り夫の惣太郎の仕業に違えねえ。恋女房の浅ましい赤裸々の姿を、何かの拍子でこの枕絵に見て、惣太郎はカッとなる。無理もねえ、自分の女房が、何処の誰とも知らぬ男と、亭主にも見せねえこんな恰好でくつついて嬉しそりにしていきや、誰だつて泣きたくもなりまさあネ。抗絵をつきつけて女房にツめよる。痴話喧嘩の果、可愛さ余つて憎さ百倍、思わず夢中でお志乃を絞めてからハッと我に返える。取返しのかぬ己れの犯した罪の恐ろしさにガリ／＼慄え乍ら、枕絵を懷ろにして其の場を立去ろうとする。廊下に出た時に折から来合わせた女中のお鉄にバツタリ出合う。突嗟の思案で、女房は少し気分悪くて先に寝たから起さずにその儘にしておく様にと告げ、自分は一寸用事を思い出したからとでも云つて表へ出る。その儘奴は風を喰つて何処へか逃れる。朝になつてお志乃の死を発見して大騒ぎとなる。とこいつは我乍ら上乘だ。どうですえ

「フーム仲々見事な推理。観々堂つく／＼感服致した。天晴れ／＼と云いたいが、チト違ふな——。」

「へえ?……とすると

犯人は誰で……?」

「そいつが分れば苦労

はせぬわい。第二のヒ

ント。北尾重政の宅へ出掛けて、お志乃を「好色玉手箱」に画かれた女の似顔に選んだその真相を探ぐつてくるのじや。」

「合点ノ正に御名答で——」

と云うや尻軽の源六、横ッ飛びに長屋の

ドブ板を踏みならして飛んで行きました。

鼠が死骸にウジヤ

くたかつていた

「と云うんですから、体が寒くなりますぜ——。正に一大事だ。これを一大事と云わずして、何をか一大事と云わんや——。」

「何を独りで力んでいる。あわてゝるねえ相変らず——」

「これを落着いてた日にや、御先祖様に対して申訳ねえ。あれほど探してもいねえ筈その惣太郎は鼠にかじられていたんでさあ御内儀が、水ハケが悪く何か妙な匂いがする、と云い出して、お勝手元から流れ出る裏口の溝の、揚板を上げさせたら、ニョキッ」と真黒い脚が……。若旦那の惣太郎が溝

幾々藏



の中で半分腐つて長く延びていた。鼠が何千匹となく腐肉に噛りついていて目も当てられねえ有様——」

お志乃が殺された時、家の内外隅々迄も少し念入りに搜索すれば、惣太郎を探す無駄な手間も省けたでしように、彼は家を脱け出して外にいと許り思つていた先入観念が大きな誤りのもとでした。

検死の結果、日数も終つていて判然としませんが、大体お志乃と前後して殺されたらしく、致命傷は左脇腹を七首様のもので一えぐりされた外、傷はなく、犯人はいきなり暗闇から躍り出て惣太郎をぐざりとやると、あッと倒れるのを抱え込んで、ズル／＼溝板の処まで引き曳つてくると、刃り

の様子を窺つて素早くこゝへ押し込んだに相違ありません。町家の裏口より、使い水を流す下水溝は、尺四方以上の幅も深さもあつて、人間一人隠すには手頃でした。水ハケが悪く、悪臭を放つことから、数日後始めて彼の死体が発見された事は、何と云つても町方の手落でした。

改めて家人一同に対して峻烈な取調べが繰り返されました。素姓から持ち物一切念入りに調べましたが、前回と異つた目新しい手掛りはありません。事件は振り出しへ戻つてしまいました。こうなるともはや源六の頭では如何ともしがたい程收拾がつ

かなくなつてしまつたのです。

「左様な訳で、先生——。一度大黒屋へ行つては戴けませんかい？ わしじやどうも」と源六は頭をかくのでした。

「重政は何と云つたな？」

「そう、あれですか。先生のお仕込で早速十手をひけらかして當つた処、相手の云い草が気に入らねえじやありませんか。一枚絵に迄画いた女の顔形を、枕絵に画いたのがどうして悪い。気に入つたから書いた迄の事、お志乃さんが御多福なら書きもしないトネ、こうなんですよ——。」

画家氣質として、そうした事もあり得る事です。浮世絵に適した女の顔には、絵画としての愛着を覚え、秘本のたぐいにもいつ——か潜在意識が現われて描かれたに違ひありません。

お志乃の娘時代、一枚絵を描いて評判をとつたのがその頃画かれた「好色玉手箱」の女の顔に描かれたと云う事は、別段とり立て、云う程の不自然さもなかつたわけですから。寧ろ、一部浮世絵師の間には、反つてその時代の評判女を選んで描く傾向のあつた事は、種々艷本の歴史にも残つております。

「だが先生、驚いちゃいけねえ。もつとえれええ事が……」

「ハハ、惣太郎が訪ねて来たと云うのじやろ」

「あれッ、知つていなさるんで——。流石に八卦見だ。チャーンとお見通しだね。その惣太郎がお志乃の一件で、えらい権幕で怒鳴り込んだらしいが、斯々如々とわけを

きかされて、女房に甘い男の見本見てえな面で、奇本に描かれたのを反つて満足に思つて帰つていつたのが酉の下刻（九時）。宵に家を出て、すぐ重政を訪ねたらしい模様で——。」

「よし、分つた。それじや、お邪魔でなかつたら一度大黒屋を訪ねるとしようかな——」

「有難えッ、そうこなくちや嘘だ。おみこしの上つたところで、駕籠だ——カゴ——ッ」

「あわてるなよ、日が高い。結構な足があるんだ。歩いてボツ——行くわいな。」

一体犯人は誰だ？

「と聞かれても、現場を見んことには分らぬわい。」

と道々駄弁りつゝ歩くと早いもので——

先生と源六の御両人大黒屋へと参りました。異様な風体の先生に、人々の眼は、不審げに二人の組合せを迎えました。先生そんなことに拘る御人柄では更々ありません。

「イヤ」と軽く一言、ズイと奥へ通ります。先生は、座敷から庭へ、又廊下へとけい——として光り出します。裏庭の築山の辺りでフト何か拾つたらしく、先生はそそくさと袂へ忍び込ませると、足どりは飄々として地を這う如く、時折商売道具の天眼鏡をとり出してはあちこちと覗いて行きます。

「分りましたかねえ、先生——。」

「フーム、段々と分りかけてきとる。時に皆の持物を調べた結果はどうじやつたな」

「女つて奴はだらしがねえやな。下女のお鉄なんぞ、味噌も糞も一緒だねえ。臭いのする湯文字の下にねじきり棒の舐りかけがかくしてあつたり……」

「そこへゆくつと、番頭喜六のなんざさすが実直だねえ。きちんとしてあつて埃一つかゝつちやいねえ。」

「手代の方は——」

「二輪加芝居の役者の似顔絵で一冊ぎつしりだ——。こやつなんかチト臭くはござんせんかい？」

「とは、どうして？」

「役者の似顔を集める位なら、女の似顔なんかも好きじやねえかと思つて……」

「いや、天晴れなる推理じや——ないな。まあ今に判る。落まぬがみんなを一間に集めてくれぬか——。計は密なるをもつてよしとす。一寸耳を貸せ——。」

「……」

「わかつたか？」

「ナール——程。そうか、よし来た。」

源六、密なる先生の授けにすっかり嬉しくなつて、かけ出した後、先生は人が変わった様に、しんねりむつとりと山羊髭をしきりにしごき乍ら考え込んでおりました。

主人惣兵衛の居間——。家人一同の集つた前で、源六は高々と反りかえり、先生は横でニヤ——と源六の演出振りを眺めていました。先生の耳打がすっかり源六に自信

をつけさせたに違ひありません。

「犯人の手口から見ると外部からの形跡は少ない。よつて内部の者と考えるべきである。」

開口一番、源六は胸を反らせてズラリと惣兵衛夫婦、喜六、信七、千吉、お鉄、それに飯炊婆のおとらも合せた七人と見渡します。

「さて犯人は日頃おとなしきやうにしてはいらるが、その実おとなしい人間程、その腹を割れば、割合助平が多いのであつて、犯人も亦誠に助平な奴であつた——。」

クスンと笑う声はどうやら先生の様です。咳一咳源六は声を改めて、

「ところでそやつは見せかけの実直とおとなしい手前、僅かにその助平根性と、春画艷本等によつて只管自ら慰めておつたのである。」

一同の眼は一斉に信七に走り、一瞬サツと緊張して、顔色を変えた信七を、先生ははつきり見てとりました。

「そやつはいつしか、これらの書画の蒐集に興味を感じる様になり、色々集めた。ふとその一冊、これは「好色玉手箱」と云う書だが、これを見た時、その男女の交合の姿の中に、こゝのお志乃さんの似顔を見出してはつとした。悪魔の様な思案がムラ——と湧いて来た。そやつはこの本を秘かに若旦那惣太郎に見せて、貞淑なるお志乃さんと浮世絵師との仲に、さも姦通ありげに吹込んで彼の妬心をあふつた。この淫らな閨房の肢態を見せられ、しかもその女がお志乃ときいちゃ、若旦那もじつとしては



たせた。」

蒼靄めた手代信七の手許が微かに震えるのをチラリと横眼に、源六の仕方話は益々佳境に入りま

てはと、解けた下紐引きぬくより、いきなりぐつと喉首をしめ上げた——。傍らに投げ出された枕絵本を彼女は苦悶の余り握りしめる。引きちぎられた本の一部が彼女の手中に堅く残った——」

一座はシーンと静まり返つて、艶本枕絵を巡る殺人に、嵐の前の不気味な緊張をつづけておりました。

「所業にかこつけて部屋に入り込んだそやつは、重大な用件とか何とか云つて、件の枕絵をお志乃さんに示した。思いがけぬ絵に彼女

「しまったと思つたが、お志乃の顔色は益々々と変つて行く——。若旦那に智恵づけした今となつては取かえしがつかない。毒喰わば皿迄との殺意にかり立てられた。庭先に出て若旦那の帰りを窺う内、枝折戸が開いて、肩を落して戻つてくる彼の姿を見かけた。放然として歩いてくるのをいきなり隠しもつていた短刀で脇腹をブスリと一突き。ワーツとのけぞるのを其儘する——と引き曳つて裏口へ——。溝板あげてその中へ押し込むと、何喰わぬ顔で寝につく。」

反けた。

——この枕絵を若旦那に見せりや、嫉妬の余り唯じやすむまい。己れ独りの胸に納めるから、図の如くなれと押し迫つた

「わしと違ふ……わたしじやない——」

事実そやつは浮世絵師との仲をそり思つていなかとも知れない。絵に迄描かれた御新造なら、ぐつとこちらが砕けてもちかけ

必死の声でそう叫んだのは手代の信七でした。意外な声に源六一寸面喰つた様でしたが、

つと思惑は見事外れて、お志乃さんは身に露覚えのない事とて強くはねつけた。己れの集めた枕絵や春本の物語同様、不倫の行為を甘く見ていたそやつは、これを羞恥と

「誰もてめえだとは云つちやいねえ。ところでそこのお鉄さん、あの翌朝、早くから焚火をした男はいなかつたかねえ？」

解釈して、無理押ししの行動に移つた。女の肌に触れ、下へと延びて争う内、切羽詰つたお志乃さんは、大きい声を出すとも云つたのだらう。慌てたそやつは声立てられ

「えつ焚火？、あッそう——それなら——」と云おうとするより早く、パツと立上つた男——。人々を蹴倒して飛出そうとするのを、さもあらんと網をはつていた下ツ引

つとも、枕絵を見せて口説けば案外た易く蹴くかも知れないと、もはや理性を失なつたそやつは、ムラムラと邪恋の炎を燃え立

たのは、仮面をはがれて、醜く歪んだ番頭喜六の蒼靄めた姿でした。

いられなかつた。

その日結婚以来始めてと云つてもよい氣拙い時間を過すと、楽しめるべき夜を迎えるのが苦痛となつて、疑心暗鬼にかられた若旦那は浮世絵師の許へ真偽を訊すべく走つた——。

妖艶に男に絡む枕絵のお志乃と、消えも入りたげに身悶える夜毎のお志乃とが同一人物であらうとは——。まさかと打消し

急変したいつにない夫の態度に、お志乃は唯おろおろする計りで、行先も云わすムツと夫が出て行つた後、独りしよんぼり彼女は物思いに耽つていた。様子を窺つていたそやつは、枕絵のお志乃と実在のお志乃がそやつの脳裡でダブツて映つたに違いない。

つとも黒雲の様に覆いかぶさつてくる妻への不安に、惣太郎に夢中で浮世絵師重政の門を叩いたに違いない。

一方——その頃大黒屋の離れ座敷には、

世 相 風 俗 現 代 小 説



め おと ぼ じよう
夫 婦 慕 情

泉 春 樹

☆ ☆ ☆

帰り道、源六は大手柄に浮々し乍らも、尙納得が行きかねるのか、観々堂先生に謎解きをせがみます。

「先生どうして番頭だと分つたんですい？」

「……」

山羊髭をしごきく先生はのんびりと答えてやります。

「心に疼しくない人間なら、荷物や持物を片付けはしないよ。喜六の荷物に埃一つ蔽さつてないと云うのは、その前に取調べを考えて予め片附けた証拠。」

も一つ裏庭を見廻ると焚火の跡があつてその燃え残りにこの類いの本が焼き捨てられてあつた。要するに証拠いんめつを計つたものに違いあるまいて——。若旦那を殺めて溝へ押し込んだ後、血塗れの短刀と一緒に返り血を浴びた着物を、手早く築山のかたわらに穴を掘つて埋め、そつと離れから上ると、雨戸を閉めて栓を落し、部屋に戻つて来た。丁稚の千吉は高軒で夢見の真最中だつた。

ろろよ。第三にわしの観相学から見ても、喜六奴は、罪を犯した者の兇相があり／＼と顔に現われておつたわい。」
「……」
「源六、女の別嬪すぎるのを貰うと怖いぞよ。横丁のおかんが、源六には丁度似合でいゝかも知れぬて——」
「へッ違いねえ。——」
首をすくめた源六と、観々堂先生の後ろから、血腫い事件も何のその、神羅万象変りなく、たいとうの春風がそよ／＼と、二人の鬘を撫で上げて行くのでした。(了)

一、ほつたん

雨の日も風の日、しよつ中、平吉は自分の赤ン坊を背におんぶしていた。赤ン坊は二つになる男の児で、それは傍から見ると眼もまことに気の毒なくらい、もう年がら年中であつた。

平吉は当年とつて三十八歳である。

しかし三十八と言えば、最早や不惑の二つ手前で、普通の場合なら先ず男の働き盛りであるのに、いつたい何の因果で詰らぬ子守りなんかしなければならぬのかと、彼は時々わが身をふり返つて見てつくづく情けないと思つた。

——だが、考えてみると、これも結局はみんな自分の身から出たサビで、要するに男としての甲斐性がないからだともう近頃では殆んど自棄に近い諦めの気持でアツサリ己れを見くびつてい

る彼だつた。

平吉が現在の妻であるサヨと結婚したのは、丁度いまから五年前で、例の敗戦で世の中がまだヒドく、ゴテ／＼としていた時分であつた。彼は戦地に六年もひっぱられて、挙句の果に終戦でまつた骨抜き同様にされて内地に還つて来たものの、なにしろ永い期間にわたる軍隊生活ですつかり人間が馬鹿になつて、所謂復員ボケとでもいうのか、しばらく大阪の天下茶屋にある兄の家でボンヤリ暮しているうち、或る日、ふと薦められて始める気になつたのが代用毛糸の販売であつた。そして、これは一時まつたく図に乗つた。

とに角當時は一般にまだ統制の厳しい折りで、殊に毛糸類はどこを探してもあまり無かつたので、しぜん泉州方面で仕入れるヤミの毛糸はそのまま辺りな場所に持つて行くと、忽ち飛ぶようにして売れた。實際に平吉ならずとも、誰れでも簡単にやれる

北 濱
湯 川 胃 腸 病 院

院 長 湯 川 永 洋
副院長 三 浦 洋

大阪市東区今橋三丁目
電話北濱②0922・6057

仕事であつた。

ところで、元々お人好しで律儀な彼のこ
とだから、仮令いくら儲かつて、ヤミで
儲けたようなそんな不浄な金は最初から自
分の身に附かずとばかり、殆んど大部分を
酒と女に費つて、いつまで経つても一向に
ウダツが上らなかつた。しかも、その頃知
合つて出来たのが妻のサヨである。

サヨは当時難波の或る闇の料理屋に仲居
として働いていたが、何でも産れは大阪の
そして上海の引揚者とかで、自称某高女出
の才媛で容貌も美しく、おまけに生れつき
の勝気な性質でよく喋るので、客を煙りに
巻く手練手管も仲々堂に入つたもので、す
でにその時分から小金も少々貯めていた。
しかし、そんな彼女が、選りにも選つてま
るで鰻のように掴み所のない平吉の、一体
どこに惚れたのかと知らぬ人々は笑うかも
しれないが、そこはまあ昔からタデ喰う虫
も何とやらの譬えで、最初から平吉にはえ
らい肩の入れようであつた。大かた男のデ
レに惚れたのだと口さがない料理屋の朋輩
達の噂で、実際は平吉にもその当時他に何
か取柄もあつたのである。

サテ、或る夜彼はサヨの店でしたたか酔
つぱらうと、誘われるまま夜更けてから彼
女と近くのホテルに泊つたが、到頭一夜の
契りを交わしてしまつた。それがキツカケ
二人は急にノッピキならぬ深い仲になつて
しまつたのである。

その難波界隈の或るチャチなホテルの一
間で、平吉と枕を共にした翌朝、サヨは相
手に貰つた紙幣の数をそつと読みながら、

不図さりげなく圓に立つたが、障子を開け
て廊下に出たとたん、ヒソかに心の中で呟
いた。

……平吉つあんて、阿呆か賢いのか分ら
ん人や……

二、嬖ア大將

うやむやの裡に三年経つた。

サヨはその後も平吉の許から毎日コッ
く難波の飲み屋に通つていた。チップ
を稼ぐためである。しかし彼と一緒になつ
てから、すでに三度もその店を替えていた
子供はいつの間にか一人出来たが、生れて
二三月月もすると、ふとした風邪が原因で
あつてなく死んでしまつた。一方、平吉
は相変らず繊維の闇売りなどして暮してい
たが、そのうちに統制は次第に緩和され
て、製品も彼地此地へ急に引出つてくる
もよう以前のようにポロい儲けは出来なかつ
た。従つてフトコロもだん／＼淋しくなつ
たが、おかげでサヨの方は料飲の開放以来
い／＼大びらに働けるようになったので
客に貰うチップの高も日増しに殖え、い
くら平吉の儲けは少なくとも、夫婦は妻の
稼ぐ収入でラクに食へられた。そして金も
相当出来る、二人はそれまで住んでいた
平吉の兄の家を引揚げて、近くの繁華な通
に小さい店舗を一軒構え、そこで当世向の
バーマネットを始めるようになった。元々
サヨはその方の技術も習得していて、日本
に帰つてからも絶えず開業の機会を狙つて
いたのである。幸い、仕事の許可は飲み屋

の顔馴染にその筋の者がいたから、その
の手引きで万事都合よく行つた。

開店すると、仕事は彼女の期待した通り
どうやら最初から順調に運んで、やがて面
白い程よく流行り、もう当てにならぬ夫の
僅かな収入に頼らなくとも、一家は財政的
にまつたくノンビリとして来た。全く妻の
お蔭である。しかし反面、妻はその後しだ
いに自分の商売に躍起となつて、女だてら
に金儲けか、死に病か、毎日一心不乱で仕
事に精を出すようになったので、しぜん家
庭のことはまつたく放つたらかしであつた
が、それでも平吉は文句も言えなかつた。

——そして知らぬ間にまた二年経つた。

夫婦の仲にはすでに二人目の子が生れて
いたが、こんどは幸い無事育つた。平一が
それである。しかし流石に現在となつてみ
ると、働らきの鈍い煩わしい赤ン坊は商売
熱心の妻にとつて足手纏いで、時には彼女
からヒドく邪魔者扱いにされることはあつ
ても、致し方なかつた。かと言つて、むろ
ん平吉には今さら規則正しい会社勤めは出
来ないし、また他に適当な職業も見つから
ぬまま、しぜん妻の収入に任せてコソソリ
競輪に通つたり、或いは当らぬパチンコに
現つてを坂かしたりしてぶら／＼暮してい
るうち、いつの間にか彼女の三下奴にまで
成下つて、遂にはケチな子守りに愛身をや
つさねばならなかつた。反対に妻は毎日毎
日エライ権幕で、夫を慣れ／＼しくアゴの
先きで使いながら、明けても暮れても自分
の仕事に必死であつた。

平吉はもう妻の膝下にレイレイしく跪ま

づきながら、風間は己れの驚馬にムチ打つ
て家事と子守りにいそしみ、夜はまた夜で
食婪なまでに旺盛な彼女の肉慾のドレイと
なつて、ひたすら奉仕をつづけたのである

三、弱き者よ汝の名 は亭主——

「あんたッ……先刻からいつまでもそんな
所にボンヤリ佇つて、いつたい。何を思案

ハナヲカケスル

問、私は鼻が低くて悩んでいます。隆鼻
術というのをよく聞きますが、効果が
あるものでしょうか。

答、先づ特殊薬注入法があります。鼻す
じだけ通じたいという人には理想的な
方法です。次に象牙挿入法は今から三
十年前から初め、アメリカでも使用さ
れ捨て難い方法です。合成樹脂も最近
は材料がよくなり使用され出しました
肉質法は少しづつ高くし度い方には良
い方法です。以上は費用何れも六千円
です。

更に当院独特な永久不変な弾力性物
質が発明され、その自然性においては
如何なる方法も追従を許しません。従
来の象牙合成樹脂の欠点は一掃さ
れました。将来は当院で発表すれば、
如何なる人も皆この方法で行うべき運
命をもつて居るのです。費用は八千円
以上です (広告)

大阪市北区梅田新道交叉点
東一丁電車通

三山整形外科内

三山隆鼻法研究所長談

しとるの？大かた競輪のことでも考えとるんでしょ！もう好え加減にして、早う晩の支度にかかつてくれんかいな。うちは一曰天手古舞で、朝から二人分も三人分も活躍しとるのに、あんたは何をしたんでス……ホンマに好え年をして情けないヒト……ちツとはこつちの苦しい気持にもなつて欲しいわ。そやから、あんたは世間から馬鹿にされるんや」

夕方——平吉が赤ン坊を脊にしてシヨンボリ門口に立つてしていると、サヨが第何人目かの女にパーマを当てながら、思出したように店の窓から首を出してケンタイらしく言つた。

「イヤ、まことに落まん落まん……」

近頃平吉は妻から何を言われても、落まん落まんの一点張りである。いくら口惜しいとは思つても、全く彼女には齒が立たなかつた。妻の口上はもう自分の耳にタコの出来るほど聞き飽きているが、それに反抗する意志などない。寧ろ競輪やパチンコでは彼女にだいぶん迷惑をかけているので、それを考慮して小さくなつてゐるのだつた

瞬間、彼はバネ仕掛の人形のように家に飛び込むと、モツケな顔で奥に來たが、早速その戸棚の米ビツから米を計ると、ソクサ流し下で研ぎにかかつた。すると、まるで野戦の炊事当番に逆戻りしたやうで情けなかつたが、今さら不服も言えなかつた。妻が一家の大切な大黒柱になつてゐる現在、彼女への反対は直ちにメシの喰い上りを意味するのである。

不甲斐ない夫と自分を呪いつつも、彼は

やがて飯を焚くと、ホツと一息吐いて服のポケットから吸いさしのタバコを出し、火箸で火を点けて旨そうに吸つたが、そのとき脊なの平一も急に眼を覺して、火がついたやうに泣きはじめた。……

むべなる哉——赤ン坊だつて三時頃から

まだ一べんも母親のお乳を口にしてないのある。

そう思うと、平吉も柄になくツイ子供がいじらしくなつて、妻や店の客にはテレかくしで優しく赤ン坊をいたわりながら、そツと表に出た。そして折りから前を通りかかつた豆腐屋を掴まえると、出來たてのそれを一丁買った。その夜はひとつ豆腐の味噌汁でもするつもりであつた。

金を渡すと、豆腐屋は礼を言つて、チリンチリンと虚ろな鈴の音をさせながら黄昏れの街に去つて行つたが、その後姿を平吉はいつまでも獲ツと見送つてゐるうち、ふと以前どこかでサヨと湯豆腐を突つて飲んだことを想い出して、何かわびしかつた。……

四 肉慾の對象

やがて四開が薄暗くなると、サヨは何日になく

ひとりコソコソ店を片づけて、平吉の脊からまるで荷物のやうに赤ン坊を手にとると、ツイと近くの銭湯に出てしまつた。しかし万事に如才のない彼女は、出かけにでも夫に何か用を言いつけて置くのである。

平吉はヤレヤレと思ひながら、ホツとし



た気持で疲れた肩を軽く叩いたが、それもホンの束の間で直ぐ便所の掃除にかかつた便所は一日の中に何十人という女達が出入りするで、トテも汚なかつた。それから晩餐の用意に掛るのである。まるで女中だつた。

奥の部屋に床をとつてゐると、妻が漸く風呂屋から戻つて來たが、彼女は鏡の前に坐ると、誰れ憚らす長々と化粧をする。そこで平吉も彼女と入れ替りに銭湯へ出かけると、蓋しこの時刻のみが彼には一日の中でまつたく開放された自由な世界で帰途いづも一寸角のパチンコ屋をのぞいてみる。

そして、これがまた妻の氣に入らなかつた平吉は銭湯を出ると、その夜は珍らしくまつすぐに家へ歸つて來たが、サヨはノホンと卓の前に坐りながら、煙草を吹かして新聞を見ていた。平一はすでに床の中でスヤ／＼と眠つてゐる。彼女は夫の顔を見ると、ふと新聞から眼を放して大きく伸びをしなが、ふてくされたやうに、

「あーアくたびれた。毎日忙しいのでイヤんなる。今晚は久しぶりで何やこー一パイ飲みたいけど、あんた、落まんけど行つて来てくれへんか……お酒を二合と、なんぞ生まのモノでもあつたら買つて来てんか。それから序でにビールも二本位たのむわたまには酒でも飲まんと、身体が休まらんホ……」と、急に横柄な態度である。

平吉は少しむつとしたが酒は彼とて元々いけるタチであるから、腹の底では大賛成だつた。早速、台所から買物籠を取つてきて空き瓶を入れると、いそいそ家を出たが

十一月の空ッ風に吹きまくりながら、やがて貧相な顔をして使いから戻つて来た。「えらい、遅かつたなあ。また、パチンコでも見とつたんと違う?—」と飯が冷めてしまふわ」

妻はうさんそりに言つた。そして徐ろに酒の燗をすると、夫を出しぬいたように慣れた手付で先ず盃を一つ空けて、

「どや、あんたも——」と、言いながら平吉の猪口に酒を酌いだ。

彼は卓を挟んで妻の前にキチンと坐りながら、例の落まんを小さく呟いて盃を干したが、ホツと上気したような相手の肌から発散されるお白粉やクリームの匂いを嗅いでいると、急に精氣を取戻したようで、やつぱり自分を幸福な男だと思ふのだつた。しなびかかつた平吉に較べると、サヨには爛熟した色気というよりなものが満ち溢れていた。

平吉が注がれるまま更に盃を空けていると、彼女が急に立ち上つて、

「実はな、今日、佐藤はんとこのオナゴが来て、こんなモノ置いて去んだんや——」と、言いながら簞笥の抽斗から何か分厚い新聞紙の包みを出して来て、それをバサリと夫の横に置いた。開けてビツクリ……春画だつた。——絢爛たる極彩色の古風な十二ヶ月の続きもの。流石に平吉は度胆を抜かれた。

——佐藤はんはその近くにあるしもたや風の高等淫売で、その若い女が誰れに頼まれたのか、心安さにそれを買つてくれと持つて来たのだつた。

サヨは人妻でもハツラツとしている。漸く二人目の児を産んで、どうやら異性が分りはじめた三十前の女なのだ。だから、最初その濃艶な絵を見せられたとき、何だか頭の芯までムズ痒くなるようで、年甲斐もなく胸が躍るのだつた。すると、まるでその絵のように、自分達も亭楽の底に酔い痴れたい衝動に駆られた。故に、その夜は初めから魂胆のある酒とビールだつた。

問題の枕絵は十二枚あつて、どれでもこれらも微に入り細をうがち、線を生かした男女達のアラレもない痴態であつた。

「あんた、ご飯を食べるのはまだ早いわ。えらい、他人行儀やなあ。まあ一パイいきなはれ。うフフ……まだお酒も残つてるし」

サヨはそう言つてビールの栓を抜くと、それを二つのコップに元氣よく注いで、

「もう、こんなもの仕舞うところ。いつまでも見とつたら眼の毒や」と、絵を傍らに納めたが、直ぐにビールをグーと呷ると、忽ち好い気持ちに酔つぱらつて、酔えば官能の疼きは流石に激しい命のホムラと化しア

然ボー然ガタ然としておつかかなビツクリの夫を尻眼に、矢のような合図のウインクである。所詮は彼女も平吉の妻だつた。そして、モヤモヤしたそんな心のわだかまりを一掃するためには、やつぱり夫たる彼に縋つて晴らすより術もなかつたのである。

平吉もどうやら調子よく酔つて来ると、衰えていた精力がウツボツと頭を擡げ、いつのまにか妻の膝に躡り寄つて、日頃のイキサツなどケロリと忘れたように接吻したもう完全なアダムとイブだつた。——

五、なすな競輪

「あんた、今日はうちの公休日よ。久しぶりで平一とラクに寝さしてもらうよつて、競輪にでも行つて来なさい。今日は許可するわ。その代り、負けたらあかんし……必ず勝つて来なさいよ」

妻はいつになく上機嫌であつた。

競輪と聞くと、流石に平吉は眼も鼻もなかつた。だから今までチョイ／＼妻の眼を盗んでは行つていたが、滅多と勝つた験しはなかつた。パチンコならまだしも、競輪と来た日には大抵負けるのに相場が決つていた。それでも競輪は一向に止められなかつた。

平吉は自分の耳を疑うように凝つと妻の貌を眺めていたが、やがて氣前よく出された千円札を一枚無難作に服のポケットにねじ込むと、心の中で快哉を叫びながら勢いよく家を出た。

間もなく待望の住ノ江競輪に来ると、折りからの雑沓を縫うようにして場内に現われたが、冬初の空は珍らしく晴れ渡つて、時々やそ寒い木枯しが吹くたびに、何万人という群集によつて埋め尽された広い場内には、濛々と土煙りが舞い上つていた。……

平吉は人混みに揉まれながら車券売場の側に来ると、早速連勝式を三枚買った。月にせいぜい三回か五回来る競輪だつたが、ここへ来るといつも急に元氣付いて、日頃から血のめぐりのよくない頭も不思議に冴えるのだつた。

必ず勝つて来なさいよ——といった妻の

言葉を平吉は何度も胸の裡で反芻しながらひたすら勝負の始まるのを待った。……しかし、やがて始められた第四レースは案外あつてなかつた。本命が一枚はいつたのみで、買った配当金の百六十円を費した額から差引くと、結局百四十円の損失だつた。

二レースおいた第七レースでは、平吉は思いきつて七枚買った。六―五という穴を狙つて五枚と、別に本命で二枚買った予想の裏をかつて六―五と反対に賭けたところに、縁起をかつぐ平吉の妙なクセがあつた

やがて合図の鐘が鳴ると、平吉の眼はしだいに血走つて来た。一齋にスタートが切られると、四周目までは不思議に六五の順に先頭を争いながら走っているの、何だか薄氣味あるかつたが、六周目に土佐から出てきた四番の選手が最後尾からグングン伸びて、第七周目のラストヘビーによりを

かけると、まるで風のように一席になつてしまつた。結果は予想の裏の裏をかつて、最後のドンデン返しで二万四千円の大穴だつた。当れば相当儲けていたのに——。

平吉は急に氣が、抜けたやうで、勝負が済むとも居堪れなかつた。懷中には百円紙幣が一枚と何程もなかつた。

やりきれぬ氣持でそこを出ると、彼は近くの屋台店に来て、おでんを二つ食べながら焼酎をコップに一杯呷つたが、だいぶん酔つぱらつて来た。

少しよろめく足を引きずるやうにして家に戻つて来ると、幸い妻は他愛もなく、よく眠つていた。夜具はだらしない昨夜から嶮きッ放しで、その枕許には空の井や、湯

香、灰皿それに読みかけのカストリ雑誌が二、三冊、雑然と散らかつていた。

◎大道棋の詰ませ方◎

大橋 盧士

Table with 9 columns and 9 rows showing a Go board position. Columns are labeled 一 through 九, rows 1 through 9. Pieces are placed at intersections.

(持駒)香・歩

右の前の碁の宿題について一応詰手順を記してみます。四三桂、二一玉、二六香...

◆銀問題◆

【宿題】

持駒 銀、

Table with 6 columns and 6 rows showing a Go board position. Columns are labeled 一 through 六, rows 1 through 6. Pieces are placed at intersections.

合とすると、同香又二三銀合、一三桂、一歩、一二歩(同銀二三金迄)同玉、二三金以下詰み。元へ戻つて二三銀合を...

寝鏡を眺めながら傍らの急須を取つて、湯呑に茶を注ぎながらその冷えた奴を自棄にガブリと一杯飲んだが、流石に酔いさめの茶の味はうまかつた。

れたらどないやの……けつたいな人——でどやつた、勝つたの……負けつたの」妻はいつのまにか眼を覚していた。

◎本誌所載の記事一切無断上映上演、放送、転載、脚色をお断り致します

◎本誌所載の記事一切無断上映上演、放送、転載、脚色をお断り致します

Various small advertisements and notices including 'Direct Purchase of Manuscripts', 'Manuscript Collection', and 'Manuscript Submission Guidelines'.

原稿募集

- 1. 短篇小説(枚数十枚—二十枚)
2. 暴露小説(枚数十五枚—三十枚)
3. 実話小説(枚数十五枚—四十枚)
4. 中間小説(枚数五枚—二十枚)
5. コント(枚数五枚前後)
6. 漫画、挿絵、寫眞、口絵、其の他
7. 中篇小説(枚数三十枚—百枚)

怪奇画集(2)

